(財)八尾市文化財調査研究会報告116

小 阪 合 遺 跡

Ⅰ 小阪合遺跡 （第28次調査）

Ⅱ 小阪合遺跡 （第29次調査）

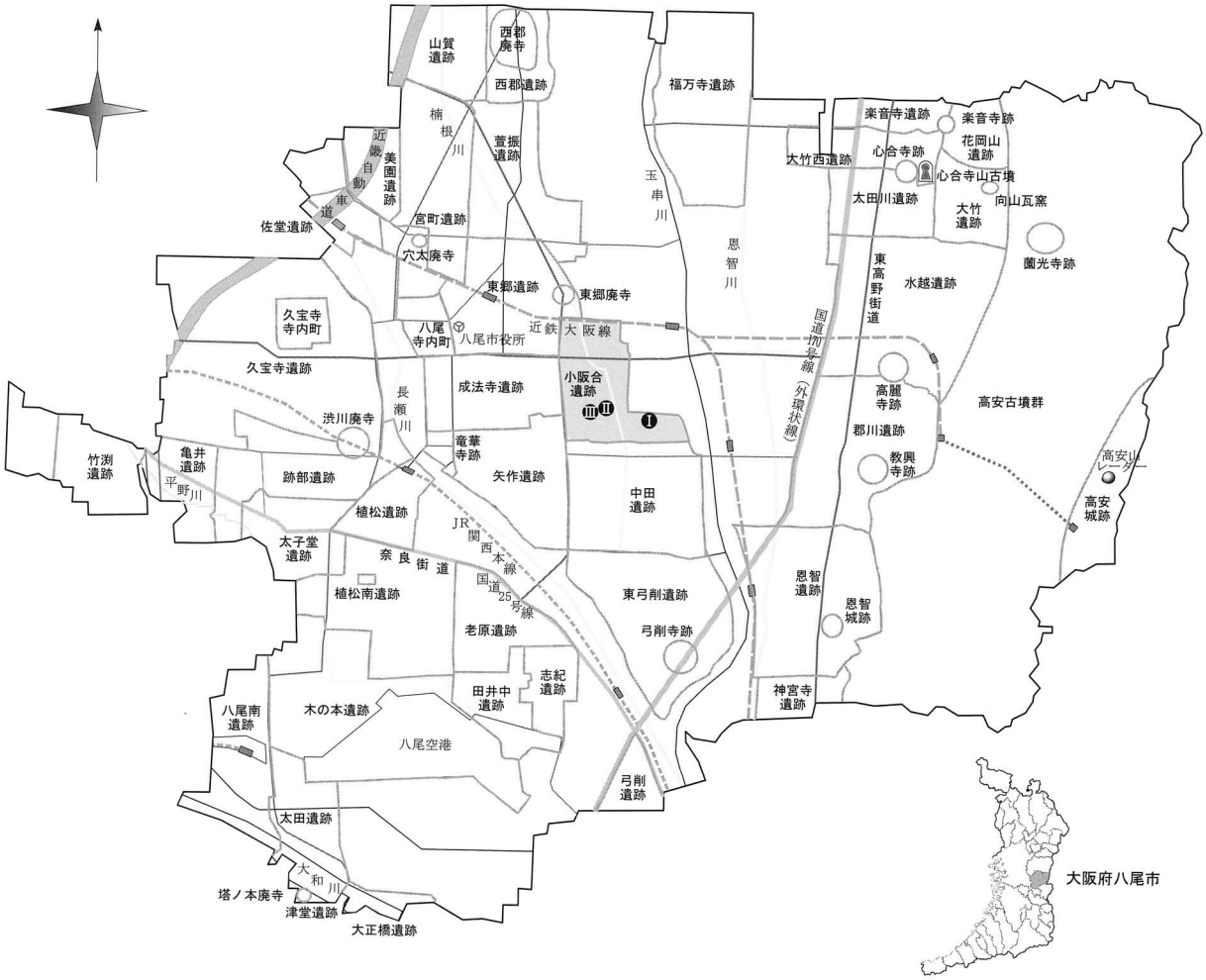
Ⅲ 小阪合遺跡 （第35次調査）

2008年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

小　阪　合　遺　跡

小阪合遺跡　(第28次調査)
小阪合遺跡　(第29次調査)
小阪合遺跡　(第35次調査)



2008年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

はしがき

大阪府東部に位置する八尾市は、河内平野のほぼ中央に位置し、東に生駒山地、南に羽曳野丘陵、西に上町台地の景観をみる地域です。この豊かな自然環境のもとで、生駒山地西麓部に位置する恩智遺跡や羽曳野丘陵先端部の八尾南遺跡では、旧石器時代以降の先人達が残した貴重な文化遺産が数多く残されています。また、平野部においては、古大和川水系による豊富な水量と肥沃な土地柄から、水稲耕作を開始した弥生時代前期以降の人々の営みを示す生活痕跡が連綿と残されています。

かけがえのないこれらの埋蔵文化財は、地域の歴史と文化を伝える貴重な史料であり、地域の人々の共有の財産であります。このような文化遺産が開発により消滅することから、記録保存を行うと共にこれらの成果の活用を広く図り、後世に永く伝承させていくことが現代に生きる我々の大きな責務と認識しています。

そこで私共では、こうした消滅の危機にさらされている埋蔵文化財を、一つでも多く後世に伝えるため、事業者のご理解とご協力をいただきつつ、事前に発掘調査を行い、その記録保存に努めている次第です。

このたび、平成６・８年度に実施しました小阪合遺跡（第28・29・35次）の３件の発掘調査の整理が完了しましたので、これらをまとめて報告書として刊行することに致しました。

本書が地域史の解明はもとより、埋蔵文化財の保護及び啓発・普及の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対して、ご協力いただきました関係諸機関の皆様方に心より御礼申し上げるとともに、今後、尚一層のご理解とご協力を賜りますよう心からお願い申し上げます。

平成20年８月

財団法人　八尾市文化財調査研究会
理事長　岩　﨑　健　二

序

1．本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成６・８年度に実施した発掘調査の報告書を収録したもので、内業整理及び本書の作成は各現地調査終了後に着手し、平成20年６月をもって終了した。
1．本書に収録した報告は、下記のとおりである。
1．本書に収録した各調査報告の文責は以下の通りである。
　Ⅰ成海佳子・河村恵理、Ⅱ河村、Ⅲ原田昌則。全体の構成・編集は河村である。
1．本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の1/2500の地形図（昭和61年測量・平成６年修正・平成８年７月編纂）、八尾市教育委員会の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成19年度版）を使用した。
1．本書で用いた標高の基準はT.P.（東京湾標準潮位）である。
1．本書で用いた方位は第28次が磁北、第29・35次が国土座標第Ⅵ系〔日本測地系〕の座標値である。
1．土色は、小山正忠・竹原秀雄編1997年期版『新版　標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局　監修・財団法人日本色彩研究所　色票監修に準拠した。
1．遺構は下記の略号で示した。
　井戸－ＳＥ　　土坑－ＳＫ　　溝－ＳＤ　　小穴・柱穴－ＳＰ　　落ち込み－ＳＯ
　土器集積－ＳＷ　　方形周溝墓－ＳＸ　　河川－ＮＲ　　竪穴住居－ＳＩ　　不明遺構－ＳＺ
1．調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。
1．Ⅰ－付編で報告した八尾南遺跡第１次調査については、財団法人大阪府文化財センターによって再度、平成14～17年に調査地を含む同敷地内で発掘調査が行われ、平成20年３月に報告書が刊行されたが、本報告は平成19年10月にほぼ掲載形態が確定していた為、調査成果の比較検討等は差し控えさせていただきたい。

目　　次

はしがき
序
Ⅰ　小阪合遺跡第28次調査（ＫＳ94－28）……1
　　－付編　八尾南遺跡（第１次調査）の調査成果－……39
Ⅱ　小阪合遺跡第29次調査（ＫＳ94－29）……49
Ⅲ　小阪合遺跡第35次調査（ＫＳ96－35）……73

Ⅰ　小阪合遺跡第28次調査（ＫＳ94－28）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市山本町南七丁目で実施した八尾市立南山本小学校屋内運動場増改築に伴う小阪合遺跡第28次調査（ＫＳ94－28）の発掘調査報告書である。
1．調査は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、成海佳子が担当した。
1．現地調査は平成６年５月26日に着手し、平成６年８月４日に終了した。調査面積は約855㎡を測る。
1．現地調査には、朝田　要、磯上サカヱ、大島一浩、竹本　香、宮崎寛子、村井俊子の参加を得た。
1．整理業務は随時行い平成20年３月に終了した。
1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－宮崎・村井、遺物・遺構トレース－山内千恵子、遺物写真－徳谷尚子、他、岩沢玲子、北原清子、都築聡子、村田知子が参加した。
1．本書の執筆は、成海・河村恵理、第２章については原田昌則で、編集は河村が担当した。
1．本書で記載した土色名については、標準土色帖を参考にしたものと独自の層名を付すものが混在しているが、あえて統一せず調査時点の表記のまま記載した。
1．土器の形式・編年で参考文献とした文献については、Ｐ38に提示した。
1．現地調査の実施および整理業務においては、以下の方からの協力とご指導を受けた。（敬称略）
正岡大見

本　文　目　次

第１章　調査に至る経過……1
第２章　地理・歴史的環境……3
第３章　調査概要……12
　第１節　調査の方法と経過……12
　第２節　基本層序……13
　第３節　検出遺構と出土遺物……15
　　１）第１面……15
　　２）第２面……17
　　３）第３面……19
　　４）下層確認調査……34
　　５）遺構に伴わない遺物……36
第４章　まとめ……37
付編　八尾南遺跡（第１次調査）の調査成果－弥生時代の方形周溝墓群について－……39

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺の発掘調査位置図（Ｓ＝1/6000）……9
第２図　調査地地区割図（Ｓ＝1/1000）……12
第３図　西区北壁断面図（Ｓ＝垂直1/40、水平1/100）……14
第４図　第１面調査地平面図（Ｓ＝1/200）・断面図（Ｓ＝垂直1/100、水平1/200）……16
第５図　第２面調査地平面図（Ｓ＝1/200）・断面図（Ｓ＝垂直1/100、水平1/200）……18
第６図　第３面調査地平面図（Ｓ＝1/200）……20
第７図　第３面ＳＸ301平・断面図（Ｓ＝1/40、１：1/8、２：1/16）……21
第８図　第３面ＳＸ301出土遺物実測図（Ｓ＝１：1/4、２：1/8）……22
第９図　第３面ＳＸ302平・断面図（Ｓ＝1/80）……23
第10図　第３面ＳＸ302出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）……24
第11図　第３面ＳＸ303平・断面図（Ｓ＝1/40）……25
第12図　第３面ＳＸ303出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）……26
第13図　第３面ＳＸ304平・断面図（Ｓ＝1/80）……27
第14図　第３面ＳＸ304出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）……28
第15図　第３面土器棺墓301土器棺実測図（Ｓ＝1/8）……29
第16図　第３面土器棺墓302土器棺実測図（Ｓ＝1/8）……30
第17図　第３面ＳＺ301出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）……31
第18図　第３面ＳＷ301出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）……32
第19図　第３面ＳＷ302出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）……32
第20図　第３面ＳＤ301土器出土状況図（Ｓ＝1/40）……34
第21図　第３面ＳＤ301出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）……35
第22図　第６・７層出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）……36
第23図　第９・10層出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）……36
第24図　調査地平面図（Ｓ＝1/500）……41
第25図　方形周溝墓出土遺物実測図（１）（Ｓ＝1/4）……44
第26図　方形周溝墓出土遺物実測図（２）（Ｓ＝1/4）……45
第27図　溝出土遺物実測図（１）（Ｓ＝1/4）……46
第28図　溝出土遺物実測図（２）（Ｓ＝1/4）……47

表　目　次

第１表　小阪合遺跡調査一覧表……10
第２表　第２面鋤溝法量表……17
第３表　第３面方形周溝墓一覧表……21
第４表　第３面西区溝法量表……33
第５表　中河内地域における弥生時代後期の方形周溝墓検出遺跡一覧表 ……37
第６表　溝法量表……40
第７表　方形周溝墓一覧表……43

写　真　目　次

写真１　調査地遠景……1
写真２　土器棺（２）出土状況……21

図　版　目　次

図版一　第１面全景
第２面全景
第３面全景
図版二　第３面全景
第３面ＳＸ302周溝内土器８出土状況
第３面ＳＸ304周溝内土器27出土状況
図版三　第３面ＳＸ304周溝内土器30・31出土状況
第３面土器棺１出土状況
第３面土器棺２出土状況
図版四　第３面ＳＷ301検出状況
第３面ＳＤ301断面
第３面ＳＤ301土器75出土状況
図版五　ＳＸ301、ＳＸ302、ＳＸ303出土遺物
図版六　ＳＸ304、ＳＺ301出土遺物
図版七　ＳＸ301、土器棺墓１、土器棺墓２、ＳＷ301出土遺物
図版八　ＳＷ302、ＳＤ301出土遺物
図版九　ＳＤ301出土遺物
図版一〇　第６・７層、第９・10層出土遺物

図版一一　**八尾南遺跡（第１次調査）**

調査地全景

方形周溝墓群全景

ＳＸ１・２検出状況

土器棺③出土状況

土器棺②出土状況

ＳＤ５土器検出状況

ＳＤ３断面

現地説明会の様子

図版一二　**八尾南遺跡（第１次調査）**

ＳＸ１周溝内埋土、ＳＸ５周溝内埋土出土遺物

図版一三　**八尾南遺跡（第１次調査）**

ＳＸ１周溝内埋土、ＳＸ５周溝内埋土、ＳＸ８周溝内埋土、ＳＸ９週構内埋土、ＳＸ11周溝内埋土出土遺物

第１章　調査に至る経過

小阪合遺跡は、八尾市中央部に所在する弥生時代中期から近世に至る複合遺跡である。現行政区画の若草町、小阪合町一・二丁目、南小阪合町一・二・四丁目、青山町一～五丁目、山本町南七・八丁目に該当する。現地表面は、標高８～９ｍを測る。

当遺跡は、昭和30年の若草町で行われた大阪府営住宅建設工事中に、古墳時代の遺物が多量に出土したことから、その存在が知られることとなった。また、東郷変電所付近の畑からは石製模造玉類が出土した（八尾市1988）。その後、八尾市教育委員会（以下「市教委」と省略）によって数回の試掘調査が行われたが、大きな成果は得られなかった。昭和57年以降になると、当地域一帯では区画整理事業に伴なう発掘調査が、大阪府教育委員会（以下「府教委」）・市教委・当調査研究会によって実施された。当調査研究会が行った発掘調査（第１～３次調査）では、弥生時代後期の柱穴跡と推測できる遺構や、古墳時代前期に比定できる方形周溝墓の周溝、他にも井戸や土坑が検出された。さらに古墳時代中期の埴輪を伴なう古墳や、平安～奈良時代の掘立柱建物の柱穴、近世の水田跡を検出した。これらの成果により、当遺跡が弥生時代から近世に至る複合遺跡であることがようやく判明した。

写真１　調査地遠景（西から）

今回の調査地は、小阪合遺跡の中でも旧楠根川以東部に該当する地域であり、これまでほとんど調査が行われていない地点に含まれる。唯一調査されていた地点（ＫＳ88－17の調査区、ＫＳ85－05の４・５調査区）では、弥生時代後期～古墳時代初頭に比定できる竪穴住居に関連する溝や土坑などの遺構を検出しており、集落の存在が明らかとなった。また、南側に接する中田遺跡では、調査地に隣接する地点の調査〔ＮＴ87－１（成海1988）やＮＴ95－31（原田1996）〕で、弥生時代後期後半の方形周溝墓に関連する溝や土坑を検出しており、墓域の拡がりが確認できた。これらの既往の成果より今回の調査地まで、弥生時代後期の居住域や墓域が及ぶ可能性が高く、今回の調査によってさらに集落の実態が明らかにされることが期待できた。

参考文献

・成海佳子1988「24　中田遺跡（第１次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告16　（財）八尾市文化財調査研究会
・原田昌則1996「Ⅵ中田遺跡（第31次調査）」『（財）八尾市文化財調査研会報告54』（財）八尾市文化財調査研究会
・八尾市史編纂委員会1988『八尾市史（前近代）本文編』

第２章　地理・歴史的環境

小阪合遺跡は大阪府八尾市のほぼ中央部に位置する若草町、小阪合町一・二丁目、南小阪合町一・二・四丁目、青山町一～五丁目、山本南七・八丁目一帯の東西0.9km、南北0.9kmに広がる弥生時代中期から近世に至る複合遺跡である。地理的には旧大和川水系による河成堆積で形成された河内平野南東部に位置している。平野内には、現在の八尾市南東部にあたる二俣地区を基点として旧大和川の主流であった長瀬川から玉串川が東に分流し北西方向に流下していた。小阪合遺跡はこの２大河川に挟まれて、南北方向に展開する低位沖積地上に位置し、さらに遺跡内の東部では中河川である楠根川が南東から北西方向に流下しているため、現地表面の標高は北部に行くに従って低く、南部で９ｍ前後、北部で８ｍ前後を測る。小阪合遺跡の成立を見たこの低位沖積地は、水稲耕作を生活基盤とする弥生時代前期以降、比較的安定した地理的条件を背景として数多くの遺跡が密集する形で成立している。当遺跡周辺に限っても、北西に東郷遺跡、西に成法寺遺跡、南西に矢作遺跡、南に中田遺跡が隣接している。

小阪合遺跡は昭和30年に若草町で行われた、大阪府営住宅供給公社の建設に際して、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器等の土器が多量に出土したことに端緒を発するものものである。考古学的な調査は昭和57～63年に実施された南小阪合地区を中心とする区画整理事業に伴う発掘調査がある。これらの調査では、弥生時代中期～近世に至る遺構・遺物が検出され、当遺跡が複合遺跡であることが確認された。なかでも、古墳時代初頭～前期における集落の広範囲な分布や数多くの他地域から搬入された外来系土器の存在は、当時の地域間交流の一端を知るうえで貴重な資料を提供する結果となった。また、流路充填堆積物の堆積相の変化から遺跡内を南北に流下した「小阪合分流路跡」が提唱されており、弥生時代後期以降の河川地形の変遷を堆積学・地形学的な観点から明晰にする試みが行われている。

小阪合遺跡内においては、これまでに市教委、当調査研究会、府教委、(財)大阪府文化財調査センター（以下、「府調センター」と省略)、(財）大阪府文化財センター（以下、「府センター」と省略)により多数の調査が実施されている。以下、これまでの調査成果を時期毎に概観してみる。

弥生時代中期前半　遺跡範囲のほぼ中央部に位置する小阪合第18次調査で中期前半(第Ⅱ様式)の居住域が検出されている。この調査では、現地表下約3.5m（T.P.＋5.00m）で当該期の生活面が確認されている。上部で検出されている古墳時代初頭の生活面から約１ｍ下層部分にあたるもので、この付近一帯では、弥生時代中期前半から古墳時代初頭までは氾濫原堆積物の累重を受ける自然環境下にあったことが推定される。このように、当該期の生活面が比較的深い地点に存在しているため、調査対象面とされた調査例が僅少であり実態については不明な点が多い。

当該期の遺跡としては、調査地の北西約400mで当調査研究会が実施した成法寺遺跡第18次調査で集落域が検出されている。断片的な成果であるため不確定な要素を含むが、本調査地および成法寺第18次調査では、ともに多量の遺物を含む良好な包含層が形成されており、仮に、同一集落と仮定すれば東西400m以上の規模を測る拠点的な大集落を形成した集落であった可能性が残されている。

弥生時代後期　遺跡範囲の南部で実施した区画整理に伴う第10次調査の第９調査区、第16次調

査の第７調査区一帯のT.P.＋8.1～8.4mで当該期の居住域、遺跡範囲の南東部で実施した南山本小学校屋内運動場に伴う第28次調査で、方形周溝墓・土器棺墓で構成される墓域が検出されている。一方、生産域としては、遺跡範囲北西部の小阪合遺跡(その１)の98－７区で水田が検出されている。

古墳時代初頭（庄内式期）　前代に比して集落形成が活発に行われている。庄内式古相前半（庄内Ⅰ期)においては、遺跡範囲南部を中心とする第３次調査(27地区)、第６次調査(第４調査区)、第13次調査(第１～３調査区)および南接する中田遺跡内の第12次(ＮＴ92－12)、中田遺跡昭和49年度調査Ｃ地点で検出されており、中田遺跡範囲を含めて東西350m、南北200m規模の集落が想定される。庄内式古相後半(庄内Ⅱ期)においては、集落域が西部に移動しており、第１次調査(Ａ－Ⅰ・Ａ－Ⅱ地区)、第３次調査(25地区)、第８次調査(第５調査区)を中心に広がっており、その範囲は東西250m、南北270mに及ぶ。庄内式新相(庄内Ⅲ期)においては、前代の居住域を踏襲しさらに南北への集落拡大が顕著であり、北部の第10次調査(第２調査区)および南接する中田遺跡２次(ＮＴ89－２)を含めて、東西200m、南北650mに亘る南北に長い集落域を構成している。これらの調査では、山陰・吉備・讃岐・近江等の他地域から持ち込まれた搬入土器が数多く出土しており、当該期における中河内地域の多くの集落数の増加や集落域の拡大を推進した要因の一つであったと考えられる。

古墳時代前期(布留式期)　布留式古相段階(布留Ⅰ・Ⅱ期)の集落は遺跡範囲南西部を中心と第１次調査(Ａ－Ⅰ・Ａ－Ⅱ地区)、第３次調査(26・28地区)、第４次調査(第７調査区)、第19次調査、第35次調査および南方の中田遺跡内の中田一丁目39、中田遺跡第26次調査(ＮＴ94－26)、西方の成法寺遺跡内の昭和61年度調査地(高美町三丁目64－１)を含んで、集落規模を広めており規模的には東西約350m、南北約400mに分布している。続く布留式中段階(布留Ⅲ期)の集落は減少傾向が顕著であり、中河内地域の他遺跡と同様の傾向で推移している。布留式後半(布留Ⅳ・Ⅴ期)においては、遺跡範囲中西部の第４次調査、第８次調査(３・５区)を中心とする範囲に集落域が認められている。

墓域としては、遺跡範囲中東部の第４次調査10区および市92－067調査で埴輪円筒棺および埴輪類が検出されており、周辺において布留式古相後半（布留Ⅱ期）段階の古墳が想定されている。従って、当該期においては小阪合分流路を挟んで、居住域と墓域が対峙する関係であったことが推定される。

古墳時代初頭から前期前半の小阪合遺跡内における集落動向は、集落域を変化しつつも一定規模を保有した連続的な集落形成が認められた。本遺跡を含む周辺遺跡を包括して「東郷・中田遺跡群」と呼称されており、これらに包括される各遺跡の当該期集落の推移としては、特に古墳時代初頭後半(庄内式新相)から前期前半(布留式古相)に集落数の増加・拡大を迎えることが共通した事実として捉えられている。これらの動向は、大和盆地南東部の遺跡群の集落動態と共通していることから、大和政権内の政治的な衰勢事象に同調した中で推移したことが推定される。

古墳時代中期　当該期の集落としては、北から小阪合遺跡(その１)の98－３・４区、小阪合遺跡(その２)の02－１区、第８次調査および第26次調査の一帯、第１次調査のＡ－Ⅱ・Ⅲ地区および第４次調査の１・２区一帯、第４次調査９区および第13次調査２区一帯の４地点で集落域が検出されている。各グループの集落域の規模は150m程度の範囲に分布しており、それらのグルー

プが概ね南北方向に一定の間隔を持ち展開している。おそらく、当該期の小阪合分流路の左岸を中心に集落域が形成されていたものと推定される。

古墳時代後期　前代に比して集落域の縮小・激減が顕著であり、遺跡範囲北西部の第８次調査１区の南部一帯で唯一古墳時代後期（６世紀中葉）の集落が確認されている程度である。当該期においては、生駒山地西麓部を中心として、横穴式石室を主体部に持つ高安古墳群内の造営が活発に行われている時期にあたり、集落の減少傾向は大和主導の政治趨勢の中で氏族間の再編成的な動きに連動した結果を示すものであった可能性がある。

飛鳥・奈良時代　飛鳥時代の集落としては、遺跡範囲北西部の第８次調査２区で飛鳥時代後半（７世紀後半）の集落が検出されているのみである。北接する東郷遺跡内では、飛鳥時代中期の創建とされる東郷廃寺が存在しており、当該期の居住域の中心が東郷遺跡の南東部付近にあったことが推定される。

奈良時代においては、当地一帯は若江郡に属していたようで、文献史料では和銅二年（709）の『広福寺田畑流記帳』に記された「河内国若江郡人正八位上河内手人刀子作広麻呂、改賜下村主姓、免雑戸号」が初現である。一方、『続日本紀』には、奈良時代後半の天平神護元年（765）～宝亀元年（770）の５年間に亘って若江郡南部を中心とした記事が散見される。全て、称徳天皇による３度の行幸に関連した内容で、「弓削行宮」「弓削寺」「由義宮」「由義寺」「竜華寺」が見える他、神護景雲三年（769）十月三十日の条には、「詔以二由義宮一、為二西京一。河内国為二河内職一。…」とあるように「陪都」的な都である「西の京」の造営が計画されている。翌年の宝亀元年（770）八月四日の天皇崩御により、造都の中止を余儀なくされるが、一時期であるにせよ都の造営が若江郡の南部で計画されたことは特筆される。

奈良時代の集落は、遺跡範囲の北西部の北集落と南西部の南集落２箇所で確認されている。北集落は、小阪合遺跡（その１）の98－１・５・７区、小阪合遺跡（その２）の02－１・３・６区、第40次調査を中心としている。南集落は、第32次調査、第35次調査、第１次調査（Ａ－Ⅲ地区）、３次調査（25・27・28地区）を中心としている。共に当該期に遺跡範囲西部を北流した河川周辺に集落域が形成されている共通点を持つ。特に南集落においては、当該期の河川の左岸に沿って集落域が展開しており、この河川より東部域は、「小阪合分流路跡」範囲に含まれており、当該期においても居住域を形成することが困難な地点であったことが推定される。北集落については、北の東郷遺跡内に存在する飛鳥時代中期の創建である東郷廃寺と近接しており、建立氏族に関わる集落域であった蓋然性が高い。出土遺物においても、硯（円面硯・風字硯）、墨書土器・墨書人面土器・刻書土器、銅製銙帯・皇朝銭等が数多く出土している。

平安時代　承平年間（931～938）に書かれた『和名類聚抄』によると、若江郡内には北から川俣郷・余戸郷・新治郷・錦織郷・巨麻郷・刑部郷・弓削郷の７郷があり、小阪合遺跡一帯は刑部郷に含まれていたものと推定される。式内社としては、坂合神社がある。坂合部連を氏神とする神社で、『三代実録』には、元慶七年（883）十二月二十八日に河内国正六位上の堺神に従五位下が授けられたとされており、この堺神が坂合神社と考えられている。

平安時代前～中期の集落は、奈良時代に存在した北部集落を踏襲する形で存続している。集落数の増加・拡大するのは平安時代後期の11世紀末～12世紀後半の間で、概ね３箇所（西・東・南）の集落が成立している。西集落は、小阪合遺跡（その１）の98－３区・02－１・３区、小阪合遺跡

（その３）、第39次調査、第26次調査、第８次調査１・２・４区、第20次調査一帯の東西約200m、南北約500mに展開している。なお、西集落の北端には立石嶺道、南端には信貴越道が共に東西方向に伸びており、難波と大和を結ぶ主要街道に挟まれた一帯に居住域が展開している。第26次調査では、平安京へ瓦を供給していた栗栖野瓦窯（京都市）と同意匠の軒丸瓦が出土しており、瓦受給の問題や「堂」と呼ばれる小規模な集落内寺院の存在が指摘されている。東集落は、西集落から当該期の楠根川を挟んで東に位置している。式内社である坂合神社の西に展開する集落で、現時点では東西約150m、南北約100mの範囲が想定できる。南集落は、３次調査28調査区、４次調査の９調査区、南接する中田遺跡調査会の北区第６地区、西接する矢作遺跡第１次調査を含めた東西約300m、南北約150mに展開している。中田遺跡調査会の北区第６地区では、地蔵堂・薬師堂・善坊寺などの寺院に関連した字名の地点から平安時代後期の屋瓦が検出されている。そのうちの善坊寺については、中田四丁目に現存しており、その旧地であることが推定されるため、南集落は善坊寺の周辺一帯に成立した集落であったと推定される。

鎌倉時代　鎌倉時代初頭（13世紀初頭）においては、第26次調査、第39次調査で検出された遺構以外には、小阪合遺跡内からは遺構が検出されておらず、集落域の移動や断絶を余儀なくされたようである。小阪合遺跡周辺は、延久四年（1072）の石清水文書にあるように石清水八幡宮の荘園に含まれている。荘田として若江郡掃部別宮に御供田五町九段があり、その内訳として南条大二十里十坪の一段四十歩、二十四坪の一町百歩、二十五坪の五段、三十六坪の八段、揚田里四坪の三坪、八坪の五段、門田里二十坪の四段、渋川里二十四坪の五段があったとされている。これらの荘田は、八尾市南本町六丁目に鎮座する掃部別宮（矢作神社）が管理していたものと推定され、小阪合遺跡内で検出されている当該期の集落についても荘田の維持・管理を行った集落であったことが推定されよう。延久四年の荘園整理でかなりの打撃を受けた石清水八幡宮領は、その後も、一族、門徒らによる宮神領の略取や平氏全盛のため源氏に縁の深い八幡宮への庇護の減少と相俟って、鎌倉時代はじめにかけて衰退を余儀なくされたようである。これらの事象は、小阪合遺跡の北部での遺跡推移と同調しており、鎌倉時代初頭の集落数の減少結果を招いた要因の一つであった可能性がある。

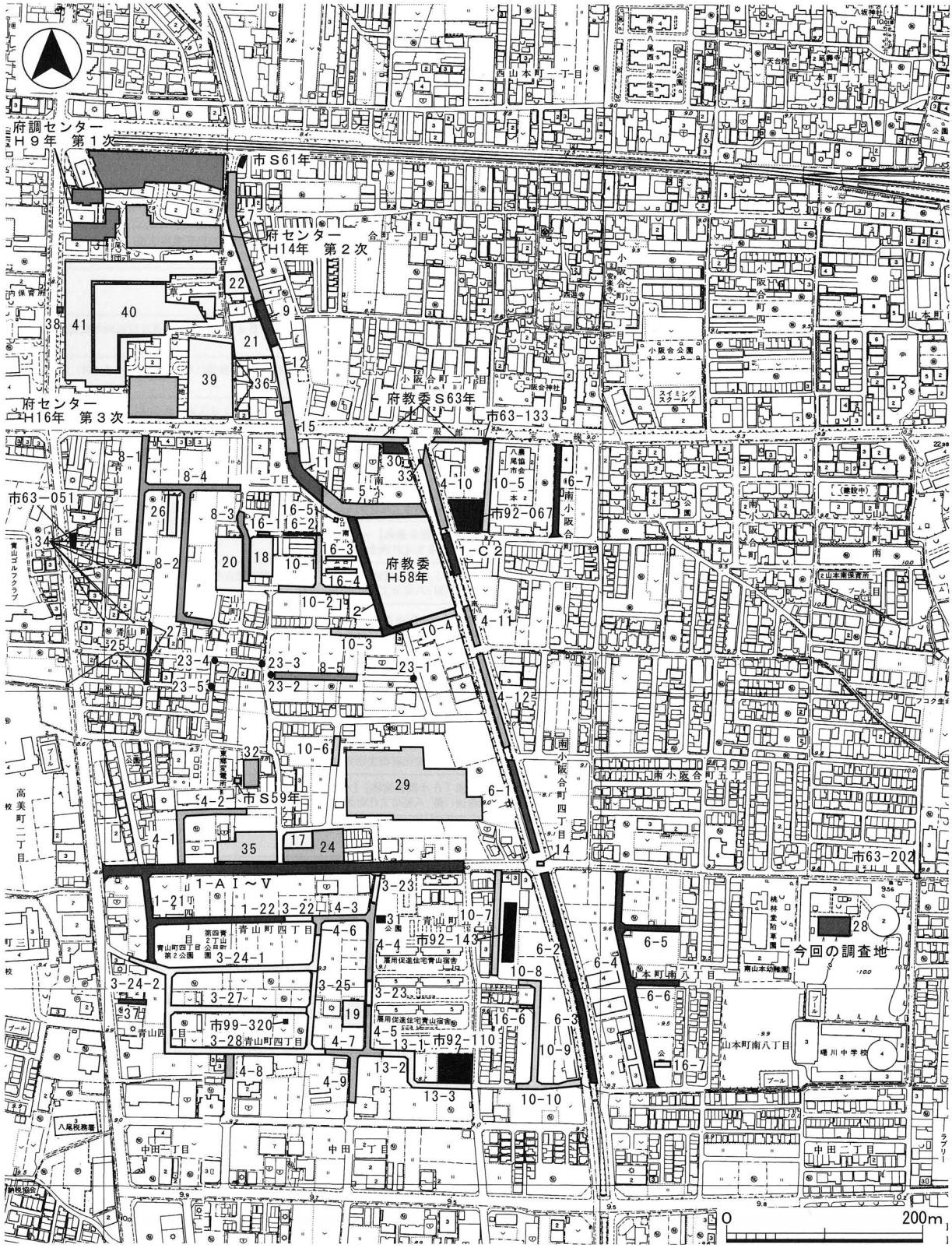
室町時代　室町時代のものとしては、遺跡範囲の北東部を中心とする第21次調査、第22次調査で検出されている。第22次調査では、屋敷地を囲繞する区画溝が検出されている。河内地方では鎌倉時代後半～室町時代前半を中心とする14世紀前半以降、集村化が進行し、集落全体を溝（堀）で囲む防衛的性格を帯びた施設として、環濠集落に変化したことが知られている。集落形態の変化は、当該期以降に顕在化する河内地方を戦場とした、南北朝期の動乱、畠山氏の内乱に端を発する応仁の乱などの戦渦から集落を守るために講じられたものと推定される。

参考文献

・末中哲夫・村川行弘　1958『近畿大学周辺史－河内国中河内郡の歴史－原始古代編』近畿大学商経学会叢書第二輯　近畿大学商経学会
・松田順一郎　2000「第１節　八尾市小阪合遺跡における弥生時代～古代の河川堆積と地形発達」『（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第51集』（財）大阪府文化財調査研究センター
・原田昌則　1990「Ⅱ．小阪合遺跡（ＫＳ89－18）」（財）八尾市文化財調査研究会報告101　（財）八尾市文化財

調査研究会
・森本めぐみ　2002「17. 成法寺遺跡第18次調査(SH2001－18)」『平成13年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋　1988「２. 小阪合遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告16　(財)八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋　1990『小阪合遺跡－第８･13･16次調査発掘調査報告－』(財)八尾市文化財調査研究会報告26(財)八尾市文化財調査研究会
・駒井正明・本間元樹・陣内暢子・松田留美・松田順一郎　2000「小阪合遺跡－都市基盤整備公団八尾団地建替えに伴う発掘調査報告書－」『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第51集』(財)大阪府文化財調査研究センター
・高萩千秋　1987「小阪合遺跡第３次調査」『小阪合遺跡－八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－<昭和58年度第２次調査・第３次調査報告書>』(財)八尾市文化財調査研究会報告11　(財)八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋　1989『小阪合遺跡－八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－<昭和60年度第６次調査報告書>』(財)八尾市文化財調査研究会報告18　(財)八尾市文化財調査研究会
・岡田清一　1993「Ⅷ中田遺跡(NT92－12)第12次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告39　(財)八尾市文化財調査研究会
・山本　昭　1975「中田遺跡」『中田遺跡調査報告Ⅱ』八尾市教育委員会
・高萩千秋　1988「２. 小阪合遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告16　(財)八尾市文化財調査研究会
・青木勘時　1990「15. 中田遺跡(NT89－02)」『八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告28　(財)八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋　1987『小阪合遺跡－八尾都市計画事業井南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－<昭和57年度第１次調査報告書>』(財)八尾市文化財調査研究会報告10　財団法人八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋　1988「２. 小阪合遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告16　(財)八尾市文化財調査研究
・青木勘時　1990「15. 中田遺跡(NT89－02)」『八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告28　(財)八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋　1988『小阪合遺跡－八尾都市計画事業南小坂合土地区画整理事業に伴う発掘調査－<昭和59年度第４次調査報告書>』　財団法人八尾市文化財調研究会
・坪田真一　1993「Ⅱ小阪合遺跡第19次調査(ＫＳ90－19)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』(財)八尾市文化財調査研究会報告41　(財)八尾文化財調査研究会
・成海佳子・森本めぐみ　1998「11. 小阪合遺跡第35次調査(ＫＳ96－35)」『平成９年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
・米田敏幸　1987「中田１丁目39番地出土土器について」『八尾市文化財紀要２』八尾市教育委員会
・岡田清一　1998「Ⅲ中田遺跡(第26次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告61』(財)八尾市文化財調査研究会
・米田敏幸　1987.3「矢作遺跡発掘調査概要」『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告15　八尾市教育委員会
・坪田真一　1992「Ⅱ中田遺跡(第３･４次調査)」『平成４年度　八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅱ)』八尾市文化財調査研究会報告35　(財)八尾市文化財調査研究会
・本間元樹・辻本　武　2004「小阪合遺跡(その２)－八尾団地(建替)埋蔵文化財発掘調査(第２次)－」『(財)大阪府文化財センター調査報告書　第116集』(財)大阪府文化財センター
・岡田清一・菊井佳弥　2006「16. 小阪合遺跡第40次調査(ＫＳ2005－40)」『平成17年度(財)八尾市文化財調

査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋　1996「ⅩⅡ中田遺跡（第32次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告53』（財）八尾市文化財調査研究会
・坪田真一　1997「25. 中田遺跡第35次調査（NT96－35）」『平成８年度　（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会
・松下知世・金光正裕・若林邦彦・新海正博　2005「小阪合遺跡（その３）ー山本団地建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査報告」『（財）大阪府文化財センター調査報告書　第132集』（財）大阪府文化財センター
・棚橋利光　1977「式内社調査報告　第４館　河内国」式内社研究会編纂
・岡田清一　2005「18. 小阪合遺跡第39次調査（ＫＳ2004－39）」『平成16年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会
・坪田真一　1993「Ⅲ小阪合遺跡第20次調査（ＫＳ90－20）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』（財）八尾市文化財調査研究会報告41　（財）八尾市文化財調査研究会
・棚橋利光　1991「二、河内中北部の街道（東西道）」『歴史の道調査報告書　第四集　奈良街道』大阪府教育委員会
・山本　昭　1975「中田遺跡」『中田遺跡調査報告Ⅱ』八尾市教育委員会
・原田昌則　1989「Ⅰ矢作遺跡（第１次調査）発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 平成元年度－矢作遺跡・花岡山遺跡－』（財）八尾市文化財調査研究会
・沢井浩三　1958「第三章　中世」『八尾市史』大阪府八尾市役所
・宮川　満　1979「第二章　荘園の動向　第四節　社領の発達」『大阪府史　第３巻　中世編Ⅰ』大阪府
・原田昌則　2007「Ⅲ. 小阪合遺跡第21次調査（ＫＳ91－21）」（財）八尾市文化財調査研究会報告101　八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋　1993「Ⅳ小阪合遺跡第22次調査（ＫＳ92－22）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告39　（財）八尾市文化財調査研究会
・山上　弘　1989『小阪合遺跡発掘調査概要・Ⅱ－八尾市南小阪合町所在－』大阪府教育委員会
・原田昌則　1996「Ⅰ小阪合遺跡（第30次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告54』（財）八尾市文化財調査研究会
・中井　均　1991「中世の居館・そして村落－西日本を中心として－」『中世の城と考古学』㈱新人物往来社



第１図　調査地周辺の発掘調査位置図（Ｓ＝1/6000）

第１表　小阪合遺跡調査一覧表

調査名	略号 調査主体	調査原因	所在地	調査期間	調査面積 (㎡)	文　　献
第１次	ＫＳ82-01 (財)八文研	区画整理	青山町四丁目	S57/11/8～ S58/3/25	1900	高萩千秋1987『小阪合遺跡－八尾都市計画事業井南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－<昭和57年度第１次調査報告書>』財団法人八尾市文化財調査研究会報告10（財）八尾市文化財調査研究会
第２次	ＫＳ83-02 (財)八文研	楠根川切替え工事	青山町一・三丁目	S58/6/21～ 7/14	390	高萩千秋1987「小阪合遺跡第２次調査」『小阪合遺跡－八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－<昭和58年度第２次調査･第３次調査報告書>』（財）八尾市文化財調査研究会報告11（財）八尾市文化財調査研究会
	第１次 府教委	小阪合ポンプ場	南小阪合町一丁目	S58/9/1～3/25	5000	
第３次	ＫＳ83-03 (財)八文研	区画整理	青山町四・五丁目	S58/10/27～ S59/2/29	1544	高萩千秋1987「小阪合遺跡第３次調査」『小阪合遺跡－八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－<昭和58年度第２次調査･第３次調査報告書>』（財）八尾市文化財調査研究会報告11（財）八尾市文化財調査研究会
第４次	ＫＳ84-04 (財)八文研	区画整理	青山町・南小阪合町	S59/6/15～ 11/15	1940	高萩千秋1988『小阪合遺跡－八尾都市計画事業南小坂合土地区画整理事業に伴う発掘調査－<昭和59年度第4次調査報告書>』（財）八尾市文化財調査研究会報告15（財）八尾市文化財調査研究会
	府教委	柏原・八尾幹線下水管渠築造	南小阪合町一丁目	S59/11/1～ 12/28	200	
	市教委	鉄塔	青山町四丁目	S59/11/5～ 11/12	55	嶋村友子1985「６．小阪合遺跡の調査<青山町４丁目４>」『八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告11八尾市教育委員会
第５次	ＫＳ85-05 (財)八文研	ポンプ場放流渠築造	南小阪合町	S60/1/25～ 3/20	636	西村公助1986『小阪合遺跡発掘調査概要－流域下水道等整備に伴う発掘調査－』（財）八尾市文化財調査研究会報告8（財）八尾市文化財調査研究会
第６次	ＫＳ85-06 (財)八文研	区画整理	青山三･五丁目、山本町南八丁目	S60/7/15～ 12/28	2742	高萩千秋1989『小阪合遺跡－八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－』（財）八尾市文化財調査研究会報告18（財）八尾市文化財調査研究会
	市教委	ポンプ場放流渠築造	小阪合町一丁目	S61/2/7～2/8		米田敏幸1986「４．小阪合遺跡」『八尾市内遺跡昭和60年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告12八尾市教育委員会
第７次	ＫＳ86-07 (財)八文研	ポンプ場放流渠築造	小阪合町一・二丁目	S61/4/5～8/8	732	高萩千秋1987「２.小阪合遺跡（第７次調査）」『昭和61年度事業概要報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告14（財）八尾市文化財調査研究会
第８次	ＫＳ86-08 (財)八文研	区画整理	青山町１・２丁目	S61/8/25～ 12/10	998	高萩千秋1990『小阪合遺跡』－第８･13･16次調査発掘調査報告－』（財）八尾市文化財調査研究会報告26（財）八尾市文化財調査研究会
第９次	ＫＳ87-09 (財)八文研	ポンプ場放流渠築造	小阪合町１・２丁目	S62/4/7～ 7/31	480	高萩千秋1988「１.小阪合遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報昭和62年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告16（財）八尾市文化財調査研究会
第10次	ＫＳ87-10 (財)八文研	区画整理	南小阪合町一丁目、青山町三・五丁目	S62/8/1～ 10/31	1023	高萩千秋1988「２.小阪合遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報昭和62年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告16（財）八尾市文化財調査研究会
第11次	ＫＳ87-11 (財)八文研	ポンプ場放流渠築造	南小阪合町一丁目	S62/8/21～ 9/5	272	高萩千秋1988「３.小阪合遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報昭和62年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告16（財）八尾市文化財調査研究会
第12次	ＫＳ87-12 (財)八文研	ポンプ場放流渠築造	小阪合町二丁目	S62/10/12～ S63/1/18	400	高萩千秋1988「４.小阪合遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報昭和62年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告16（財）八尾市文化財調査研究会
第13次	ＫＳ87-13 (財)八文研	区画整理	青山町五丁目	S62/11/2～ 12/28	260	高萩千秋1990『小阪合遺跡』－第８･13･16次調査発掘調査報告－』（財）八尾市文化財調査研究会報告26（財）八尾市文化財調査研究会
第14次	ＫＳ87-14 (財)八文研	特殊人孔築造工事	小阪合町四丁目	S63/1/16～ 1/18	30	高萩千秋1988「６.小阪合遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報昭和62年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告16（財）八尾市文化財調査研究会
	63-051 市教委	事務所	青山町五丁目	S63/5/11.	9	近江俊英1989「３．小阪合遺跡（63-051）」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告19八尾市教育委員会
第15次	ＫＳ88-15 (財)八文研	ポンプ場放流渠築造	小阪合町二丁目	S63/5/17～ 10/31	360	高萩千秋1989「７小阪合遺跡（第15次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報昭和63年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告25（財）八尾市文化財調査研究会
第16次	ＫＳ88-16 (財)八文研	区画整理	青山町一～三丁目、山本南八丁目	S63/7/5～ 8/24	500	高萩千秋1990『小阪合遺跡』－第８･13･16次調査発掘調査報告－』（財）八尾市文化財調査研究会報告26（財）八尾市文化財調査研究会
	府教委	府道平野中高安線拡張	南小阪合町一丁目	S63/10～12	500	山上弘1989『小阪合遺跡発掘調査概要・Ⅱ－八尾市南小阪合町所在－』大阪府教育委員会
第17次	ＫＳ88-17 (財)八文研	共同住宅	青山町三丁目	S63/10/3～ 10/4	32	高萩千秋1989「９小阪合遺跡（第17次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報昭和63年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告25（財）八尾市文化財調査研究会
	63-133 市教委	公共下水道	南小阪合町一丁目	S63/11/14.	70	近江俊秀1989「６．小阪合遺跡（63-133）」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告20八尾市教育委員会
	63-202 市教委	公共下水道	山本町南八丁目	S63/12/2.	6	米田敏幸1989「７．小阪合遺跡（63-202）」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告20八尾市教育委員会
第18次	ＫＳ89-18 (財)八文研	区画整理	青山町三丁目	H1/4/4～4/28	500	原田昌則2007「Ⅱ.小阪合遺跡（KS89-18）」『(財)八尾市文化財調査研究会報告101』(財)八尾市文化財調査研究会
第19次	ＫＳ90-19 (財)八文研	共同住宅	青山町五丁目	H2/10/16～ 11/1	164	坪田真一1993「Ⅱ小阪合遺跡第19次調査（KS90-19）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』(財)八尾市文化財調査研究会報告41（財）八尾市文化財調査研究会
第20次	ＫＳ91-20 (財)八文研	共同住宅	青山二丁目	H3/4/19～ 5/16	340	坪田真一1993「Ⅲ小阪合遺跡第20次調査（KS90-20）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』(財)八尾市文化財調査研究会報告41（財）八尾市文化財調査研究会
第21次	ＫＳ91-21 (財)八文研	共同住宅	若草町	H4/1/18～ 2/10	300	原田昌則2007「Ⅱ.小阪合遺跡（KS89-18）」『(財)八尾市文化財調査研究会報告101』(財)八尾市文化財調査研究会
	92-067 市教委	共同住宅	南小阪合町一丁目	H4/5/7・19～ 21	105	澄斎1993「６．小阪合遺跡（92-067）」『八尾市内遺跡平成４年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告27八尾市教育委員会
	92-110 市教委	倉庫	青山町五丁目	H4/6/8.	6.25	澄斎1993「７．小阪合遺跡（92-110）」『八尾市内遺跡平成４年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告27八尾市教育委員会

調査名	略号 調査主体	調査原因	所在地	調査期間	調査面積 (㎡)	文　　献
	92-143 市教委	共同住宅	青山町五丁目他	H4/6/29・7/6 ～10	8	澁　斎1993「10. 小阪合遺跡（92-143）」『八尾市内遺跡平成４年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告27八尾市教育委員会
第22次	ＫＳ92-22 (財)八文研	共同住宅	若草町	H4/8/5～ 8/28	200	高萩千秋1993「Ⅳ小阪合遺跡（KS92-22）第22次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告39（財）八尾市文化財調査研究会
第23次	ＫＳ92-23 (財)八文研	公共下水道	青山町二・三丁目	H4/9/8～ 11/26	106	成海佳子1993「Ⅴ小阪合遺跡（KS92-23）第23次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告39（財）八尾市文化財調査研究会
第24次	ＫＳ92-24 (財)八文研	共同住宅	青山町五丁目	H4/11/16～ 12/5	230	高萩千秋1993「Ⅵ小阪合遺跡（KS92-24）第24次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告39（財）八尾市文化財調査研究会
第25次	ＫＳ93-25 (財)八文研	公共下水道	青山町二丁目	H5/4/2～ 7/9	44	坪田真一1994「Ⅴ小阪合遺跡第25次調査」『(財）八尾市文化財調査研究会報告42』（財）八尾市文化財調査研究会
第26次	ＫＳ93-26 (財)八文研	共同住宅	青山町二丁目	H5/9/1～ 10/4	420	坪田真一1998「Ⅰ小阪合遺跡（第26次調査）」『(財）八尾市文化財調査研究会報告61』（財）八尾市文化財調査研究会
第27次	ＫＳ94-27 (財)八文研	公共下水道	青山町二丁目	H6/5/9～ 5/27	36	西村公助・中野篤史1996「Ⅲ小阪合遺跡（第27次調査）」『(財）八尾市文化財調査研究会報告50』（財）八尾市文化財調査研究会
第28次	ＫＳ94-28 (財)八文研	体育館	山本町南七丁目	H6/5/26～ 8/5	855	本書掲載
第29次	ＫＳ94-29 (財)八文研	総合体育館	青山町三丁目	H6/6/1～ H7/3/20	7220	本書掲載
第30次	ＫＳ95-30 (財)八文研	共同住宅	南小阪合町一丁目	H8/1/8～ 1/22	104	原田昌則1996「Ⅰ小阪合遺跡（第30次調査）」『(財）八尾市文化財調査研究会報告54』（財）八尾市文化財調査研究会
第31次	ＫＳ95-31 (財)八文研	防火水槽	青山町五丁目	H8/1/29～ 2/2	36	岡田清一1996「Ⅶ小阪合遺跡（第31次調査）」『(財）八尾市文化財調査研究会報告53』（財）八尾市文化財調査研究会
第32次	ＫＳ96-32 (財)八文研	変電所設備	青山町四丁目	H8/7/1～ 7/24	200	坪田真一・古川晴久1997「13.小阪合遺跡第32次調査（KS96-32）」『平成８年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会
第33次	ＫＳ96-33 (財)八文研	電気管路	青山町四丁目、南小阪合町一丁目	H8/11/13～ 11/29	76	高萩千秋1998「Ⅸ小阪合遺跡（第33次調査）」『(財）八尾市文化財調査研究会報告60』（財）八尾市文化財調査研究会
第34次	ＫＳ96-34 (財)八文研	公共下水道	青山町一・二丁目	H9/1/13～ 2/28	50.3	原田昌則1998「Ⅹ小阪合遺跡（第34次調査）」『(財）八尾市文化財調査研究会報告60』（財）八尾市文化財調査研究会
第35次	ＫＳ96-35 (財)八文研	養護老人ホーム施設	青山町四丁目他	H9/3/17～ 6/19	1090	本書掲載
	98-１～７ 府調センター	団地	若草町	H9/12/26～ H10/12/25	6135	駒井正明・本間元樹・陣内暢子・松田留美・松田順一郎2000「小阪合遺跡ー都市基盤整備公団八尾団地建替えに伴う発掘調査報告書ー」『(財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第51集』(財)大阪府文化財調査研究センター
第36次	ＫＳ97-36 (財)八文研	公共下水道	若草町	H10/2/9.	12	高萩千秋1999「Ⅴ小阪合遺跡第36次調査」『(財）八尾市文化財調査研究会報告62』（財）八尾市文化財調査研究会
	92-143 市教委	分譲住宅	青山町四丁目	H11/11/11.	4	吉田珠己2000「２．小阪合遺跡（99-320）」『八尾市内遺跡平成11年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告42八尾市教育委員会
	02-１～６ 府センター	団地	若草町	H14/4/15～ H15/3/14	3270	本間元樹・辻本武200４「小阪合遺跡（その２）ー八尾団地（建替）埋蔵文化財発掘調査（第２次）ー」『(財)大阪府文化財センター調査報告書第116集』（財)大阪府文化財センター
第37次	ＫＳ2002-37 (財)八文研	公共下水道	青山町四丁目、中田一・三丁目	H14/9/10～ H15/3/10	36	高萩千秋・成海佳子・西村公助・樋口薫2003「小阪合遺跡（第37次調査）」『(財）八尾市文化財調査研究会報告75』（財）八尾市文化財調査研究会
第38次	ＫＳ2002-38 (財)八文研	公共下水道	若草町地内	H15/6/26～ 9/30	33.28	樋口薫2003「Ⅵ小阪合遺跡第38次調査（KS2002-38）」『(財）八尾市文化財調査研究会報告78』（財）八尾市文化財調査研究会
	第３次調査 府センター	団地	若草町	H16/4/1～ H17/6/30	1625	松下知世・金光正裕・若林邦彦・新海正博2005「小阪合遺跡（その３）ー山本団地建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査報告」『(財）大阪府文化財センター調査報告書第132集』（財）大阪府文化財センター
第39次	ＫＳ2004-39 (財)八文研	共同住宅	若草町	H16/7/1～ 10/21	1590	岡田清一2005「18.小阪合遺跡第39次調査（KS2004-39）」『平成16年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会
第40次	ＫＳ2005-40 (財)八文研	病院	若草町	H17/9/1～ H18/3/10	5230	岡田清一・菊井佳弥2006「16.小阪合遺跡第40次調査（KS2005-40）」『平成17年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会
第41次	ＫＳ2006-41 (財)八文研	病院	若草町	H19/3/28～ H19/9/28	5350	樋口薫・河村恵理・鬼頭彰2008「９.小阪合遺跡第41次調査（KS2006-41）」『平成19年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会

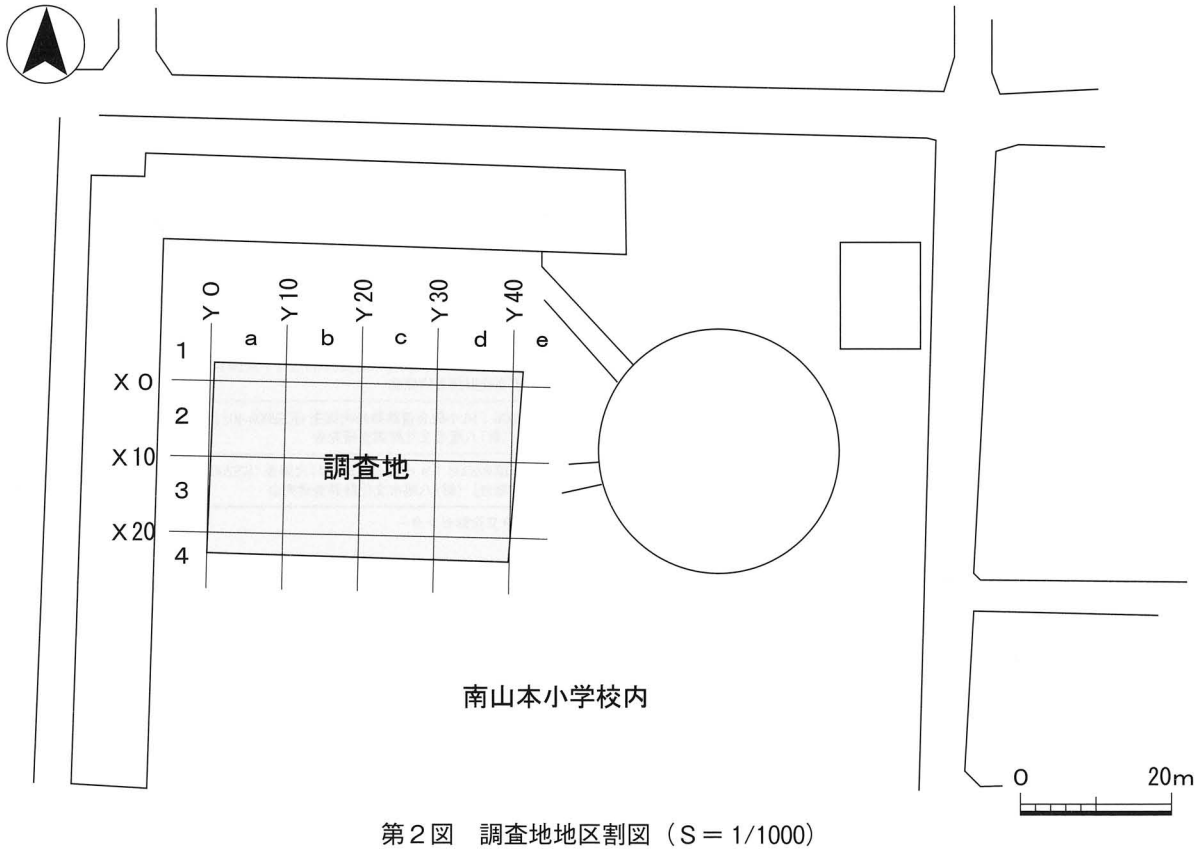
凡例　府教委ー大阪府教育委員会　府調センターー大阪府文化財調査研究センター　府センターー大阪府文化財センター
市教委ー八尾市教育委員会　（財）八文研ー（財）八尾市文化財調査研究会

第３章　調査概要

第１節　調査の方法と経過

今回の調査は、南山本小学校屋内運動場増改築工事に伴う発掘調査で、当調査研究会が小阪合遺跡内で実施した発掘調査の第28次調査（ＫＳ94－28）にあたる。工事は、既存の屋内運動場を取り壊した後、ほぼ同位置に新たな建物を建てるもので、その建物の位置に合わせて調査地を設定した。

調査地の面積は、上幅で東西40.6m×南北25.1mの1019.06㎡であるが、試掘調査で、ベースとなる砂層の含水量が多いことが明らかにされており、安全を重視するため、機械掘削の段階から壁面の勾配を45度に保った。そのため、機械掘削終了時の調査地面積は、東西38m×南北22.5mの855㎡に減少している。人力掘削に際しても、水はけを考慮し、幅広で深い側溝を設定し、水止めのためのセクションも多く残したため、面積はさらに減少している。さらに第１面までは全体的に調査を行ったが、第１面終了後は調査地をＹ20ライン上にセクションを残し、これを境に東区・西区の２か所に分けて調査を行った。最終的な平面の面積は、東区が東西12.0m×南北17.5m、西区が東西13.5m×南北18.0mとなった。調査を開始したのは平成６年５月26日、機械掘削が完了したのは６月１日、第１面の調査が終了したのは６月22日である。第２面の調査が終了したのは、東区が７月14日、西区が７月16日である。第３面の調査が終了したのは、東区が７月21日、西区が８月２日である。以後、下層確認、セクション掘削等すべての調査が完了したのは８月４日である。



第２図　調査地地区割図（Ｓ＝1/1000）

第２節　基本層序(第３図)

現地表面の標高はT.P.＋9.50m前後、第０層の盛土は0.7～0.8cm程度あるが、既存の建物を取り壊したため、周囲やグラウンドよりは若干低い。

第１層：旧耕土。学校建設直前まで耕作されていたもので、上面は造成時に削平され、ほぼ水平である。上面はT.P.＋8.7～8.8m、層厚は0.1～0.15m前後である。(第３図－１)

第２層：第１層の床を形成する土層。土質は青灰色礫混じり砂質シルトを呈する。上面に酸化鉄が沈着する。層厚は0.05～0.1m前後である。(第３図－２)

第３層：土質は青灰色粘土混じり砂質シルトを呈する。層厚は0.1～0.2mである。調査地東端では、礫の目立つ土層(第３－１層)の堆積が見られた。調査地西半では、粘土質が強い上部(第３－２層)と、シルト質が強い下部(第３－３層)に分けられる。(第３図－３～11)

第４層：土質は青灰色粗砂～礫混じり砂質シルトを呈する。層厚は０～0.2mである。調査地北西部にのみ堆積する。(第３図－12)

第５層：土質は暗青灰色粗砂～礫混じり砂質シルトを呈する。上面に酸化鉄が沈着する。層厚は０～0.1mである。第４層とおなじく当該層も調査地北西部にのみ薄く堆積する。(第３図－13)

第６層：洪水に起因する砂層。土質は白灰色粗砂を呈する。層厚は0.1～0.15mである。室町時代までの遺物をわずかに含む。(第３図－15・16)

第７層：第６層と同じく洪水に起因する砂層。土質は白灰色粗砂と灰色粘質シルト～粗砂の互層を呈する。層厚は0.15～0.4mである。調査地西側から東側へ順に堆積する(第７－４→７－１層)。室町時代までの遺物をわずかに含む。(第３図－18～22)

第８層：室町時代の水田耕作土。土質は青灰色微砂混じり粘質シルトを呈する。層厚は0.1～0.3mである。上面には、人・牛の足跡、鋤・鍬などの耕作痕が顕著に認められる。当該層上面を「第１面」と呼称した。(第３図－23・24)

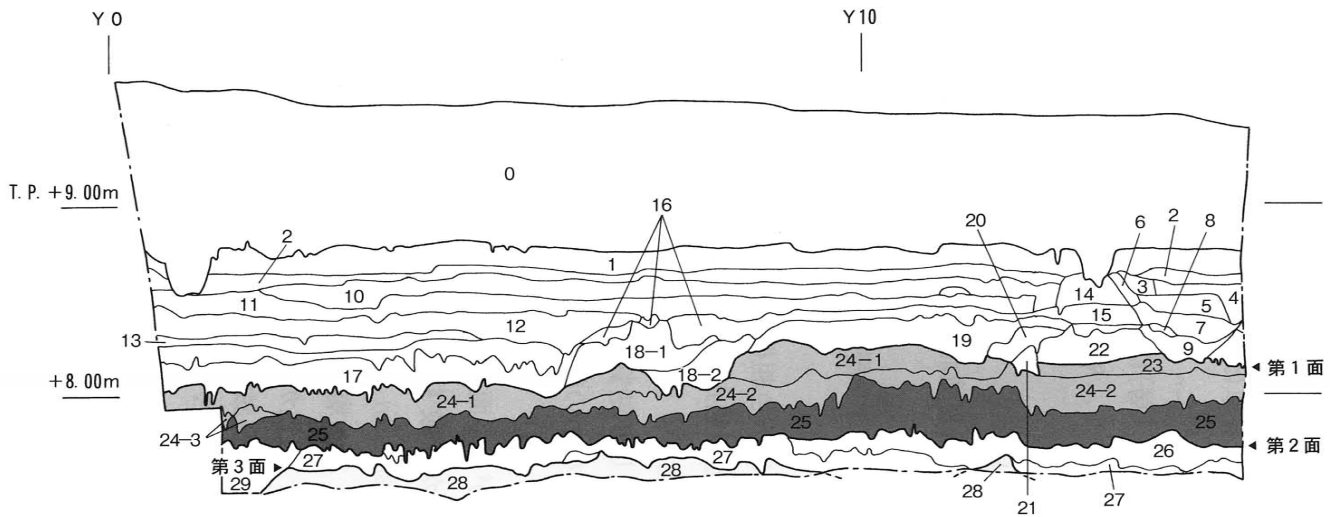
第９層：平安時代以降の水田耕作土の可能性が高いが、平面調査では認識できなかった。土質は灰色～青灰色粘土を呈する。下部に炭酸鉄が沈殿する。層厚は0.15～0.4mである。第９層上面はT.P.＋7.7～7.8mを測る。(第３図－25)

第10層：第９層の床を形成するものと考えられるが、第９層との分離が不可能な部分がある。土質は灰色粘土を呈し、粗砂～礫を少量含み、粘性が高い。層厚は０～0.2mである。古墳時代後期(６世紀代)の遺物が少量含まれる。当該層上面で第９層下面から切り込まれたと考えられる溝群を確認したが、平面調査ではさらに１層下の第11層上面で捉え、第11層上面を「第２面」と呼称した。第10層上面はT.P.＋7.7～7.8mを測る。(第３図－26)

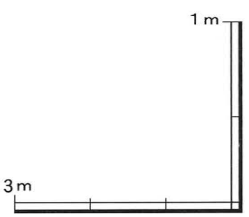
第11層：弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺物包含層。土質は暗青灰色微砂～礫混じり粘質シルトを呈し、粘性が強い。層厚は0.1～0.2m。(第３図－27)

第12層：土質は青灰色シルト～微砂を呈する。層厚は0.1～0.3mである。当該層上面で、弥生時代後期末の方形周溝墓、溝などを検出した。当該層上面を「第３面」と呼称した。上面はT.P.＋7.5～7.7mで東から西へ低くなる。(第３図－28)

当該層を除去したところ、当調査地の最終的な基盤層を確認。土質は灰色微砂～粗砂



0　盛土＜第０層＞
1　黒灰色礫混じり粘質シルト＜第１層＞
2　青灰色礫混じりシルト(砂質)　上部に鉄分沈着＜第２層＞
3　青灰色礫混じりシルト＜第３－１層＞
4　青灰色粗砂混じりシルトに青灰色粘土のブロック＜第３－１層＞
5　青灰色礫～粗砂混じりシルト＜第３－１層＞
6　青灰色シルト礫混じり＜第３－１層＞
7　灰色粗砂混じりシルト(底に鉄)　＜第３－１層＞
8　７よりシルト少ない＜第３－１層＞
9　粗砂に 17 がブロックで入る＜第３－１層＞
10　青灰色砂質シルト　青粘土多量に含む＜第３－２層＞
11　青灰色砂質シルト　青粘土含む＜第３－３層＞
12　青灰色粗砂～礫混じりシルト(砂質)＜第４層＞
13　暗青灰色粗砂～礫混じりシルト(砂質)　上部に鉄分沈着＜第５層＞
14　灰色シルト　15 より硬い
15　白灰色粗砂＜第６層＞
16　17 より砂が多い＜第６層＞
17　灰色シルト～粗砂と灰白色粗砂の互層　鉄分沈着＜第７－１層＞
18-1　灰茶シルト(粘質)　＜第７－２層＞
18-2　灰白色粗砂　上部は灰色粘土とシルトの互層＜第７－２層＞
19　灰色微砂混じり粘質シルト＜第７－３層＞
20　灰色シルト～微砂に 19・23 がブロックで入る　茶灰色粘質シルト＜第７－４層＞
21　灰色シルトに 17 と類似するブロック土入る＜第７－４層＞
22　灰白色粗砂　底に鉄分沈着　硬くしまる＜第７－４層＞
23　灰色微砂～粘質シルト＜第８層＞
24-1　青灰色粘質シルト　微砂混じり＜第８層＞
24-2　青灰色粘質シルト　微砂少ない＜第８層＞
24-3　青灰色粘質シルト　シルト質強い＜第８層＞
25　灰色礫混じり粘土＜第９層＞
26　淡青灰色粘土＜第 10 層＞
27　青黒色礫混じり粘土シルト＜第 11 層＞
28　青灰色粘質シルト～微砂＜第 12 層＞
29　青灰色シルト



第３図　西区北壁断面図（S＝垂直 1/40、水平 1/100）

を呈し、含水量は極めて多い。層厚は0.2～0.3m以上である。当該層上面を構築面とする溝状遺構を検出したが、周溝部下部の部分的な下層確認であった為、図化できなかった。

第３節　検出遺構と出土遺物

１)第１面(第４図、図版一)

T.P.+8.0m前後に堆積する第８層青灰色微砂混じり粘質シルト層上面で、東西方向に伸びる畦畔状の遺構と水田遺構を検出した。検出した畦畔を南から順に**畦畔101**～**103**と呼称し、**畦畔101**以南に位置する水田を**水田101**、**畦畔102**と**103**に挟まれた水田を**水田102**と呼称した。**畦畔101**と**102**に挟まれた箇所には第８層の堆積が見られず、流路状の窪地が東西に伸びる。水田遺構の東部および流路の西部の標高値の低地部分に堆積した自然堆積層(第６・７層)から室町時代の瓦器などが少量出土した。当該面は室町時代の遺構面であると推察できる。

畦畔(**畦畔**)

畦畔101

３ａ－ｄ地区で検出した畦畔である。畦畔の検出規模は、上面幅0.5～4.0m、基底幅1.3～5.2m、高さ0.05～0.2mを測る。第８層を盛り上げて構築しており、幅・高さともに東へ行くほど小規模なものとなる。

畦畔102

ａ－ｄ地区をとおるＸ15ライン上に沿って検出した畦畔である。**畦畔101**から北へ３～４m程離れた地点に位置する。畦畔の検出規模は、上面幅1.0～1.5m、基底幅1.5～1.7m、高さ0.05～0.15mを測る。第９層を盛り上げて構築しており、上面には特に粗砂が厚く堆積している。

畦畔103

２ａ－ｄ地区で検出した畦畔である。畦畔の検出規模は、断面の観察から、上面幅2.5m、基底幅3.3m前後と推定される。高さは0.1～0.15mを測る。**畦畔102**から北へ７m程離れた地点に位置する。北端は調査地外に至り、東側は攪乱を受けている。第８層上面にシルト～粗砂などのブロック層を盛り上げて構築しており、上面には足跡状遺構の窪みが顕著に残る。

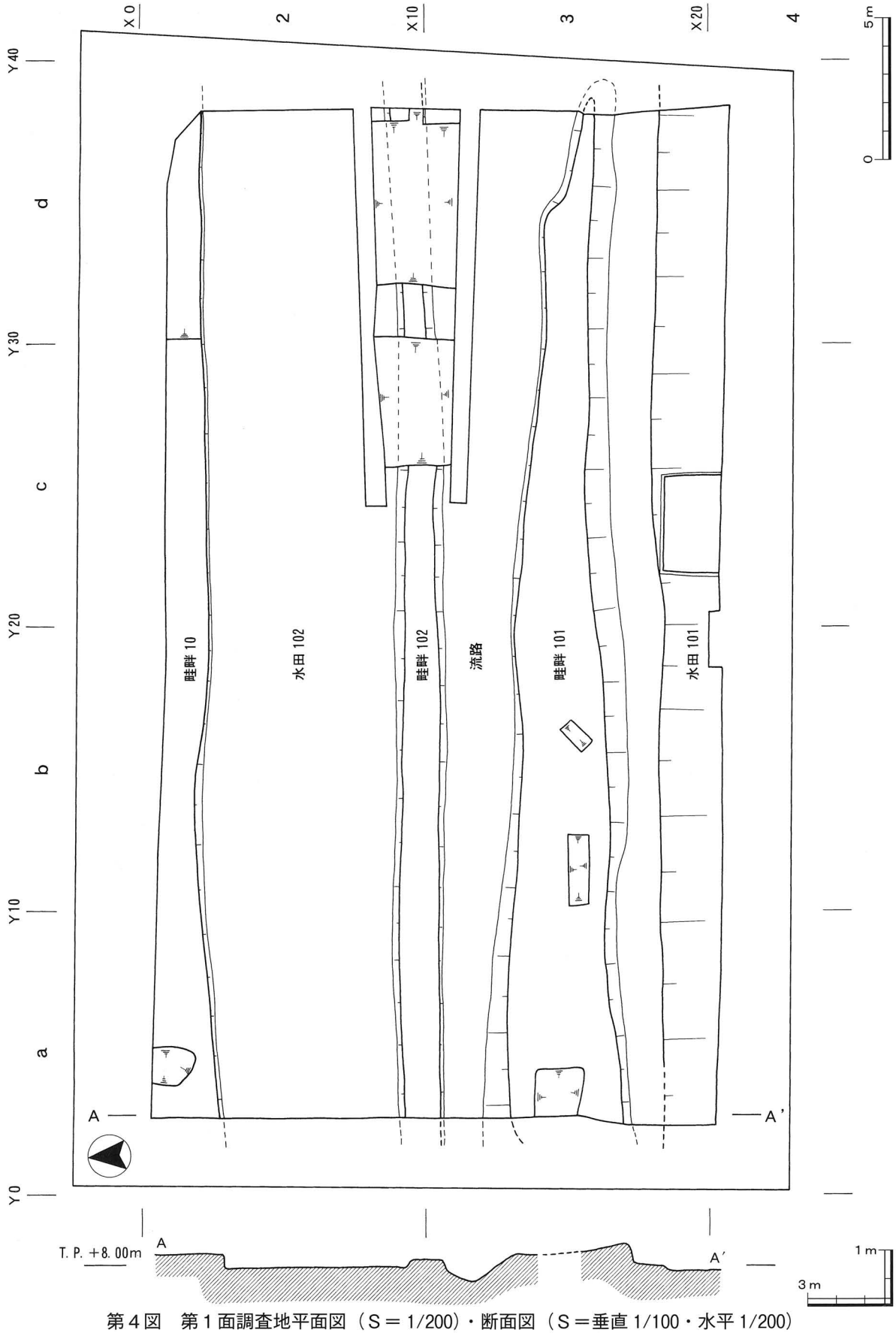
水田(**水田**)

水田101

３・４ａ－ｄ地区で検出した水田である。水田の検出規模は、南北検出幅3.5～4.5m、東西検出幅35.5mを測る。北端から約２m地点で、南へ１段下がる鈍い段を有する。全体に西から東へ低くなる。上面の標高はT.P.+7.8～8.1mを測る。

水田102

２ａ－ｅ地区で検出した水田である。水田の検出規模は、南北幅6.0～6.5m、東西検出幅35.5mを測る。上面の標高はT.P.+7.9m前後で西から東へ低くなる。



第４図　第１面調査地平面図（S＝1/200）・断面図（S＝垂直 1/100・水平 1/200）

2）第２面（第５図、図版一）

T.P.+7.7～7.8mに堆積する第11層暗青灰色微砂～礫混じり粘質シルト層上面で、鋤溝16条、土坑２基、小穴１個、落ち込み１か所からなる田畑の床面を検出した。検出した鋤溝群は調査地全体を東西・南北軸に整然と並ぶ。土坑はＹ15ライン上をほぼ南北に並列する。この２基の土坑は、南側をＳＫ201、北側をＳＫ202と呼称した。東区東部中央で検出した落ち込みをＳＯ201、西区東端で検出した小穴をＳＰ201と呼称した。

鋤溝（ＳＤ）

調査地全体を東西・南北に整然と並ぶものである。このうち、東西方向に伸びる鋤溝を南からＳＤ201～212、南北方向に伸びる鋤溝を東からＳＤ213～216と呼称した。規模は、幅0.2～0.5m、深さ0.1～0.3m前後を測る。各溝の間隔は、東西方向のものが４～５ｍとほぼ等間隔に対して、南北方向のものは5.5～10mとやや広く不揃いである。なお東西方向に伸びる鋤溝には、ＳＤ203～205、ＳＤ206～208、ＳＤ209～211のように狭い間隔で、まとまりをもつものがある。鋤溝の埋土には第10層灰色粘土が堆積しており、遺物は土師器・須恵器・瓦器等の小破片をわずかに含むにとどまった。溝底の標高は、東西方向の鋤溝は西下がり、南北方向の鋤溝は南下がりである。鋤溝の法量などについては以下、第２表にまとめた。

第２表　第２面鋤溝法量表（単位m）

溝番号	幅	深さ	検出長	他の溝との関係
ＳＤ201	0.3～0.5	0.18～0.2	＊１	ＳＤ213・216と交差
ＳＤ202	0.3～0.4	0.1前後	6.5	ＳＤ213との交差
ＳＤ203	0.3～0.5	0.15～0.2	＊１	ＳＤ213・216と交差
ＳＤ204	0.3～0.4	0.1前後	16.5	ＳＤ213・215と交差
ＳＤ205	0.2～0.4	0.2前後	9.2	ＳＤ216と交差
ＳＤ206	0.25～0.6	0.12～0.2	＊１	ＳＤ213・216と交差
ＳＤ207	0.55～0.6	0.15～0.2	9.3	ＳＤ216と交差
ＳＤ208	0.3～0.5	0.15～0.2	11.5	ＳＤ213・215と交差
ＳＤ209	0.2～0.3	0.1～0.15	＊１	ＳＤ213・216と交差
ＳＤ210	0.15～0.3	0.15～0.2	8.4	ＳＤ216と交差
ＳＤ211	0.3～0.45	0.15～0.2	8.7	
ＳＤ212	0.2以上	0.15以上	8.7	ＳＤ215とＴ字形に接続
ＳＤ213	0.3～0.6	0.2～0.3	＊２	ＳＤ201・206・208・209・211と交差、ＳＤ201を切る
ＳＤ214	0.25～0.35	0.15～20	＊２	ＳＤ201・203・204・206・208・209と交差
ＳＤ215	0.25～0.52	0.2～0.24	＊２	〃、ＳＤ212とＴ字に接続
ＳＤ216	0.3～0.48	10前後	15.5	ＳＤ201・203・205・207・209・211と交差

＊１　調査地東西幅と同じ
＊２　調査地南北幅と同じ

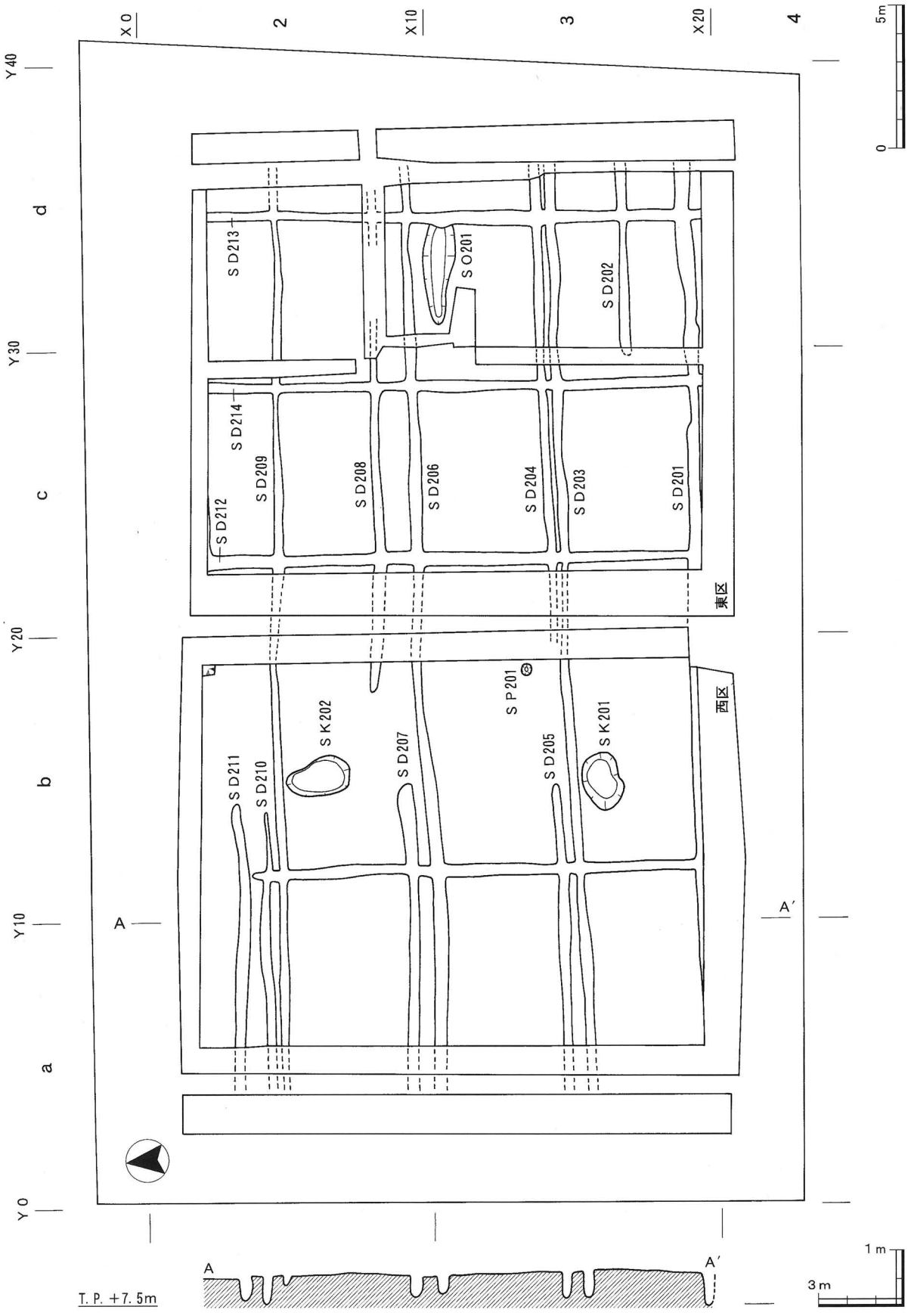
土坑（ＳＫ）

ＳＫ201

３ｂ地区で検出した土坑である。土坑の形態は、長軸を東西に持つ楕円形を呈し、長径2.1m、短径1.2m、深さ2.1mを測る。遺構埋土は第10層灰色粘土を主として、灰色粗砂や暗灰色粘土などのブロック土が混ざる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ202

２ｂ地区で検出した土坑である。土坑の形態は、長軸を南北に持つ楕円形を呈し、長径2.2m、



第５図　第２面調査地平面図（S＝1/200）・断面図（S＝垂直 1/100・水平 1/200）

短径1.25m、深さ1.8mを測る。遺構埋土はＳＫ201同様、第10層を主とし、ブロック土が混ざる。遺物は出土しなかった。

落ち込み（ＳＯ）

ＳＯ201

ｄ地区のＸ10ライン上で検出した落ち込みである。落ち込みの形態は、東西に長い楕円形を呈し、検出長は東西3.5m、南北1.1m、深さ0.1m前後を測る。遺構埋土は灰色粘土（第10層）である。遺構の東端はＳＤ213に切られていることから鋤溝群の構築時期よりも若干古いと推察できるが、埋土の特徴から時期差はほとんどないものと考えられる。遺物は出土しなかった。

小穴（ＳＰ）

ＳＰ201

３ｂ地区で検出した小穴である。小穴の形態は、径0.35mの円形を呈し、深さは0.18mを測る。断面形状は逆凸字形である。遺構埋土は暗灰色粘土の単一層で、杭跡と推測できる。遺物は出土しなかった。

３）第３面（第６図、図版一・二）

T.P.+7.5～7.7mに堆積する第12層青灰色シルト～微砂層上面で、方形周溝墓４基、土器棺墓２基、土器集積２ヵ所、溝９条を検出した。Ｙ18ラインを境に調査地東側では方形周溝墓等、墓域に関連する遺構が集中しており、西側では小規模な溝群を検出した。検出した遺構はそれぞれ、方形周溝墓をＳＸ301～304、土器棺墓を**土器棺墓**301・302、土器集積をＳＷ301・302、大溝をＳＤ301、小溝群をＳＤ311～318、その他不明遺構をＳＺ301・302と呼称した。

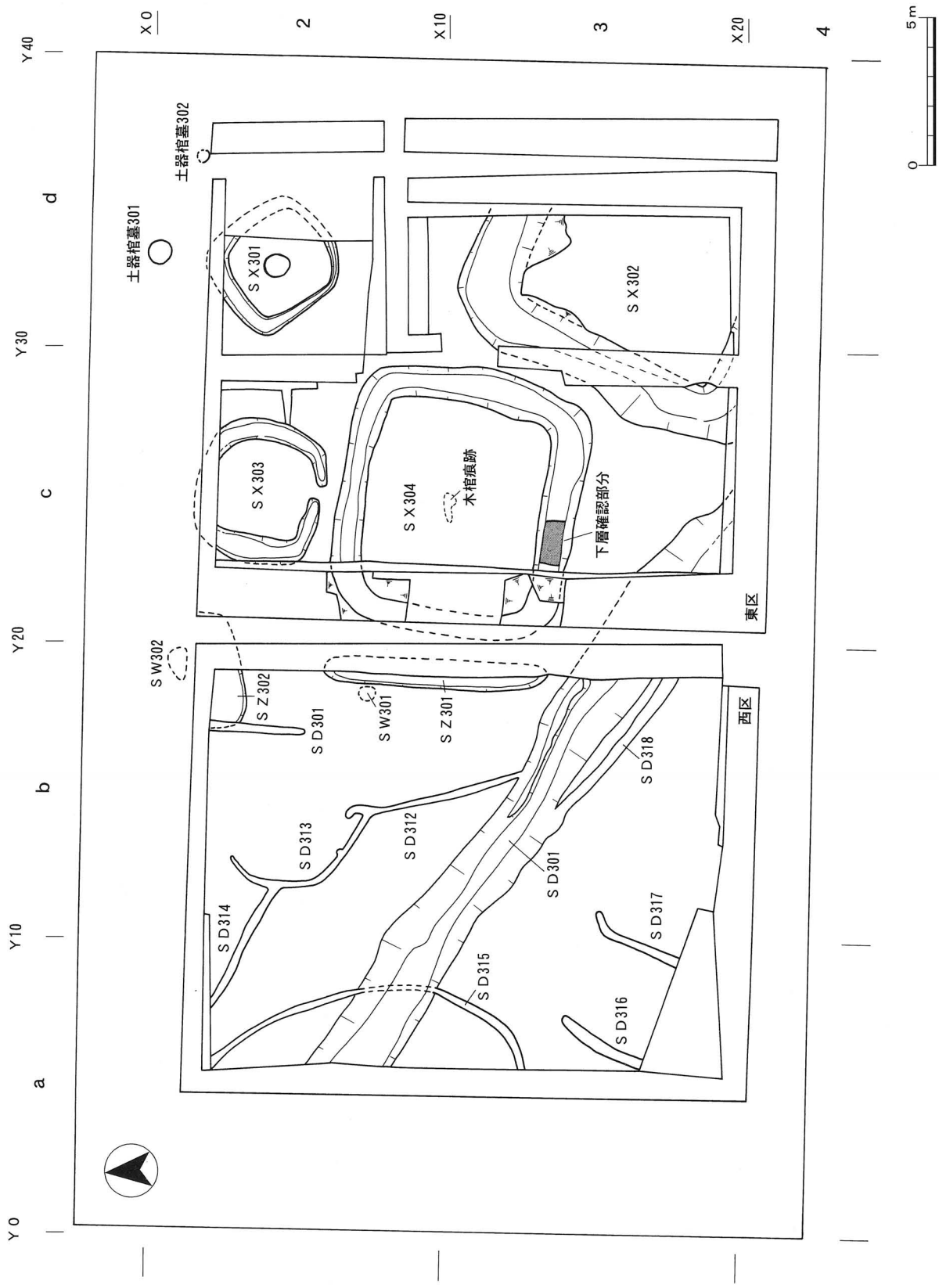
方形周溝墓（ＳＸ）

２－３・ｃ－ｄ地区で４基の方形周溝墓群を検出した。これらの方形周溝墓は、方向や規模に相異がある。方向について見てみると、主軸を北北西－南南東にもつもの（ＳＸ301）、北西－南東にもつもの（ＳＸ302）、ほぼ南北にもつもの２基（ＳＸ303・304）に分類できる。規模については、ＳＸ301・303は一辺３m前後、ＳＸ302・304は一辺７m前後を削り、２倍以上の差が生じる。詳細な規模については、21頁第３表にまとめた。なお、４基の構築時期は、ＳＸ301・303・304は弥生時代後期後半、ＳＸ302は弥生時代後期前半に比定できる。

ＳＸ301（第７・８図、図版五・七）

２ｄ地区で検出した方形周溝墓である。北東側の３分の１は側溝及び調査地外におよぶ為、検出できた３箇所のコーナー部分より墓の形状及び法量の復元を試みた。この結果、北北西－南南東方向に長軸を持ち、周溝を含めた全体の規模は北北西－南南東が4.2m、東北東－西南西が3.7m前後の小規模な方形周溝墓になることが想定できた。検出した周溝の幅は、北側周溝が0.6～0.65m、南側周溝が0.25～0.3m、深さ0.1～0.15mを測り、南コーナーが幅・深さともに小規模となる。なお、マウンドは後世の削平によってほとんど残っていない。

埋葬施設として、土器棺（２）を１基検出した。この土器棺は墳丘上のほぼ中央部に埋置された



第６図　第３面調査地平面図（S＝1/200）

第３表　第３面方形周溝墓一覧表（単位m）

遺構名	地区	区画検出規模	墳丘検出規模	周溝検出規模	出土遺物
ＳＸ301	２ｄ	4.2×3.7m前後	3.0×2.7m以下	(北周溝)幅0.6～0.65m (南周溝)幅0.25～0.3m 深さ0.3～0.5m	土器棺（２）、甕（１）
ＳＸ302	３ｃ－ｄ	10～11m以下	7.2m前後	幅1.7～2.0m 深さ0.3～0.5m	壷（３・５）、甕（６・７）、高杯（８～10）
ＳＸ303	２ｃ	4.9×4.2m	3.2～3.3m	(西周溝)幅0.7～1.0m (東周溝)幅0.4～0.8m (南周溝)幅0.3～0.6m 深さ0.1～0.15m	壷（11・12）、甕（13～18）、鉢(19～21)、高杯(22～25)
ＳＸ304	２－３ｃ	9.2×8.0m	7.0×5.9m	(南～東周溝) 幅1.1～1.4m、深さ0.4～0.5m (東～北周溝) 幅0.8～1.1m、深さ0.4～0.5m	壷（26・27）、甕（28～32）、鉢(33・34)、高杯(35)

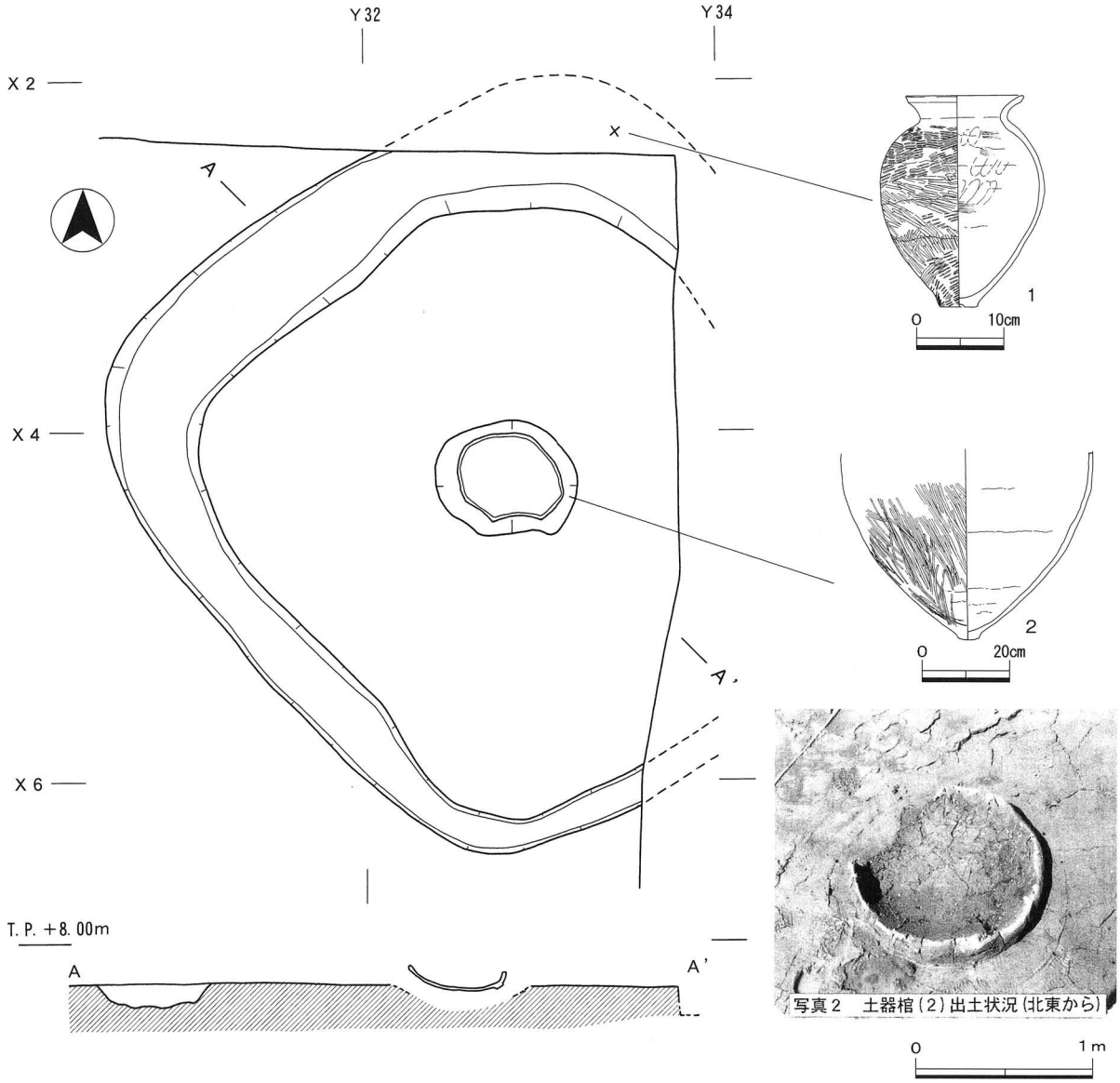


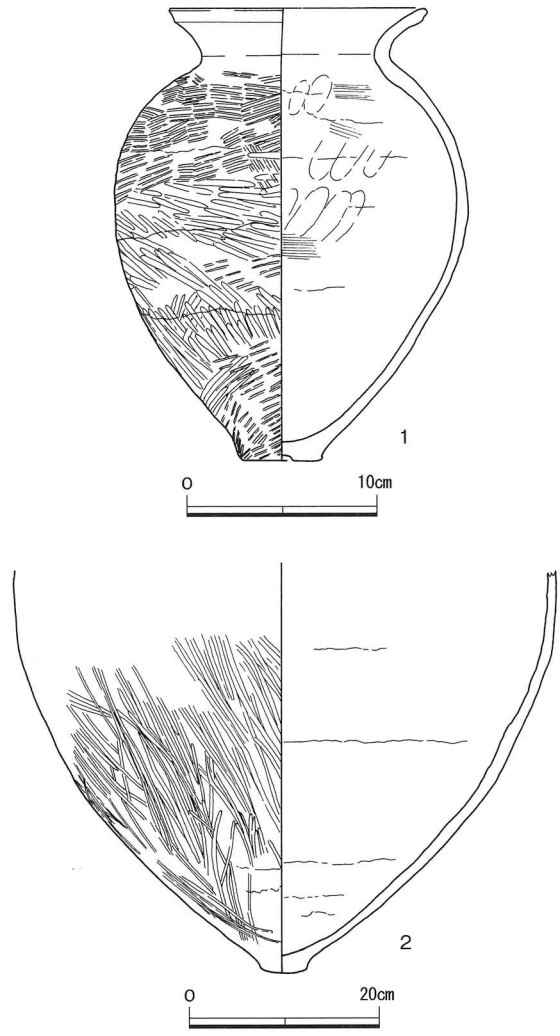
写真２　土器棺（２）出土状況（北東から）

第７図　第３面ＳＸ301平・断面図（Ｓ＝1/40：１：1/8、２：1/16）

状態で検出されたが、マウンドと同じく後世の削平を受けており、体部下半部～底部を残すのみであった。なお、土器棺底部が南東方向に向いた状態で検出されたことから、頭位を北西方向にむけて埋置されたものと考えられる。２は大形の壷であり、調整は外面に縦方向のヘラミガキを施す。内外面に粘土紐接合痕が見られる。外面底部及び底面と、体部上半に黒斑が見られる。生駒西麓産。

供献土器として、北コーナーの周溝底部で、甕（１）を検出した。１はほぼ完形の甕であり、受け口状口縁をもつ。調整は、内面全体に板状工具によるナデを施す。粘土紐接合後、指頭圧痕が見られる。外面はタタキ後体部中央～下半部にかけてヘラミガキを施す。体部中央部と下半部に、粘土紐接合痕が残る。体部下半部に黒斑が見られる。ドーナツ状底を持つ。生駒西麓産。弥生時代後期後半。

以上の出土遺物より、墓の構築時期は弥生時代後期後半以降に比定できる。



第８図　第３面ＳＸ301出土遺物実測図（Ｓ＝１：1/4、２：1/8）

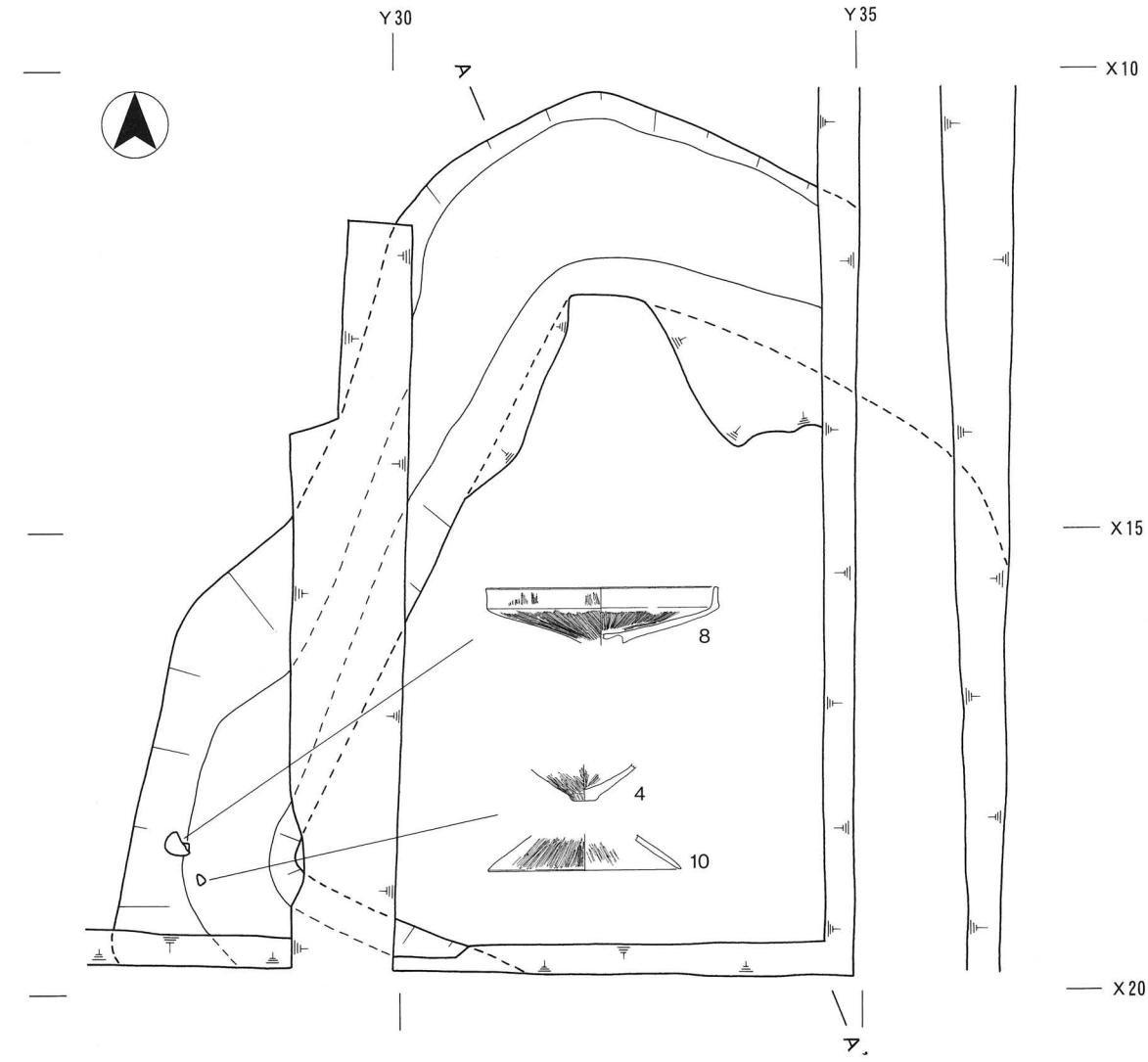
ＳＸ302（第９・10図、図版二・五）

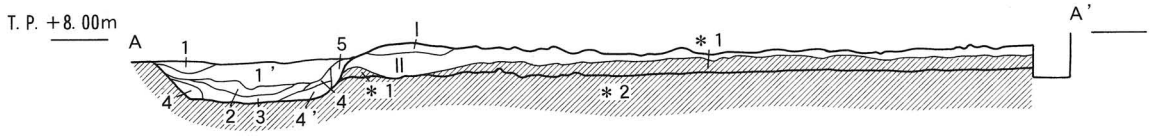
３ｃ－ｄ地点で検出した方形周溝墓である。南東側３分の２は側溝及び調査地外におよぶ為、今回の調査では確認できなかった。検出できた２箇所のコーナー部分より墓の形状及び法量の復元を試みた。この結果、周溝を含めた全体の規模は北東－南西が10～11ｍの方形周溝墓になることが想定できた。検出した周溝の幅は、北西周溝が1.7～2.0ｍ、深さ0.3～0.5ｍを測る。なお、マウンドは後世の削平によってほとんど残っておらず、埋葬施設も確認できなかった。

供献土器として、やや浅く掘られた南西コーナーの周溝底部で、高杯（８・10）・小形鉢または小形壷の底部（４）が出土した。この他にも周溝内埋土より短頸壷の口縁部（３）、壷底部（５）、甕（６）底部片（７）、高杯脚柱部（９）が出土した。南西コーナーの周溝底部から出土した遺物と、それ以外の周溝内埋土から出土した遺物を大別して観察した。前者の遺物は、墓の構築時期に置かれたものと推測でき、後者の遺物は周溝が埋没する過程において供献土器の崩壊による混入または、廃棄されたものと考えられる。以下、出土した遺物について概観したい。

まず、南西コーナーの周溝底部から出土した遺物について見てみると、８・10は高杯の杯部と脚部である。８は皿状を呈する。口縁部は短く立ち上がり、口縁端部に面を持つ。10は裾が広がり、端部を丸くおさめる。共に調整は内外面に丁寧な縦方向のヘラミガキを施す。生駒西麓産。弥生時代後期前半。

この他に周溝内埋土から出土した遺物について見てみると、３は緩やかに広がる口縁部をもつ



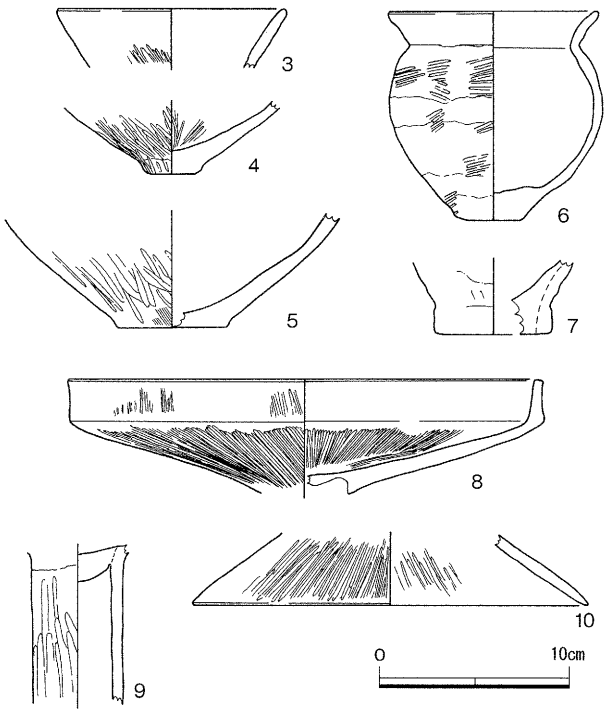


＜周溝埋土＞
1．青黒色粘質シルト
1'．青黒色礫混じり粘質シルト
2．青灰色粘質シルト
3．暗褐灰色粘質シルト（炭化物、礫、下層部に植物遺体を含む）
4．暗灰色粘質シルト
4'．暗灰色粘質シルト（やや色淡い）
5．青灰色シルト（マウンド崩壊土層）

＜マウンド盛土＞
Ⅰ．灰色微砂混じり粘質シルト（鉄分沈着）
Ⅱ．灰色粘質シルト
＊1．青灰色微砂混じり粘質シルト（黒灰色粘質シルト）
＊2．青灰色微砂

0　2m

第９図　第３面ＳＸ302平・断面図（Ｓ＝1/80）



第10図　第３面ＳＸ302出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

短頸壷で、頸部外面にヘラミガキを施す。生駒西麓産。６は球形の甕で、緩やかに屈曲する口縁部を持ち、口縁端部は受け口状口縁を呈する。弥生時代後期後半。９は高杯の脚柱部で、筒状を呈する。生駒西麓産。

以上のように、周溝内底部から出土した遺物は、他のＳＸ301・303・304周溝内より出土した遺物より古い時期（弥生時代後期前半）のものと推察できる。また、北西側に位置するＳＸ304の影響を受けたためか、北西周溝の外側ラインがやや乱れていることからも、ＳＸ302がＳＸ304構築前に存在していたものと推測できる。

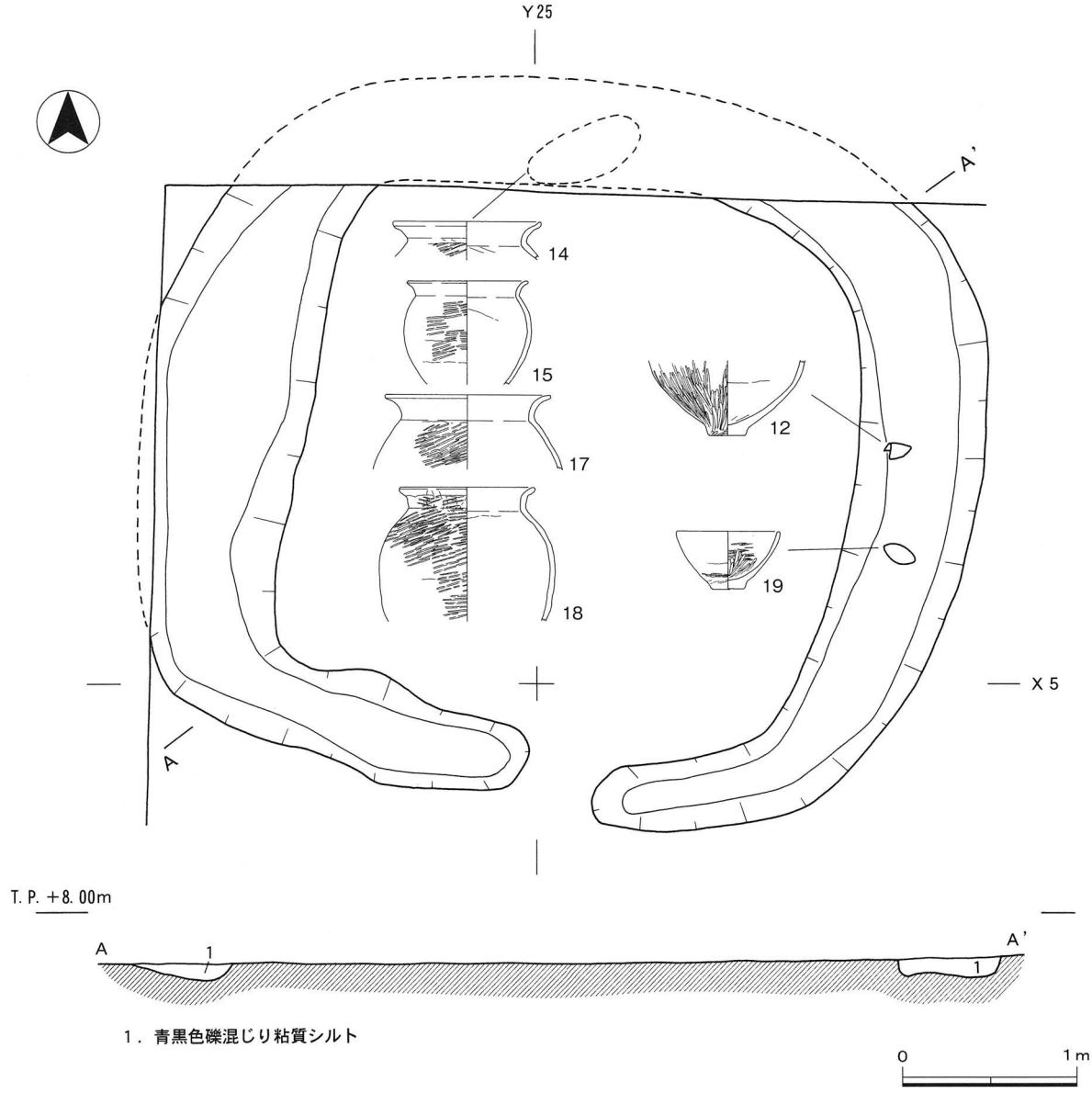
ＳＸ303（第11・12図、図版五）

２ｃ地区で検出した方形周溝墓である。北側および南西側の一部は調査地外に及ぶが、ほぼ全体の形をとどめる。平面形状は東西方向に長い隅丸方形を呈する。周溝を含めた全体の規模は南－北が4.2m、東－西が4.9mの小規模な方形周溝墓である。検出した周溝の幅は西側が0.7～1.0m、東側が0.4～0.8m、南側が0.3～0.6m、深さは0.1～0.15mを測る。南～西周溝が幅広で浅く、東周溝が幅狭で深い。周溝は南周溝の中央やや東よりで途切れている。なお、マウンドは後世の削平によってほとんど残っておらず、埋葬施設も検出できなかった。

供献土器として、東周溝中央部で壷(12)と鉢(19)が出土した。また、北周溝中央部では甕の破片（14・15・17・18）が出土した。この他にも周溝内埋土より広口壷の口縁部（11）、甕の口縁部(13)、甕の口縁～体部上半部(16)、鉢(20)、有孔鉢(21)、高杯の杯部(22)、高杯の脚部(23～25)が出土した。前者の遺物は墓の構築時期に置かれたものであり、後者の遺物は周溝が埋没する過程において廃棄されたものである。以下、出土した遺物について概観したい。

東周溝内から出土した遺物について見てみると、12は壷の体部下半～底部の破片である。調整は外面全体に縦方向のヘラミガキを施す。外面底部及び底面に黒斑が見られる。生駒西麓産。19は椀形の小形鉢。調整は内外面に丁寧なヘラミガキを施す。次に北周溝内から出土した遺物についてみてみると、全て甕の口縁部片であり、受け口状口縁部を持つもの(14)と、緩やかに屈曲して、口縁端部を丸くおさめるもの(15・17・18)がある。調整は外面に右上がりのタタキがみられ、内面はナデ調整で仕上げる。14は弥生時代後期後半。14・17は生駒西麓産。

この他に周溝内埋土から出土した遺物について見てみると、11は緩やかに外反する口縁部を持つ壷。13は「く」の字に屈曲し、受け口状口縁をもつ。弥生時代後期後半。16は緩やかに屈曲して、口縁端部を丸くおさめる。20は椀形の鉢。調整は内面にヘラミガキを施す。外面は右上がりのタタキが見られる。21は有孔鉢の底部片。22は高杯の杯部。23～25は高杯の裾部。23・25は生駒西麓産。これらの出土遺物より、墓の構築時期は弥生時代後期後半以降に比定できる。



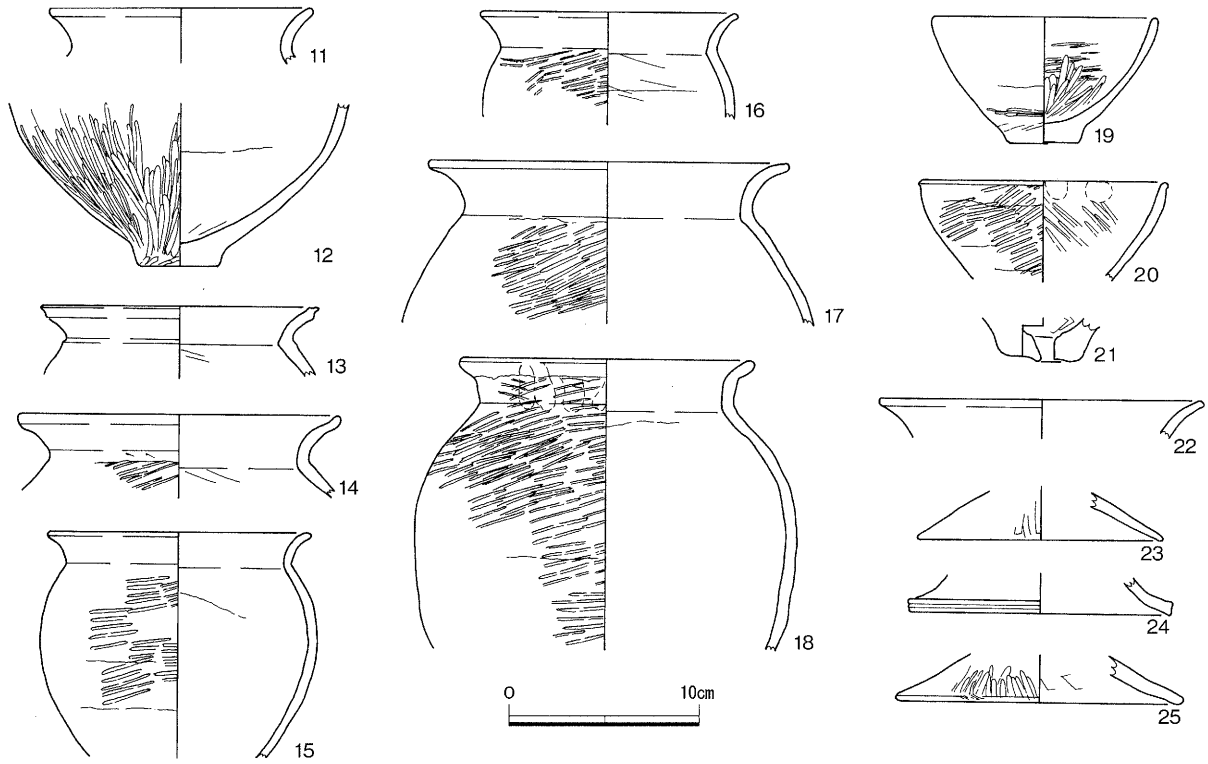
第11図　第３面ＳＸ303平・断面図（Ｓ＝1/4）

ＳＸ304（第13・14図、図版二・三・六）

２－３ｃ地区で検出した方形周溝墓である。北側にＳＸ303、南東側にＳＸ302が隣接する。西側の一部はトレンチやセクション部分に及ぶが、ほぼ全体の形を残す。平面形状は東西がやや長い方形を呈する。周溝を含めた全体の規模は南－北が8.0m、東－西が9.2mの方形周溝墓である。周溝の幅は東～南側が1.1～1.4m、西～北側が幅0.8～1.1m、深さは北～東が0.3m～0.4m、東～南にかけて0.4～0.5m、北東・南東部のコーナーはやや深くなる。なお、マウンドは後世の削平によってほとんど残っていない。

埋葬施設として、墳丘のほぼ中央部で、木棺の可能性のある木片を確認したが、明確な掘方などは、確認できなかった。

供献土器として、南東コーナーの周溝底部で直口壷(27)・鉢(34)、北西コーナーの周溝底部で

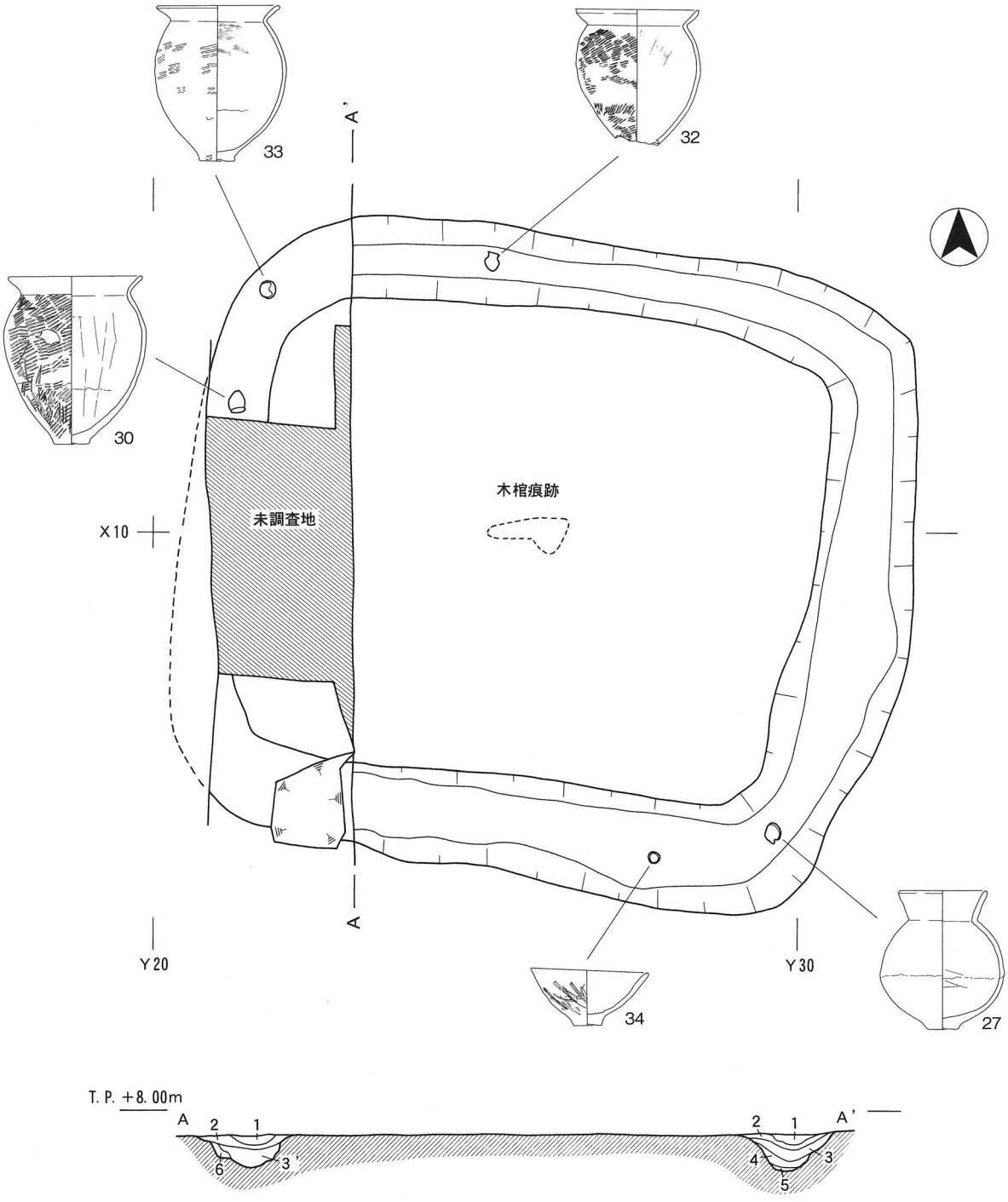


第12図　第３面ＳＸ303出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

甕(28・30～32)を検出した。この他にも周溝内埋土より壷の口縁部(26)、甕の口縁部(29)、鉢(33)、高杯杯部(35)が出土した。以下、出土した遺物について概観したい。

南東コーナーの周溝底部から出土した遺物について見てみると、27はほぼ完形の直口壷。調整は、内面に板状工具によるナデを施す。外面は摩滅が著しい為不明瞭であるが、おそらくヘラミガキを施していたと思われる。粘土紐接合痕が残る。体部下半部に黒斑が見られる。弥生時代後期前半。34は椀形の鉢。口縁部に僅かながらくびれ部分が認められる。調整は、内面は摩滅が著しい為不明瞭であるが、外面はヘラミガキを施す。外面の口縁部～底部にかけて黒斑が見られる。ほぼ完形の鉢。北西コーナーの周溝底部から出土した遺物について見てみると、28は甕の口縁部。生駒西麓産。30～32は体部中半部に最大径をもつ甕である。口縁部形態は、緩やかに屈曲し口縁端部を丸くおさめるもの(30・31)と、「く」の字に屈曲し端部に面をもつもの(32)がある。調整は内面に板状工具によるナデ、外面にタタキ後ナデを施す。30～32はほぼ完形の状態で出土したが、30の体部上半部には穿孔とみられる痕跡が残る。32は底部のみ欠損することから、故意に打ち欠いた可能性が高い。30・31は生駒西麓産。弥生時代後期後半。

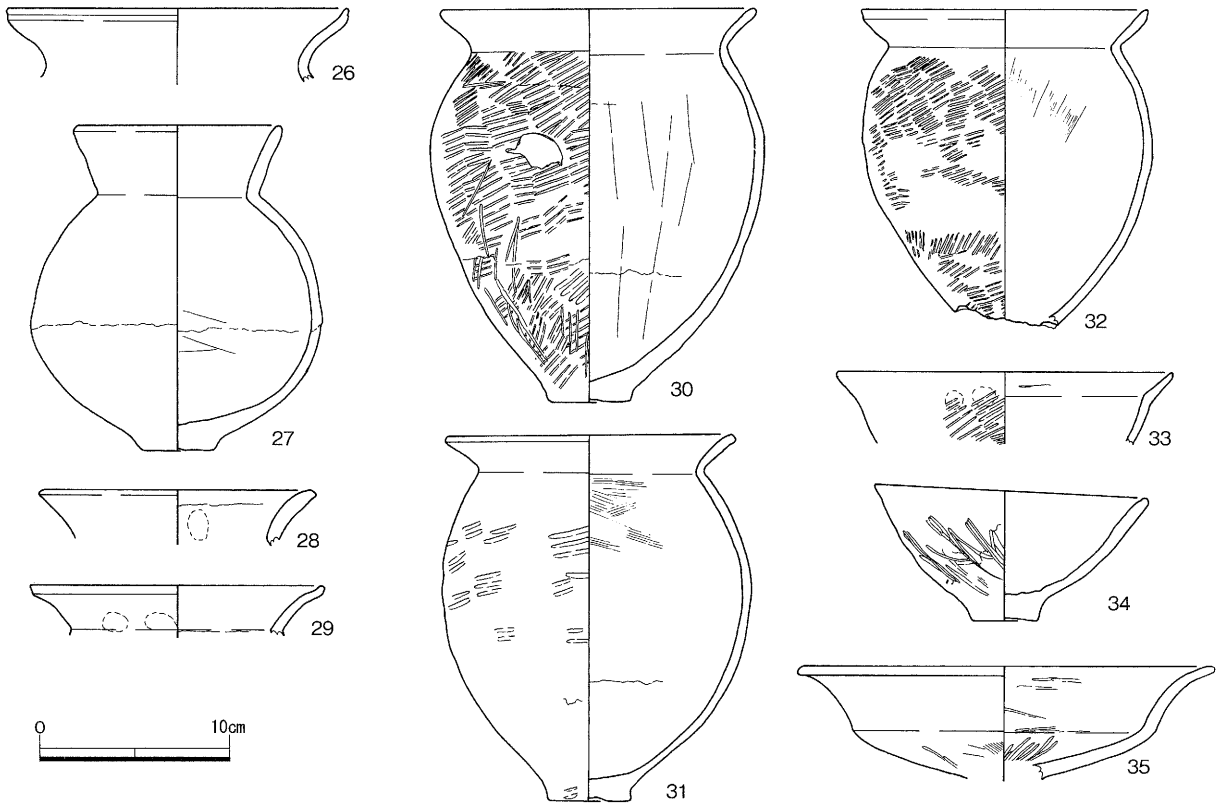
周溝内埋土より出土した遺物について見てみると、26は広口壷の口縁部。口縁端部の形態は上方に肥厚し、端面に沈線を施す。29は受け口状口縁部をもつ甕。33は外反する口縁部をもつ鉢。調整は外面にタタキを施す。口縁部に指頭圧痕を残す。弥生時代後期後半。35は外反度が顕著となる有稜高杯の杯部。弥生時代後期後半。これらの出土遺物より、墓の構築時期は弥生時代後期後半に比定できる。



1．暗灰褐色礫混じり粘質シルト
2．暗青灰色礫～粗砂混じりシルト（粘性やや弱い。炭化物含む）
3．暗灰色礫～粗砂混じりシルト（粘性強い。炭化物含む）
3'．３に青灰色粘質シルトがブロック状に混ざる
4．暗褐灰色粗砂混じりシルト（粘性強い。植物遺体含む）
5．灰色粘土
6．青灰色粘質シルト

0　2m

第13図　第３面ＳＸ304平・断面図（Ｓ＝1/80）



第14図　第３面ＳＸ304出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

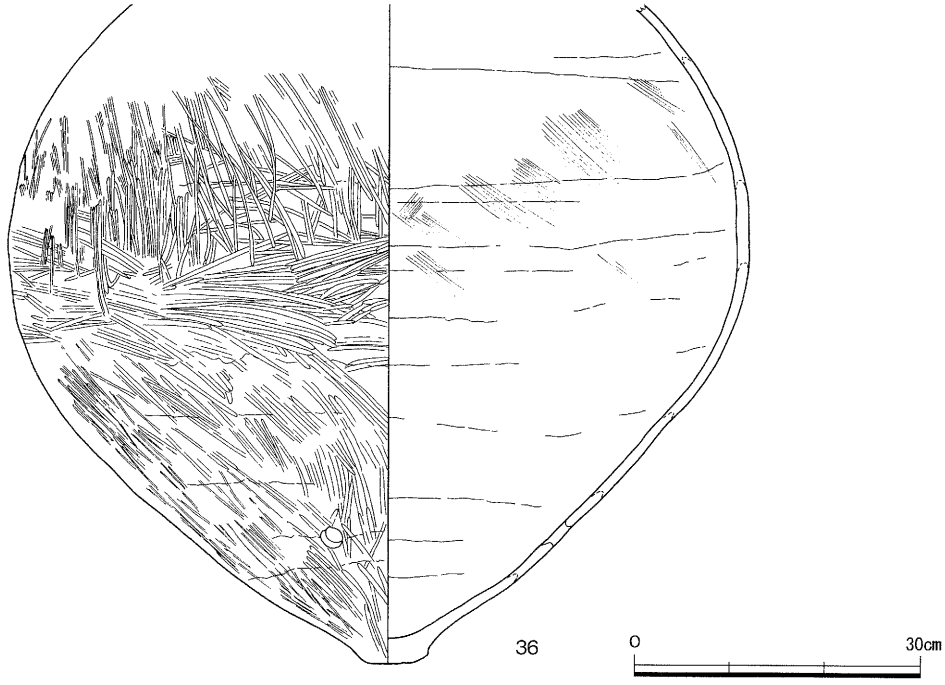
土器棺墓（**土器棺墓**）

土器棺墓301（第15図、図版三・七）

１－２ｄ地区で検出した土器棺である。ＳＸ301の北約1.5m、北壁際の側溝内より出土した為、詳細な埋没状況は不明である。この土器棺（36）は大形の壷であるが、後世の削平を受けており、頸部から上が欠損する。胴部形態は扁球形を呈し、最大径80cm・残存高40cmを測る。体部下半に径２cmの穿孔が見られる。生駒西麓産。

土器棺墓302（第16図、図版三・七）

２ｄ地区で検出した土器棺である。ＳＸ301の北東約2.5m、調査地北東隅で検出した。この土器棺（37）は大形の複合口縁を有する壷である。口縁部は二重口縁部分に装飾が施され、外面に竹管押圧円形浮文を貼り付け、端部に竹管押圧文が見られる。復元口径45cm程度を測る。胴部は扁球形で、調整は内面にヘラ状工具によるナデ、外面にヘラミガキを３段階に分けて施す。体部上半部分に黒斑がみられる。口縁部内面全体が煤ける。弥生時代後期後半（様相２～３）。



第15図　第３面土器棺墓301土器棺実測図（Ｓ＝1/8）

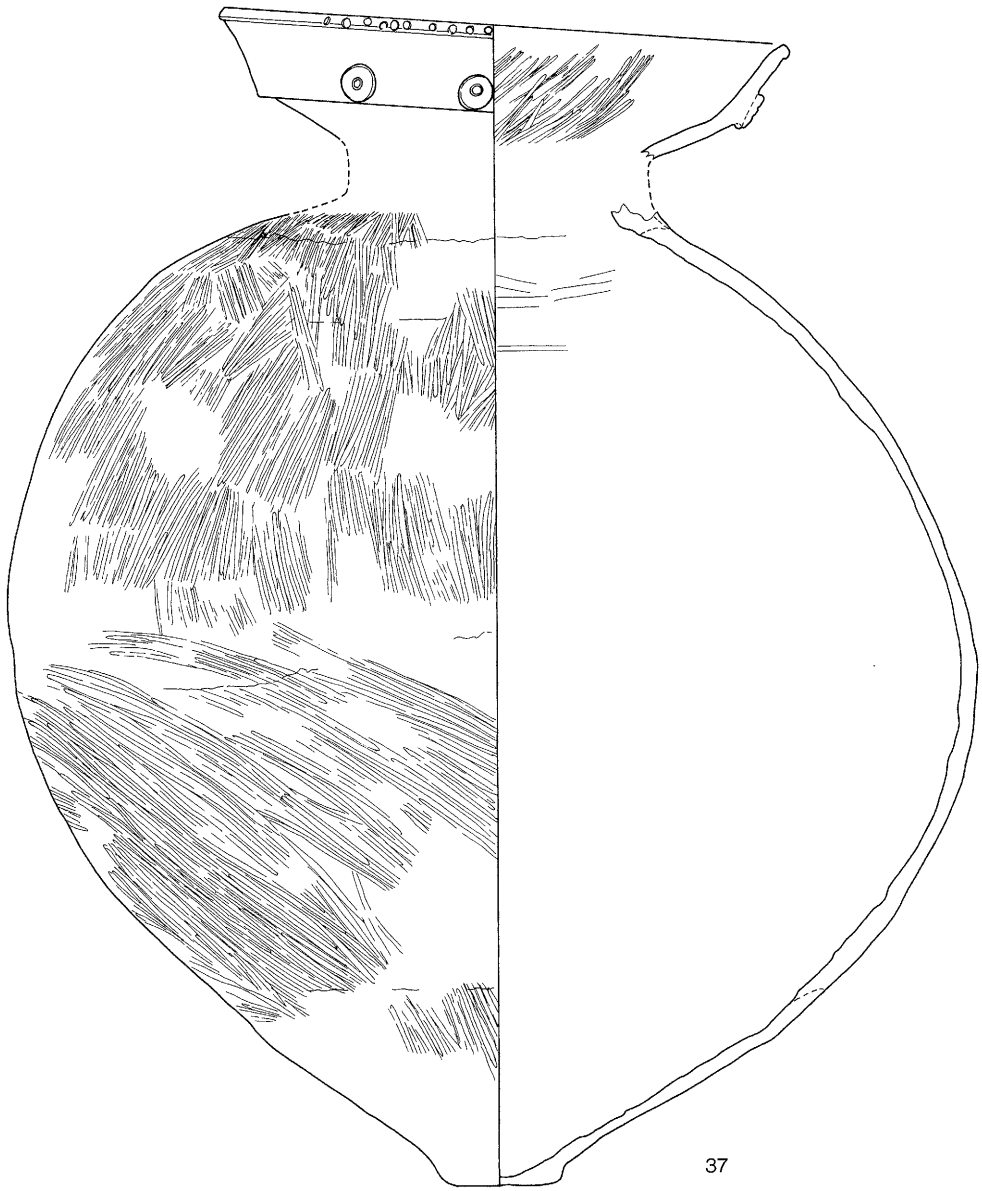
不明遺構（ＳＺ）

ＳＺ301（第17図、図版六）

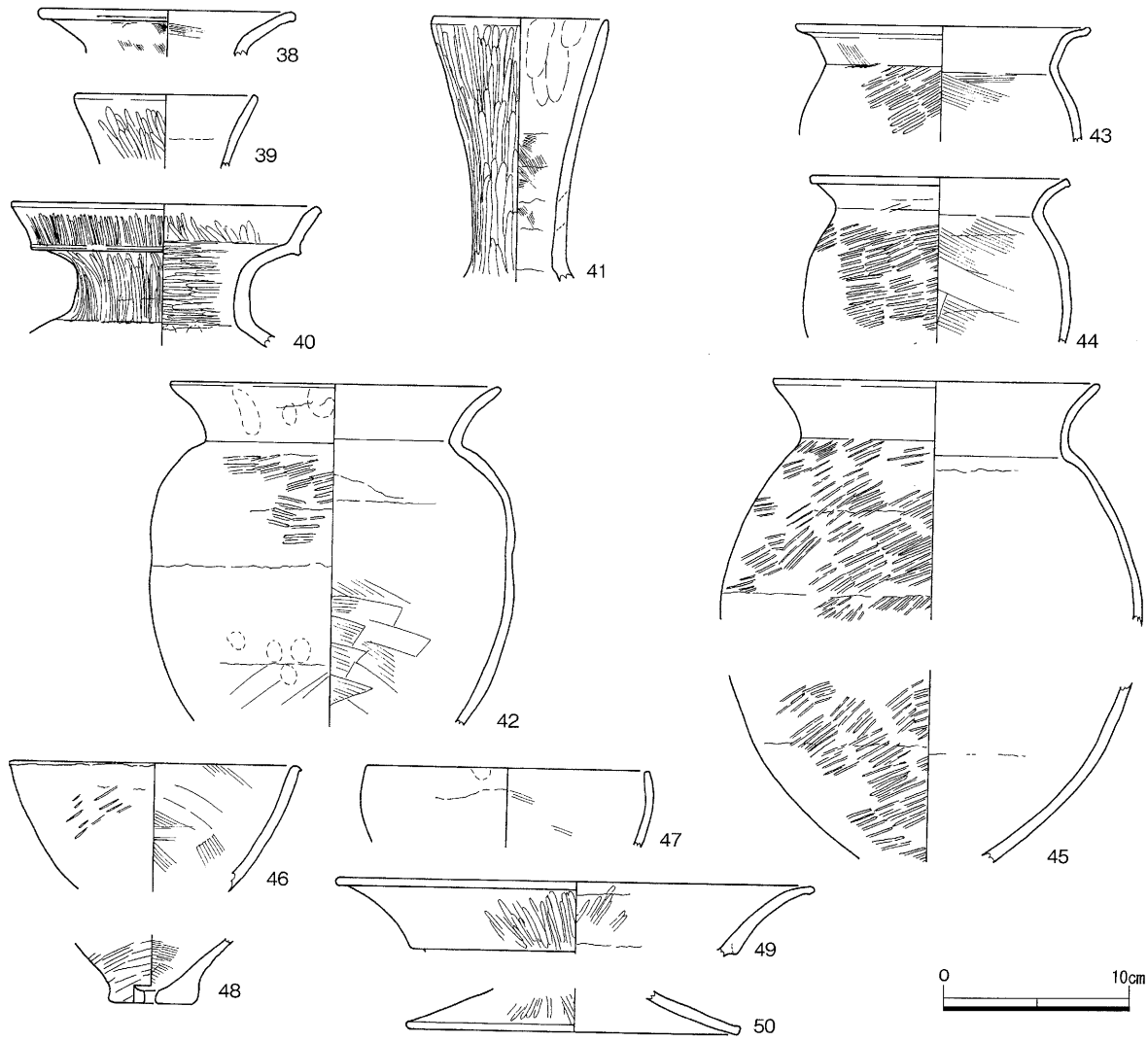
２－３ｂ地区で検出した用途不明の遺構である。ＳＸ304の西約２ｍ地点に位置し、ＳＸ304の西側周溝と並列する。平面形態は南北に長い長円形を呈し、南北 7.6m・東西1.0 ｍ・深さ0.25ｍを測る。北西側にはＳＷ301が存在する。当遺構（周辺部）からは土器が多量に出土した。以下、残存状態の比較的良好な遺物を図化した。

図化できたものは、広口壷（38）、直口壷（39）、二重口縁壷（40）、細頸壷（41）の口縁部、甕（42～45）、鉢（46･47）、有孔鉢（48）、高杯（49･50）である。38は広口壷で、口縁端部を丸くおさめる。端部が丸くおさめる口縁部をもつ広口壷。39は外傾して直口する口縁をもつ直口壷。調整は外面に縦方向のヘラミガキを施す。生駒西麓産。40は頸部が短く伸びた後、段を有する二重口縁壷。41は体部から直線的に伸びる口縁部をもつ細頸壷。調整は内面にナデ、外面に縦方向のヘラミガキを施す。生駒西麓産。42～45は体部中央部に最大径をもつ甕。口縁部形態は、「く」の字に屈曲し口縁端部を丸くおさめるもの（42）、体部から短く直立した後外反するもの（43・45）、緩やかに屈曲して口縁端部が肥厚するもの（44）がある。調整は外面にタタキ後ナデを施す。46・47は椀形の鉢で、口縁部形態が、外傾して口縁端部が肥厚するもの（46）、内湾するもの（47）がある。47は生駒西麓産。48は有孔鉢の底部片。49は外反度が顕著となる有稜高杯の杯部、50は高杯の裾部。生駒西麓産。なお、これらの出土遺物の中で土器の色調が赤色系であるものは図化した土器の半数以上を占め、39は灰茶褐色、40は淡灰褐色、42は橙茶褐色、43は淡灰茶色、44は灰橙色、45は明橙色、48は淡橙褐色、49は茶褐色であった。このことから、意図的にこれらの土器を選択した可能性も考えられる。

以上の遺物より当遺構の廃絶期は弥生時代後期後半以降に比定できる。ＳＸ304と位置が近接



第16図　第３面土器棺墓302土器棺実測図（Ｓ＝1/8）



第17図　第３面ＳＺ301出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

し、ＳＸ304周溝内遺物と当遺構内から出土した遺物の時期がほぼ一致することから、当遺構がＳＸ304に関連した遺構である可能性がある。

ＳＺ302

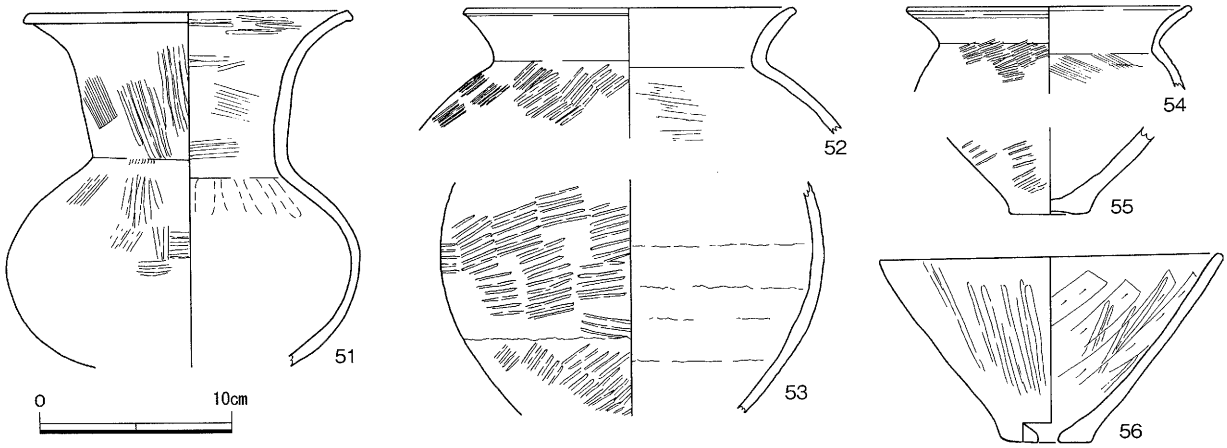
２ｂ地区で検出した用途不明の遺構である。西には南北方向に伸びるＳＤ311が隣接し、北東側にはＳＷ302がある。平面形態は南西隅が丸い長方形で、東西1.95m・南北0.9～1.1mを測る。深さは0.15m程度である。以上の位置や形状から、方形周溝墓の周溝の可能性も考えられる。遺物は出土しなかった。

土器集積（ＳＷ）

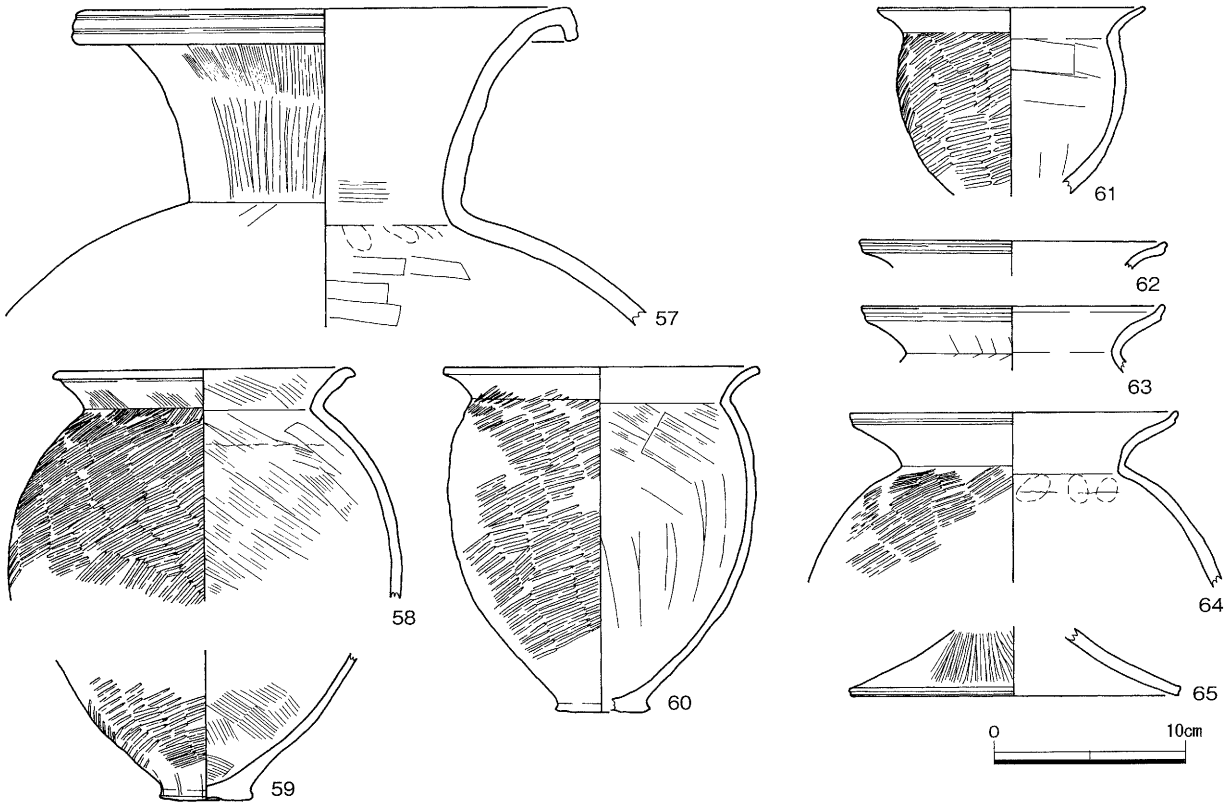
ＳＷ301（第18図、図版四・七）

２ｂ地区で検出した土器集積である。径0.5m程度の範囲に６個体の土器（51～56）を集積するが、掘方は確認できなかった。以下、残存状態の比較的良好な遺物を図化した。

51は広口長頸壷。体部形態は算盤形を呈す。52は緩やかに屈曲する口縁部を持つ甕。53は甕の



第18図　第３面ＳＷ301出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）



第19図　第３面ＳＷ302出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

体部片。54は口縁部が緩やかに屈曲し、口縁端部に短い段を持つ甕である。55は甕の底部片。56は有孔鉢の完形品。52～56は生駒西麓産。

以上の遺物より以上の構築時期は、弥生時代後期後半に比定できる。又、東側にＳＺ301とＳＸ304が近接しており、三者の遺構に密接な関係があると推測できる。

ＳＷ302（第19図、図版八）

２ｂ地区で検出した土器集積である。東西1.4m・南北0.6mの範囲に多量の土器を集積するが、掘方は確認できなかった。以下、残存状態の比較的良好な遺物を図化した。

57は大形広口壷の口縁部。口縁部形態は、細めの頸部から大きく外反し、口縁端部が下方向に

肥厚し、端面に２条の沈線を施す。復元口径25.5cmを測る。調整は内面に板状工具によるナデ、外面にハケ後ヘラミガキを施す。生駒西麓産。他の土器よりも大きく、周囲に周溝と推察できるＳＤ311やＳＺ302等が確認できたことから、土器棺の可能性も考えられる。58～64は甕である。口縁部形態は、緩やかに屈曲し口縁端部に面を持つもの(58・60)、短く直立して後外反し、口縁端部を丸くおさめるもの(61)と口縁端部をつまみあげたもの(62～64)がある。体部上半部に最大径を持つもの(58・60・61)が目立つ。65は有稜高杯の裾部片。生駒西麓産。

以上の遺物より遺構の構築時期は弥生時代後期後半に比定できる。

溝(ＳＤ)

２ａ－３ｃ地区にかけて南東－北西に伸びる大規模な溝１条をＳＤ301、２－３・ａ－ｂ地点で無作為に伸びる小規模な溝８条をＳＤ311～318と呼称した。ＳＤ311～318の溝群は、方向や形態に統一性がないことから用途は不明である。ＳＤ301は、前述の遺構群の基盤よりもやや上層から切り込むことから、小規模溝群よりは若干新しい時期のものと推測できる。小規模溝群(ＳＤ311～318)の法量などについては以下、第４表にまとめた。

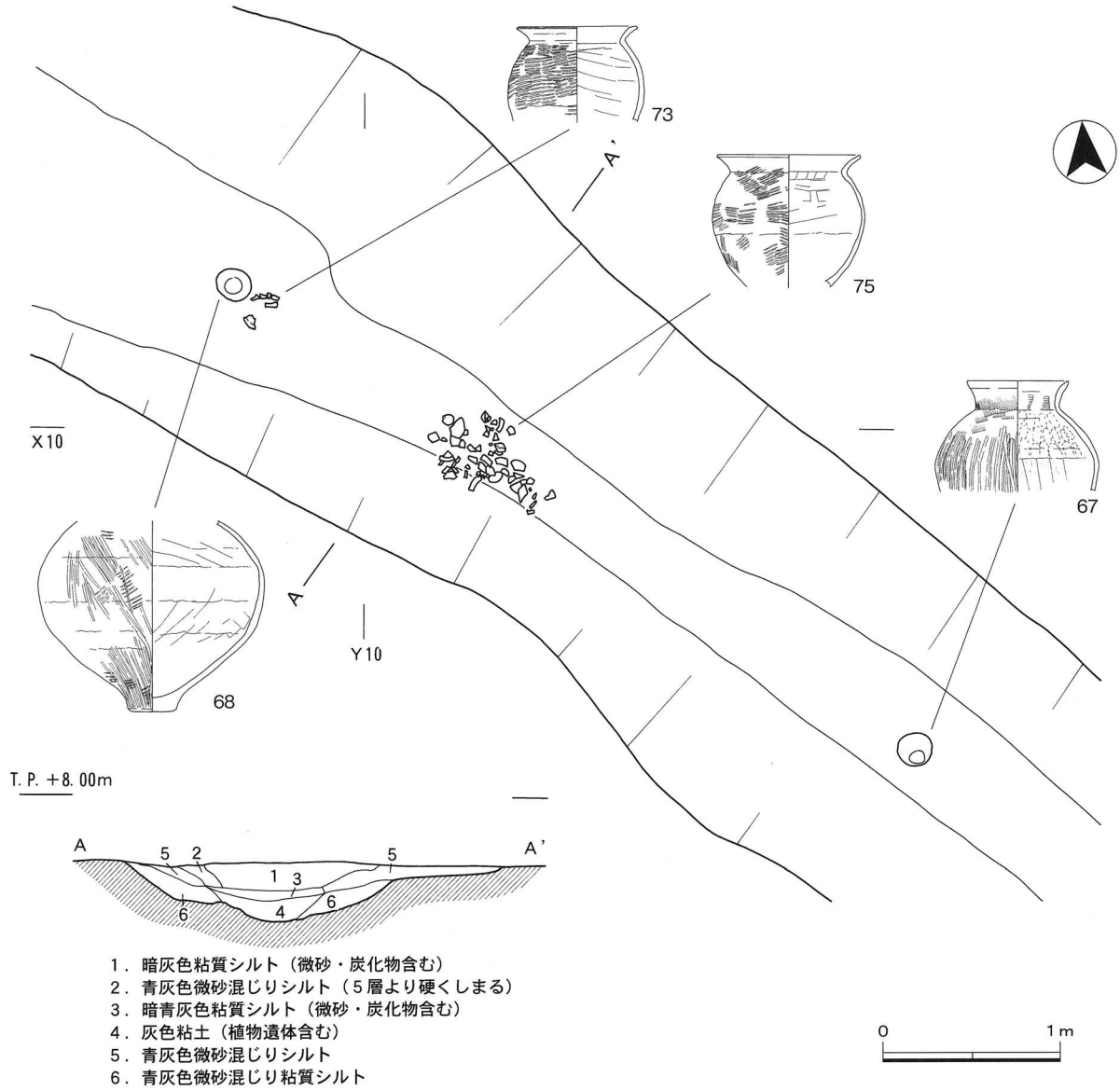
第４表　第３面西区溝法量表(単位m)

溝番号	位置	幅	深さ	検出長	方向	他の溝との関係
ＳＤ311	北東部	0.2前後	0.05～0.12	3.1	南→北	ＳＺ301を切る
ＳＤ312	東部	0.2～0.3	0.05m前後	6.1	北→南	ＳＤ313とＴ字形に合流
ＳＤ313	北部	0.05～0.25	0.05～0.1	6	北→南	ＳＤ312・314とＴ字に合流
ＳＤ314	北西部	0.2～0.3	0.1前後	4.6	南東→北西	ＳＤ313とＴ字形に合流
ＳＤ315	西部	0.1～0.2	0.1～0.15	12	南→北	ＳＤ301を切る
ＳＤ316	南西部	0.35～0.4	0.05前後	2.8	南西→北東	
ＳＤ317	南西部	0.25前後	0.07前後	3.2	南西→北東	
ＳＤ318	南東部	0.35～0.4	0.1～0.15	10.2	南西→北東	ＳＤ301の南に沿う

ＳＤ301（第20・21図、図版四・八・九）

２ａ－３ｃ地区にかけて検出した大溝である。規模は、幅2.0m～3.0m・深さ0.35mを測る。流路の方向は南東－北西である。溝の埋土上層部で土器が多量に出土した。以下、残存状態の比較的良好な遺物を図化した。

66は算盤形の体部をもつ小形台付壷。口縁部と脚部は残存しない。調整は、内面にヘラ状工具による板ナデ、外面に丁寧な横方向のヘラミガキを施す。頸部に波状文が見られる。67は短頸壷の口縁部～体部中央部。口縁部形態は、頸部から短く直立して後外反する。調整は、体部内面に板ナデ、体部上半に指頭圧痕が見られる。外面は、口縁部～体部上半に板ナデ後ナデ、体部中央部に縦方向のヘラミガキを施す。68～70は壷の体部下半部～底部。調整は、内面に板ナデ、外面に縦方向のハケを施す。68は外面に黒斑が見られる。69は内面全体が煤ける。外面体部下半部に黒斑がみられる。71・72は壷の体部片。各々に線刻が見られる。共に生駒西麓産。73～80は甕の体部上半～口縁部。口縁部形態は、「く」の字に屈曲し、口縁端部に面をもつもの（73・75)、短く直立して後外反し、口縁端部に面を持つもの(74・76・78)、受け口状口縁をもつもの(79)、口縁部に最大径をもつもの(80)がある。70は外面、75は内面が煤ける。75の外面、80の内面底部に黒斑が見られる。73・78～80は生駒西麓産。81は甕の底部片。82は鉢。83・84は高杯の杯部と裾部である。83の口縁部外面に黒斑が見られる。85は器台。少なくとも２段に４穿孔施す。調整は、

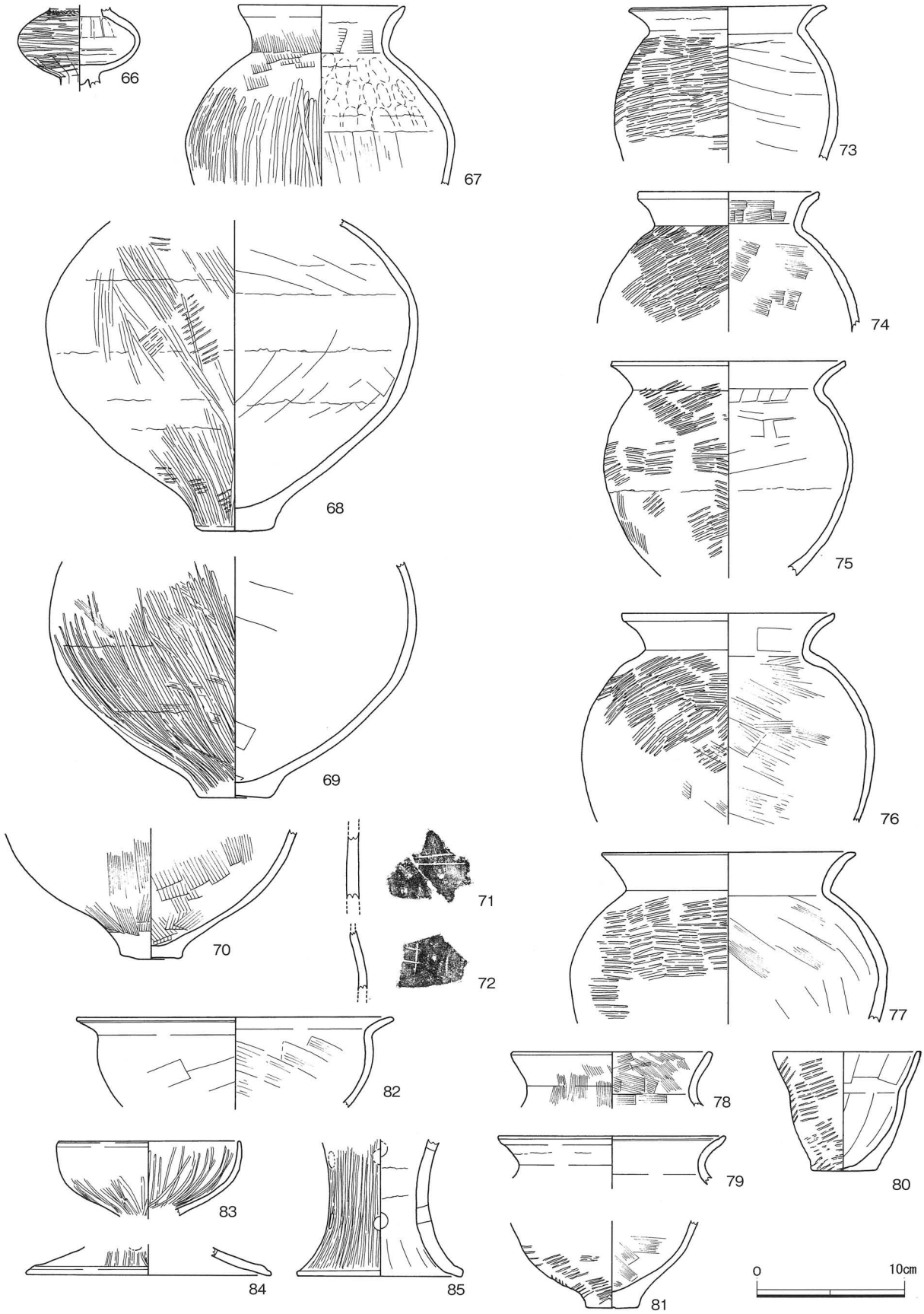


第20図　第３面ＳＤ301土器出土状況図（Ｓ＝1/40）

内面に板状工具によるナデ、外面全体にヘラミガキを施す。

4）下層確認調査（第６図）

ＳＸ304の南周溝を完掘したところ、溝底の一部が窪んでおり、下層部に遺構面の存在が想定できた為、調査終了後、この付近を掘り下げた。その結果、第３面より0.4m下層（T.P.＋7.3～7.4m）の第13層灰色微砂～粗砂上面で、北から南方向に流れる溝を検出した。溝内からの出土遺物はなかったが、周辺から弥生時代中期後半の遺物がわずかに出土していることから、この溝の時期を弥生時代中期後半と推定できる。

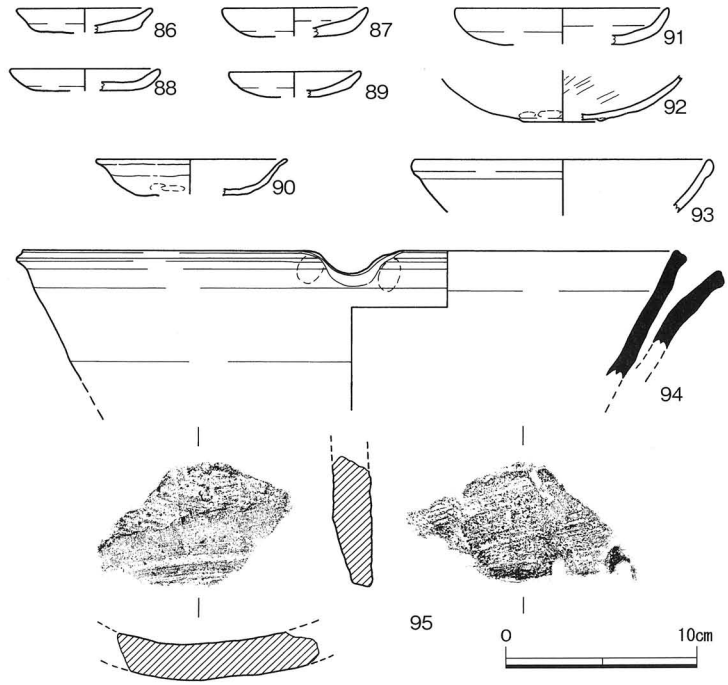


第21図　第３面ＳＤ301出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

5）遺構に伴わない遺物

第６・７層出土遺物（第22図、図版十）

第６・７層は洪水に起因する砂層である。直下には第１面の遺構面が広がっており、この遺構面の時期を確定する上で極めて重要な層である。当該層からは、土師器・瓦器・瓦などの破片が微量に出土した。以下、残存状態の比較的良好な遺物を図化した。

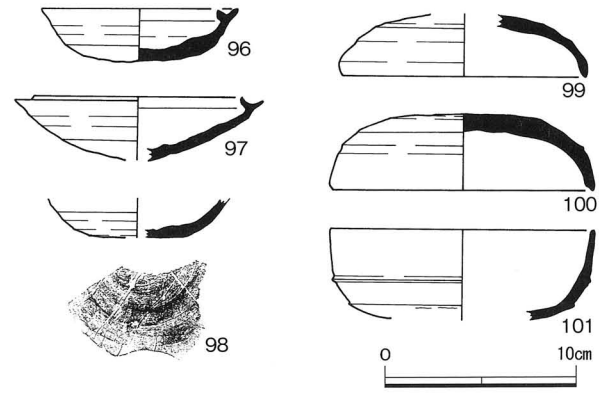


第22図　第６・７層出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

86～89は土師器小皿の破片。復元口径7.0～8.0cm程度を測る。12世紀前半～中頃。90・91は土師器皿の破片。口縁部はヨコナデ、底部下半に指押えを施す。12世紀中頃。92は瓦器椀の底部片。尾上編年の和泉型Ⅳ－２期（13世紀中頃）。二次焼成を受ける。93は白磁碗の口縁部。11世紀後半。94は東播系須恵器の片口鉢。口縁端部形態はやや下方に肥厚する。11世紀末葉～12世紀前半。95は平瓦の破片。凹面に布目痕、凸面に縄目痕を残す。凹面に水切り痕が見られる。

第９・10層出土遺物（第23図、図版十）

第９・10層は水田耕作土である。第９層下面には第２面の遺構面が広がっており、この遺構面の時期を確定する上で極めて重要な層である。当該層からは、土師器・須恵器などの破片が微量に出土した。以下、残存状態の比較的良好な遺物を図化した。



第23図　第９・10層出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

96～101は須恵器。96～98は杯身の破片。口縁部の立ち上がり部が短く内傾する。田辺編年のＴＫ209型式（７世紀前半）。98は底部に線刻が見られる。99･100は杯蓋。99はＭＴ85型式（６世紀後半）、100はＴＫ43型式（６世紀末）。101は無蓋高杯の杯部。ＴＫ43型式（６世紀末）。

第４章　まとめ

今回の調査では、古代末期～中世に至る生産遺構、及び弥生時代後期の方形周溝墓と土器棺墓を確認した。さらに下層確認調査では、弥生時代中期の遺構の存在を確認した。弥生時代後期の方形周溝墓は全部で４基検出し、このうち１基が弥生時代後期前半、３基が弥生時代後期中頃に築造されたものと推察できた。

中河内地域では、方形周溝墓が弥生時代前期～後期初頭まで累々と造られていたが、弥生時代後期前半～後半頃になると河川氾濫等によって不安定な環境となり激減する。この為、中河内地域では当該時期に築造された方形周溝墓の検出例は少なく、今回の調査成果は河内地域一帯の墓制を解明する上で貴重な発見となった。以下、中河内地域における弥生時代後期築造の方形周溝墓を集成し、今回の調査で確認した方形周溝墓と比較検討したい。

既往の調査で検出した弥生時代後期の方形周溝墓は、６遺跡22基が存在する。構築年代別に見たところ、後期初頭と後期後半に集中することが分かる。この年代の偏りは、弥生時代後期の中河内地域が、河川氾濫等によって不安定な環境であったことに影響を受けたものと考えられる。今回の調査で検出した方形周溝墓の構築時期は、類例の少ない希薄な時期に相当し、長原遺跡１

第５表　中河内地域における弥生時代後期の方形周溝墓検出遺跡一覧表（単位ｍ）

遺跡名	調査	規模（東西×南北ｍ）	方向（長辺を基準）	個数（基）	埋葬施設	時期	備考	文献
巨摩	巨摩・瓜生堂 巨摩・若江北	4.8	北北西－南南東	3	木棺4 土器棺 2土壙1	後期初頭 （河内Ⅴ-0様式）	・うち1基は2調査地に渡る・突出部状の部有（付加施設）	1
久宝寺	南（その2）	12以上	東－西	1	木棺1	後期後半 （様相2～3）	・方形の突出部有	2
八尾南	ＹＳ82－1	6.5～10 ×6.5～10	／	12	／	後期後半 （様相2～3）	・うち2基陸橋部有 ・後世の削平が著しい為主体部不明 ・近年、（財）大阪府文化財センターによって調査	3
	ＹＳ87－8	6.8～7.4×7.5	北西－南東	1	土坑3 （土壙墓の可能性有）	後期	・周溝内出土遺物は甕の小片であった為詳細な時期不明 ・古墳時代中期後半築造の八尾南9号墳の周溝に切られる ・陸橋部有	4
長原	ＤＤ85－1 （北地区）	／	北西－南東	1	／	後期前半 （河内Ⅴ-1～2様式）	・南西南東部の周溝のみ検出	5
	ＮＧ82－41 ＮＧ85－13 （東南地区）	12.0×8.5	北北西－南南東	1	／	後期後半 （様相1）	・東周溝は南周溝へ連結せず東側に周溝を共有する別の墓が存在する？ ・周辺に５基確認したが時期が古墳時代初頭の可能性大 ・手焙形土器出土。	6
瓜破北	2004年度調査	東西4.8	／	1	／	後期後半 （様相3）	・後世の削平が著しい為主体部不明	7
喜連東	ＫＲ86－4	11	北西－南東	1	／	後期後半 （様相3）	・南北辺中央部に一ヶ所づつ2m四方のややバチ状に開く突出部有 ・後世の削平が著しい為主体部不明	8
	ＫＲ99－2・ 00－2	14.5×13	東－西	1	木棺6 土器棺3	後期初頭 （河内Ⅴ-0様式）	・残存状況良好	9

次調査で検出した弥生時代後期前半(河内Ⅴ－１～２様式)に比定できる方形周溝墓に併行する時期である。今回の発見はこの資料とあわせて、空白の時期を埋める貴重な資料となることと期待できる。

埋葬施設の特徴については　、後期初頭に築造された巨摩遺跡や喜連東遺跡の方形周溝墓は、１つの墓に対して複数の埋葬施設をもつ。これは弥生時代中期の周溝墓の性格を引き継ぐ家族墓的な性格を残すものとも考えられる。

今回の調査で特筆すべき点として、マウンド中央部に土器棺が埋葬された方形周溝墓（ＳＸ301)を検出したことが挙げられる。本来は土器棺はマウンド裾部や、木棺墓に付随して足元等に埋葬されるものであり、このような埋葬方法は他に類例が無く、珍しいものであった。埋葬施設が弥生時代中期に築造される家族墓的な方形周溝墓から、古墳時代に築造される墳墓への変換期特有の埋葬方法であったと推察できる。

今回の調査地周辺は、小阪合遺跡の中でも、調査成果の少ない地域であった為、今回の調査は周辺地域一帯の状況を知る上で貴重な資料になることが期待された。調査の結果、弥生時代後期に大溝(ＳＤ301)を境界として、南西部に住居跡、北東部に方形周溝墓群が集中することが分かり、調査地周辺一帯に、居住域と墓域の存在が明らかとなった。

参考文献

1　堀江門也・玉井　功・井藤暁子・小野久隆1981『巨摩・瓜生堂』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
石神幸子・三好孝一・市本芳三・亀井　聡1995『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告－第４次－』(財)大阪文化財センター
2　赤木克視・一瀬和夫1987『久宝寺南(その2)近畿道自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』(財)大阪文化財センター
3　原田昌則・成海佳子1984「３八尾南遺跡」『昭和58年度事業概要報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告5
4　原田昌則1995「Ⅰ八尾南遺跡(第８次調査)」『八尾南遺跡』(財)八尾市文化財調査研究会報告47
5　大庭重信1999「第Ⅲ章長原遺跡北地区の調査成果」『長原遺跡発掘調査報告Ⅶ』(財)大阪市文化財協会
6　大庭重信1999「第Ⅱ章長原遺跡東南地区の調査結果」『長原遺跡発掘調査報告Ⅶ』(財)大阪市文化財協会
田中清美1993「第３節長原遺跡東南地区の調査(ＮＧ85－13次調査)」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅴ』(財)大阪市文化財協会
7　市川　創2005「集落墓地、転々と－瓜破北遺跡の調査から－」『葦火114号』(財)大阪市文化財協会
8　黒田憲一1987「喜連東遺跡発見の方形周溝墓と発見」『葦火10号』(財)大阪市文化財協会
9　平田洋司2000「喜連東遺跡発見の墳丘墓」『葦火87号』(財)大阪市文化財協会
・尾上　実・森島康雄・近江俊秀1995「６．瓦器椀」『概説中世の土器、陶磁器』中世土器研究会
・高橋一夫1998『手焙形土器の研究』六一書房
・田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
・原田昌則1993「Ⅱ久宝寺遺跡(第１次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告37』(財)八尾市文化財調査研究会
2003「中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半(庄内式古相)の土器の細分案について」『久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書』(財)八尾市文化財調査研究会報告74
・藤沢真依1987「近畿地方の方形周溝墓－その基本型と展開－」『文化史論叢(上)』横田健一先生古稀記念会
・三木　弘1998『東奈良遺跡－本文編－』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第32集－2

付編　八尾南遺跡(第１次調査)の調査成果
－弥生時代の方形周溝墓群について－

１．はじめに

八尾南遺跡は、大阪府八尾市南西部にある若林町一～三丁目、西木の本一～四丁目の東西約0.5km、南北約1.3kmの範囲に位置する旧石器時代から鎌倉時代に至る複合遺跡である。中河内の南西部に位置し、南から派生する羽曳野丘陵と河内低平地の接点部に立地する。当遺跡周辺には、東に大正橋遺跡・太田遺跡・木の本遺跡、西に長原遺跡・瓜破遺跡・瓜破北遺跡(ともに大阪市)、南に津堂遺跡・小山遺跡(藤井寺市)、北に亀井遺跡が存在する。

今回一部報告する第１次調査は、コクヨ(株)倉庫の建設に伴って1982年に八尾市教育委員会が行った事前の試掘調査により、弥生時代から古墳時代の遺物包含層が認められたため、３×100ｍのトレンチを４箇所設定して開始された。この結果、方形周溝墓と方形墳の一部が検出された為、調査範囲を更に拡張して、総面積2620㎡を調査することとなった。

当章では、前章(Ⅰ－第４章)と関連する調査成果として、八尾南遺跡第１次調査で検出した12基の方形周溝墓群を中心に報告することとする。

２．調査の概要

１)調査の方法と経過

調査はG.L.－0.5ｍを機械掘削し、以下、人力で表土下0.6～0.8m（T.P.＋10.60m前後）まで掘削した。この結果、弥生時代の方形周溝墓群・土器棺墓、古墳時代の方墳、平安～鎌倉時代の柱穴群・井戸・焼土坑、河道を検出した。当調査地周辺は、弥生時代以降の土壌の堆積が殆ど見られず、同一面で弥生～鎌倉時代までの遺構群が混在する結果となった。

２)基本層序

今回の調査では、基本の層位として４層確認した。以下、特徴を記したい。

第０層：盛土。層厚30～40cm。地表面の標高はT.P.＋12.60m前後。

第１層：近代の耕作土。土質は、灰色～暗灰色砂質土である。層厚0.10～0.15m。

第２層：上層の床土。土質は明灰茶色砂質土である。層厚0.10～0.15m。

第３層：土質は、茶灰褐色～淡灰黄色微砂混じり粘質土である。層厚0.0５～0.15m。弥生時代後期・古墳時代中期・平安時代末期～鎌倉時代初頭の遺物が混在する。

第４層：土質は、淡灰黄色～黄灰色シルト～シルト質粘土である。層厚0.10～0.20m。当該層上面で弥生時代後期・古墳時代中期・平安時代末期～鎌倉時代初頭の時期の遺構を多数確認できたことから、当該層上面を「遺構面」とし、遺構検出に努めた。

３)検出遺構と出土遺物

・検出遺構

中世の遺構としては、調査地西側を南から北方向に流れる河道を検出した。現在の坪境とほぼ一致する。調査地東側では、柱穴群・井戸・焼土坑を検出した。これらの遺構からは、瓦器椀・土師器皿が出土した。焼土坑からは、多量の瓦器椀・瓦器小皿・土師器皿がほぼ完形の状態で出土した。

古墳時代の遺構としては、３基の方形墳が検出された。古墳の規模は約５×５～10×10m四方の方墳である。但し、方墳の周囲から須恵器が出土した為、古墳時代の構築遺構とされたが、近年の調査(註１)より、当方墳が、周囲で検出された弥生時代の方形周溝墓と同時期に相当する方形周溝墓である可能性も高くなってきた。

弥生時代の遺構としては、方形周溝墓群・土器棺墓・溝を検出した。以下、主な遺構の概要について記述したい。

方形周溝墓は調査地全域で検出された。全部で12基あるが、マウンド部は後世の土地利用によって削平された為、マウンド部や主体部は残存しなかった。また周溝の痕跡が一部分残るだけの箇所もある。周溝を含めた全体の規模は、6.5×6.5～10×10mを測り、残存する周溝深度は0.1～0.5mである。周溝内から供献土器が出土したものや、陸橋部をもつもの（ＳＸ６・７）も検出した。なお、方形周溝墓の詳細な規模や特徴については、第７表にまとめた。

検出された12基の方形周溝墓は、周溝部が極端に近接するものや、切り合い関係をもつものがあり、周溝墓の構築時期が、弥生時代後期後半(原田編年様相１～４)からさらに幾時期かに分類できるものと推測できる。時期設定の目安となる土器の出土が少ないことや、後世の土地活用による削平等により重複する周溝の切り合い関係が不明瞭であることから、現時点では詳細な時期に区分することは不可能であった。

方形周溝墓の近接地点より、土器棺墓が３基点在して検出された。いずれも弥生時代後期に比定できる大形の壷で、正位またはこれに近い状態で検出された。土器棺を埋設するための明瞭な掘方は確認できなかった。これらの土器棺墓も、周溝墓の構築と併行する時期に埋納されたものと推察できる。

溝は、全部で７条検出された。調査地西端で確認できたＳＤ１は、西側は調査地外に及ぶことから、東肩部のみ検出した。なお、調査の都合上、溝の底部は確認できなかった。埋土は、下層部は流水による堆積であるが、上層部は流水の痕跡は見られなかった。また上層部から出土した完形の土器は、ローリングなどを受けた痕跡がないことから、溝の廃絶期にこれらの土器を投棄して後、埋没したものと推測できる。調査地西部で確認できたＳＤ２は、南北方向に伸び、中央部で２条に分岐する。西部に流れるＳＤ１に沿って検出されたことから、この河川から分岐した溝である可能性も考えられる。ＳＤ３は、八尾南６号墳とＳＸ６の間を縫うように流れることから、墓道に関連する排水溝の可能性が考えられる。ＳＤ４は、ＳＸ７の周溝から派生して後、屈曲して北側は調査地外に及ぶ。屈曲状況や溝幅から、北西部に展開する周溝の可能性も考えられる。ＳＤ５は、今回の調査では一部分のみの確認であったが、検出状況より、ＳＸ10・11の方向へ続くものと推測できる。おそらく、これらの周溝との関連性が深いものと考えられる。ＳＤ６は、300個体を越える多量の遺物が出土した。これらの土器は、完形やそれに近い状態で、重なりあって出土した。埋土は流水層は見られず、基盤層(第４層)に類似することから、比較的時間の経過を経ずに埋没したものと考えられる。ＳＤ７は、周囲に方形周溝墓が多く検出されていることや、溝の方向より周溝の一部である可能性が極めて高いが、今回の調査では確認できなかった。なお、各溝の詳細な規模や埋土の特徴については、第６表にまとめた。

・出土遺物

前述した方形周溝墓の周溝部から主に供献土器と推測できる土器が出土した。ただし、出土状況が把握できないことから、周溝部の詳細な出土地点は不明である。また、７条の溝からも完形の土器が多量に出土した。以下、比較的残存率の良好な遺物について概観したい。

ＳＸ１周溝内埋土から出土した遺物のうち、壷（１・２）・甕（３～５）・鉢（６）・台付鉢（７）を図化した。１は球形を呈する短頸壷で、体部から短く立ち上がった後外傾する口縁部をもつ。調整は、内面にヘラケズリ、外面にハケを施す。体部肩部には黒斑が見られる。２は二重口縁壷の口縁部～頸部が残存する。口縁部中程の屈曲部分と肩部にヘラ状工具による刺突文が見られる。調整は外面に縦方向の丁寧なヘラミガキを施す。３は3/4以上残存する甕である。口縁部は「く」の字に屈曲し、口縁端部に面をもつ。底部は突出しない平底を呈する。調整は内面にハケ、外面にタタキを施す。典型的なＶ様式甕である。４・５は体部上半～口縁部まで残存し、口縁部形態は受け口状を呈する。調整は内面にナデ、外面にタタキを施す。６は椀形で、短く外反する口縁部をもち、底部はドーナツ状を呈する。調整は内面にナデ、外面に粗いタタキを施す。原田編年様相４。７は椀形で口縁部は体部から外傾する。時期は弥生時代後期後半（中相）以降に比定できる。

ＳＸ２周溝内埋土から出土した遺物は土師器の底部片のみであった為、今回は図化しなかった。

ＳＸ３は、遺物が出土しなかった。

ＳＸ４周溝内埋土から出土した遺物のうち、甕（８）を図化した。８は甕の口縁部で、「く」の字に屈曲し、口縁端部は丸くおさめる。

ＳＸ５周溝内埋土から出土した遺物のうち、壷（９～12）・甕（13）・手焙形土器（14）を図化した。９・10は受け口状口縁をもつ広口壷で、体部中央部に最大径をもち、球形を呈する。体部下半部には共に穿孔が見られる。調整は、９は体部肩部に波状文と直線文を施す。10は内面にハケ、外面下半部にタタキを施す。11は直口壷で、体部から外反して後、まっすぐ立ち上がる口縁部をもつ。体部中央部に最大径をもち、球形を呈する。体部下半部に穿孔が見られる。12は大形の広口壷で、球形の体部からまっすぐに立ち上がる頸部と、外側に広がる口縁部をもつ。口縁部と頸部と肩部にそれぞれ押圧竹管文が見られる。また頸部には、ヘラ状工具による刺突文を施した貼り付け凸帯が見られる。13は球形の甕で、受け口状口縁をもつ。調整は、内面に板状工具によるナデ、外面にタタキ後ハケを施す。14は手焙形土器であるが、残存率が悪く、調整も不明瞭である。

ＳＸ６周溝内埋土から出土した遺物のうち、高杯（15）を図化した。15は小形の有稜高杯である。原田編年様相２。杯部は皿状を呈し、口縁部は外反する。裾部は逆三角形を呈する。調整は内外面全体にナデを施す。原田編年様相１・２。

ＳＸ７から出土した遺物のうち、短頸壷（16）・甕（17）を図化した。16は長胴の壷で、外傾する口縁部をもつ。原田編年様相３。17は球形の甕で、「く」の字に屈曲した後外反する口縁部をもつ。

ＳＸ８周溝内埋土から出土した遺物のうち、有稜高杯２点（18・19）を図化した。共に口縁部は緩やかに外反する。時期は弥生時代後期後半（新相）～古墳時代初頭に比定できる。

ＳＸ９周溝内埋土から出土した遺物のうち、小形の甕２点（20・21）を図化した。口縁部は共に緩やかに外傾する。体部上半部に最大径をもつ。底部は突出しない平底を呈する。調整は、内面にナデ、外面にタタキを施す。口縁部をタタキ出し手法によって成形した甕である。

ＳＸ10周溝内埋土から出土した遺物のうち、甕（22）を図化した。22は甕の口縁部で、「く」の

字に屈曲し、口縁部形態は受け口状を呈する。

ＳＸ11周溝内埋土から出土した遺物のうち、壷(23・24)・手焙形土器(25・26)を図化した。23は広口壷、24は細頸壷の口縁部。23は上下に肥厚した口縁端部面に、波状文を施した後、円形浮文を貼り付ける。口縁部内面にも波状文を施す。24は内湾気味に立ち上がる口縁部をもつもので、調整は内外面に細かいハケを施す。原田編年様相２～３。25・26は手焙形土器の破片で、調整も摩滅の為、不明瞭。なお図上復元した結果、25は高橋編年３b期、26は高橋編年３a期にそれぞれ位置付けられ、時期は弥生時代後期後半(新相)以降に比定できる。

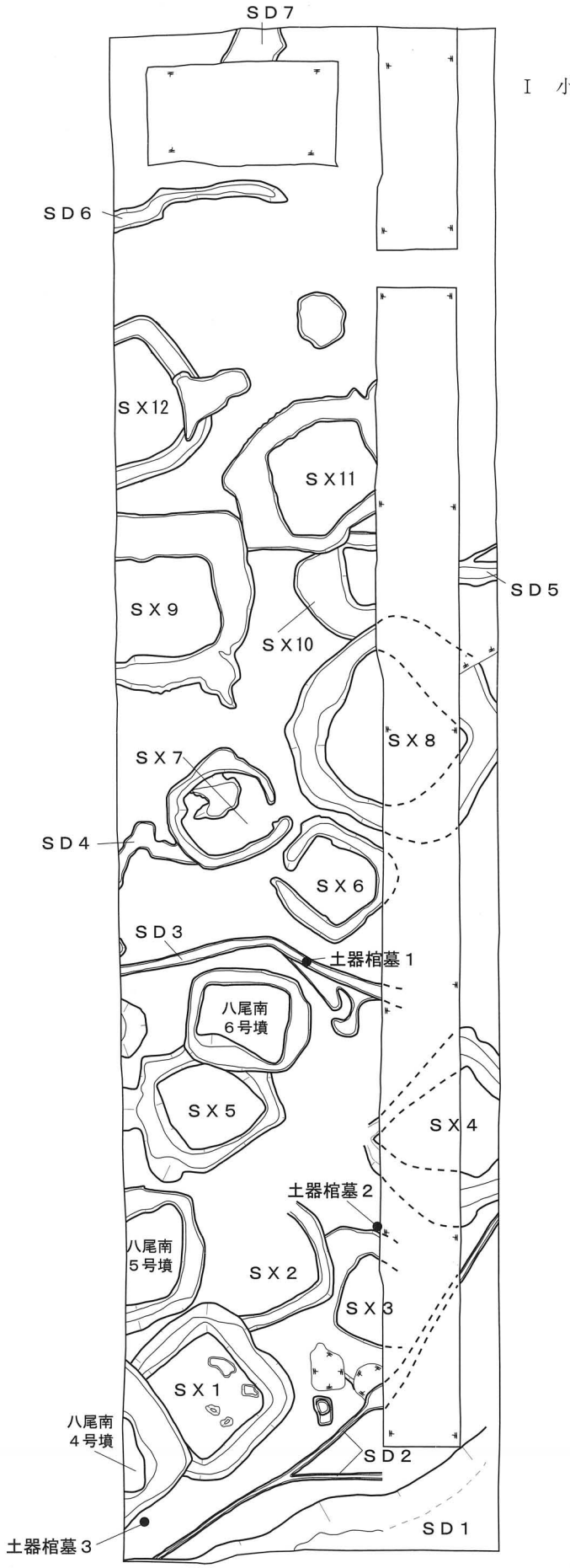
ＳＤ１から出土した遺物のうち、壷(27～32)・甕(33・34)・鉢(35・36)・高杯(37～39)を図化した。27～29は広口壷。体部から屈曲して後外反するもの(27)、体部から緩やかに外反するもの(28)、体部から直立して後外反するもの(29)がある。ともに口縁端面をもつ。30は短頸壷。口縁部は、体部から「く」の字に屈曲し、口縁端部に沈線が見られる。体部は下膨れを呈し、ドーナツ状底を呈する底部をもつ。31・32は二重口縁壷の口縁部。31は口縁部に竹管文を施した円形浮文が貼り付けられる。33・34はともに屈曲する口縁部をもち、体部最大径を33は中央～上半、34は下半にもつ。35・36は椀形の鉢。体部形態は、35はやや擂鉢状、36は扁球状を呈す。口縁部形態は、外反するもの(35)、緩やかな段をもつもの(36)がある。37～39は脚部のみ残存する。脚柱部形態は、中実のもの(38)と中空のもの(39)がある。原田編年様相２～３。当該溝の廃絶期は、弥生時代後期後半(中相)以降に比定できる。

ＳＤ３から出土した遺物のうち、甕(40・41)・高杯(42)・小形器台(43)を図化した。40・41は緩やかに外反する口縁部をもつ。42・43は屈折して外側に開く脚部をもつ。原田編年様相２。43は「ハ」の字に開く脚部をもつ。当該溝の廃絶期は、弥生時代後期後半(中相)に比定できる。

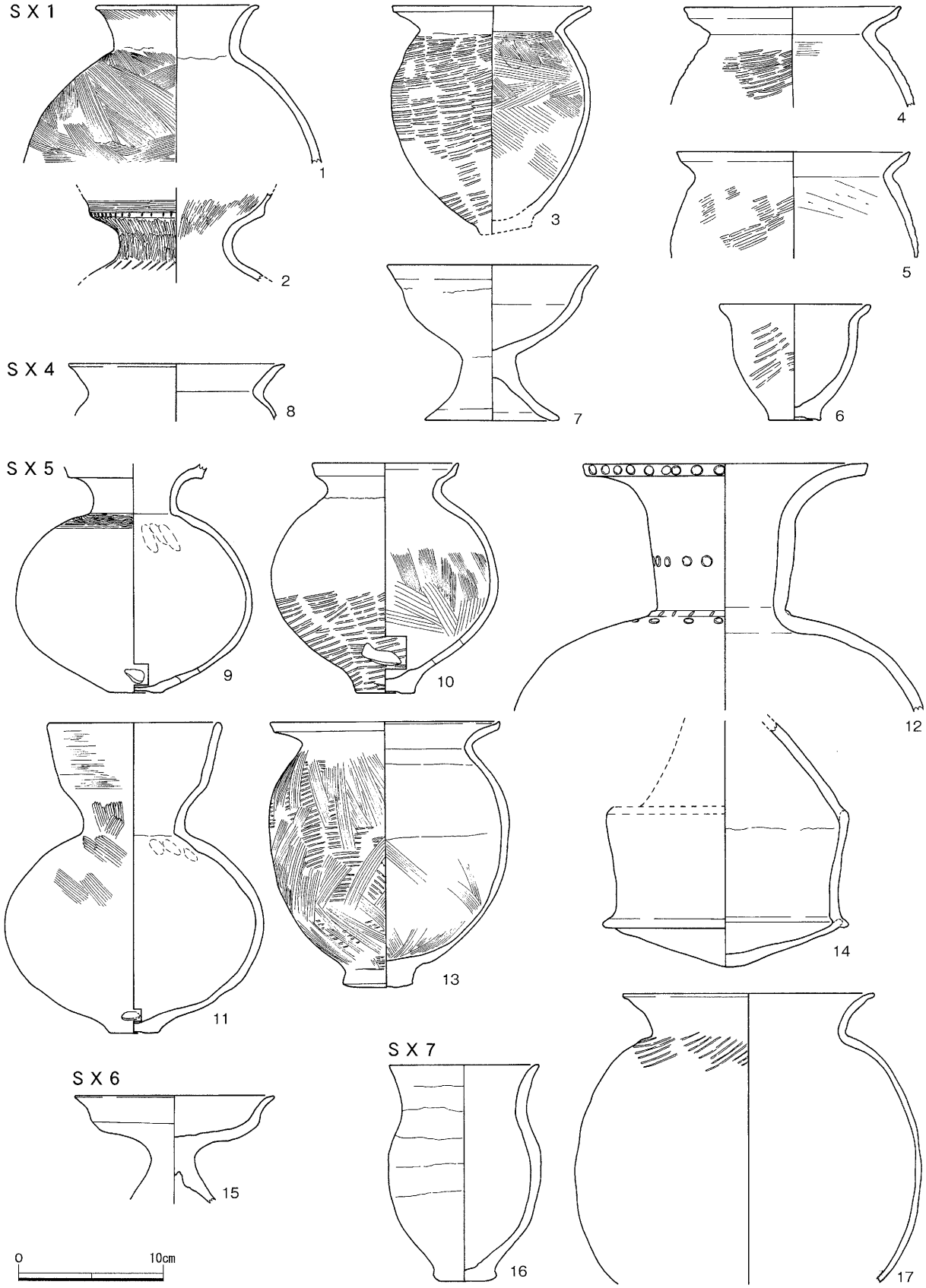
ＳＤ４から出土した遺物のうち、甕(44・45)・鉢(46)・器台？(47)・高杯(48・49)を図化した。44は緩やかに外反する口縁部をもつ。45は口縁部が直立して後内湾する。原田編年様相４。46は椀形で高台をもつ鉢。47は器台の脚柱部。48は椀形高杯で中空の脚柱部と大きく開く脚部をもつ。原田編年様相２。49は有稜高杯で口縁部の外反が大きく、屈折して開く脚部をもつ。原田編年様相３。当該溝の廃絶期は古墳時代初頭(古相)に比定できる。

ＳＤ５から出土した遺物のうち、壷(50～53)・甕(54～56)・鉢(57～60)・有孔鉢(61)・高杯(62～67)・器台(68)を図化した。50・51は広口壷、52は二重口縁壷の口縁部。53は直口壷で、内面にハケ、外面に縦方向のヘラミガキ調整が残る。54・55はともに小形で体部最大径を肩部にもつ。口縁部と底部形態は、「く」の字に屈曲する口縁とドーナツ状底をもつもの(54)、緩やかに外反し端面をもつ口縁と突出しない平底をもつもの(55)がある。56は緩やかに外反し体部最大径を上半部にもつ。57は椀形鉢、58は受け口状の口縁部をもつ小形台付鉢、59は内湾する口縁部をもつ小形鉢。60は体部中央部に最大径をもつ球形の小形鉢。原田編年様相４。61は擂鉢状の体部をもつ有孔鉢である。62～64はともに口縁部が外反気味に開く。様相２～３に比定できる。65は有稜高杯。原田編年様相４。66・67椀形高杯で大きく開く脚部をもつ。原田編年様相３。68は装飾器台の脚部で二段に屈曲する。原田編年様相４。当該溝の廃絶期は古墳時代初頭(古相)に比定できる。

ＳＤ７から出土した遺物のうち、甕(69)・台付鉢(70)を図化した。69は「く」の字に屈曲する口縁部をもつ。原田編年様相４。70は椀形の台付鉢で、口縁部がカギ状に屈曲する。原田編年様相２。当該溝の廃絶期は古墳時代初頭(古相)に比定できる。

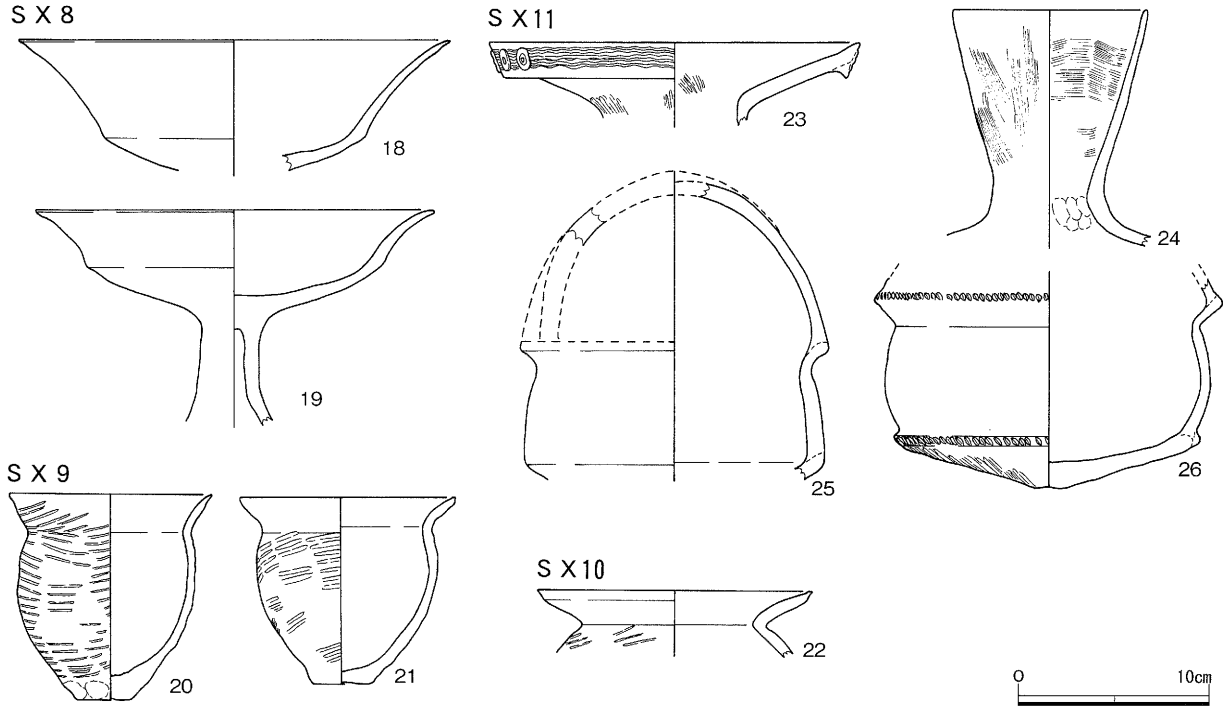


第24図　調査地平面図（Ｓ＝1/500）



ＳＸ１周溝（１～７）、ＳＸ４周溝（８）、ＳＸ５周溝（９～14）、ＳＸ６周溝(15)、ＳＸ７周溝(16・17)

第25図　方形周溝墓出土遺物実測図（１）（Ｓ＝1/4）



ＳＸ８周溝（18・19）、ＳＸ９周溝（20・21）、ＳＸ10（22）、ＳＸ11（23～26）
第26図　方形周溝墓出土遺物実測図（１）（Ｓ＝1/4）

３．まとめ

今回の報告では、調査で検出した弥生～鎌倉時代の遺構群のうち、方形周溝墓群や土器棺墓が検出された弥生時代後期後半を中心に記述した。

今回検出できた12基の方形周溝墓は、周溝から出土した遺物より、弥生時代後期後半（原田編年様相２～４）を中心に継続的に構築されたものと考えられる。なお、今回報告の調査は、約28年前に行われたものであり、近年に、当調査地を含む敷地全体で再度、（財）大阪府文化財センターによって発掘調査が行われた。この調査で、同じく同時期の方形周溝墓群が確認されている（註１）。これらの成果より、さらに構築時期が限定されることが期待できる。

今回の第４章で記述したように、中河内地域では当該時期に構築された方形周溝墓の検出数は極端に少なく、ここで報告した調査成果は、貴重な資料の１つといえる。

註１　岡本茂史・正岡大実2008『八尾南遺跡－大和川改修（高規格堤防）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）大阪府文化財センター調査報告書第172集　（財）大阪府文化財センター

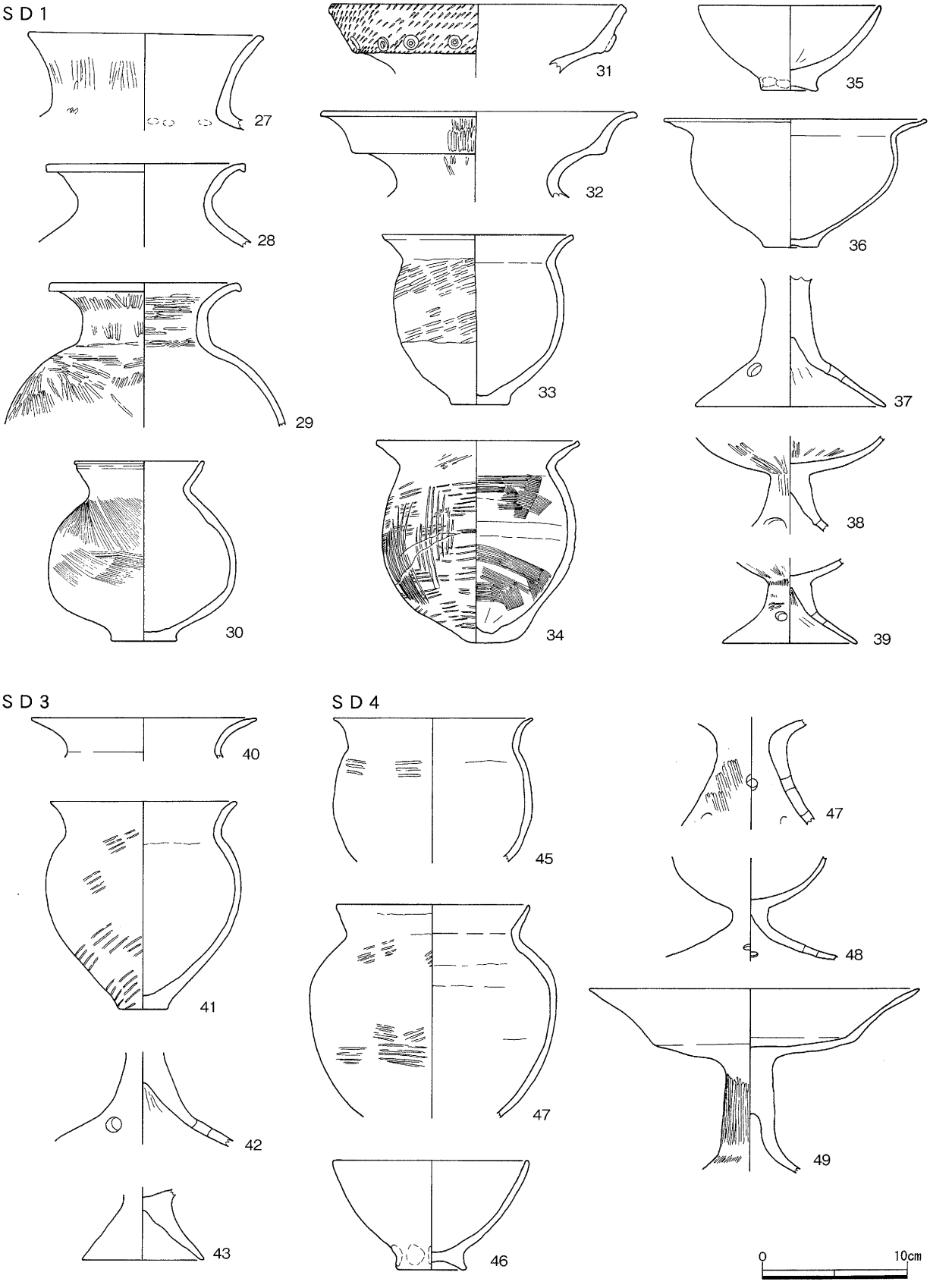
※参考文献に関しては、38頁参照のこと。

第６表　溝法量表（単位ｍ）

溝番号	幅	深さ	検出長	堆積状況	方向	出土遺物
ＳＤ１	検出幅８	１以上	30前後	上部：黒色粘土 下部：灰色シルト～砂	南→北	
ＳＤ２	0.4～1.6	0.03～0.2	38前後	暗灰褐色砂質土(単一層)	南→北	
ＳＤ３	0.5～1.5	0.15前後	30	暗褐灰色粘質土	北東→南西	
ＳＤ４	1.6～2.2	0.2～0.4	3	暗褐色～暗灰褐色粘質土	北東→南西	
ＳＤ５				淡灰褐色～淡灰黄色粘質土	北東→南西	300個体以上の遺物出土
ＳＤ６	4	0.25	27	暗灰褐色粘質土	北西→南東	
ＳＤ７	3.5～４	0.1前後	6	暗褐灰色粘質土	北東→南西	

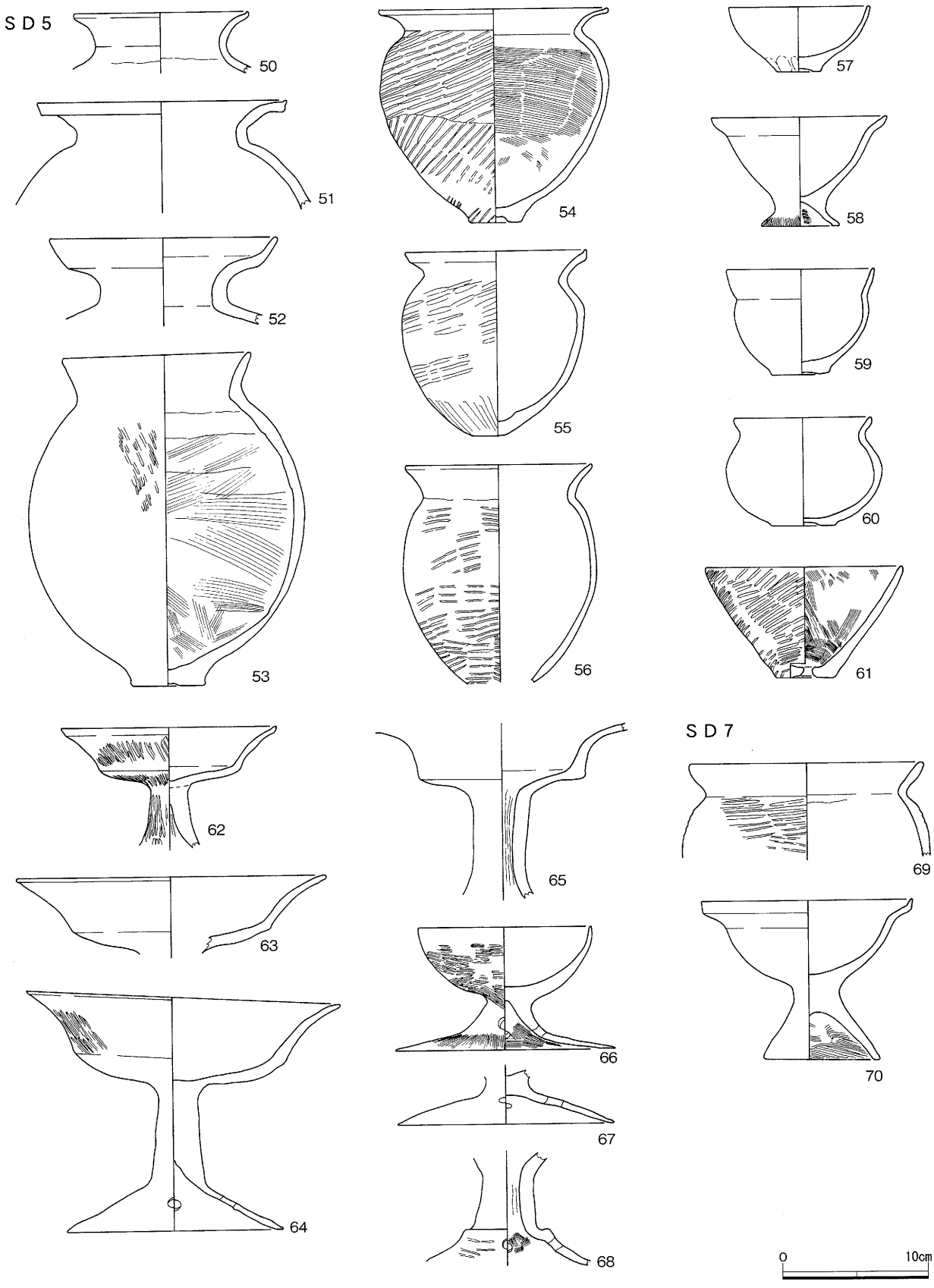
第７表　方形周溝墓一覧表(単位m)

遺構名	規模 (東西×南北)	周溝規模	周溝埋土	方向(南北軸)	出土遺物	備考
ＳＸ１	8.7×7.8	(東周溝) 1.2～2.0 (西周溝) 1.5～2.0 (南周溝) 1.6～2.3 (北周溝) 1.5～2.0 深さ0.3～0.4	①暗灰黒色粘質土 ②黒色粘質土 ③黒灰色粘質土 がレンズ状に堆積	磁北から西へ19度振る	壷(1・2)・甕(3～5)・ 鉢(6)・高杯(7)の破片	・周溝屈曲部に土器片が集中して出土・時期不明・ＳＸ２の周溝部に切られる・埋葬施設の可能性がある土坑がマウンド上に有
ＳＸ２	約8.0	幅1.0～1.5 深さ0.05	暗褐色粘質土のみ遺存	ほぼ磁北	壷の底部片のみ	・周溝屈曲部に土器片が集中・ＳＸ１の周溝を切る
ＳＸ３	6.5（推定）	幅1.8 深さ0.1前後	灰褐色粘質土のみ遺存		(図化不可能)	・ＳＸ２の周溝と重複
ＳＸ４	7.0×8.0 (推定)	(西－南周溝) 2.5前後 深さ0.15～0.4 (北－東周溝) 1.2～1.5 深さ0.05	暗褐灰色粘質土 (単一層)	磁北から西へ21度振る	甕(8)・壷・高杯の破片	—
ＳＸ５	6.5×7.0	(東周溝) 1.4～2.1 (西周溝) 1.0～2.0 (南周溝) 1.5前後 (北周溝) 2.4～3.4 深さ0.25～0.45	暗灰色粘質土がレンズ状に堆積(マウンドの盛土崩壊土含む)	ほぼ磁北	壷(9～12)・甕(13)・手焙形土器(14)・高杯	・古墳時代の方墳によって切られる・マウンド上に土器が集積
ＳＸ６	6.0×5.2	(東周溝) 1.2前後 (西周溝) 0.8～1.2 (南周溝) 1.4～1.7 (北周溝) 1.4～1.6 深さ0.15～0.25	灰黒色粘質土が主体(マウンドの盛土崩壊土含む)	磁北から西へ30度振る	高杯(15)・壷・甕・鉢	・マウンド北東部に幅1.0mの陸橋部有・特に陸橋部付近に多量の土器片が集積
ＳＸ７	6.2×6.7	(東周溝) 0.9～1.8 (西周溝) 0.8 (南周溝) 0.5～1.0 (北周溝) 1.2前後 深さ0.15～0.25	灰色～淡灰褐色粘質土		壷(16)・甕(17)・高杯	・マウンド南西部に幅1.6mの陸橋部有・マウンド上で検出した土坑は若干新しい・北周溝部から伸びる溝は同時期
ＳＸ８	9.0（推定）	幅1.5～3.0 深さ0.2前後	灰黒色粘質土 (単一層)	磁北から東へ15度振る	高杯(18・19)・壷・甕・鉢	・古墳時代初頭の可能性もある
ＳＸ９	7.5×8.0以上	(東－南周溝) 3.5前後 (西周溝) 2.0前後 深さ0.15	褐灰色～暗褐色粘質土		甕(20・21)・壷・鉢・高杯	—
ＳＸ10	5	(東周溝) 1.2前後 (西周溝) 3.0前後 (北周溝) 3.0～4.5 深さ0.2～0.25	暗茶褐色～灰黒色粘質土		甕(22)・壷・高杯の破片	・西・東周溝がＳＸ８・11の周溝と重複するが、新旧関係は未確認
ＳＸ11	7.0×8.0	(東周溝) 2.0前後 (西周溝) 1.4前後 (南周溝) 2.0前後 (北周溝) 3.0前後 深さ0.2前後		磁北から西へ13度振る	壷(23)・ 器台(24)・手焙形土器(25・26)・高杯・甕	・ほぼ全容を確認
ＳＸ12	9.0×6.0以上	(東周溝) 1.5前後 (西周溝) 1.5 (南周溝) 1.0 深さ0.1～0.25	灰褐色砂質土～粘質土		高杯他少量の土器片	—



ＳＤ１（27～39）、ＳＤ３（40～43）、ＳＤ４（44～49）

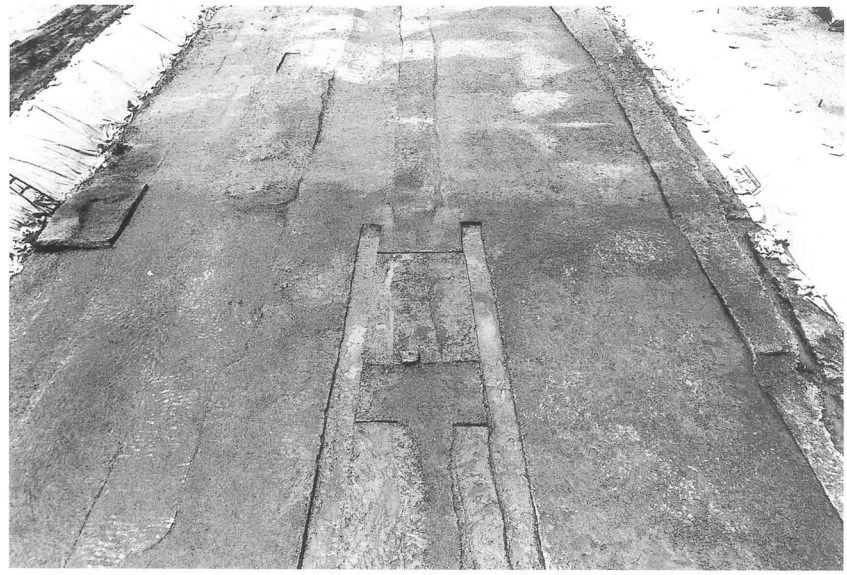
第27図　溝出土遺物実測図（１）（Ｓ＝1/4）



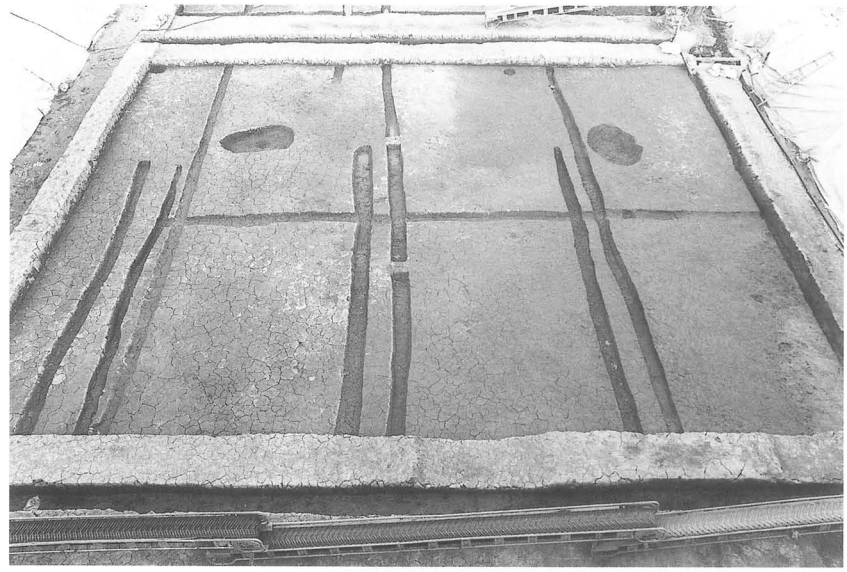
ＳＤ５(50～68)、ＳＤ７(69・70)

第28図　溝出土遺物実測図(２)（Ｓ＝1/4)

図　　版



第１面全景（東から）



第２面全景（西から）

第３面全景（東から）

図版二

第３面全景（西から）

第３面ＳＸ302周溝内
土器８出土状況（南西から）

第３面ＳＸ304周溝内
土器27出土状況（南東から）

第３面ＳＸ304周溝内
土器30・31出土状況（西から）

第３面土器棺１出土状況
（北から）

第３面土器棺２出土状況
（南から）

図版四

第３面ＳＷ301断面（東から）

第３面ＳＤ301断面
土器75出土状況（南西から）

第３面ＳＷ301検出状況
（東から）

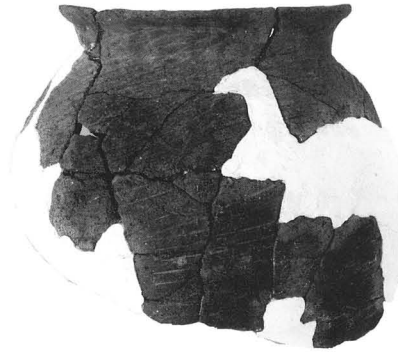
1

15

6

17

8



18

12

19

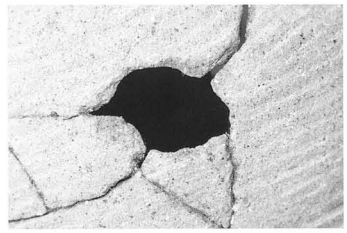
ＳＸ301（１）、ＳＸ302（６・８）、ＳＸ303(12・15・17～19）出土遺物

図版六

27

32

34

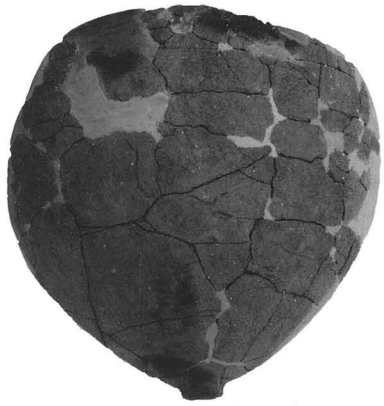

30

40

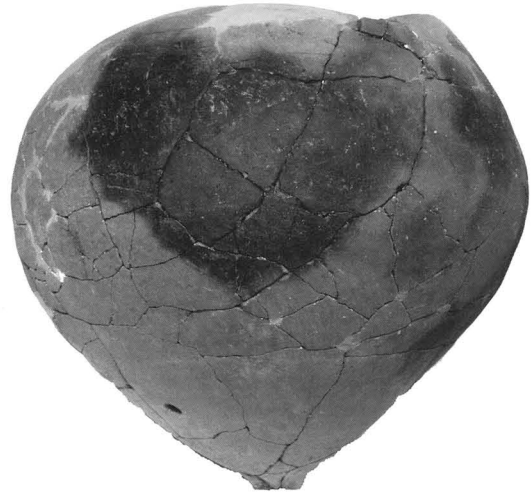
31

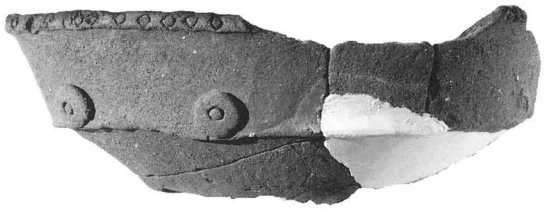
42

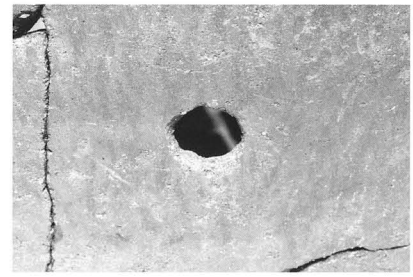
ＳＸ304（27・30～32・34）、ＳＺ301（40・42）出土遺物



2







36

37

51

56

ＳＸ301（２）、土器棺墓１（36）、土器棺墓２（37）、ＳＷ301（51・56）出土遺物

図版八

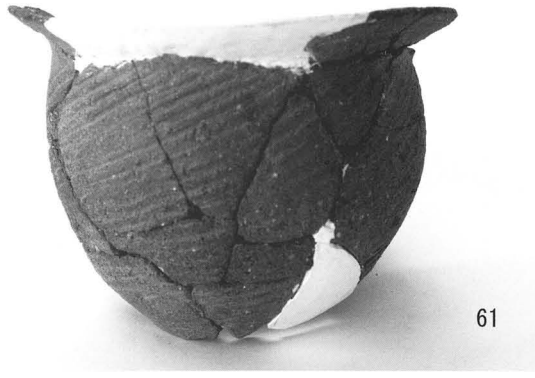
57

64

58

60

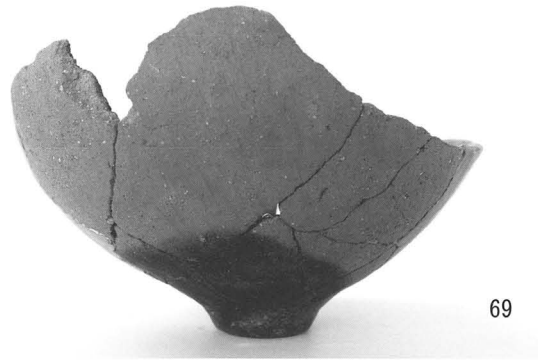
66


61

67

SW302（57・58・60・61・64）、SD301（66・67）出土遺物

68


69

71

74

76

72

77

82

73

80

ＳＤ301（68・69・71～74・76・77・81・82）出土遺物

83

85

94

100

96

101

97

98

99

第６・７層（83・85・94）、第９・10層（96 ～ 101）出土遺物

図版一一　八尾南遺跡（第1次調査）

調査地全景（北西から）

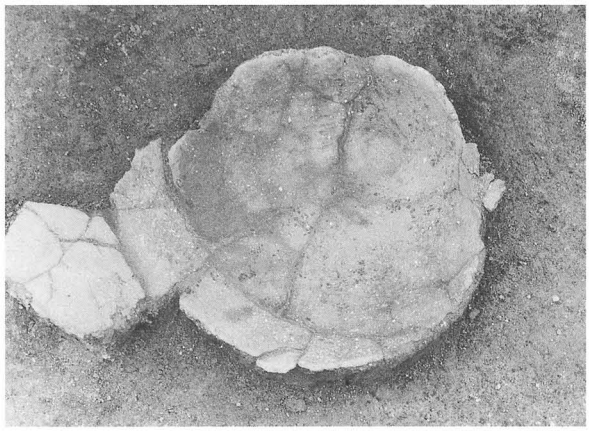
土器棺②出土状況

方形周溝墓群全景（北西から）

ＳＤ５土器検出状況（南西から）

ＳＸ１・２検出状況（北東から）

ＳＤ３断面（北西から）



土器棺③出土状況（北東から）

現地説明会の様子

1

2

3

5

9

11

ＳＸ１周溝内埋土（１～３・５）、ＳＸ５周溝内埋土（９・11）出土遺物

6

20

12

21

18

23

19

24

ＳＸ１周溝内埋土（６）、ＳＸ５周溝内埋土（12）、ＳＸ８周溝内埋土（18・19）、ＳＸ９周溝内埋土（20・21）
ＳＸ11周溝内埋土（23・24）出土遺物

II　小阪合遺跡第29次調査（ＫＳ94－29）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市青山町四丁目で実施した八尾市立総合体育館建築工事に伴う小阪合遺跡第29次調査（ＫＳ94－29）の発掘調査報告書である。
1．調査は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、高萩千秋・中野篤史（現　田尻町教育委員会）が担当した。
1．現地調査は平成６年６月１日に着手し、平成７年３月20日に終了した。調査面積は約7220㎡を測る。
1．現地調査には、赤沢茂美・稲木六月美・市森千恵子・川上節子・後藤信男・佐藤哲也・島野鋼一・清水柳吉・高岡昭人・中谷嘉多・中村百合・西岡千恵子・八田雅美の参加を得た。
1．整理業務は随時行い平成20年５月に終了した。
1．本書作成に関わる業務は、上記の他、北原清子、黒田幸代、徳谷尚子、村田知子、藤原由理子、山内千恵子が参加した。
1．本書の執筆は、河村恵理が担当した。
1．本書で記載した土色名については、「標準土色帖」によるマンセル表色で示されたものと独自の層名を付すものが混在しているが、あえて統一せず調査時点の表記のまま記載した。
1．土器の形式・編年で参考文献とした文献については、Ｐ72に提示した。
1．基準点測量は㈱八州に委託した。
1．現地調査の実施および整理業務においては、以下の方からの協力とご指導を受けた。
　藤岡達也

本　文　目　次

第１章　はじめに……49
第２章　調査概要……50
　第１節　調査方法と経過……50
　第２節　基本層序……50
第３章　検出遺構と出土遺物……55
　１）第１面……55
　２）第２面……62
　３）第３面……66
　４）遺構に伴わない遺物……69
第４章　まとめ……71

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図（Ｓ＝1/2500）……51
第２図　調査地地区割図（Ｓ＝1/1000）……51
第３図　調査地北壁断面図（Ｓ＝垂直1/50、水平1/500）……53
第４図　調査地西壁断面図（Ｓ＝垂直1/50、水平1/500）……54
第５図　第１面調査地平面図（Ｓ＝1/600）……56
第６図　第１面ＳＥ101平・断面図（Ｓ＝1/50）……57
第７図　第１面ＳＥ103・105平・断面図（Ｓ＝1/50）……58
第８図　第１面ＳＥ104平・断面図（Ｓ＝1/50）……59
第９図　第１面ＳＥ101・104出土遺物実測図（Ｓ＝１・２：1/4、３・５・６：1/2、４：1/1）60
第10図　溝群・ＳＫ201出土土器実測図（Ｓ＝1/4）……62
第11図　第２面調査地平面図（Ｓ＝1/600）……63
第12図　第２面ＮＲ201出土遺物実測図（Ｓ＝14・23：1/1、他：1/2）……64
第13図　第３面調査地平面図（Ｓ＝1/600）……66
第14図　第３面ＳＤ301平面図（Ｓ＝1/300）・断面図（Ｓ＝1/20）……67
第15図　第３面ＳＤ301周辺出土土器実測図（Ｓ＝1/4）……68
第16図　第３面ＳＷ301平面図（Ｓ＝1/20）……68
第17図　第３面ＳＷ301出土土器実測図（Ｓ＝1/4）……69
第18図　第７・８層出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）……70
第19図　包含層出土金属製品実測図（Ｓ＝1/4）……70
第20図　包含層出土土器実測図（Ｓ＝1/4）……71

写　真　目　次

写真１　北壁断面（南東から）……54
写真２　北壁断面（南西から）……54
写真３　第１面ＳＫ103検出状況（東から）……61
写真４　第２面馬骨出土状況（南から）……65
写真５　第３面ＳＷ301出土状況（東から）……68

表　目　次

第１表　第１面検出土坑法量表（単位ｍ）……61

図　版　目　次

図版一　第１面全景
　　第２面全景
図版二　第２面全景
　　第３面全景
図版三　第１面ＳＥ101検出状況
　　第１面ＳＥ104検出状況
　　第１面ＳＥ104検出状況
図版四　２区　第２面ＮＲ201検出状況
　　１区　第２面ＮＲ201検出状況
　　１区　第２面ＮＲ201検出状況
図版五　第２面足跡検出状況
　　第３面ＳＤ301断面
　　第３面ＳＤ301断面
図版六　ＳＥ104、耕作等溝群、ＮＲ201出土遺物
図版七　ＮＲ201、ＳＤ301、ＳＷ301出土遺物
図版八　ＳＷ301、第７層、第８層、金属製品、包含層出土遺物

第１章　はじめに

小阪合遺跡は、八尾市中央部に所在する弥生時代中期から近世に至る複合遺跡である。現行政区画の若草町、小阪合町一・二丁目、南小阪合町一・二・四丁目、青山町一～五丁目、山本町南七・八丁目に該当する。現地表面の標高は８～９ｍを測る。

地理的に概観してみると、当遺跡は、旧大和川の主流である長瀬川と玉串川によって形成された沖積地上に立地する。当該調査地は、昭和23年撮影の空中写真等より、周辺地域より標高がやや低い部分に立地することが推察できる。調査地一帯では、旧大和川から直接分岐する埋没河川（以下「小阪合分流路（註１）」と呼称）が度々流路を変えて北流し、多大な影響を及ぼしていたことはこれまでの調査成果より周知の事実となっている。今回の調査地東側でも小阪合分流路を検出しており、後世まで調査地一帯は小阪合分流路の影響により氾濫原の広がる地域であったと推察できる。なお、小阪合分流路の詳細については、河内平野低地部における流路の変遷についての研究（阪田1997）や、堆積学・地形学的観点から小阪合分流路の地形発達・埋没過程についての研究（松田2000）などで、論及されてきたので、今回はそれらを割愛したい。ただし、今回の調査成果をうけて藤岡達也氏が論及された論文（藤岡1996）については、今回の調査成果を報告する上で、重要な内容であるため以下、要約しておきたい。

当稿では、堆積物や堆積構造を観察して小阪合分流路（註２）を主体とした微地形の復原を試みている。この結果、当遺跡周辺では、弥生時代中期頃まで幾度も流路を変えたと考えられる網状河川が砂や泥などを運搬しており、大部分が湿地帯に属する。弥生時代後期から古墳時代前期になると、小阪合分流路の祖系となる河川が発達する。この河川が後に、小阪合分流路に発展し、中世（13世紀）以降には衰退の域をたどる。なお、弥生時代後期から古墳時代前期に発達した河川の影響を受けた為、当遺跡周辺の南と北地域で堆積環境が異なる。以下、南地域と北地域に分けて土地の活用方法を見ていきたい。南地域（註３）では、小阪合分流路の祖系となる河川が構築した自然堤防が広がる。この自然堤防上に集落を形成し、中世以降まで長く存続する。北地域（註４）では、依然として後背湿地的要素が強く残る。この為、中世以降も集落域や墓域等に適さない地域が目立つ。このように、当該調査地の生活域は、楠根川を中心とした微地形の変化に敏感に対応していた事を明確化した。

なお、小阪合遺跡における既往調査の概要、及び同遺跡周辺の地理的・歴史的環境の詳細については、本書「Ⅰ小阪合遺跡（第28次調査）第２章（Ｐ３～11）」を参考にされたい。また、調査地周辺図については、「Ⅰ小阪合遺跡（第28次調査）第２章（Ｐ９）」を参照されたい。

註記

註１　（松田2000）によって、後背湿地を流域とする楠根川とは性質が異なることから、従前に使用していた「旧楠根川」から「小阪合分流路」と改称。

註２　（藤岡1996）では、「旧楠根川」を使用していたが、本章では「小阪合分流路」で統一。

註３　中田遺跡北部から小阪合遺跡南部を指す。

註４　小阪合遺跡北部から東郷遺跡を指す。なお、今回の調査地もこの地域に含まれる。

第２章　調査概要

第１節　調査方法と経過

今回の調査は、八尾市立総合体育館建設工事に伴って行われたもので、調査総面積は約7220㎡を測る。当該調査地は、八尾市役所仮庁舎跡地にあたり、仮庁舎解体工事の都合上、調査地を２つに分割して調査を行う方法をとり、南東側を「１区」、その残りである北側を「２区」と呼称した。

調査地の地区割については、調査地北西隅地点の座標（Ｘ＝－152.050、Ｙ－35.270〔国土座標第Ⅵ系（日本測地系）を使用〕地点を基点に設定した。１区画の単位は10m四方で、東西方向をアルファベットのＡ～Ｏ（西を「Ａ」）、南北方向を算用数字の１～８（北を「１」）とし、地区名を「Ａ１～Ｏ８」と呼称した。

調査は、現地表面から約1.7～2.0mまで機械掘削し、以下0.7m前後まで人力掘削を行い、遺構・遺物の検出に努めた。

調査では、３面に亘る調査を実施した結果、弥生時代中期末～近世までの遺構・遺物を確認した。出土遺物には、弥生時代中期末～近世に比定される弥生土器・土師器・須恵器・埴輪・瓦器・瓦・土製品・木製品・石製品・金属製品・獣骨があり、総量は１・２区あわせてコンテナ50箱を数える。

第２節　基本層序（第３・４図、写真１・２）

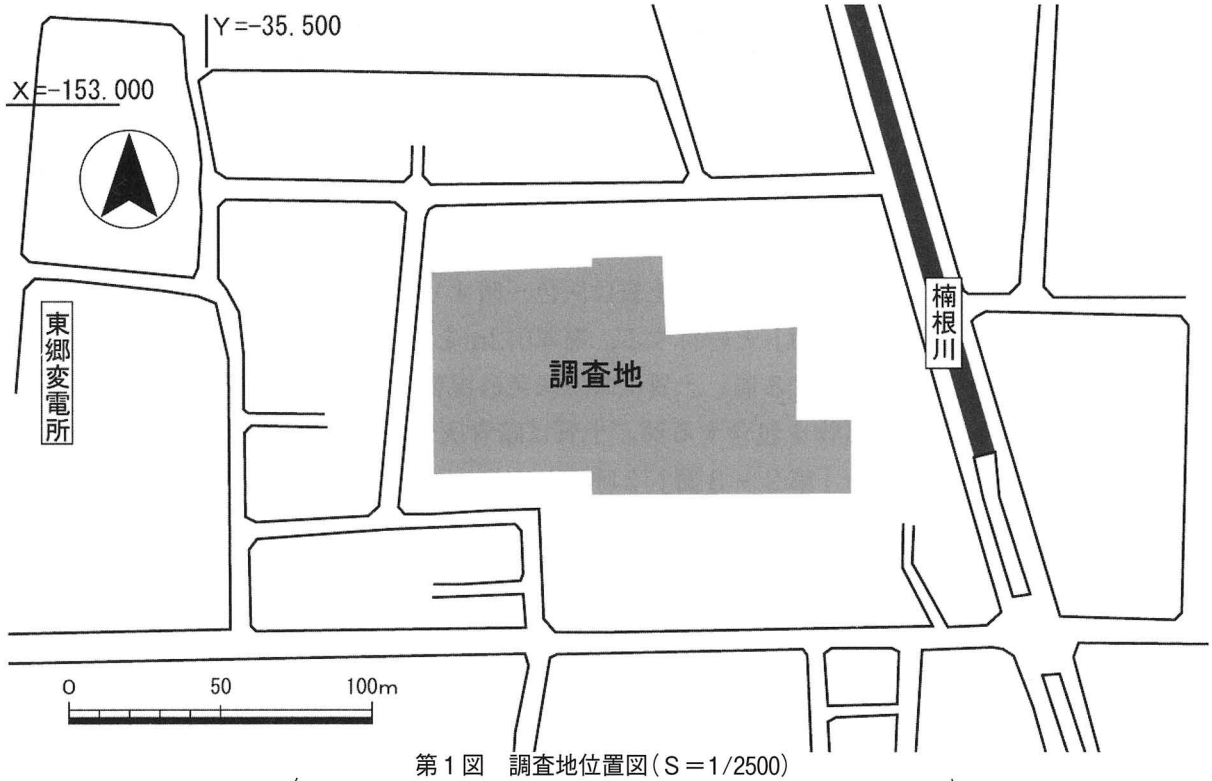
今回の調査では、調査の便宜上、調査地を分割したものであり、基本の層位としては１区及び２区の相違点は無いものと考えられる。確認できた層位について、以下、特徴を記したい。ただし、筆者は現地調査に直接関与していない為、地層の堆積状況及び、平面的な土層の広がりについては、当時の土層断面図及び写真より得た情報から筆者が復原した情報を交えて記載する。調査成果と筆者の見解で若干の相違が認められる点については、現地調査が終了してから整理作業を行うまでに十数年の月日が経過していることを考慮していただきたい。

第１層：昭和57年以降に行われた旧楠根川改修工事と市役所仮庁舎建設時の盛土層（攪乱等含む）。層厚1.3mを測る。現地表面の標高はT.P.＋8.0～9.0m前後。

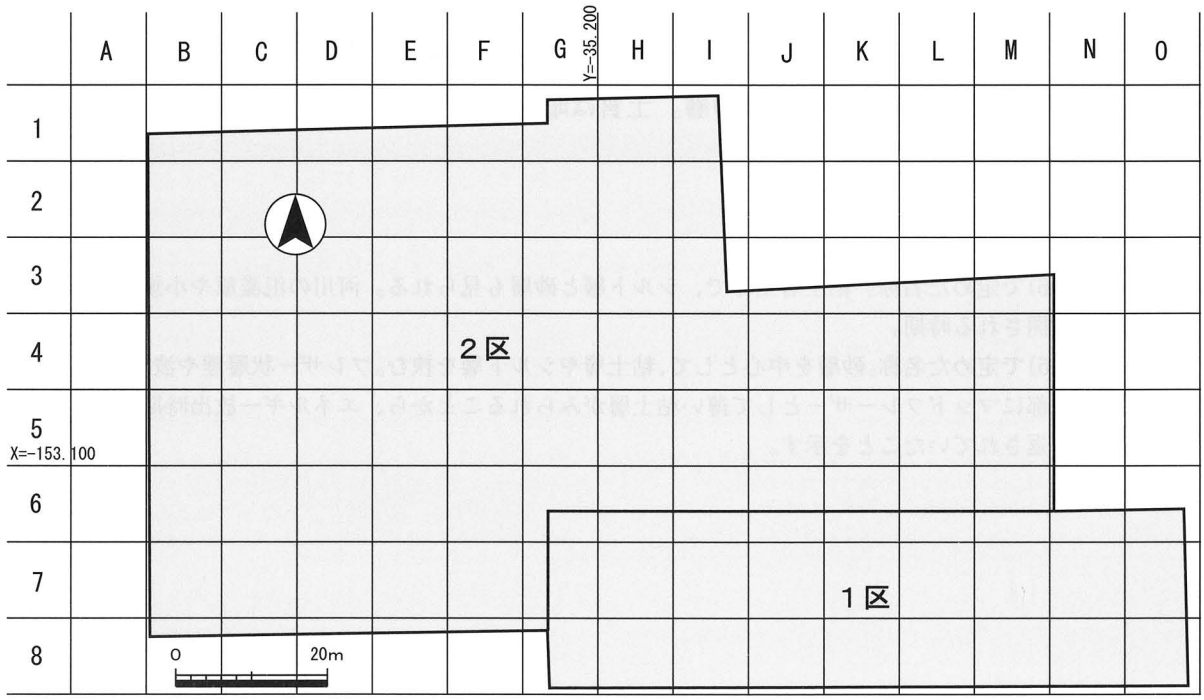
第２層：旧耕作土層。層厚0.1m前後を測る。

第３層：斜交葉理が見られる洪水堆積物層。土質は灰白色砂礫～緑灰色砂質土を呈する。層厚0.2～0.4mを測る。近世以降の堆積層。

第４層：近世の島畠と水田の耕作土層。島畠耕作土は、主に調査地西半部に堆積する。土質はにぶい黄褐色土を呈する。水田耕作土は、主に島畠と島畠の間及び地形が低くなる調査地北東部（ＮＲ101・102付近）に堆積する。水田耕作土層は少なくとも３枚から形成されているが、流水堆積物層が無く、土壌化した層が連続することから、比較的安定した時期に堆積したものであることが分かる。土質は、上層が灰黄色土、中層が橙色粒混黄灰色粘土、下層がオリーブ灰色粘質土を呈する。今回の調査では、島畠耕作土及び水田耕作土の上層部を機械掘削により除去した為、当該層の詳細な構築時期は不明である。耕作



第１図　調査地位置図（Ｓ＝1/2500）



第２図　調査地地区割図（Ｓ＝1/1000）

溝を広く検出した面を「第１面」と呼称する。第１面の標高はT.P.＋8.1m前後。

第５層：島畠構築以前(中世以降)の耕作土層。土質は灰色～暗青灰色粘質土を呈する。なお、後世の耕作時(第１面)に削平されており、島状に残る。層厚0.35mを測る。
当該層と直下層(第６層)は耕作時に攪拌されているため、識別が困難であったと推察できる。北壁断面(第３図)では、当該層(第５層)と下層(第６層)の識別は、不十分であった為、第５・６層については、西壁断面(第４図)を採用した。

第６層：鎌倉～室町時代の水田耕作土層。土質は灰色～暗オリーブ灰色粘質土を呈する。当該層下面を「第２－１・２面」と呼称する。層厚0.2mを測る。標高はT.P.＋7.3～7.4m。

第７層：鎌倉時代の遺物を包含する層。土質は暗緑灰色砂混粘土を呈する。層厚0.2mを測る。

第８層：奈良～平安時代の遺物を包含する層。土質は暗青灰色粘土を呈する。層厚0.2m前後を測る。当該層上面を「第２－３面」と呼称した。

第９層：土質は暗オリーブ灰色粘土を呈する。当該層下面を「第３面」と呼称する。当該調査面における平面調査は、限られた範囲であった為、平面的な遺構の広がりは、確認できなかった。層厚0.1mを測る。第３面の標高はT.P.＋6.8～6.9m。

第10層：流水堆積物層。土質はオリーブ灰色シルトを呈する。層厚0.05mを測る。

第11層：弥生時代中期～後期の洪水堆積物層。「堆積相Ｃ(註１)」に対応する。

11－１：土質は青灰色灰色粘質土を呈する。層厚0.2mを測る。

11－２：土質は青灰色粘質土を呈する。層厚0.15mを測る。

11－３：土質は青灰色粘質土に細粒砂混を呈する。層厚0.2mを測る。

11－４：土質は青灰色粘質土を呈する。層厚0.3mを測る。

第12層：弥生時代前期の洪水堆積物層。「堆積相Ｂ(註２)」に対応する。

12－１：土質は暗青灰色粘土を呈する。層厚0.15～0.2mを測る。

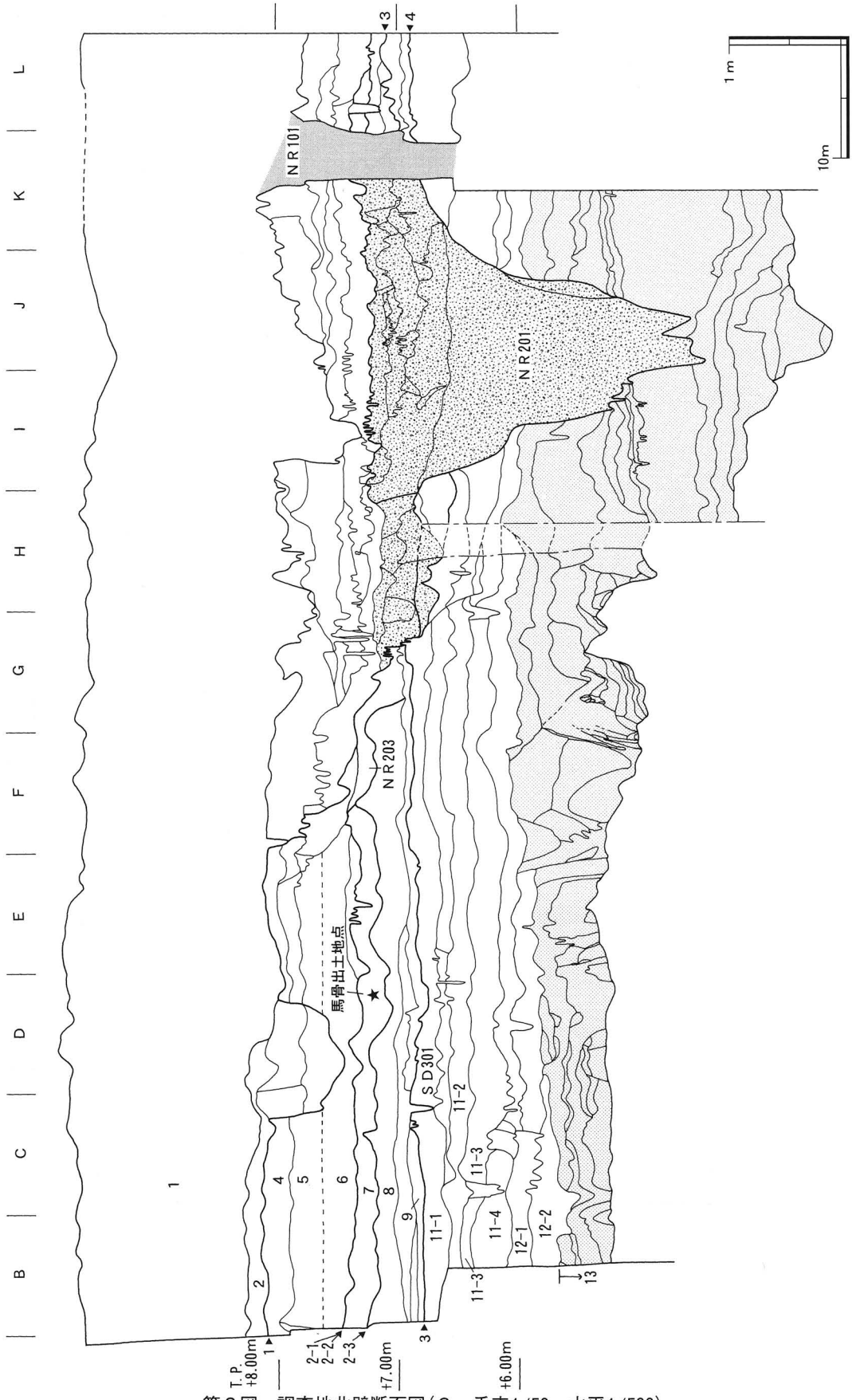
12－２：土質は青灰色シルトとオリーブ灰色粘土の互層を呈する。

第13層：弥生時代前期以前の洪水堆積物層。土質は暗青灰色シルトと青灰色シルトの互層。調査地全域に堆積する。

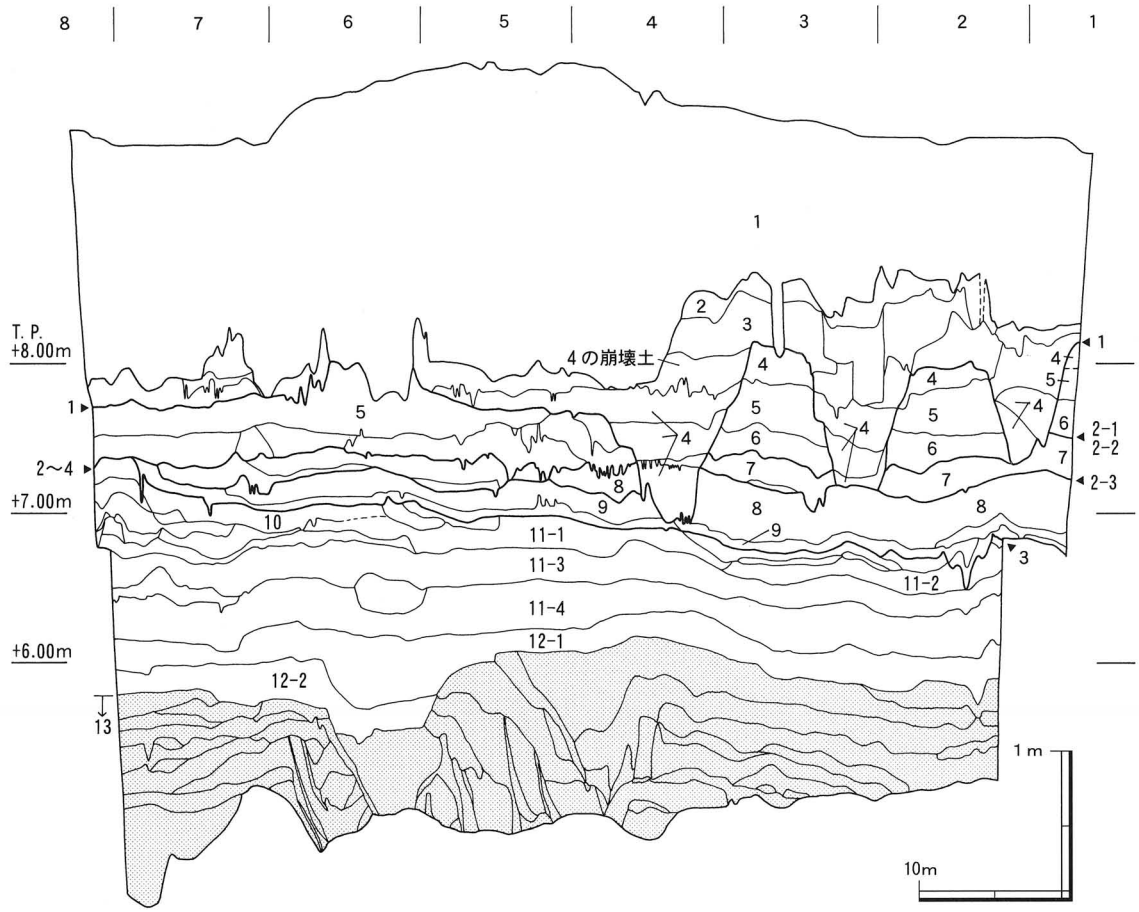
註記

註１　(藤岡1996)で定めた名称。粘土層主体で、シルト層と砂層も見られる。河川の氾濫原や小規模な河川の流路が展開される時期。

註２　(藤岡1996)で定めた名称。砂層を中心として、粘土層やシルト層を挟む。フレザー状層理や波状層理、リップルの底部にマッドフレーザーとして薄い粘土層がみられることから、エネルギー放出時期と穏かな時期が繰り返されていたことを示す。



第３図　調査地北壁断面図（Ｓ＝垂直1/50、水平1/500）



第４図　調査地西壁断面図（Ｓ＝垂直1/50、水平1/500）

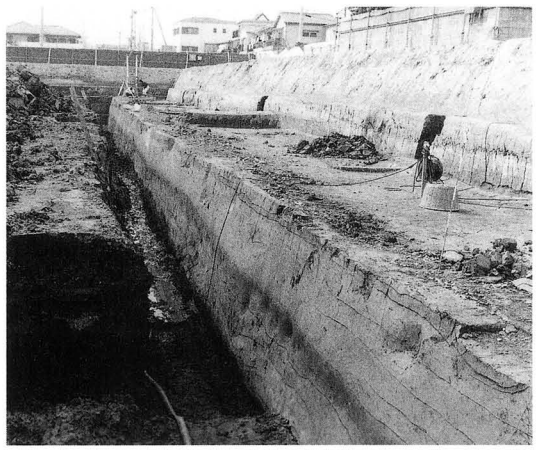


写真１　北壁断面（南東から）

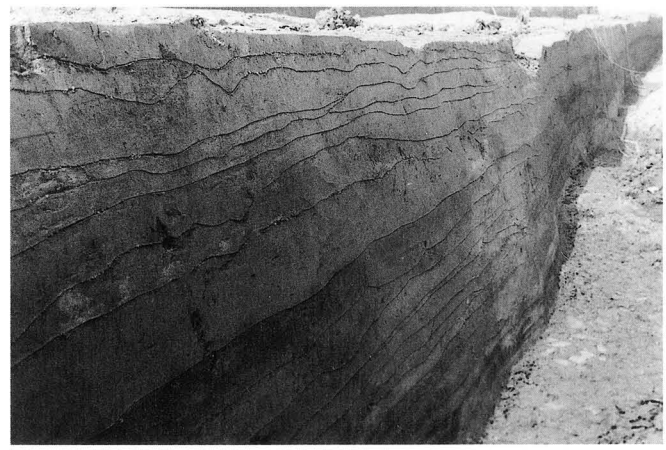


写真２　北壁断面（南西から）

第３章　検出遺構と出土遺物

１）第１面（第５図、図版一）

洪水堆積物層である灰白色砂礫～緑灰色砂質土（第３層）を除去し、近世以降の島畠及び水田の耕作土層（第４層）を除去した面で、島畠・水田の耕作痕や、井戸・土坑を検出した。

本来の島畠耕作面は、洪水によって堆積した洪水砂層（第３層）を除去した面であったが、今回の調査では、機械掘削範囲内であった為、機械掘削終了面である第４層除去面を「第１面」とした。水田耕作土層は３枚あったが、耕作土上層（灰黄色土）及び中層（橙色粒混黄灰色粘土）は機械掘削により除去した。

今回の調査で検出した遺構は、主に調査地西半部に集中する。西半部の地形は、微高地状の高まりとなっており、旧楠根川が北流する調査地東半部よりも立地環境が安定していたと考えられる。以下、各遺構について概観したい。

島畠（**島畠**）

島畠100～111（図版六）

Ｂ１～Ｉ８地区で島畠群を検出した。島畠群は現在の条里方向と一致するように並列する。検出面は、本来の島畠耕作面では無く、床面を検出した為、大きさや形態に多少の差異が生じる。以下、島畠の形成過程について概観したい。

下層の水田は、頻繁に生じた洪水により、厚い洪水砂に覆われる。この洪水堆積物を攪拌して、近世期になると島畠などを作り始める。これが**島畠100～111**である。これらの島畠は、機械掘削等で上部が削平されており、詳細な時期が特定できる遺物等の資料は残存しなかった。

島畠102・105・108は、一部が削平されている。これは後世の耕作土等で使用する為に土を搾取した土取り穴であった可能性が高い。

これらの耕作土層を全て除去した一面に、農耕時に使用した耕具の痕跡を検出することができた。埋土は砂層である。

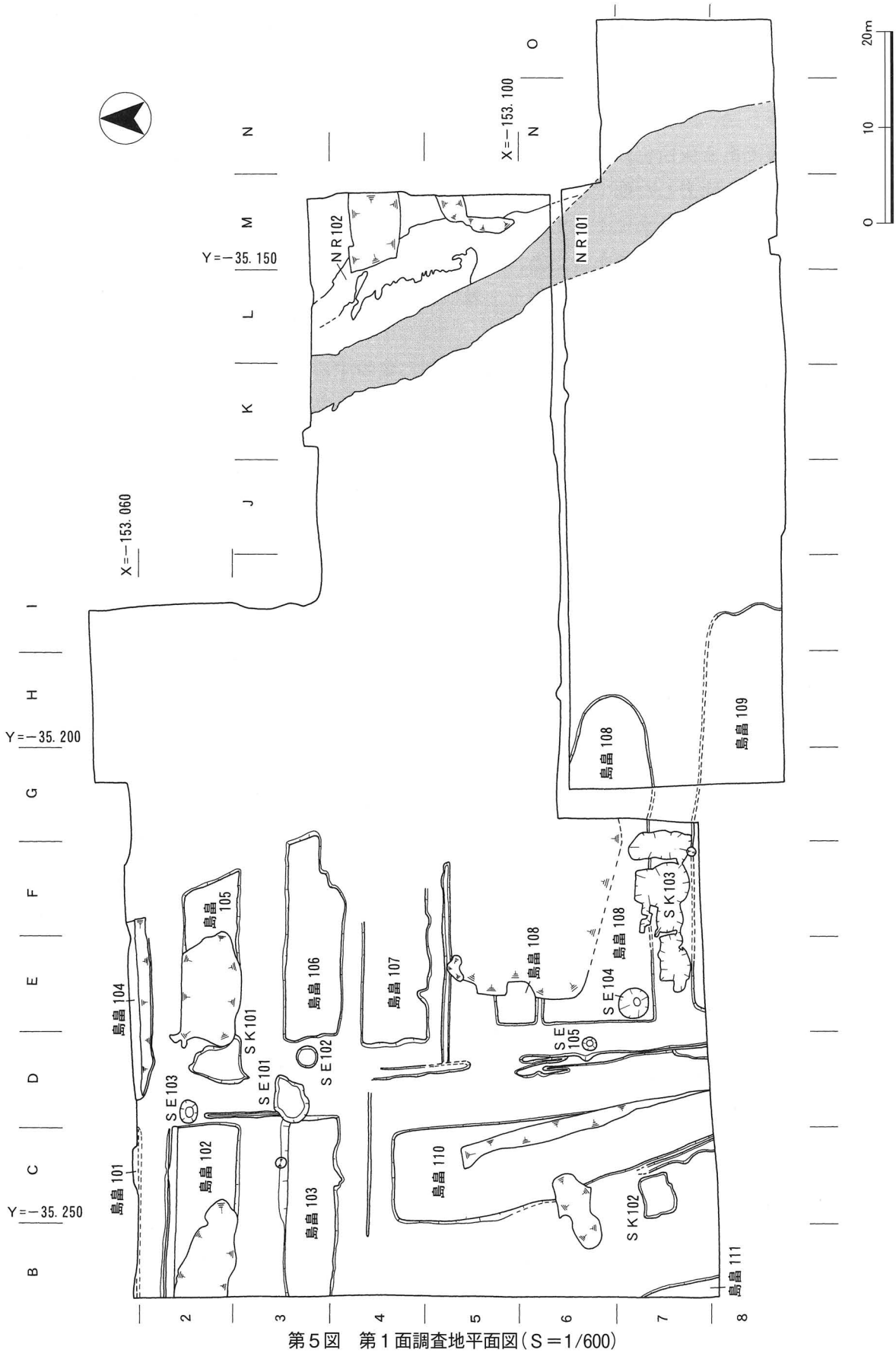
井戸（ＳＥ）

ＳＥ101～105

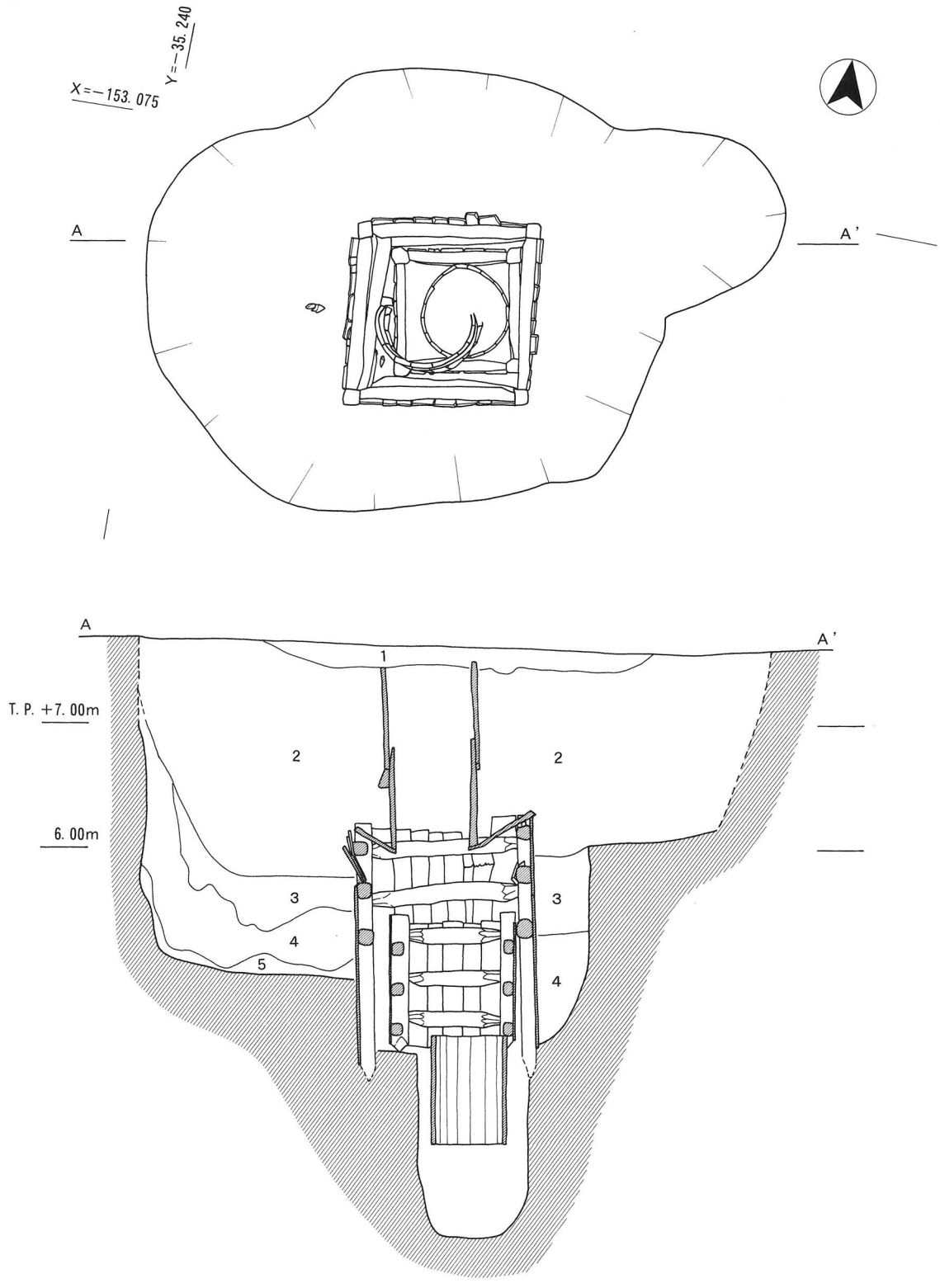
井戸は、Ｄ２～７地区を南北方向に通る里道を挟むように並列して作られたものである。全部で５基検出した。以下、各井戸の特徴や遺物について概観したい。

ＳＥ101（第６・９図、図版三）

Ｄ３地区で検出した井戸である。井戸側の形態は、桶と方形木枠を組み合わせたものである。井戸側の最下段に桶を据え置き、その上に、大小２種類のサイズを持つ方形木枠を重ね合わせたものを組み合わせ、最上段に瓦を２段積み上げる。掘方の平面形態は楕円形で、南北3.6m、東西4.15mの径を測る。深さは4.75mを測る。出土遺物は、銭貨（４）等である。４は寛永通宝。無背銭であり、３期の新寛永に属する。当該井戸は18世紀以降に構築されたものと比定できる。



第５図　第１面調査地平面図（Ｓ＝1/600）



第６図　第１面ＳＥ101平・断面図（Ｓ＝1/50）

ＳＥ102

Ｄ３地区で検出した井戸である。井戸側の形態は、記録されていないので詳細は不明である。なお掘形の平面形態は円形で、約２ｍの径を測る。深さは不明。出土遺物は、土師器・須恵器・瓦の破片である。

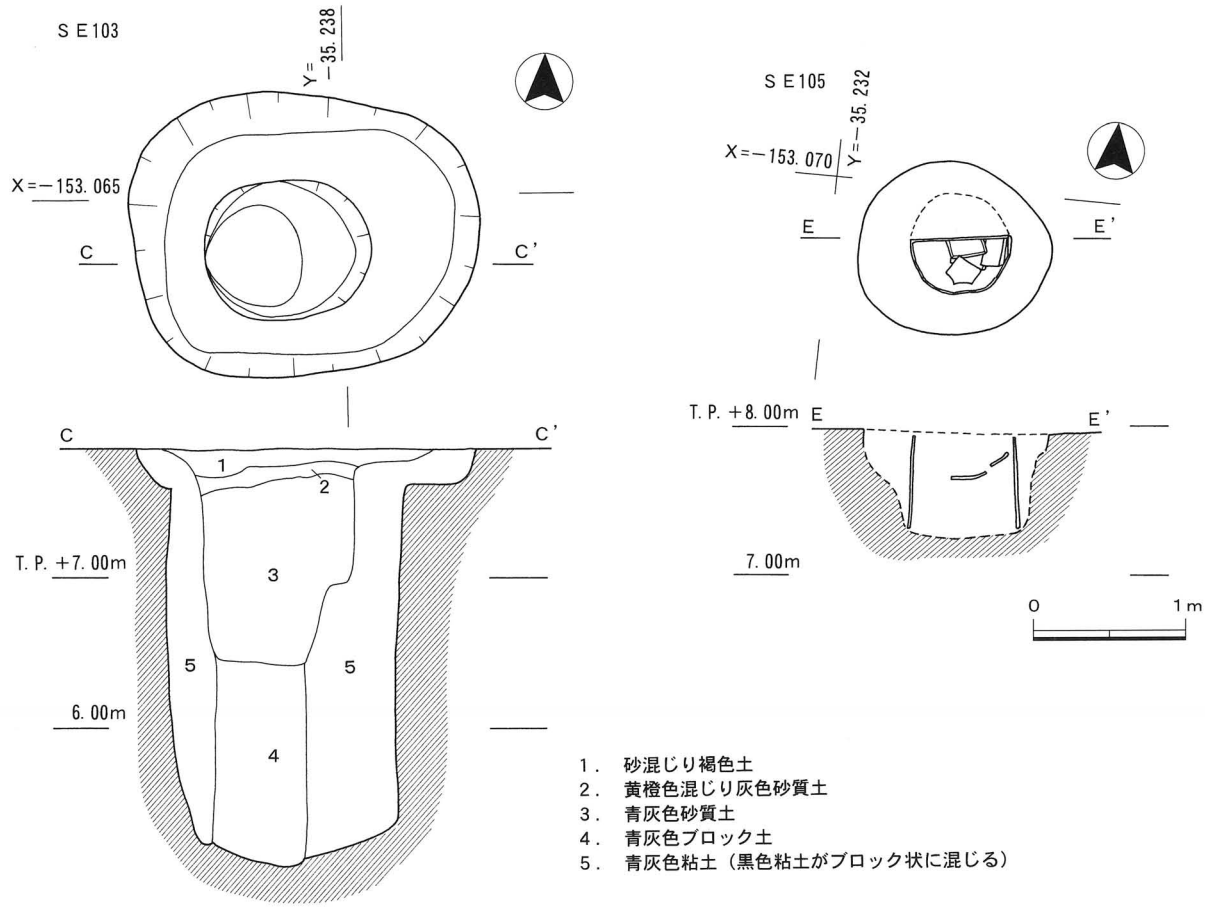
ＳＥ103（第７図）

Ｄ２地区で検出した井戸である。井戸側の形態は、桶を組み合わせて使用していたと思われるが、桶は抜き取られて残存しなかった。箍が僅かに残るのみであった。掘方の平面形態は円形で、約1.9～2.27mの径を測る。深さ2.77mを測る。出土遺物は、瓦質の井戸側片である。

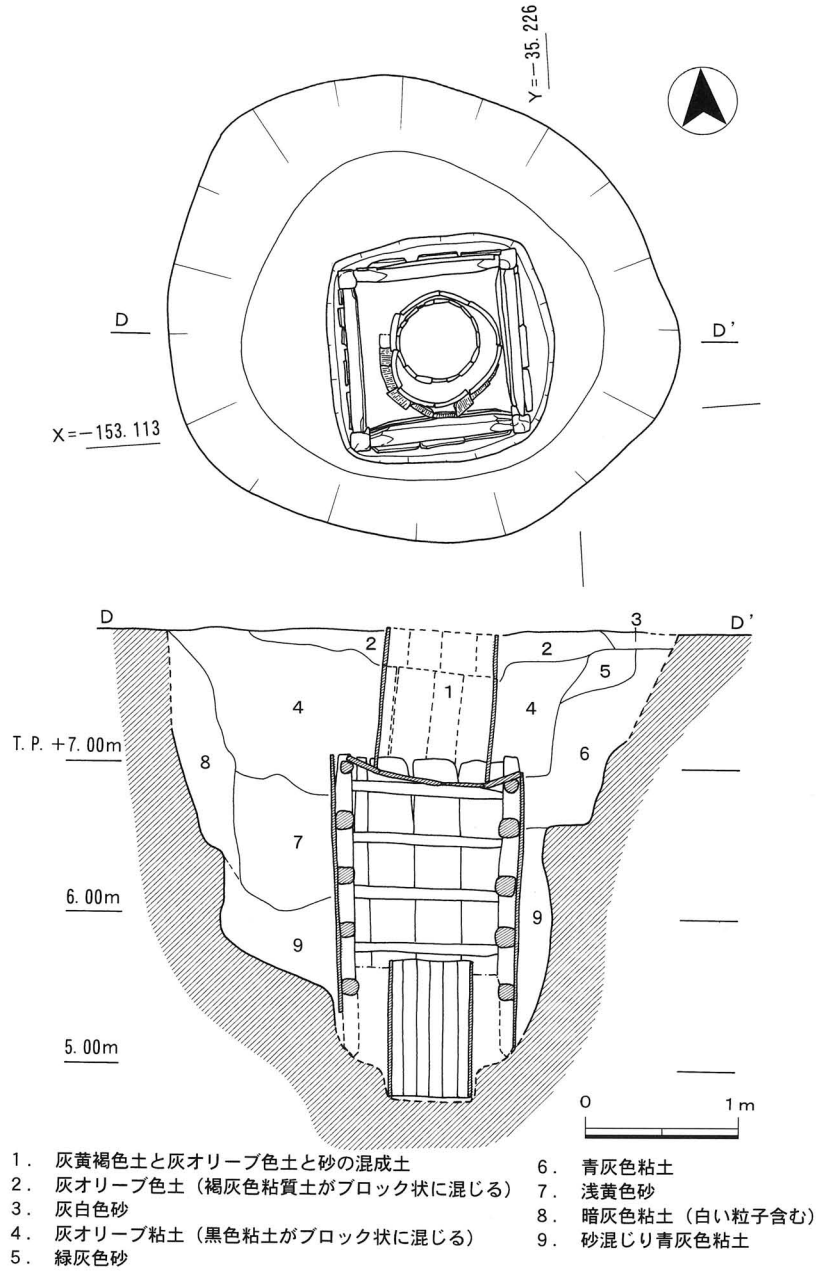
ＳＥ104（第８・９図、図版三・六）

Ｅ７地区で検出した井戸である。井戸側の形態は、桶と方形木枠を組み合わせたものである。井戸枠の最下段に桶を据え置き、その上に、方形木枠を組み合わせ、最上段に井戸側を２段積み上げる。掘方の平面形態は円形で、南北3.1m、東西3.35mの径を測る。深さは3.12mを測る。

出土遺物は、瓦（１・２）、土製品（３）、金属製品（５・６）である。１・２は、瓦質の井戸側。２は、凸面に刺突文で兎が描かれている。側面には、「安新」？の文字が線刻されており、井戸側職人の屋号である可能性も考えられる。３は小形の土錘。５・６は金属製キセルで、６には、灰を落とす時に叩く箇所に使用痕が顕著に見られる。これらの遺物から、昭和初期まで存続していたものと推測できる。



第７図　第１面ＳＥ103・105平・断面図（Ｓ＝1/50）

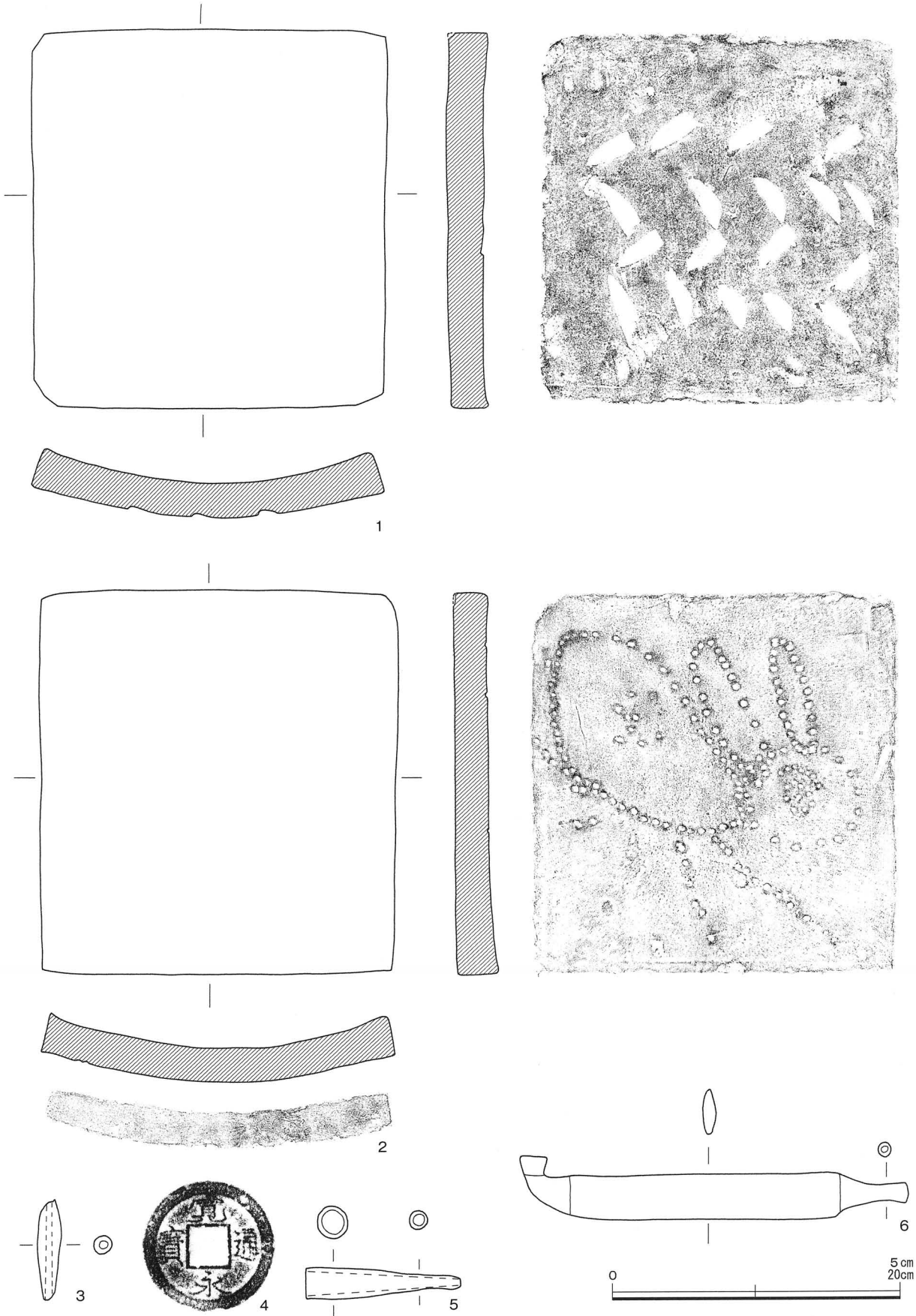


第８図　第１面ＳＥ104平・断面図（Ｓ＝1/50）

ＳＥ105（第７図）

Ｄ６地区で検出した井戸である。井戸側の形態は、桶を使用していたと思われる。掘方の平面形態は円形で、南北1.15m、東西1.25mを測る。当該井戸は、南東方向に位置するＳＥ104から汲み上げた水を一時的に貯めておく施設であったものと推測できる。

出土遺物は無かったが、ＳＥ104と併存すると考えるならば、昭和初期まで存続した可能性が高いものと考えられる。



第９図　第１面ＳＥ101・104出土遺物実測図（Ｓ＝１・２：1/4、３・５・６：1/2、４：1/1）

土坑（ＳＫ）

ＳＫ101～103（第１表、写真３）

当該遺構面で検出した土坑は、井戸と同様にＤ２～７地区を南北方向に通る里道を挟んで作られたものである。全部で３つ検出した。以下、各土坑の特徴や出土遺物については第１表に記述した。

特筆すべき土坑としては、ＳＫ103が挙げられる。当該土坑の役割について２通り推察できる。以下、推測できる役割について述べたい。

１つ目として、灌漑用水を確保するために掘削した土坑とする考え方である。これは、第１表からも分かるように、掘削深度が1.7mあり、この深度まで掘削すると水成層に辛うじて達することから推測できる。

写真３　第１面ＳＫ103検出状況（東から）

第１表　第１面検出土坑法量表（単位m）

遺構名	地区	長軸	短軸	深さ	平面形	断面形	埋積土	出土遺物
ＳＫ101	Ｄ２・３	5.5	4.7	0.1	不定形	皿形	—	—
ＳＫ102	Ｃ７	4.25	3.25	0.13	隅丸長方形	浅い逆台形	①黄橙色砂混じる暗配色粘質砂	土師器
							②灰褐色粘質土	須恵器
ＳＫ103	Ｅ～Ｇ７	17	5.7	～1.7	不定形	椀形	①オリーブ灰色土と黄橙色土のブロック ②オリーブ灰色土、腐った木片を含む ③青灰色粘性粘質土とオリーブ灰色のブロック ④灰白色砂 ⑤青灰色粘性砂質土と砂とオリーブ灰色粘性砂質土のブロック ⑥木片を多量に含む青灰色粘性砂質土とオリーブ灰色粘性砂質土のブロック ⑦砂粒含む青灰色粘土 ⑧オリーブ灰色粘性砂質土と青灰色粘土のブロック	—

２つ目として、土取り穴の痕跡とする考え方である。これは、平面形態が他の土坑と比較して不定形であり、掘削深度も一定でないことから推測できる。つまり、洪水などが生じた後、耕作地を復興するために、良質の土を求めて掘削した可能性がある。

自然河川（ＮＲ）

ＮＲ101（昭和年代）

Ｋ３～Ｎ８地区で検出した河川である。川幅4.5～9.0m、深さ0.4mを測り、南東から北西方向に流れる。旧楠根川の付け替え作業が行われる以前（昭和57年以前）の川筋と考えられる。出土遺物は、ガラス、陶磁器、染付、瓦等の破片である。

ＮＲ102

Ｌ３～Ｍ６地区で検出した河川である。川幅4.9m、深さ0.15～0.3mを測り、南東から北西方向に流れる。前述したＮＲ101が、ある時期に氾濫した痕跡であると推察できる。出土遺物は、土師器・瓦器の破片である。

２）第２面(第11図・図版二・五)

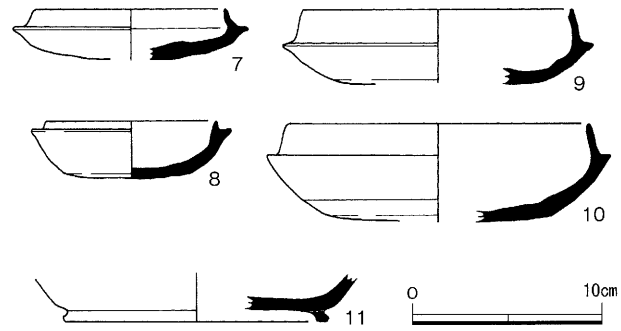
鎌倉～室町時代の水田耕作土層である灰色～暗オリーブ灰色粘質土（第６層）を除去したところ、数十本から構成された鋤溝群・土坑・人の足跡などの水田耕作に関する遺構を検出した。

検出した水田耕作面は、調査地西側に広がっていたが、平面調査で、鋤溝群の一部がＮＲ201に切られていることから、本来は調査地全域に水田耕作面が展開されていたものと推定できる。

以上のことから、自然河川(ＮＲ201)派生面を「第２－１面」、水田耕作面を「第２－２面」と呼称した。さらに、第７層を除去した面で自然河川（ＮＲ202）や馬骨が出土したことから、当概面を「第２－３面」と呼称した。以下、各遺構について概観したい。

水田≪第２－２面≫(第10図)

Ｂ２～Ｊ８地区で検出した溝群は、排水機能をもつ溝だけでなく、畦畔構築時に掘削されたものも含まれる。平面上の標高値と、壁断面を比較検討したところ、本来の水田構築面はさらに上層部であったと考えられる。おそらく後世の耕作等によって削平され、畦畔などの高まりは残存しなかったと思われる。残存する溝幅は0.5m、溝と溝の間は４～５ｍである。



第10図　溝群・ＳＫ201出土土器実測図(Ｓ＝1/4)

出土遺物は須恵器(７～10)である。７～10は須恵器の杯身である。７・８は小形化が進み、立ち上がりがほとんどない口縁部をもつ。調整は内外面に回転ナデを施す。８は底部外面に粘土塊が付着する。９・10はやや立ち上がりが短く、内傾する口縁部をもつ。口縁端部内面に段を施す。調整は内外面に回転ナデ、回転ヘラケズリを施す。時期は、Ⅱ型式６段階(７世紀中頃)に比定できる。

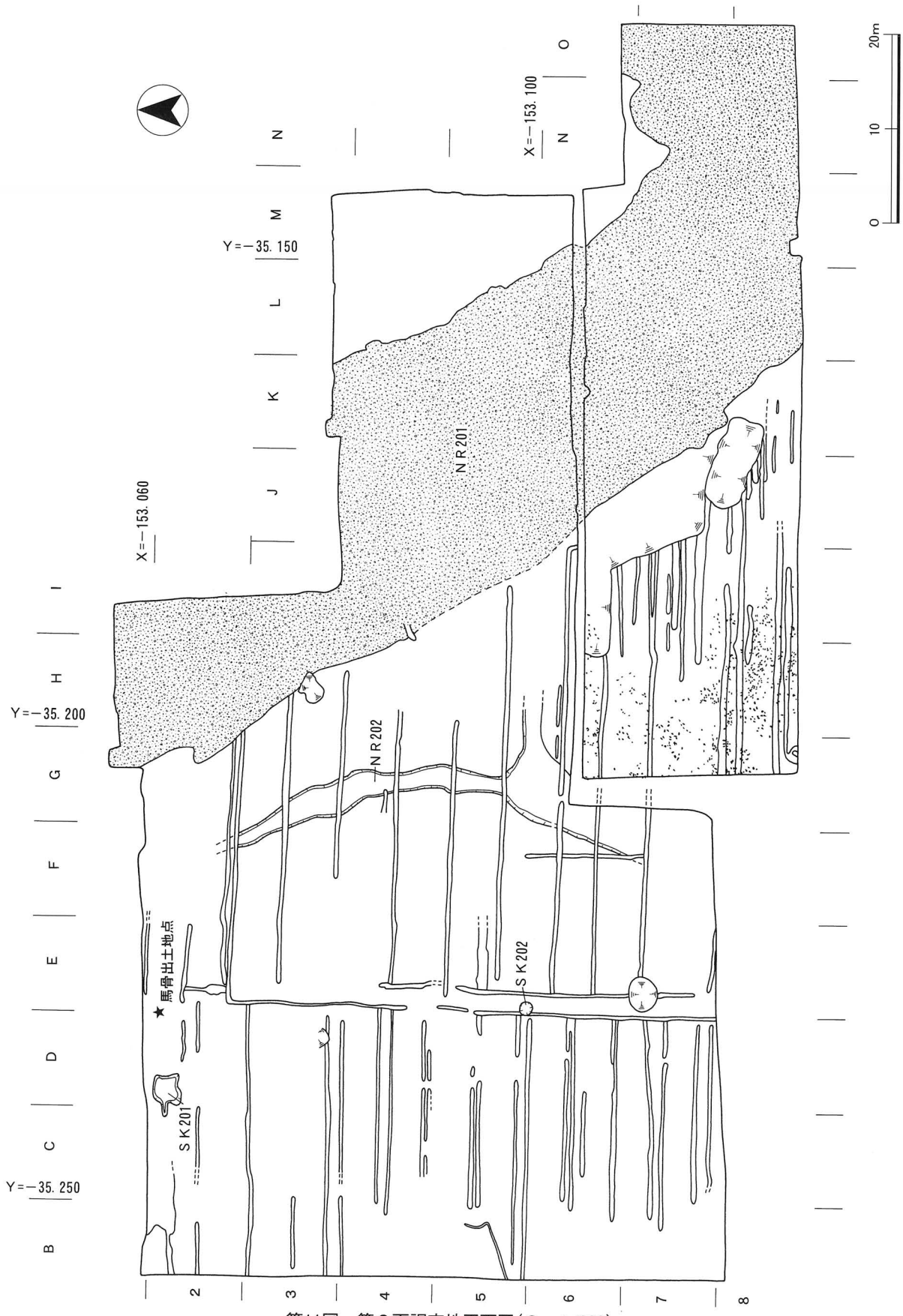
土坑(ＳＫ)

ＳＫ201≪第２－１～２面≫(第10図)

Ｄ２地区で検出した土坑である。平面形態は不定形で、南北長3.0m、東西長4.0m、深さ0.15ｍを測る。埋土は砂粒を含む暗オリーブ灰色土を呈する。

出土遺物は須恵器１点(11)である。11は須恵器の杯身で、杯Ａの底部内側に高台を貼り付けたものである。外面調整は回転ナデを施す。外面底部はヘラ切り後、部分的にナデ調整を施す。胎土は２㎜以下の砂粒を含む。Ⅳ型式２・３段階(８世紀中頃)に比定できる。

以上の特徴や、当該地点が比較的調査地の中でも標高が低く、水田遺構が希薄である状況から、自然にできた窪地である可能性も捨てきれない。



第11図　第２面調査地平面図（Ｓ＝1/600）

ＳＫ202≪第２－２面≫

Ｅ６地区で検出した土坑である。平面形態は円形で、径1.4m、深さ0.15～0.2mを測る。埋土は灰色粘土を呈する。遺物は確認できなかった。

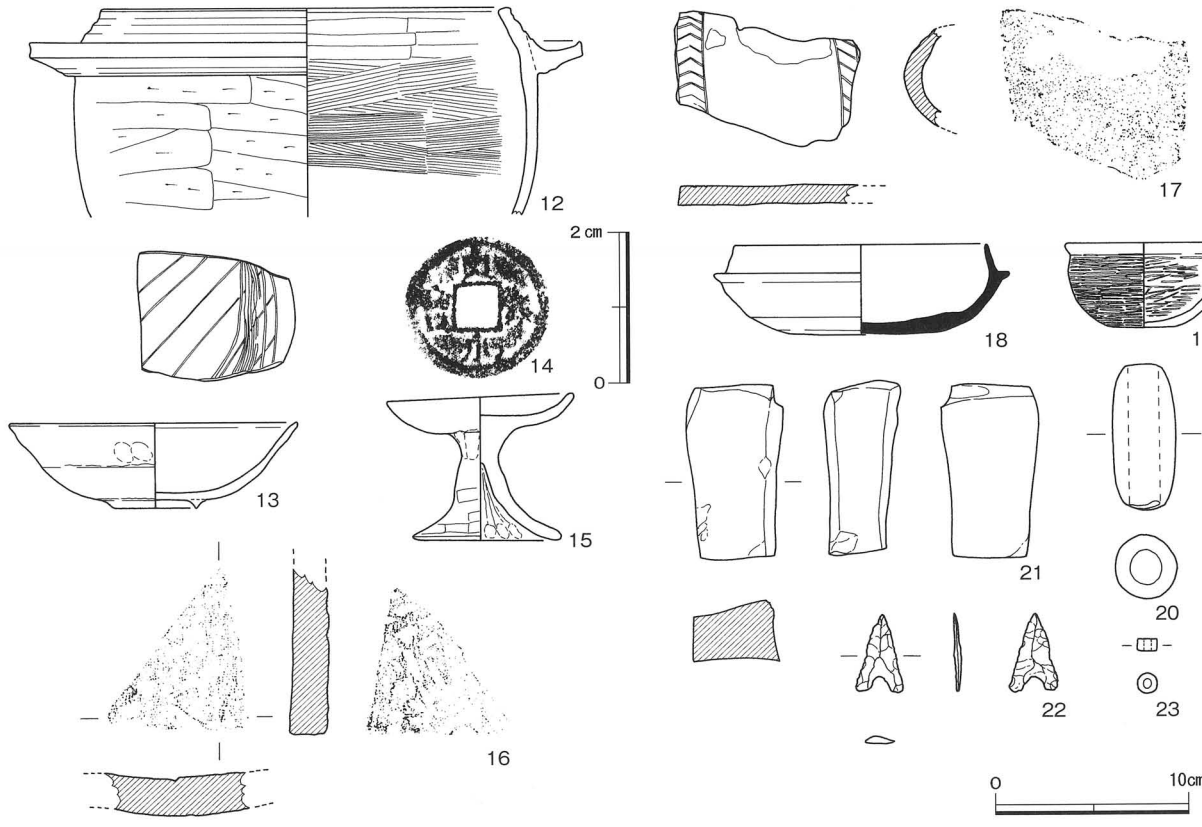
畦畔脇で検出したことから、農耕時に使用したものと推測できる。

自然河川（ＮＲ）

ＮＲ201≪第２－１面≫（第12図、図版四・六・七）

Ｇ１～Ｏ８地区で検出した河川である。河川の規模は、幅22.0～29.0m、深さ2.2mを測る。この河川は北西－南東方向に流れるものである。河川埋土は、以下の特徴より、２層に分層できる。埋土上部は砂粒を含む暗青灰色粘土を呈する。上部出土遺物は、土師器(15)、瓦(16)、埴輪(17)、須恵器(18)である。埋土下部は灰白色中粒砂を呈する。下部出土遺物は、羽釜(12)、瓦器(13)、土師器(19)、土製品(20)、石製品(21・22)である。なお、銭貨(14)、石製品(23)は出土地点不明。以下、出土遺物について概観したい。

12は土師器羽釜で、口縁部形態は内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部に面をもつ。調整は、内面全体にナデ調整を施す。外面は口縁部～鍔にかけてヨコナデ、体部にヘラケズリを施す。口縁部を除く外面全体に煤が付着。胎土は２㎜以下の砂粒を含む。色調は乳白灰色。13は瓦器椀で、口縁部は緩やかに外反する。調整は、内面体部下半に疎なヘラミガキ、底部に平行状ヘラミガキを施す。外面は口縁部にヨコナデを施し、体部に指頭圧痕が目立つ。焼成はやや軟質。尾上編年の和泉型Ⅲ－２～３式に比定できる。14は銭貨で、貞観永宝（初鋳870年）である。熱を受けたため



第12図　第２面ＮＲ201出土遺物実測図（Ｓ＝14・23：1/1、他：1/2）

に変形している。15・19は、手捏ねで製作したミニチュア土器である。15はほぼ完形の高杯で、浅い皿状の杯部をもつ。調整は、脚部内面に絞り目がみられ、指頭圧痕が顕著に残る。内外面全体を指ナデ調整で仕上げる。色調は乳褐灰色。杯部と脚部の同一方向面に黒斑が見られる。19は鉢で、短く外反する口縁部をもち、底部は平底を呈する。調整は、内外面に横方向の丁寧なヘラミガキ、底部外面にヘラケズリを施す。色調は淡灰茶色。20は土錘。色調は淡灰褐色。16は平瓦の破片である。凸面全体に施した縄目を丁寧にナデ消した後、綾杉状のたたきを施す。さらに綾杉の軸に並行するように直線文を数条施す(安村1997)。凹面には布目を施す。桶枠痕あり。17は家形埴輪の破片である。外面に２条の綾杉文が見られ、埴輪片が丸くカーブを描くことから、家形埴輪の天井部分の破片であると考えられる。18は須恵器の杯身で、立ち上がりは短く内湾する口縁部をもつ。調整は、内面に回転ナデを施す。外面に回転ナデ、下半部は回転ヘラケズリを施す。21は砥石で平面形態が長方形を呈する。４面とも砥面して使用しており比較的平滑な状態である。22は凹基石鏃で、最大長4.2cm、最大幅2.4cm、最大厚0.4cm、重さ約4.2g。石材はサヌカイト製。23は滑石製の臼玉。

以上の遺物より、当該河川は、室町時代に埋没したと考えられる。

ＮＲ202≪第２－３面≫

Ｆ２～Ｈ６地区で検出した河川である。河川の規模は、川幅1.8～10.4m、深さ0.1～0.2mを測る。南北方向に流れる河川であったが、調査地北側では、当該河川を検出できなかった。これらの痕跡が残存しなかったのは、旧楠根川の影響及び、後世の耕作等によって削平されていたと考えられる。河川埋土は、灰色～黄色中砂を呈する。出土遺物は土師器・須恵器の破片である。当該河川埋没後に水田が構築されることから、遅くとも７世紀中頃には埋没していたものと推測できる。当該河川西縁辺部に、馬骨が検出されており、両遺構がほぼ同時期に存在していた可能性が極めて高いと考えられる。

馬骨≪第２－３面≫(写真４)

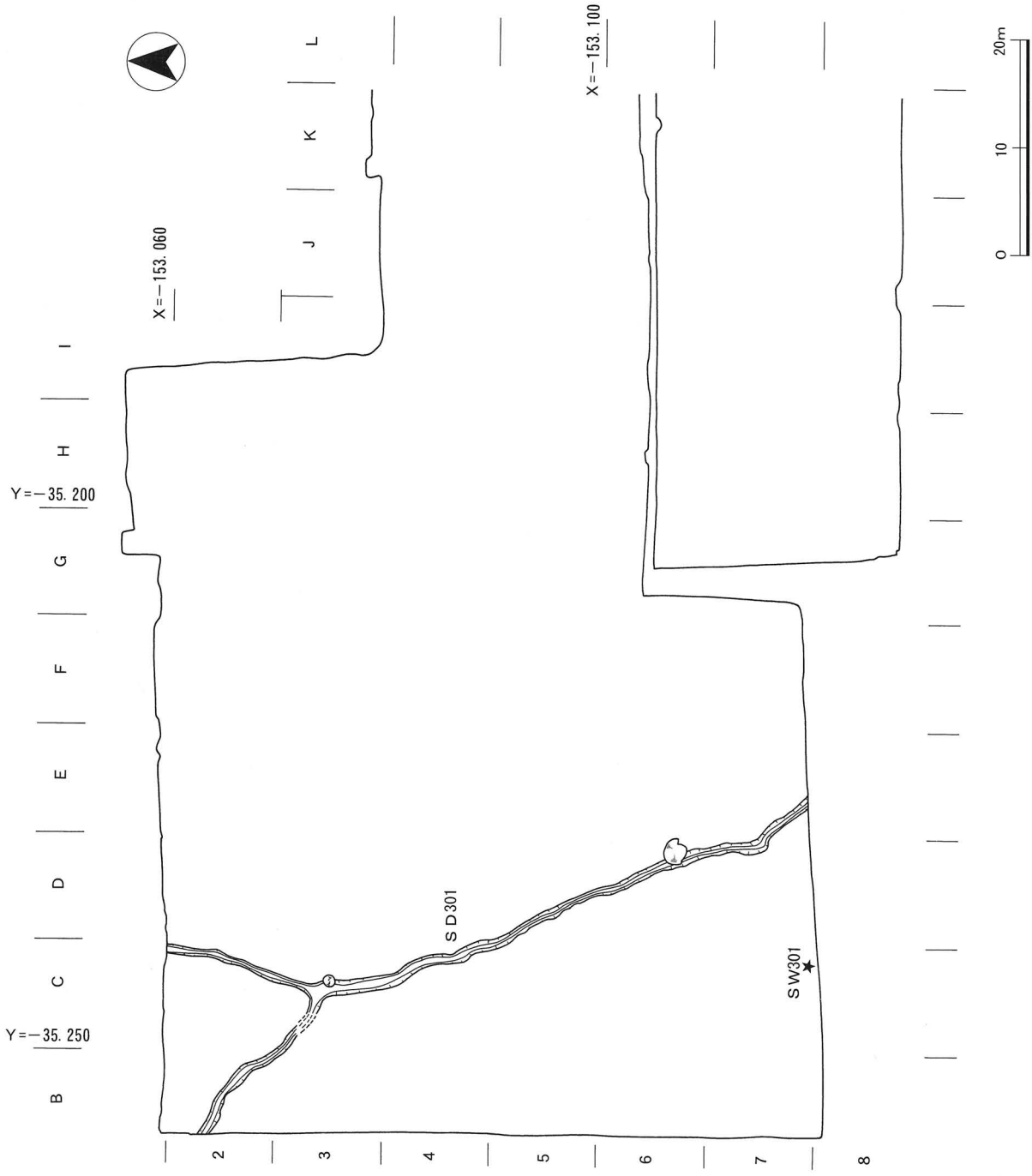
Ｅ２地区で獣骨と、拳大の石が散乱した状態で検出した。出土した獣骨は、馬の骨と推察でき、出土骨の部位は、上顎歯・下顎骨・胸堆歯・肋骨・大腿骨・上腕骨・膣骨・肩甲骨に大別できる。このうち下顎骨が少なくとも３個体あることから、３頭以上の馬骨が一箇所に埋葬又は廃棄されたものと推測できる。なお、掘方等は確認できなかった。

写真４　第２面馬骨出土状況(南から)

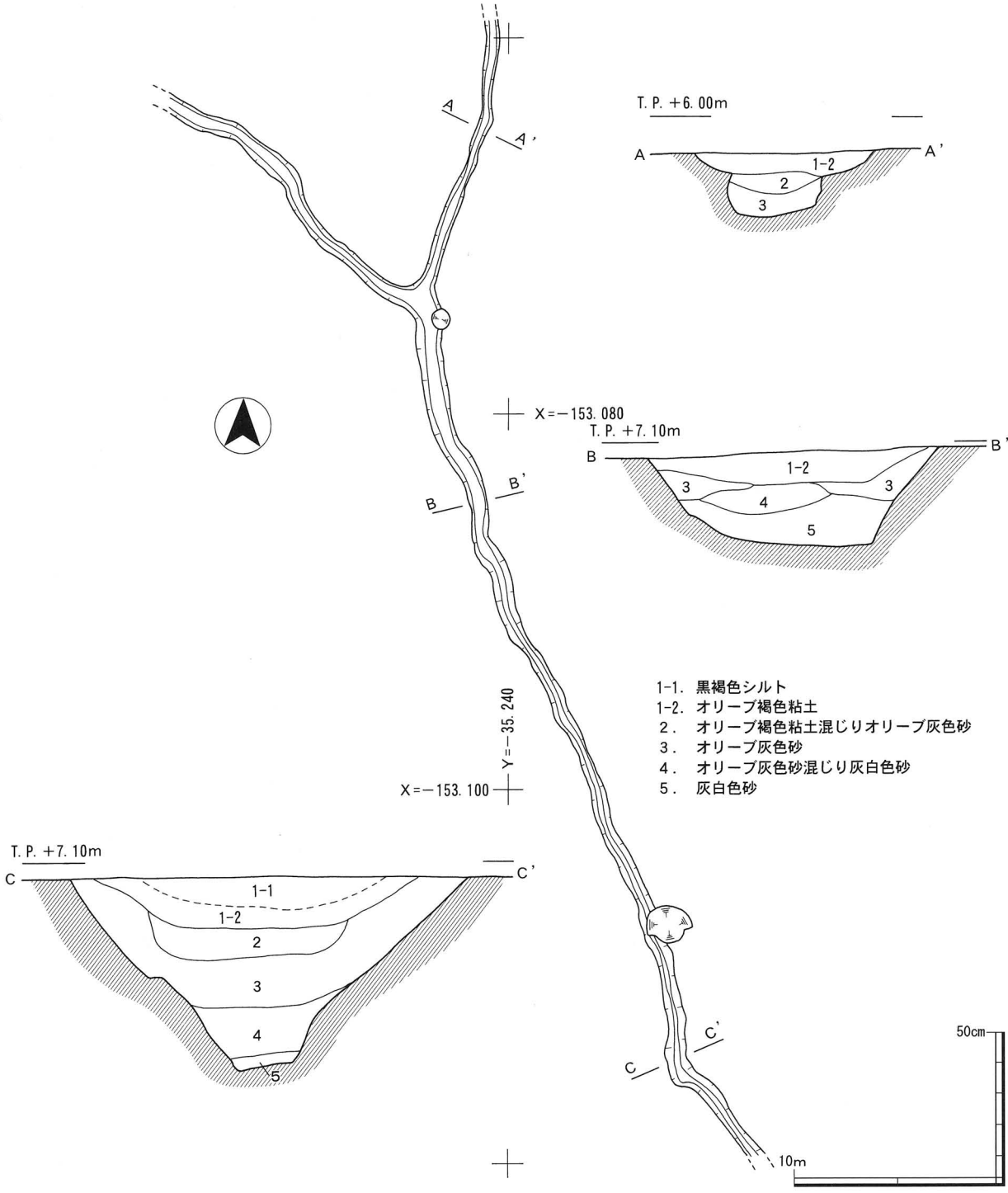
遺構の性格は、前述したように、当該面では、ＮＲ202が当該遺構の東隣を流れることから、水の祭祀に関連する遺構であった可能性も考えられる。また、上面の第２－２面で検出した水田遺構の畦畔が出土地点が近接することから、水田の廃絶期に祀られたものとも考えられる。

3）第３面（第13図、図版二）

当該遺構面は、当初予定していた掘削深度より深い箇所であった為、全体の平面調査は行わなかった。ただし、調査地側壁断面で遺構の確認ができたもの（ＳＤ301）については周囲を部分的に掘り下げ、平面的な広がりを確認した。また、ＳＷ301は、調査地内で最も地形の高い箇所にあり、調査の掘削深度が遺構面に達していた為検出可能であった。調査の結果、第９層下面（T.P.＋6.8～6.9m）で、溝１条（ＳＤ301）、土器集積１箇所（ＳＷ301）を検出した。



第13図　第３面調査地平面図（Ｓ＝1/600）



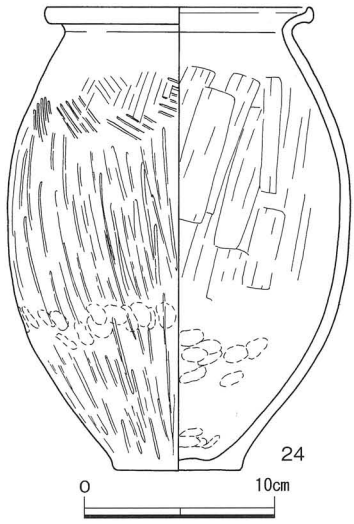
第14図　第３面ＳＤ301平面図（Ｓ＝1/300）・断面図（Ｓ＝1/20）

溝（ＳＤ）

ＳＤ301（第14・15図、図版五・七）

Ｄ７～Ｃ３地点まで小刻みに蛇行して北西方向に流れ、Ｃ３地点で北と北西方向に分岐する。溝の幅は約0.5m、深さ約0.4～0.6mを測る。溝の断面形態は、ＶまたはＵ字形を呈する。埋土は遺構構築層と類似する暗灰色土である。

溝埋土内から遺物は出土しなかったが、下層確認の為に掘削を行ったトレンチ（Ｃ・Ｄ２～５



第15図　第３面ＳＤ301周辺出土土器実測図（Ｓ＝1/4）

地区）のＳＤ301埋土部分から、残存率2/3以上を占める弥生土器甕(24)が出土した。24は、体部上半に最大径をもつ甕で、口縁部は「く」の字に外反し、口縁端部に面をもつ。調整は、外面に縦方向のヘラミガキを施す。内面全体には、ヘラケズリを施し、底部に指頭圧痕が見られる。全体にローリングを受けている為、摩滅が著しい。時期は畿内第Ⅴ様式前半に比定できる。

第３面構築面下部に、薄く部分的に堆積する灰オリーブ色シルト層内からは、畿内第Ⅳ様式に比定できる弥生土器の破片が出土している。以上のことから、当該溝が機能していた時期は、弥生時代中期末～後期前半に比定できる。

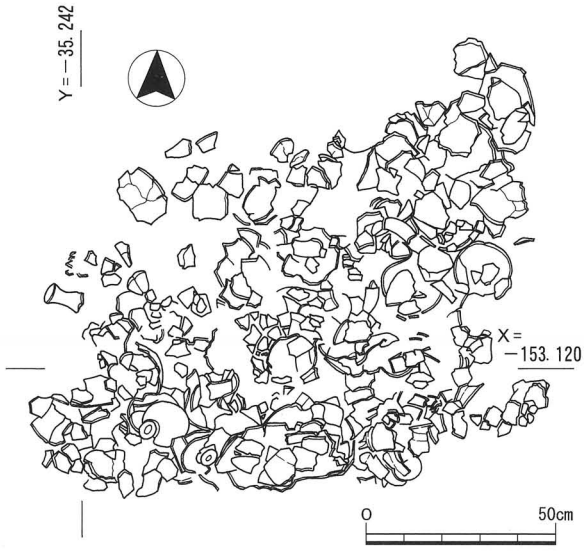
遺構の性格は、断面及び埋土の堆積状況から人工的に掘ったもので、農耕用の水路として使用されていたものと推察できる。

土器集積（ＳＷ）

ＳＷ301（第16・17図、写真５、図版七・八）

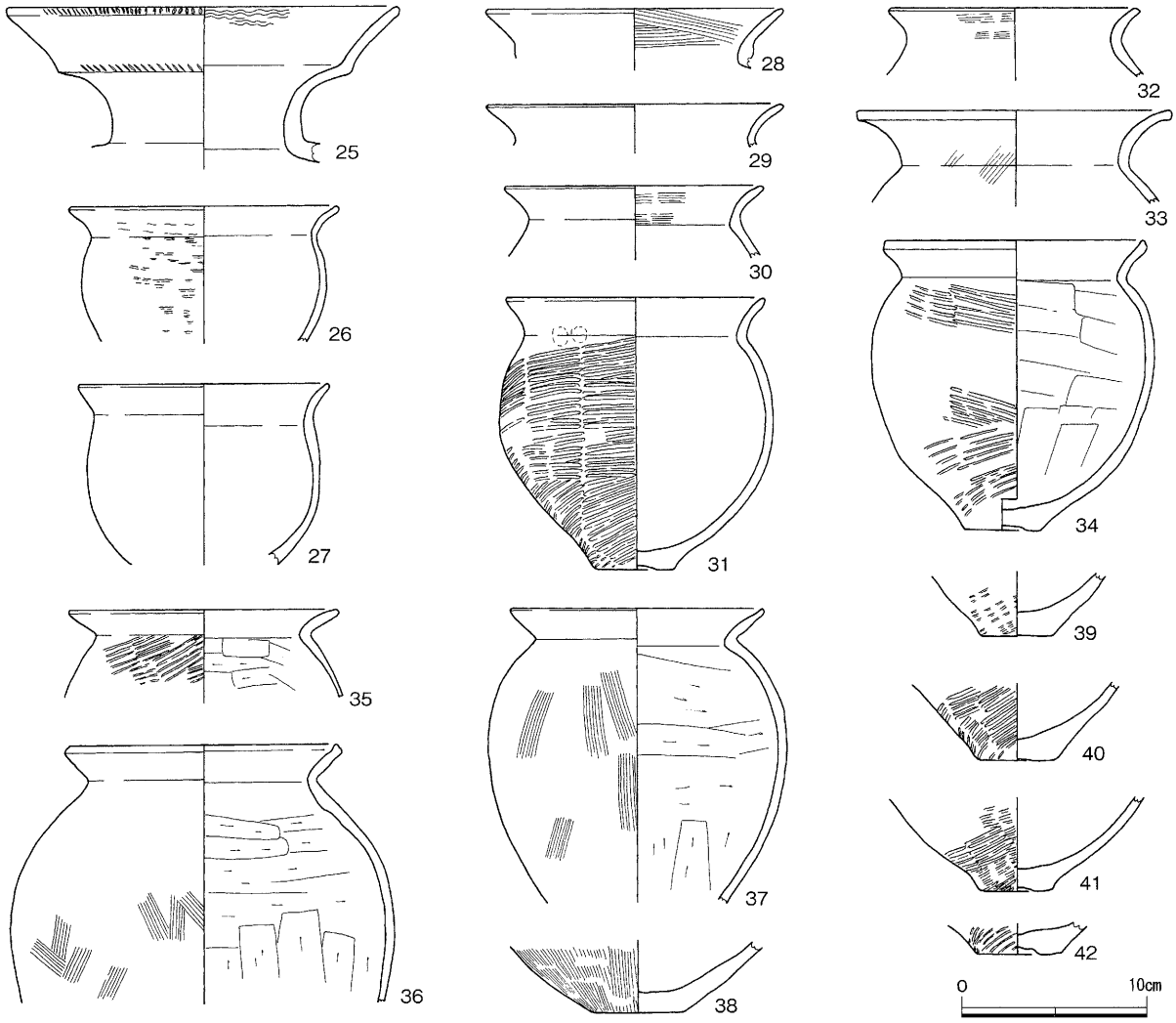
７Ｂ地区で検出した土器の集積である。検出した地点は調査地内で最もベース面が高い箇所に存在した為、検出できたものと考えられる。検出時の状況は、細片の土器がほぼ円形状密集した状態で集積していた。集積の規模は、径約1.5mの範囲内であった。なお掘方の形状等は確認できなかった。

出土土器は、弥生土器の壷(25・38)・甕(26～37・39～41)等である。25は二重口縁壷の口縁部で、強く外反する。調整は、口縁部内面に粗雑な波状文、口縁端部と擬口縁接合部分の２箇所には、ヘラ状工具による刻み目を施す。頸部外面は横方向のヘラミガキを施す。全体に摩滅が著しい。38は壺の底部。調整は、外面にハケ目を施す。内面は摩滅が著しい為、調整不明瞭。胎土に、赤褐色酸化粒が目立つ。26～37は、甕の口縁部～体部片である。31・34は弥生系甕。緩やかに外反する口縁部をもつ。底部はドーナツ底で、底部輪台技法を用いる。調整は、外面に右上がりタタキを施し、分割成形技法を用いる。内面の調整は摩滅が著しく調整不明瞭である。35～37



第16図　第３面ＳＷ301平面図（Ｓ＝1/20）

写真５　第３面ＳＷ301出土状況（東から）



第17図　第３面ＳＷ301出土土器実測図（Ｓ＝1/4）

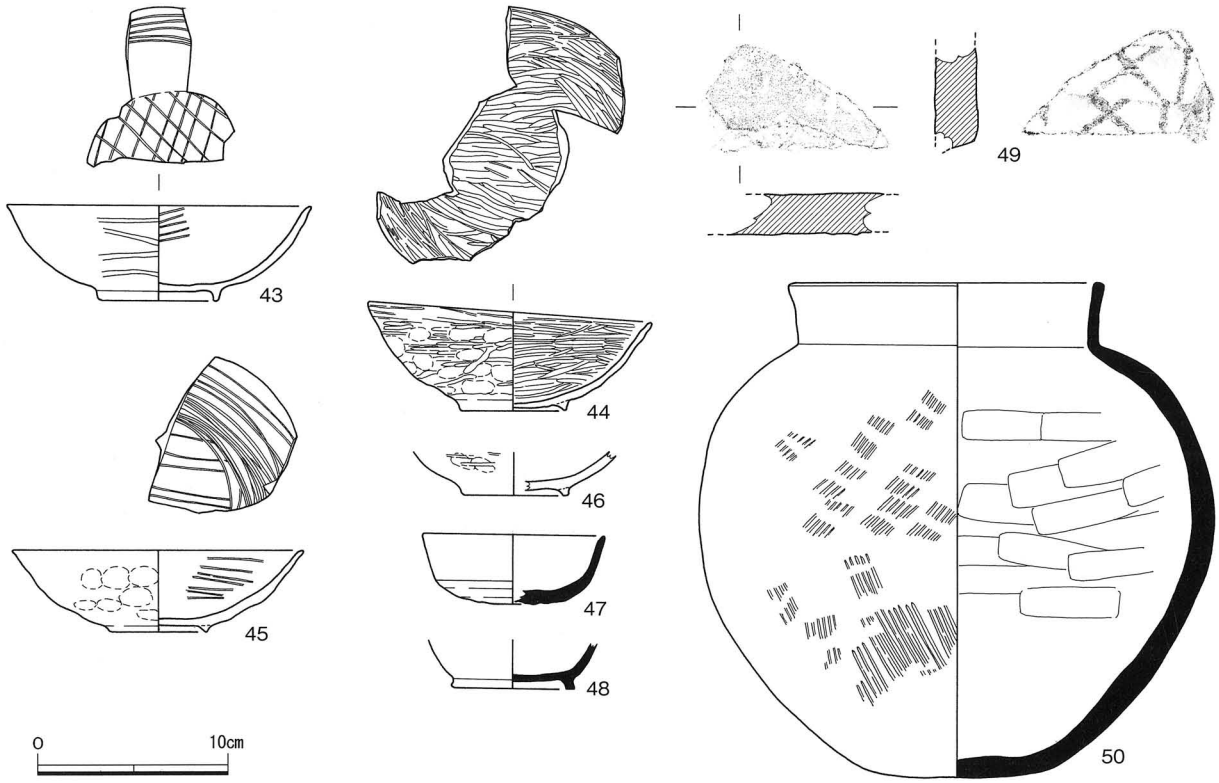
は庄内式甕。調整は、内面にヘラケズリ、外面に35は右上がりのタタキ、35・37はハケ目を施す。口縁部形態は「く」の字に外反し、端部を丸くおさめるもの(35・37)と、端部に面をもつもの(36)がある。28～30・32・33は甕の口縁部で、緩やかに外反し、端部を丸くおさめるもの（28～30・32）と、端部に面をもつもの（32）がある。39～42は甕の底部で、平底（39）と、ドーナツ底（40・41）がある。以上の遺物は、弥生時終末期～庄内式古相に比定できる。

これらの土器は、完形に近い状態で出土したものはなく、全てが破損していた。以上のことから、集積内の出土土器は故意に割って置かれたもの又は放置されたものと考えられる。

４）遺構に伴わない遺物

・第７・８層出土土器（第18図、図版八）

第７層から出土した遺物は、瓦器椀(43～46)、須恵器(47・48)、瓦(49)である。43は内面口縁部付近にのみヘラミガキ、底部には格子状暗文を施す。外面は疎なヘラミガキを施す。尾上編年の和泉型Ⅲ－１期に比定できる。44は内面全体に密なヘラミガキを施す。外面も密なヘラミガキを施し、指頭圧痕が目立つ。和泉型Ⅱ－１期に比定できる。45は内面全体に疎なヘラミガキを施



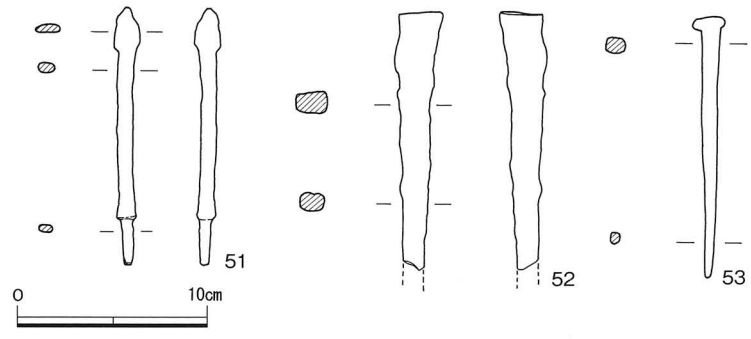
第18図　第７・８層出土遺物実測図（S＝1/4）

す。外面は指頭圧痕が目立つ。和泉型Ⅲ－３式に比定できる。49は平瓦の破片である。凹面全体に布目痕を呈する。凸面には「×」印タタキを施す。平安～鎌倉時代前期に比定できる。

第８層から出土した遺物は、須恵器(50)である。50は須恵器の甕である。上半部に最大径をもつ体部から、短い口縁部が立ち上がる。内面は当て具痕を丁寧にナデ消している。外面はタタキ（４条/cm）のちナデを施す。胎土は６㎜以下の砂礫（長石）を多量に含む特徴的な胎土をもつ。淡い灰茶色を呈する。

・包含層出土金属製品(第19図、図版八)

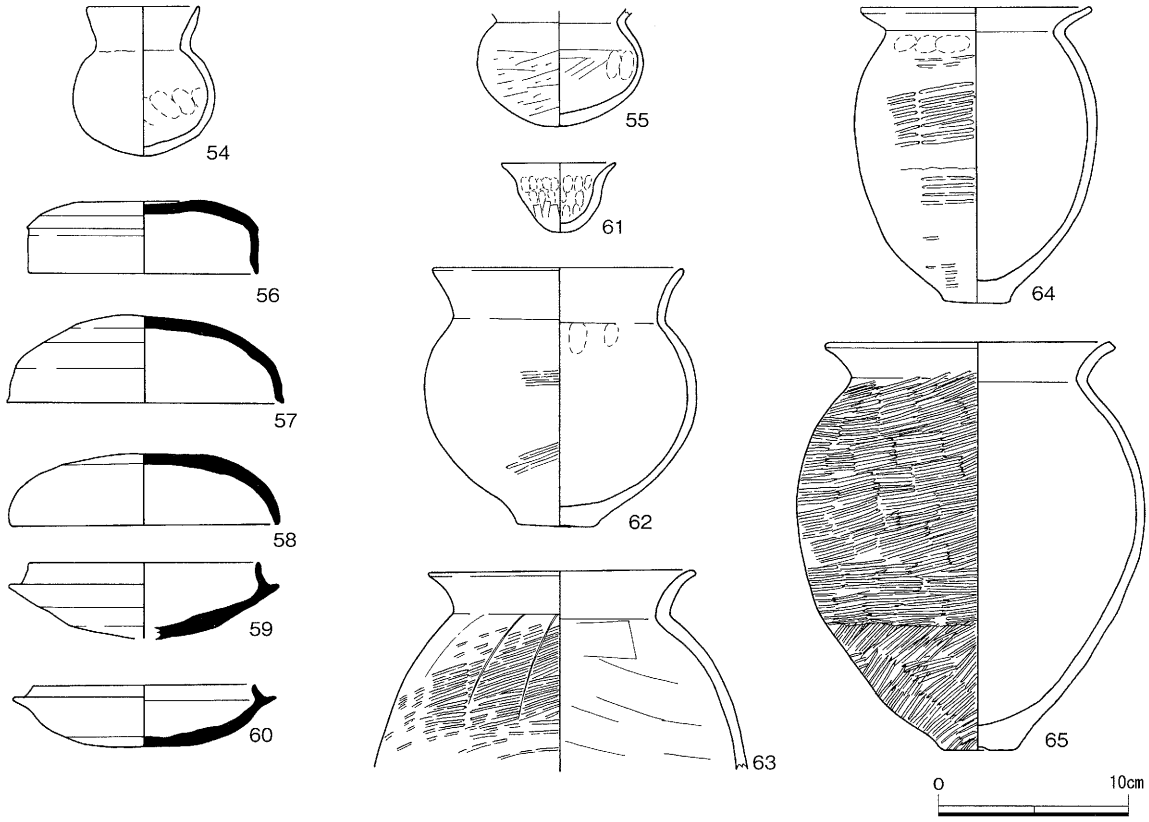
今回の調査では金属製品が３点(52～54)出土した。52は鉄鏃、53は馬鍬の歯、54は鉄釘である。52は第２面(中世耕作面)上面を精査時に出土したものである。形態は、鏃身部は長三角形で、頸部は台形、茎部は有頸を呈する。この形態より古墳時代後期に比定できる。53・54は共に、第２面構築層（中世耕作土層）内より出土した。いずれも、耕作時に混入したものと推測できる。



第19図　包含層出土金属製品実測図（S＝1/4）

・包含層出土土器(第20図、図版八)

本稿でとりあげた包含層出土土器は、調査取り上げ時の注記が「第６層または第７層」と記載されていることから、当初は掲載を控えようと考えたが、残存状態が全体の2/3以上あり、何ら



第20図　包含層出土土器実測図（Ｓ＝1/4）

かの遺構に伴なう可能性が考えられたので、これらの遺物について紹介のみ行うこととする。以下、出土した土器について概観したい。

54は第１面検出時に出土したほぼ完形の小形丸底壷である。調整は内面に指ナデを呈するが、外面は剥離のため調整不明瞭である。55は第６層掘削時に出土した小形丸底壷の体部である。54・55の時期は原田編年布留Ⅳに比定できる。56～65は第７層掘削時に出土した須恵器（56～60）・土師器（61～65）である。56は杯蓋の破片である。調整は内外面に回転ナデを呈する。時期は中村編年Ⅰ－２期に比定できる。57・58は須恵器の杯蓋、59・60は須恵器の杯身である。調整は内面に回転ナデを呈し、外面は回転ヘラケズリを施す。時期は中村編年Ⅱ－４・５期に比定できる。61は粗製のミニチュアの鉢である。62～65は弥生系甕である。口縁部形態は、上方に立ち上がり外反するもの(62)と、緩やかに外反し、端部に面をもつもの(63～65)がある。調整は、内面にヘラケズリ、外面に右上がりのタタキを施す。時期は、弥生時代後期～古墳時代初頭に比定できる。

第４章　まとめ

今回の調査では、近世以降の耕作面（第１面）、中世の耕作面（第２－１・２面）、古代面（第２－３面）、弥生時代中期～後期の水田面（第３面）の少なくとも４枚の遺構面の存在を確認した。調査成果からも分かるように、今回の調査地一帯は、長期間に亘り生産域として利用されてきた

ことは明確である。おそらく、当該地域一帯は、南北方向に伸びる小阪合分流路の影響を多大に受けて不安定な自然環境のもとにあり、集落域には適さない土地であったものと推測できる。以下、各時期の土地利用について見ていきたい。

弥生時代中期～後期に構築された第３面では、１条の溝と１箇所の土器集積を検出するに留まった。これは第３面が、工事破壊深度に達しないことから、調査対象外であったことに起因する。調査地側溝掘削時に確認できた遺構（ＳＤ301）や、上層掘削時に露出した遺構（ＳＷ301）は調査対象とし、最小限の調査範囲で検出した。これらの調査成果や、調査地断面で確認できた土層の堆積状況から、第３面が水田として利用されていたことが推察できた。

奈良～平安時代（第２－３面）では、自然河川（ＮＲ202）や、ＮＲ202の近接地で馬骨を検出した。このような成果から、第２－３面は、不安定な環境にあった為、ほとんど土地活用されていなかったものと推察できる。

中世（第２－１・２面）では、調査地東側地域で、室町時代に埋没したと推測できる自然河川（ＮＲ201）を検出した。、調査地西側地域では、耕作溝の痕跡や土坑を確認することができた。このような成果から、第２－１面の調査地西側地域は、比較的安定した環境であり、生産域として広く活用されていたものと推察できる。

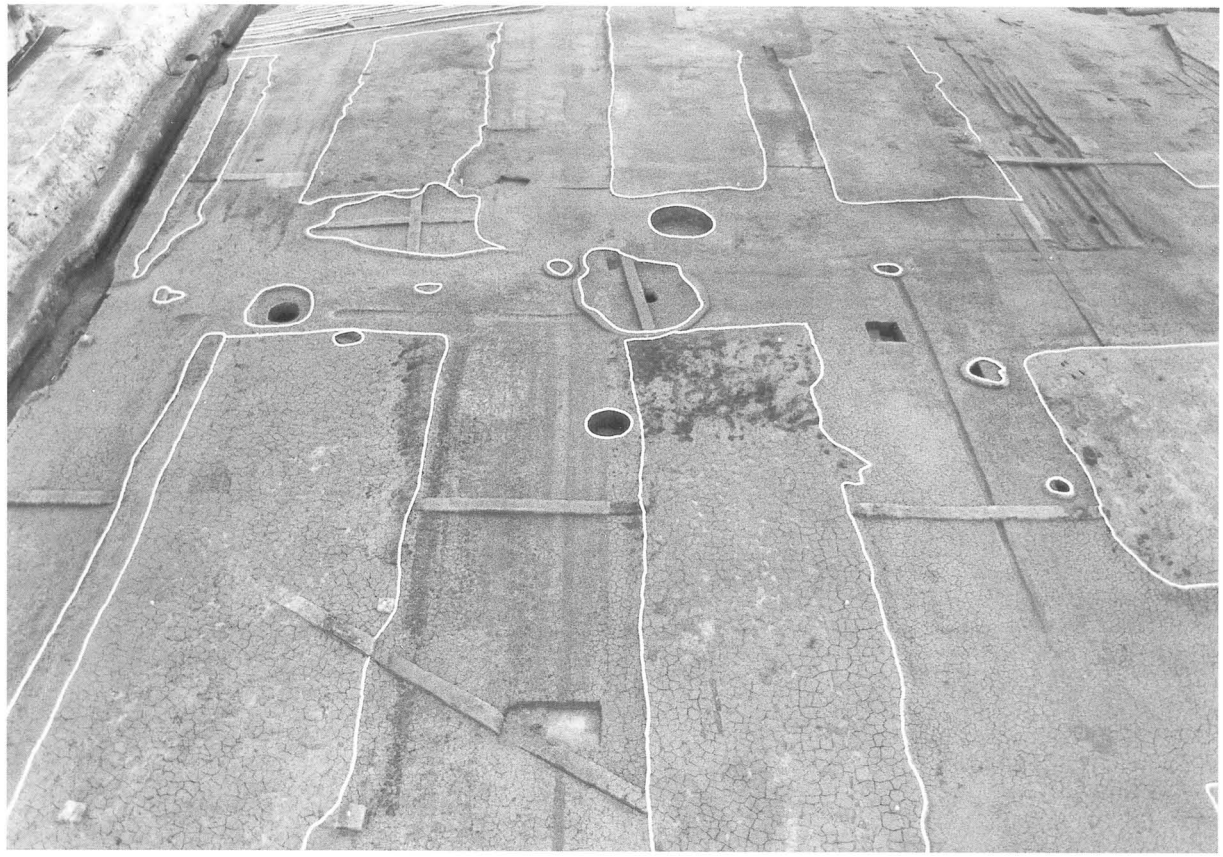
近世（第１面）では、調査地東側地域は小阪合分流路の影響から遺構を検出できなかったが、調査地西側地域では、島畠群及び数基の井戸を検出した。検出した島畠群は、現在の条里方向と一致するように並列し、井戸（ＳＥ104）から昭和初期の遺物が出土したことから、第１面は近世から近代まで続く生産域であったものと推察できる。

このように今回の調査では、当該調査地が小阪合分流路の影響を受けながら、生産域として長期間に亘って活用されてきたことが明らかとなった。

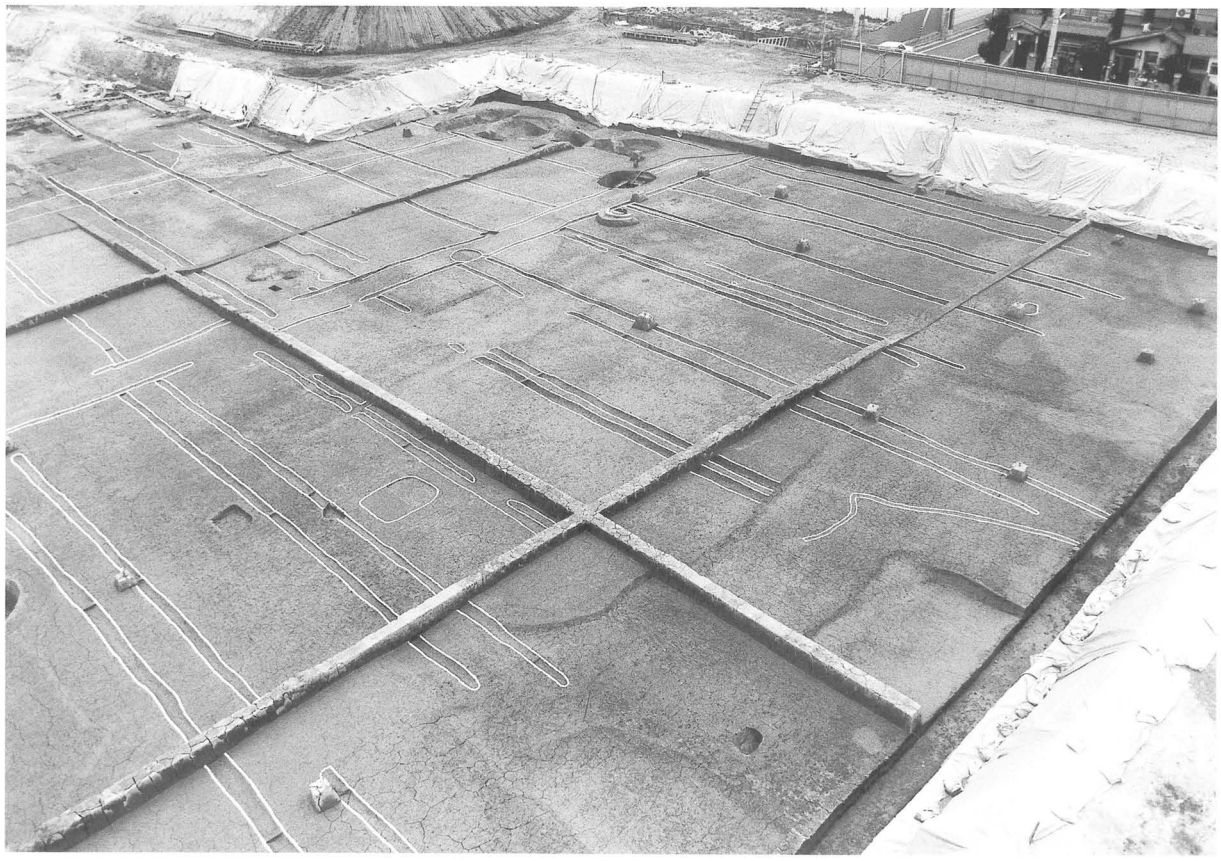
参考文献

・井上智博1999「池島・福万寺遺跡の形成過程と景観変遷」『調査研究報告第２集』財団法人大阪府文化財センター
・井上智博2002「第Ⅲ章遺構面の認識と標準層序」『池島・福万寺遺跡２　遺構・遺物編』
・江浦　洋1991「Ⅴ．調査成果（90－3調査区）『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅱ』（財）大阪府文化財センター
・尾上　実・森島康雄・近江俊秀1995「６．瓦器椀」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
・久保和士・松井　章1999「第10章　家畜＜その２－ウマ・ウシ＞」『考古学と動物学』
・駒井正明1999「河内往生院出土瓦の編年とその歴史」『岩滝山往生院六萬寺史上巻－考古編－』往生院六萬寺
・杉山秀宏1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集第八創立50周年記念』橿原考古学研究所
・阪田育功1997「河内平野低地部における河川流路の変遷」『河内文化研究論集』柏原市文化研究会
・永井久美男1996『日本出土銭総覧　1996年版』兵庫埋蔵銭調査会
・中村　浩1978『陶邑』大阪府教育委員会
・原田昌則1993「Ⅱ久宝寺遺跡（第１次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告37』（財）八尾市文化財調査研究会
・藤岡達也1996「河内平野南部における古環境復元の基礎的研究」『歴史地理学38巻35号』
・別所秀高・積山　洋2005「考古解説」『大阪の部落史　第１巻史料編』大阪の部落史委員会
・松田順一郎2000「八尾市小阪合遺跡における弥生時代～古代の河川堆積作用と地形発達」『小阪合遺跡』財団法人大阪府文化財センター
・安村俊史1997「柏原市域出土平瓦の叩き目について」『摂河泉古代寺院論纂第１集』摂河泉古代寺院研究会

図　　版

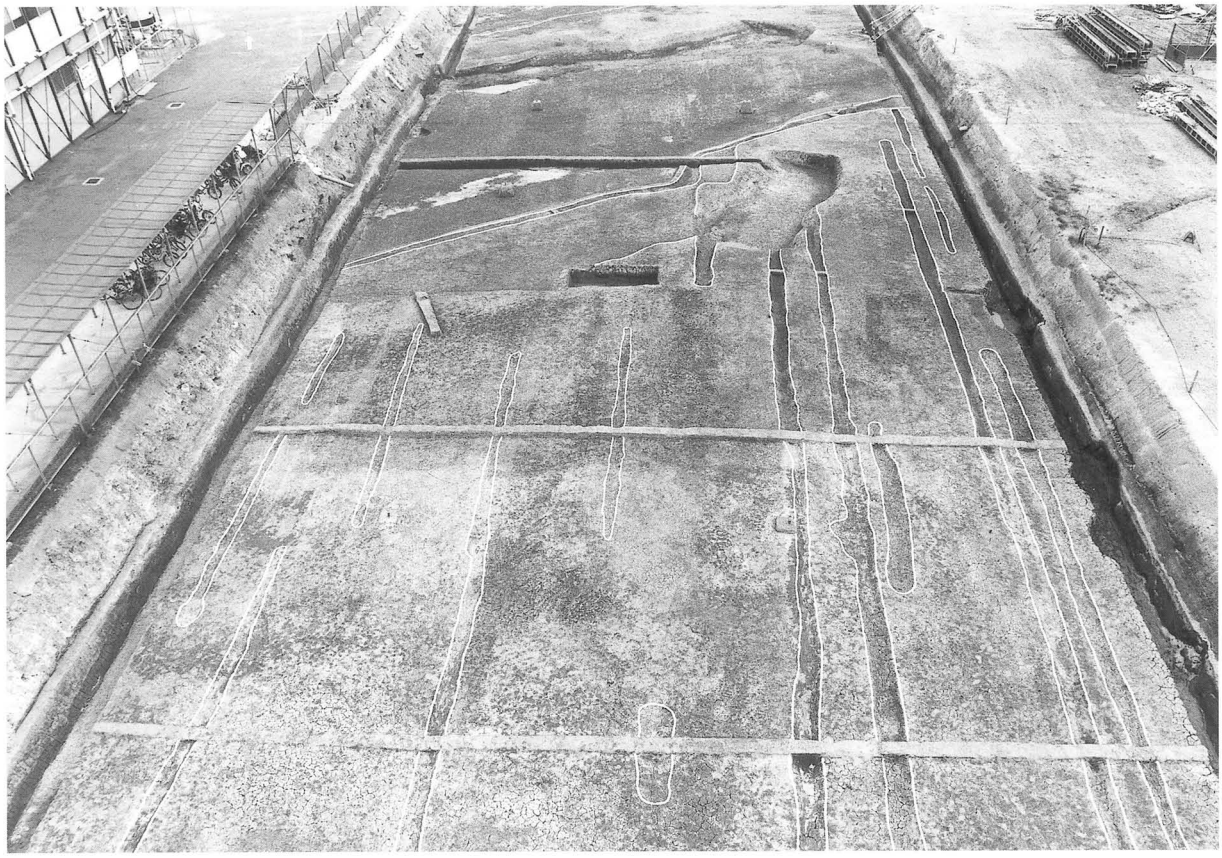


第１面全景（西から）

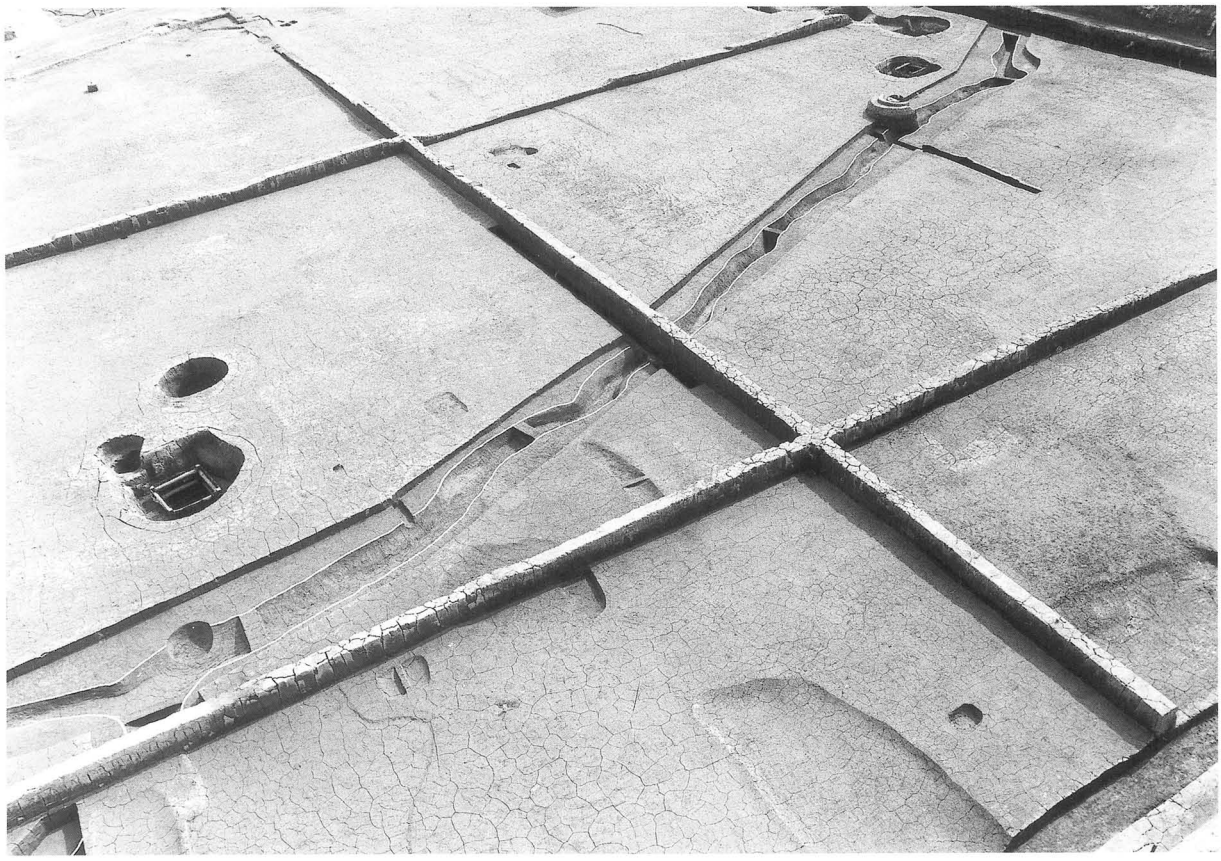


第２面全景（北西から）

図版二



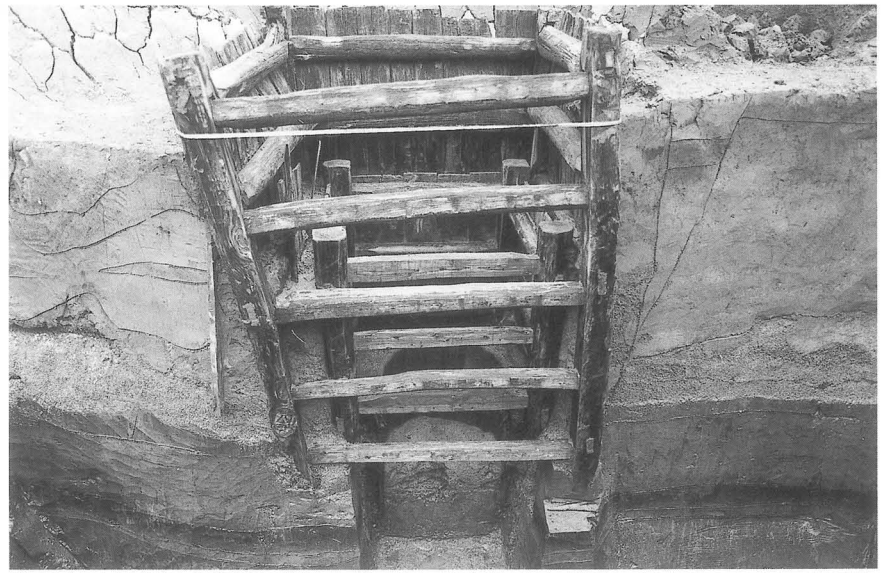
第２面全景（西から）



第３面全景（北西から）

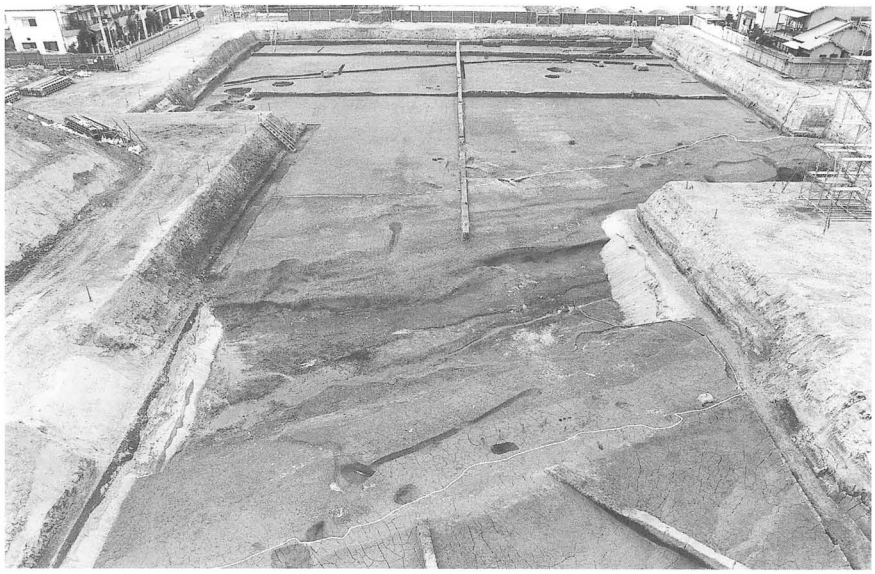
第１面ＳＥ101
検出状況

第１面ＳＥ104
検出状況



第１面ＳＥ104
検出状況

図版四



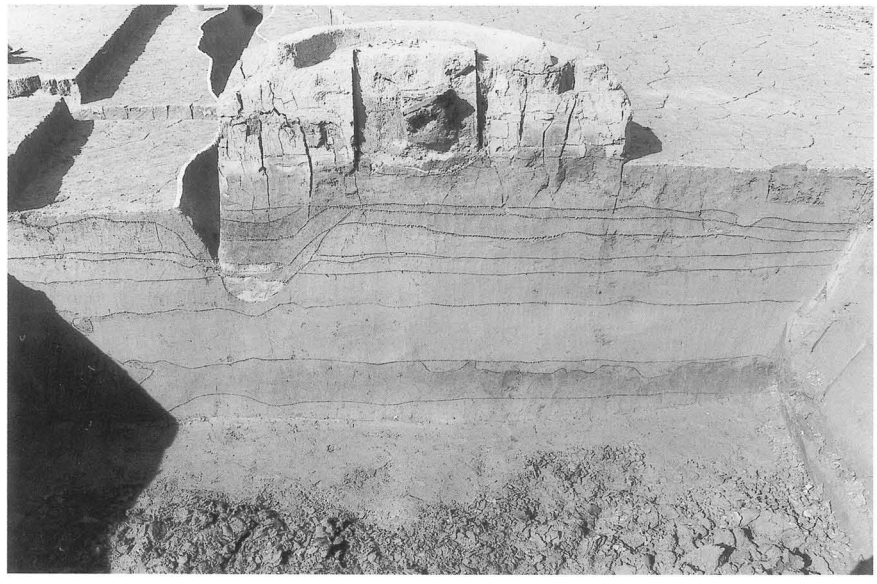
第２面ＮＲ201
検出状況（東から）

第２面ＮＲ201
検出状況（東から）

第２面ＮＲ201
検出状況（西から）

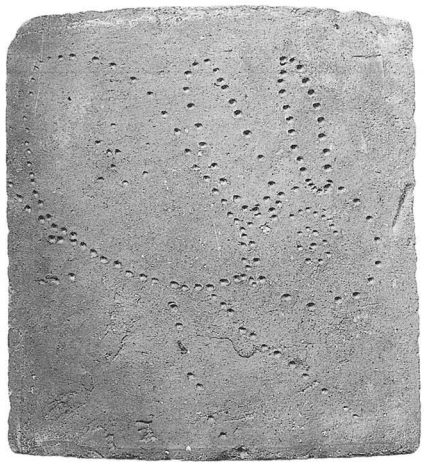
第２面足跡
検出状況（西から）

第３面ＳＤ301
断面（北から）



第３面ＳＤ301～下層
断面（南東から）

図版六



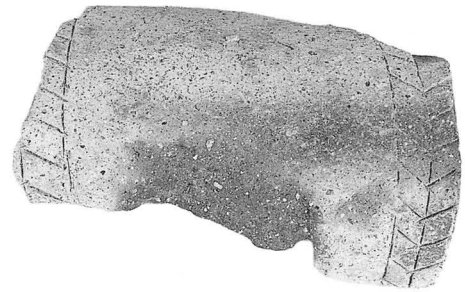
2

5

6

3

10



17

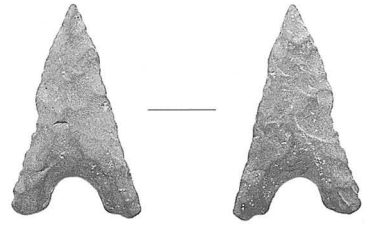
14

18

15

20

19



22

23

ＳＥ104（２・３・５・６）、耕作等溝群（10）、ＮＲ201（14・15・17～20・22・23）出土遺物

16

21

24

31

25

37

34

ＮＲ201（16・21）、ＳＤ301（24）、ＳＷ301（25・31・34・37）出土遺物

16

21

24

31

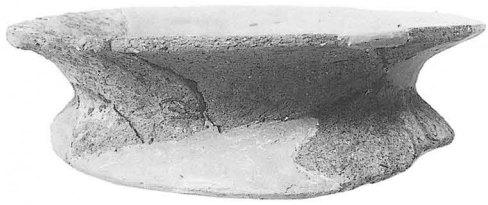
25

37

34

ＮＲ201（16・21）、ＳＤ301（24）、ＳＷ301（25・31・34・37）出土遺物

図版八



33

60

38

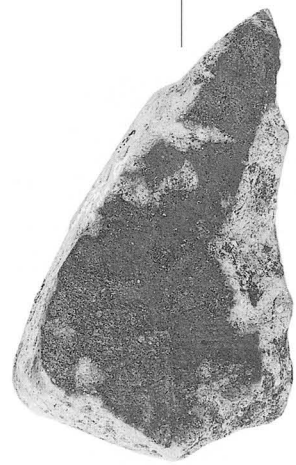
63

50

51

53

52



49

SW301（33・38）、第７層（49）、第８層（50）、金属製品（51～53）、包含層（60・63）出土遺物

Ⅲ　小阪合遺跡第35次調査（ＫＳ96－35）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市青山町四丁目149番地他２筆で実施した八尾市立養護老人ホームおよび(仮称)在宅福祉サービスネットワークセンター建設に伴う発掘調査の報告である。
1．本書で報告する小阪合遺跡第35次調査(ＫＳ96－35)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は平成９年３月17日から６月19日(実働64日)にかけて、成海佳子・樋口(旧姓森本)めぐみを担当者として実施した。調査面積は約1090㎡を測る。
1．現地調査においては、市森千恵子・岸田靖子・中前和代・中村百合・宮崎寛子・村井俊子が参加した。
1．内業整理業務は、整理係の原田昌則・尾崎良史が行い平成20年１月に完了した。
1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－市森千恵子・岸田靖子・沢村妙子・田島和恵・中西明美・西岡千恵子・宮崎寛子、図面トレース－山内千恵子、遺物写真撮影－徳谷尚子、写真図版作成－尾崎・原田が行った。
1．本書で記載した地層名については、「標準土色帖」によるマンセル表記で示されたものと独自の基準により示されたものがある。粒径区分についても、調査担当者により基準が異なるものが混在しているが、あえて統一せず調査時点の表記のまま記載した。
1．本書の執筆・編集は原田が行った。
1．土器形式・編年で参考とした文献については、Ｐ136に提示した。

本　文　目　次

第１章　はじめに……73
第２章　調査概要……74
　第１節　調査の方法と経過……74
　第２節　基本層序……75
　第３節　検出遺構と出土遺物……75
　　１)検出遺構……75
　　２)遺構に伴わない出土遺物……133
第３章　まとめ……137

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺図……73
第２図　地区割図……74
第３図　断面図……76
第４図　第１面平面図……77
第５図　ＳＫ102出土遺物実測図……77
第６図　ＳＫ101平断面図……78
第７図　第２面平面図……79
第８図　第３面平面図……81
第９図　ＳＥ301平断面図……82
第10図　ＳＥ302平断面図……82
第11図　ＳＥ302出土遺物実測図……82
第12図　ＳＥ303平断面図……83
第13図　ＳＥ303出土遺物実測図……83
第14図　ＳＫ301～303、ＳＫ305、ＳＫ308、ＳＫ309、ＳＫ312平断面図……84
第15図　ＳＫ309出土遺物実測図……86
第16図　ＳＫ310平断面図……86
第17図　ＳＫ311平断面図……86
第18図　ＳＫ310、ＳＫ311出土遺物実測図……87
第19図　ＳＫ312出土遺物実測図……87
第20図　ＳＫ319平断面図……88
第21図　ＳＫ319出土遺物実測図……89
第22図　ＳＤ304、ＳＤ305出土遺物実測図……90
第23図　ＳＤ314、ＳＤ315出土遺物実測図……91
第24図　ＳＤ314、ＳＤ315平断面図……92
第25図　ＳＤ317、ＳＤ318出土遺物実測図……93
第26図　ＳＷ301出土遺物実測図……95
第27図　第４面平面図……96
第28図　ＳＩ401平断面図……97
第29図　ＳＩ401出土遺物実測図……97
第30図　ＳＩ402平断面図……98
第31図　ＳＩ402出土遺物実測図……98
第32図　ＳＩ403平断面図……99
第33図　ＳＩ403出土遺物実測図……100
第34図　ＳＢ401平断面図……100
第35図　ＳＢ402平断面図……101
第36図　ＳＢ403平断面図……101
第37図　ＳＥ401平断面図……102
第38図　ＳＥ402平断面図……102
第39図　ＳＥ402出土遺物実測－１……103
第40図　ＳＥ402出土遺物実測－２……104
第41図　ＳＫ402出土遺物実測図……105
第42図　ＳＫ401～404、ＳＫ406、ＳＫ407、ＳＫ409、ＳＫ410平断面図……106
第43図　ＳＫ406、ＳＫ407、ＳＫ412出土遺物実測図……107
第44図　ＳＫ408平断面図……107
第45図　ＳＫ408出土遺物実測図……108
第46図　ＳＫ409出土遺物実測図……108

第47図　ＳＫ411出土遺物実測図……109
第48図　ＳＫ411、ＳＫ412、ＳＫ416～418、ＳＫ420平断面図……110
第49図　ＳＫ421、ＳＫ422平断面図……111
第50図　ＳＫ423～ＳＫ427平断面図……112
第51図　ＳＫ420、ＳＫ421、ＳＫ422、ＳＫ426出土遺物実測図……114
第52図　ＳＫ428出土遺物実測図……115
第53図　ＳＫ429出土遺物実測図……115
第54図　ＳＫ428、ＳＫ429、ＳＫ431～ＳＫ434平断面図……116
第55図　ＳＫ431、ＳＫ432出土遺物実測図……117
第56図　ＳＤ403平断面図……118
第57図　ＳＤ403出土遺物実測図－１……120
第58図　ＳＤ403出土遺物実測図－２……121
第59図　ＳＤ403出土遺物実測図－３……122
第60図　ＳＤ403出土遺物実測図－４……123
第61図　ＳＤ404、ＳＤ413出土遺物実測図……124
第62図　ＳＰ429、ＳＰ457、ＳＰ469、ＳＰ470、ＳＰ4100、ＳＰ4105、ＳＰ4115、ＳＰ4158出土遺物実測図……125
第63図　ＳＰ429、ＳＰ457、ＳＰ469、ＳＰ470、ＳＰ4100、ＳＰ4105、ＳＰ4115、ＳＰ4158平断面図……126
第64図　ＳＷ401出土遺物実測図……131
第65図　ＳＷ402出土遺物実測図……132
第66図　第４層出土遺物実測図……134
第67図　第５層出土遺物実測図……135

写　真　目　次

写真１　ＳＫ101、ＳＫ102検出状況……78
写真２　第３面調査区西部遺構検出状況……93
写真３　ＳＷ301検出状況……95
写真４　ＳＷ401、ＳＷ402検出状況……131
写真５　ＳＷ402検出状況……132

表　目　次

第１表　第２面　溝（ＳＤ）法量表……80
第２表　第３面　土坑（ＳＫ）法量表……88
第３表　第３面　溝（ＳＤ）法量表……93
第４表　第３面　小穴（ＳＰ）法量表……94
第５表　第４面　土坑（ＳＫ）法量表……117
第６表　第４面　溝（ＳＤ）法量表……124
第７表　第４面　小穴（ＳＰ）法量表……127

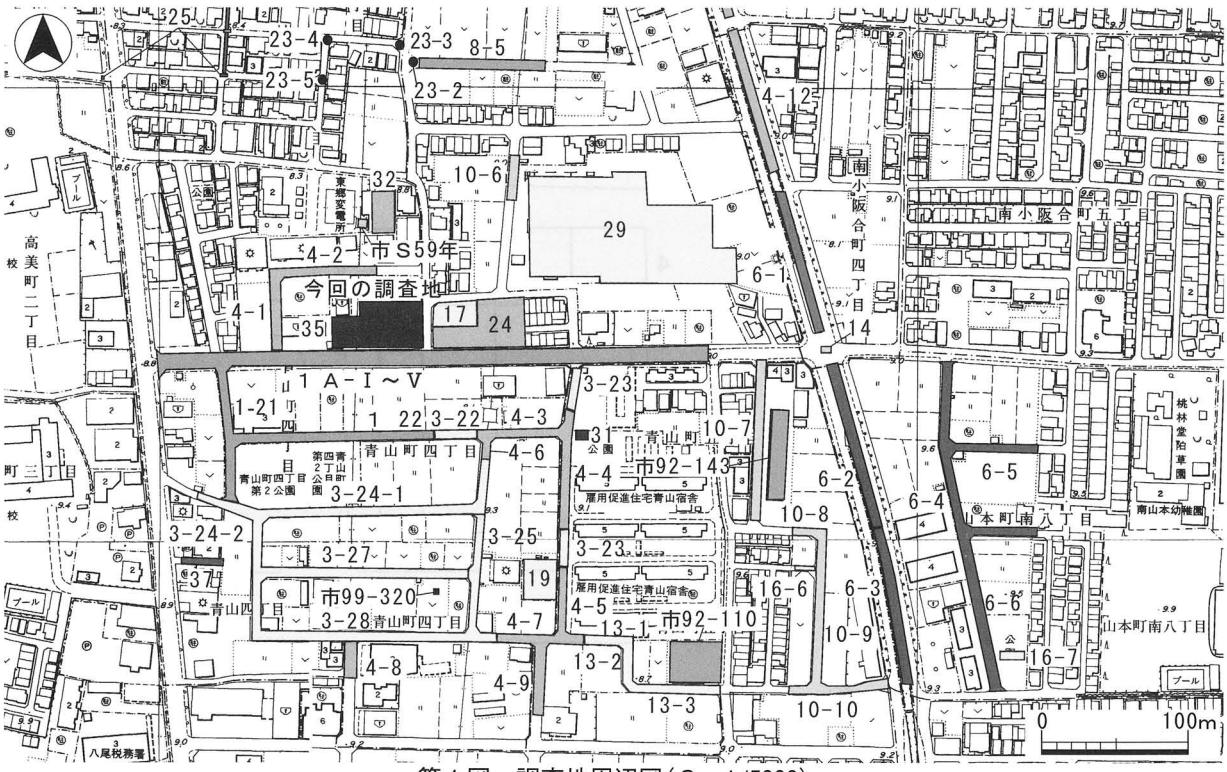
図　版　目　次

図版　一　第１面　調査区北部遺構検出状況
第１面　調査区西部遺構検出状況
図版　二　第２面　調査区北部遺構検出状況
第２面　調査区西部遺構検出状況
図版　三　第３面　遺構検出状況
第３面　遺構検出状況
図版　四　ＳＥ301検出状況
ＳＥ302検出状況
ＳＥ303検出状況
図版　五　ＳＫ309検出状況
ＳＫ310検出状況
ＳＫ311検出状況
図版　六　ＳＫ312検出状況
ＳＫ319検出状況
第３面　南西部遺構検出状況
図版　七　第４面　遺構検出状況
第４面　遺構検出状況
図版　八　ＳＩ401検出状況
ＳＩ402検出状況
図版　九　ＳＩ403検出状況
ＳＢ401検出状況
図版一〇　ＳＢ402検出状況
ＳＢ403検出状況
図版一一　ＳＥ402検出状況
ＳＥ402遺物出土状況
ＳＥ402最下層遺物出土状況
図版一二　ＳＫ402、ＳＫ403検出状況
ＳＫ407検出状況
ＳＫ408検出状況
図版一三　ＳＫ409検出状況
ＳＫ411検出状況
ＳＫ420検出状況
図版一四　ＳＫ421検出状況
ＳＫ426検出状況
ＳＫ428検出状況
図版一五　ＳＫ429検出状況
ＳＫ432検出状況
ＳＫ433検出状況
図版一六　ＳＤ403検出状況
ＳＤ403北部遺物出土状況
調査風景
図版一七　ＳＫ102、ＳＥ302、ＳＥ303、ＳＫ309、ＳＫ310、ＳＫ312、ＳＫ319出土遺物
図版一八　ＳＫ319、ＳＤ314、ＳＷ301出土遺物
図版一九　ＳＷ301、ＳＥ402出土遺物
図版二〇　ＳＥ402、ＳＫ402出土遺物
図版二一　ＳＫ412、ＳＫ408、ＳＫ409出土遺物
図版二二　ＳＫ411、ＳＫ420、ＳＫ421、ＳＫ428出土遺物
図版二三　ＳＫ428、ＳＫ429、ＳＫ431、ＳＤ403出土遺物
図版二四　ＳＤ403出土遺物
図版二五　ＳＤ403出土遺物
図版二六　ＳＤ403、ＳＤ413、ＳＰ457、ＳＷ401出土遺物
図版二七　ＳＷ402、第４層出土遺物
図版二八　第４層、第５層出土遺物

第１章　はじめに

小阪合遺跡は大阪府八尾市のほぼ中央部の若草町、小阪合町一・二丁目、南小阪合町一・二・四丁目、青山町一～五丁目、山本南七・八丁目一帯の東西0.9km、南北0.9kmに広がる弥生時代中期から近世に至る複合遺跡である。地理的には旧大和川水系による河成堆積で形成された河内平野南東部に位置している。平野内には、現在の八尾市南東部にあたる二俣地区を基点として旧大和川の主流であった長瀬川から玉串川が東に分流し北西方向に流下していた。小阪合遺跡はこの二大河川に挟まれて、南北方向に展開する低位沖積地上に位置し、さらに遺跡内の東部では中河川である楠根川が南東から北西方向に流下しているため、現地表面の標高は北部に行くに従って低く、南部で９ｍ前後、北部で８ｍ前後を測る。小阪合遺跡の成立を見たこの低位沖積地は、水稲耕作を生活基盤とする弥生時代前期以降、比較的安定した地理的条件を背景として数多くの遺跡が密集する形で成立している。当遺跡周辺に限っても、北西に東郷遺跡、西に成法寺遺跡、南西に矢作遺跡、南に中田遺跡が隣接している。

小阪合遺跡は昭和30（1955）年に若草町で行われた、大阪府営住宅供給公社の建設に際して、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器等の土器が多量に出土したことに端緒を発するものである。考古学的な調査は、昭和57～63（1982～1988）年に実施された南小阪合地区を中心とした区画整理事業に伴う発掘調査が嚆矢である。これらの調査では、弥生時代中期から近世に至る遺構・遺物が検出され、当遺跡が複合遺跡であることが確認された。なかでも、古墳時代初頭から前期における集落の広範囲な分布や数多くの他地域から搬入された外来系土器の存在は、当時の地域間交流の一端を知るうえで貴重な資料を提供する結果となった。



第１図　調査地周辺図（Ｓ＝1/5000）

今回、第35次調査を実施した青山町四丁目一帯は、小阪合遺跡範囲の中南部にあたる。調査地点周辺での既往調査は、南部では昭和57年に第１次調査(ＫＳ82－１)、東部では昭和63年に第17次調査(ＫＳ88－17)が実施されており、古墳時代前期前半から奈良時代に比定される遺構・遺物が検出されている。なお、小阪合遺跡の地理・歴史的環境、既往調査については本書Ⅰの２章を参照されたい。

第２章　調査概要

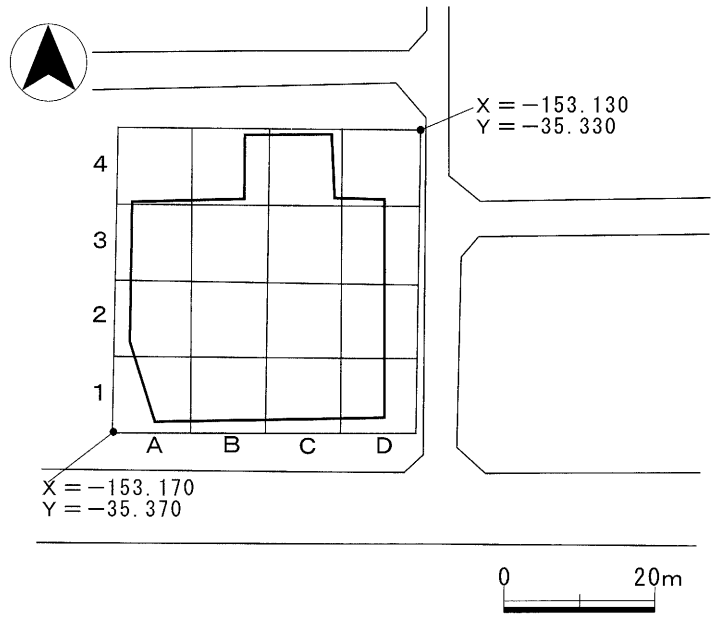
第１節　調査の方法と経過

今回の発掘調査は、八尾市立養護老人ホームおよび在宅福祉サービスネットワークセンター建設に先立って実施したもので、当調査研究会が小阪合遺跡内で行った第35次調査(ＫＳ96－35)にあたる。調査地の形状は凸字形で、東西34m、南北29mを測る調査区の北部に東西12m、南北8.7mの突出する部分があり、調査面積は約1090㎡を測る。

調査方法としては、現地表(T.P.＋9.6m)下1.3mまで機械掘削を行い、以下、現地表下2.1mまでを人力掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査区内の地区割りについては、調査地の南西隅の国土座標第Ⅵ系〔日本測地系〕値(Ｘ＝－153.170.000・Ｙ＝－35.370. 000)から10m単位に区画した。地区の呼称方法は、南北方向が算用数字(南から１～４)、東西方向がアルファベット(西からＡ～Ｄ)で示し、１Ａ～４Ｄ地区と呼称した。地点の表記については、Ｘ・Ｙ軸交点の数値で示した。調査面の呼称については、人力による調査で検出された面を上部より「第１面」とした。遺構名は、遺構略号の後に面番号を付与し、３～４桁の遺構番号と合わせて表記した〔凡例ＳＤ101〕。

調査地の全域に亘り旧建物の基礎部分が深くまで達しており、削平を受けた部分が多くを占めていた。そのため、調査では４面(第１～４面)に亘る調査を実施したが、第１～３面についてはその影響で遺構の平面的な関係を捉えるのが困難であった。調査の結果、弥生時代後期から平安時代に至る遺構・遺物が検出されている。出土遺物は弥生時代後期から平安時代後期に比定される土器類・石器類・金属製品等が出土しており、総量はコンテナ50箱を数える。



第２図　地区割図(Ｓ＝1/1000)

第２節　基本層序

旧建物の基礎構築時による削平が現地表下1.5m前後付近に存在する第５層（第３面検出面）付近に及んでいたため、第１～４層についての平面的な広がりは西部の一部で確認できたのみである。ここでは、壁面部分で普遍的に認められた８層（第０～７層）を摘出して基本層序とした。

第０層：客土。層厚65～90cm。上面の標高はT.P.＋9.5m前後。

第１層：5G2/1緑黒色細礫混砂質土。旧作土層。層厚10～20cm。

第２層：7.5GY4/1暗緑灰色細礫混シルト。層厚10～50cm。

第３層：2.5GY5/1オリーブ灰色細礫混シルト。層厚10～40cm。北壁では島畑構築により削平を受ける部分がある。第１面検出面。

第４層：10YR4/3にぶい黄褐色砂質土。やや粘性を持つ。層厚５～35cm。第２面検出面。

第５層：5Y4/2灰オリーブ色粘質土。マンガンが斑点状に付着している。層厚10～30cm。第３面検出面。

第６層：10YR4/1褐灰色シルト混粘質土。層厚20～30cm。第４面検出面。

第７層：2.5Y4/2暗灰黄色シルト。層厚20cm以上。

第３節　検出遺構と出土遺物

１）検出遺構

４面（第１～４面）に亘る調査を実施したが、第１～３面については大半の遺構が削平を受けており平面的な広がりについては不明な点が多い。調査では、弥生時代後期から平安時代後期に至る遺構・遺物が検出されている。以下、各検出面において遺物が出土した遺構を中心に記述しそれ以外のものについては、一覧表で示した。

第１面（第４図、図版一）

第３層上面（T.P.＋8.3～8.6m）を調査対象面とした。検出した遺構には土坑２基（ＳＫ101・102）、溝２条（ＳＤ101・102）、小穴１個（ＳＰ101）がある。

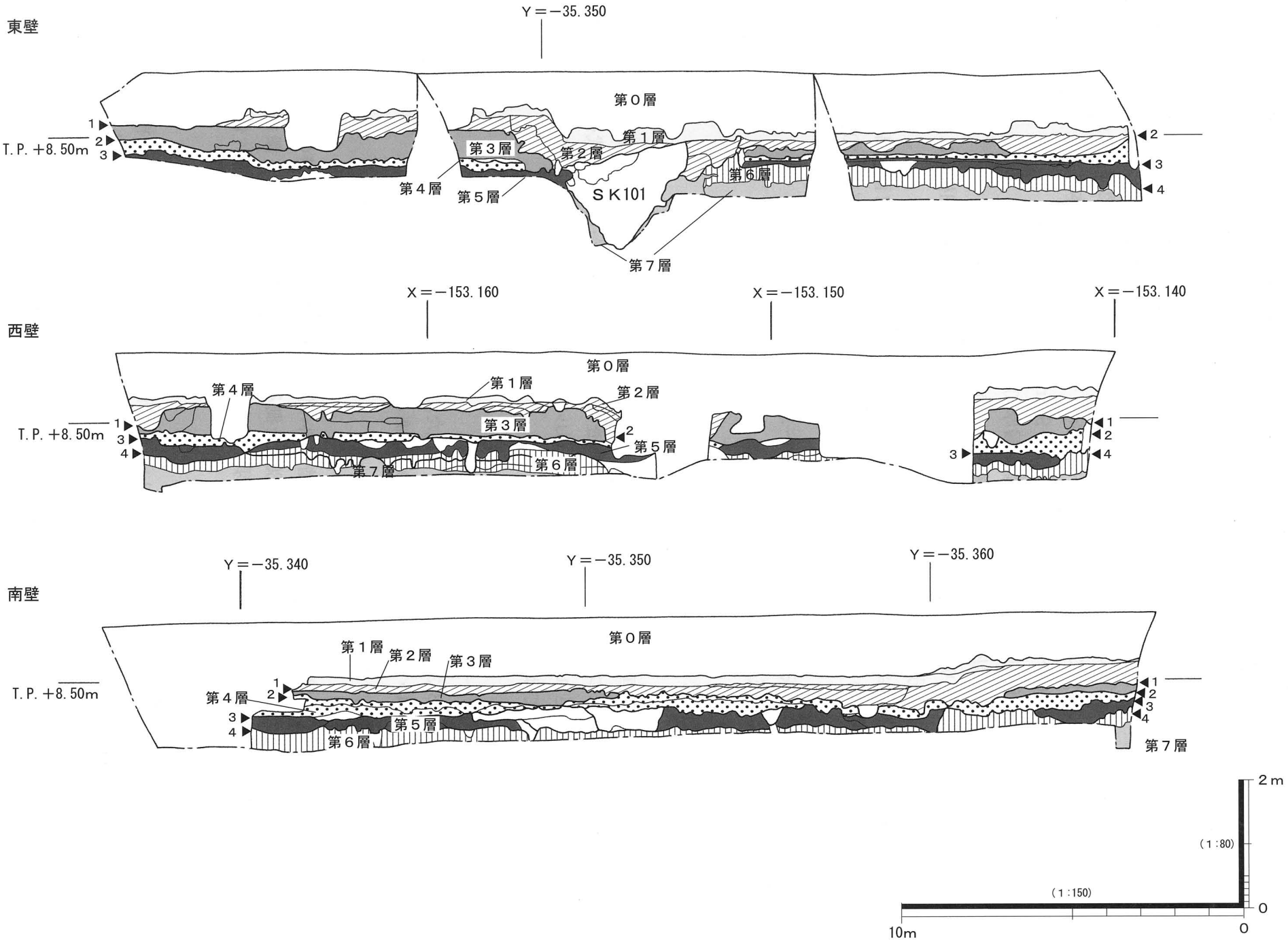
土坑（ＳＫ）

ＳＫ101（第６図）

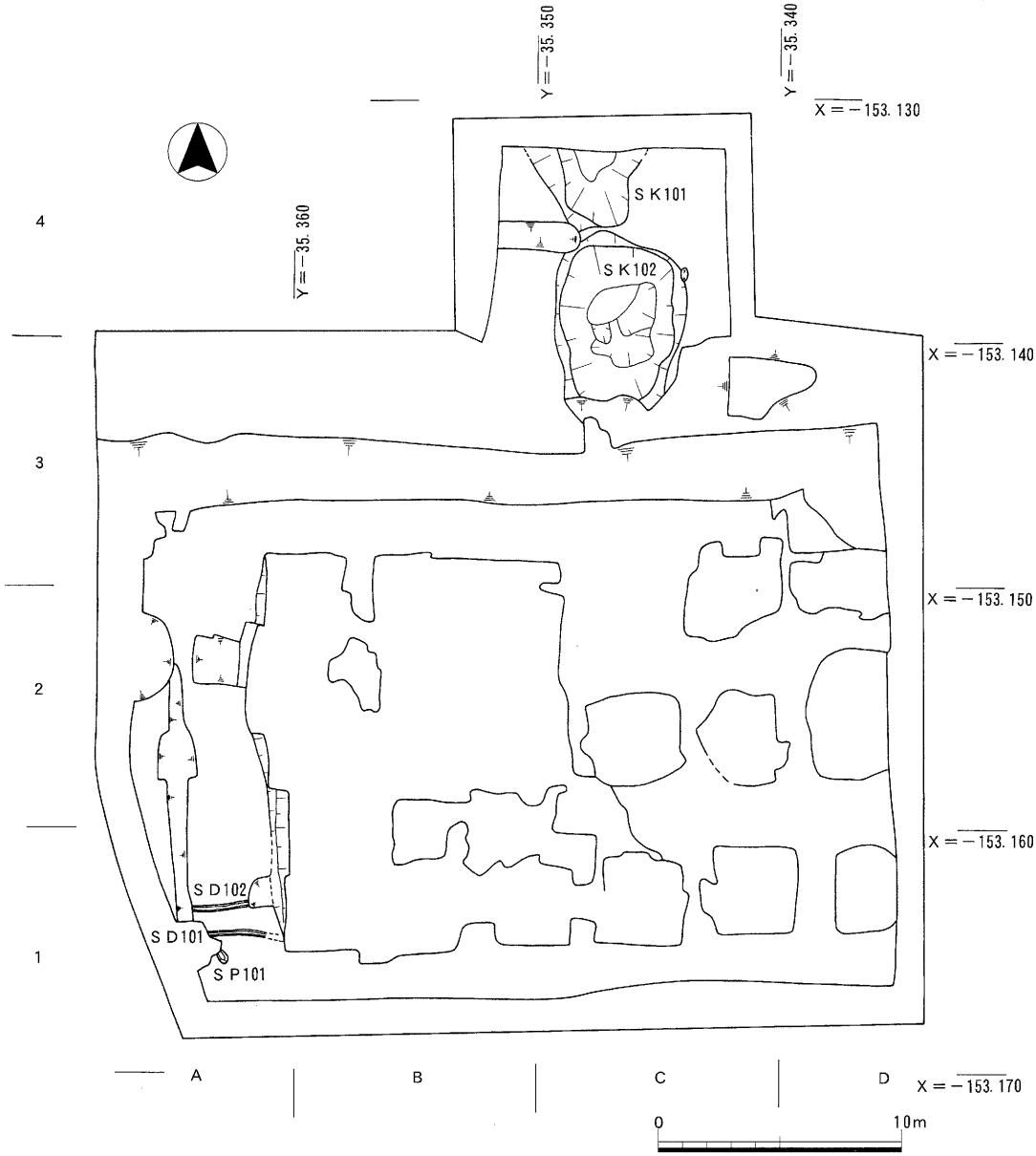
調査区北部の４Ｃ地区で検出した。北部が調査区外の他、上部が近世の島畑構築時の削平を受けている。検出部分で東西幅3.74m、南北幅3.30mを測る。掘方の形状は摺鉢状で、深さ1.45mを測る。埋土は３層から成る。遺物は土師器・須恵器片が少量出土しているが全て細片化しており、帰属時期を明確にし得たものは無い。

ＳＫ102（第５図、図版一七）

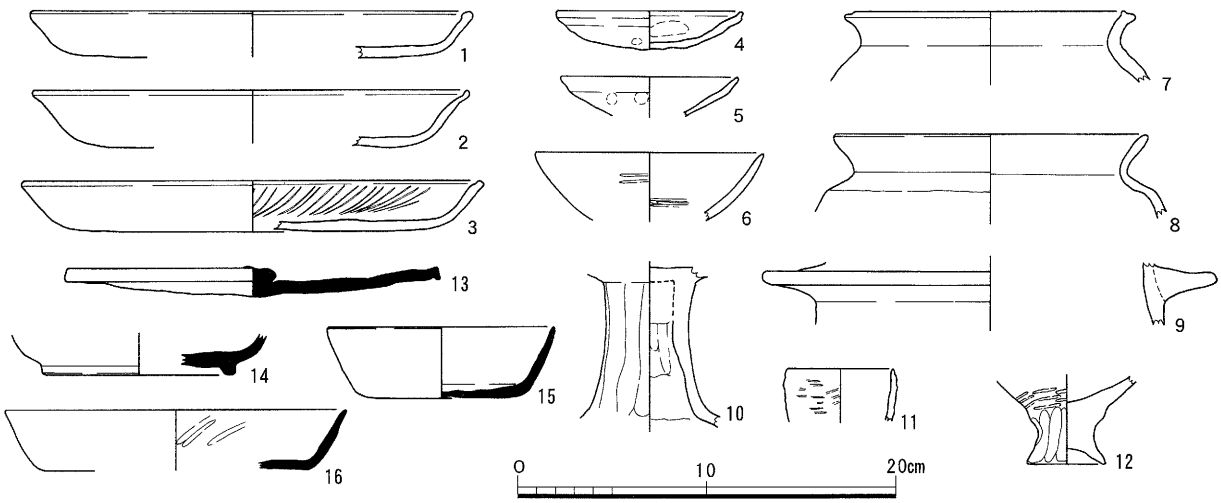
ＳＫ101の南に隣接している。南北方向に長い不整方形で南部は削平を受けている。検出部分で東西幅5.35m、南北幅7.00m、深さ1.14mを測る。掘方は三段で、断面形状は摺鉢状を呈する。遺物は奈良時代中期から平安時代後半の土師器・須恵器類がコンテナ約1/2程度出土している。埋土は褐灰色砂質土を主体としている。16点（１～16）を図化した。１～12は土師器である。１～３は皿Ａで、３は体部内面に放射状ヘラミガキが施されている。４・５は小皿で、４は「て」の字状口縁を持つ。６は椀Ａ。７・８は甕Ａで共に口縁部から体部上半の細片である。９は羽釜の鍔。



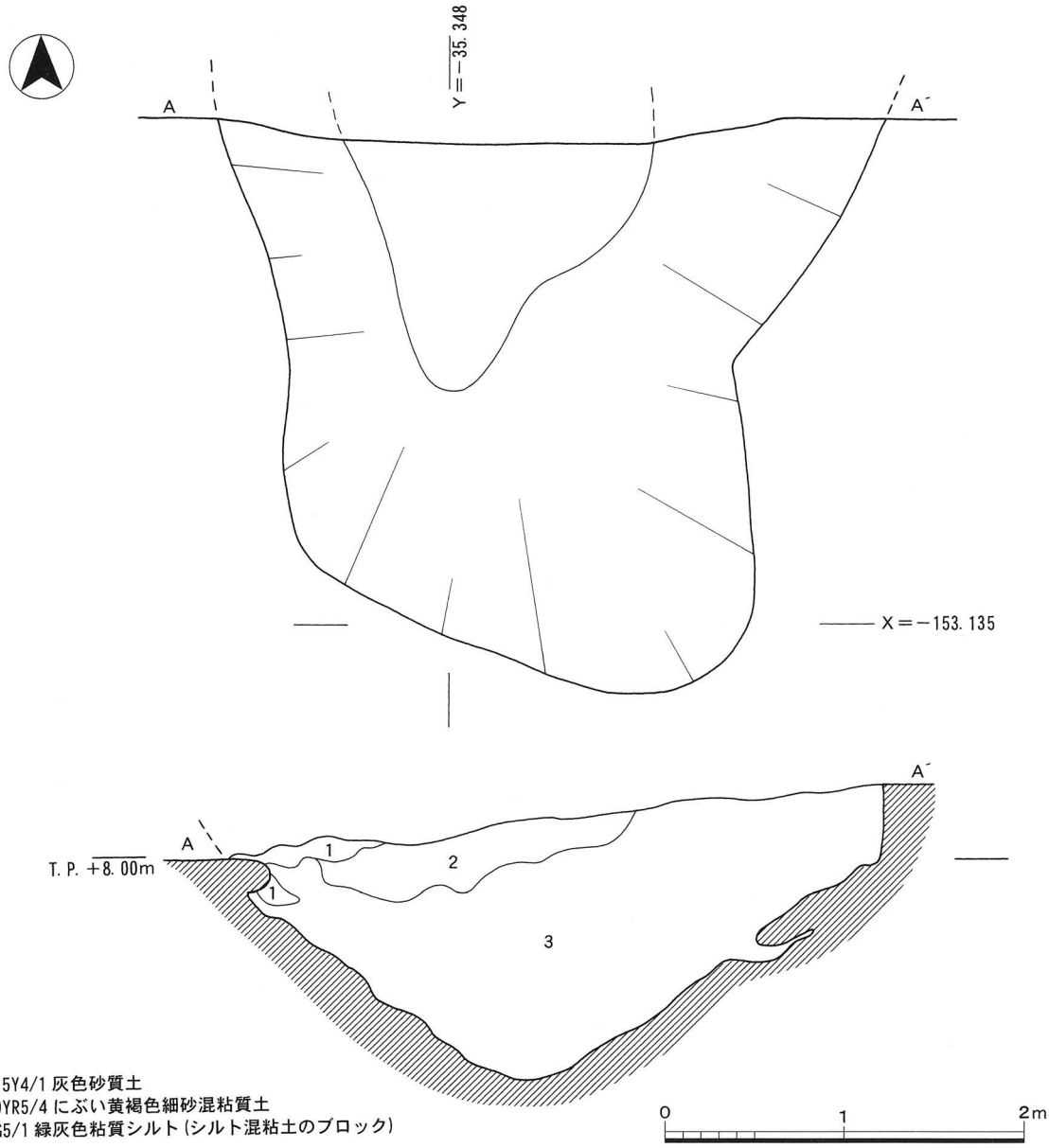
第３図　断面図(水平1/150、垂直1/80)



第４図　第１面平面図（Ｓ＝1/300）



第５図　ＳＫ102出土遺物実測図



第６図　ＳＫ101平断面図（Ｓ＝1/40）

10は高杯Ａの脚部片である。脚部外面は９面の面取りが行われている。11・12は製塩土器である。11が広瀬和雄氏編年（広瀬1994）の丸底Ⅲ式（８世紀中葉から９世紀前半）、12が脚台Ⅲ式（古墳時代前期中葉）にあたるため、12については混入品と推定される。13～16は須恵器である。13は杯Ｂ蓋である。擬宝珠部分が内側に沈む歪な形態である。口径19.5cmを測る。14～16は杯で、14が杯Ｂ、15･16が杯Ａである。奈良時代中期と平安時代後期（12世紀初頭）の遺物が混在しているが、遺構構築面から勘案して遺構の帰属時期は平安時代後期（12世紀初頭）が推定される。

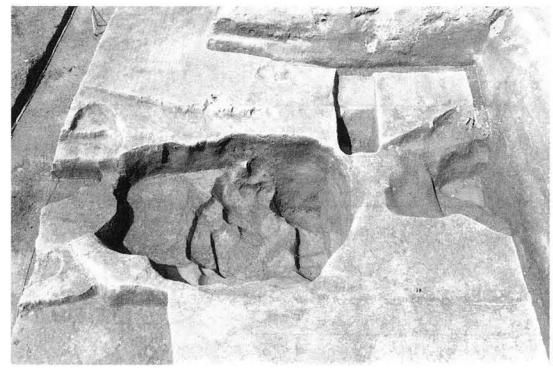


写真１　ＳＫ101（右）、ＳＫ102（左）検出状況（南から）

溝（ＳＤ）

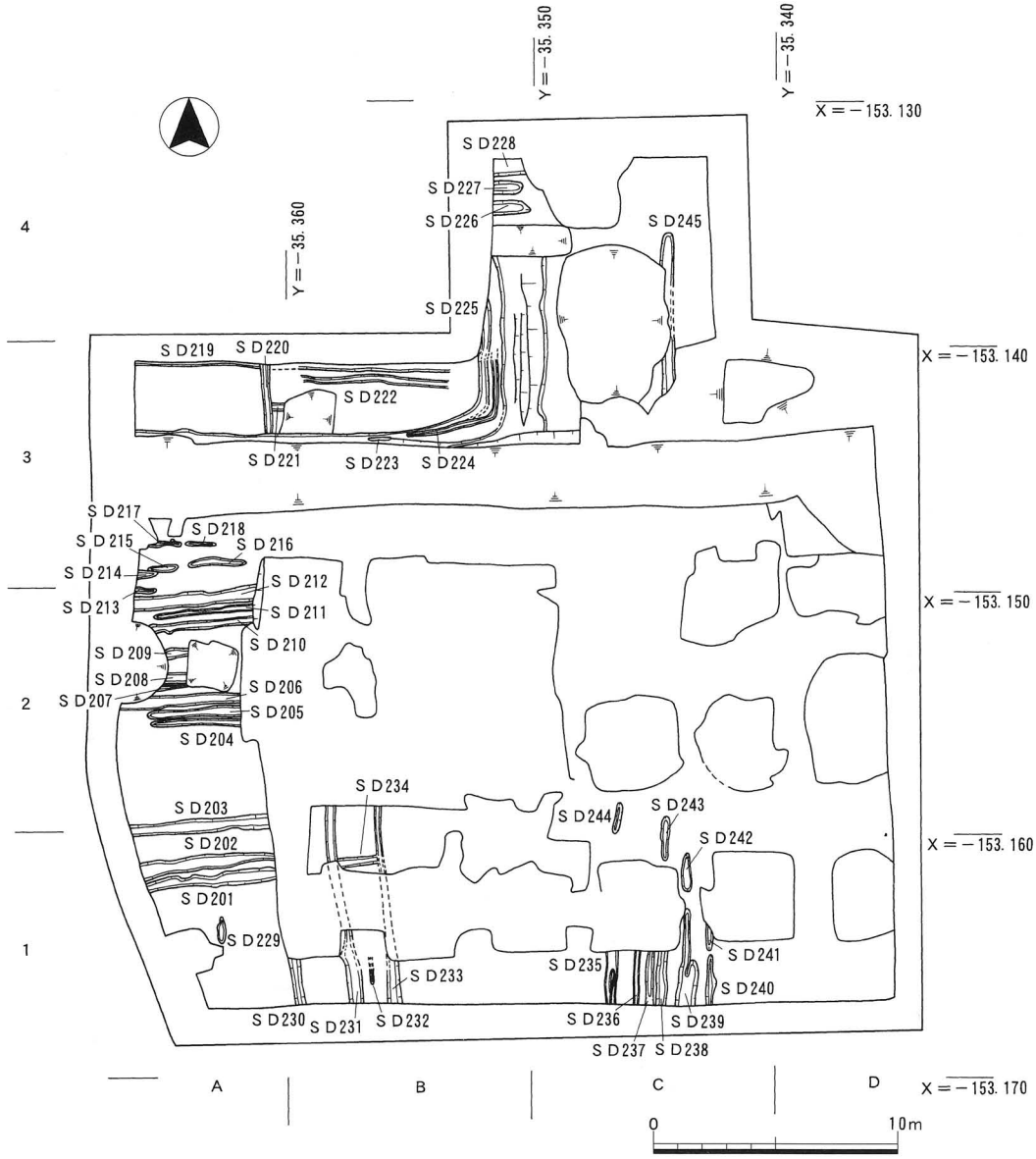
ＳＤ101・ＳＤ102

共に調査区南西隅の１Ａ地区で検出した。東西方向に伸びるもので、西端は調査区外、東端は撹乱により削平を受けている。検出部分でＳＤ101が検出長2.37m、幅0.20m、深さ0.05m、ＳＤ102が検出長2.40m、幅0.24m、深さ0.14mを測る。埋土は2.5GY5/1オリーブ灰色砂質土の単一層である。遺物は出土していない。性格的には、農耕に関連した小溝が考えられる。

小穴（ＳＰ）

ＳＰ101

調査区南西隅の１Ａ地区で検出した。円形を呈するもので、東西径0.38m、南北径0.46m、深さ0.03mを測る。埋土は2.5GY5/1オリーブ灰色砂質土の単一層である。遺物は土師器の細片が極少量出土しているが、帰属時期を明確にし得たものはない。



第７図　第２面平面図（Ｓ＝1/300）

第２面(第７図、図版二)

第４層上面(T.P.+8.1～8.4m)を調査対象面とした。第１面と同様、既存建物の基礎部分による撹乱により大半の遺構が削平を受けている。撹乱がおよんでいない調査区西部を中心に、平安時代後期に比定される溝45条(ＳＤ201～245)を検出した。

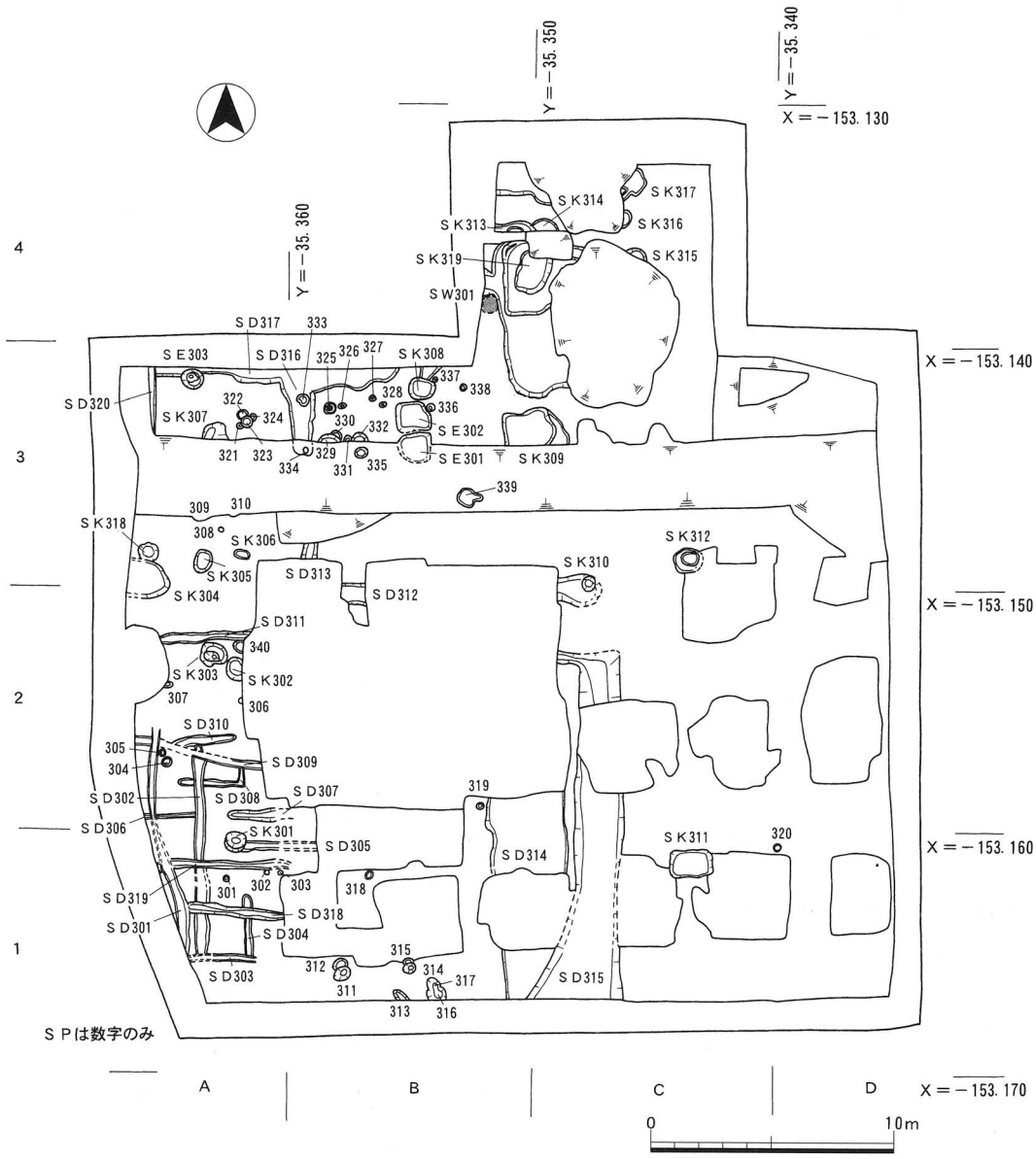
溝(ＳＤ)

総数で溝45条(ＳＤ201～245)を検出した。東西および南北方向に伸びる小溝で、農耕に関連した鋤溝と推定される。一部を除けば調査地北西部の３・４Ｂ地区と西部の１～３Ａ地区では東西方向、南部の１Ｂ・Ｃ地区では南北に伸びるものが主体を占める。そのうち土器が出土したのは、ＳＤ219・220・222・231・233である。奈良時代を中心とする土師器・須恵器の細片が極少量出土している。遺構の帰属時期については、第３面で検出した遺構から勘案して平安時代後半(11世紀初頭)以降のものと推定される。以下、法量等の詳細は第１表に示した。

第１表　第２面　溝(ＳＤ)法量表(単位m)

遺構名	地　区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋土	出土遺物
ＳＤ201	１Ａ	5.30	0.60	0.04	10Y4/2灰黄褐色砂質土	
ＳＤ202	〃	5.45	0.80	0.10	〃	
ＳＤ203	１・２Ａ	5.70	0.60	0.05	〃	
ＳＤ204	２Ａ	3.75	0.37	0.05	〃	
ＳＤ205	〃	3.80	0.45	0.05	〃	
ＳＤ206	〃	5.00	0.55	0.05	10YR5/3にぶい黄褐色砂質土	
ＳＤ207	〃	1.25	0.33	0.03		
ＳＤ208	〃	0.95	0.40	0.06		
ＳＤ209	〃	0.85	0.40	0.07		
ＳＤ210	〃	4.20	0.38	0.09		
ＳＤ211	〃	3.95	0.25	0.03		
ＳＤ212	〃	5.05	0.65	0.05	10YR5/3にぶい黄褐色砂質土	
ＳＤ213	〃	0.90	0.22	0.03	10YR2/2黒褐色砂質土	
ＳＤ214	３Ａ	0.85	0.40	0.06	〃	
ＳＤ215	〃	1.18	0.30	0.05	〃	
ＳＤ216	〃	2.33	0.32	0.05	〃	
ＳＤ217	〃	1.35	0.30	0.03	〃	
ＳＤ218	〃	1.33	0.19	0.02	〃	
ＳＤ219	３Ａ・Ｂ	12.80	0.35	0.12	7.5YR4/1褐灰色砂質土	土師器・須恵器
ＳＤ220	３Ａ	2.80	0.30	0.06	7.5YR5/4にぶい褐色砂質土	土師器・須恵器
ＳＤ221	〃	0.55	0.25	0.05	〃	
ＳＤ222	３Ｂ	6.10	0.35	0.06	〃	土師器・須恵器
ＳＤ223	〃	0.95	0.10	0.05	7.5YR4/1褐灰色砂質土	
ＳＤ224	〃	5.70	0.26	0.09	〃	
ＳＤ225	３・４Ｂ	4.20	0.40	0.02	〃	
ＳＤ226	４Ｂ	1.60	0.55	0.04	〃	
ＳＤ227	〃	0.70	0.56	0.05	〃	
ＳＤ228	〃	1.38	0.70	0.05	〃	
ＳＤ229	１Ａ	1.10	0.35	0.10	〃	
ＳＤ230	１Ａ・Ｂ	1.90	0.28	0.04	〃	
ＳＤ231	１・２Ｂ	8.20	0.55	0.08	〃	土師器
ＳＤ232	１Ｂ	0.66	0.14	0.04	〃	

遺構名	地　区	全長（検出長）	幅（最大）	深さ	埋土	出土遺物
ＳＤ233	1・2Ｂ	8.20	0.56	0.08	7.5YR4/1褐灰色砂質土	土師器
ＳＤ234	1Ｂ	1.67	0.28	0.07	〃	
ＳＤ235	1Ｃ	3.05	0.70	0.05	10YR4/3にぶい黄褐色	
ＳＤ236	〃	3.18	0.33	0.02	〃	
ＳＤ237	〃	3.12	0.44	0.06	〃	
ＳＤ238	〃	3.16	0.63	0.02	7.5YR4/1褐灰色砂質土	
ＳＤ239	〃	5.66	1.10	0.04	〃	
ＳＤ240	〃	2.90	0.60	0.04	〃	
ＳＤ241	〃	1.34	0.34	0.02	〃	
ＳＤ242	〃	2.30	0.51	0.03	〃	
ＳＤ243	1・2Ｃ	2.55	0.50	0.02	〃	
ＳＤ244	2Ｃ	1.70	0.31	0.04	〃	
ＳＤ245	3・4Ｃ	6.55	0.55	0.05	〃	



第８図　第３面平面図（Ｓ＝1/300）

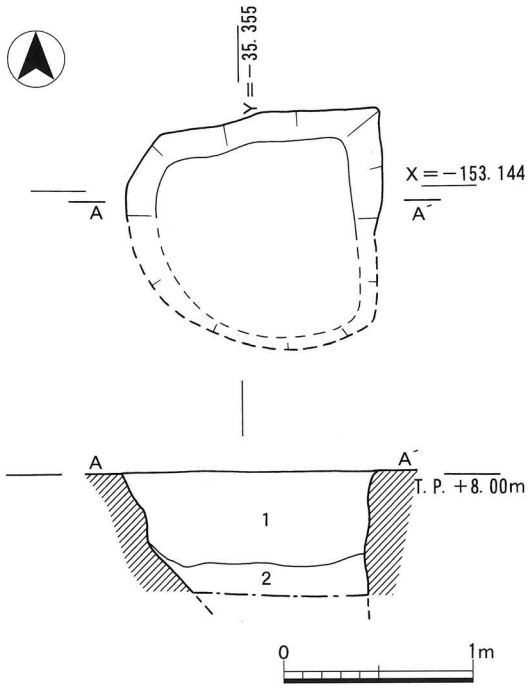
第３面(第８図、図版三)

第５層上面(T.P.+7.9～8.2m)を調査対象面とした。検出した遺構には、古墳時代前期後半から平安時代後半に至る井戸３基(ＳＥ301～303)、土坑19基(ＳＫ301～319)、溝18条(ＳＤ301～318)、小穴39個(ＳＰ301～339)がある。以下、遺物が出土した遺構を中心に記述し、その他は遺構毎に一覧表で示した。

井戸(ＳＥ)

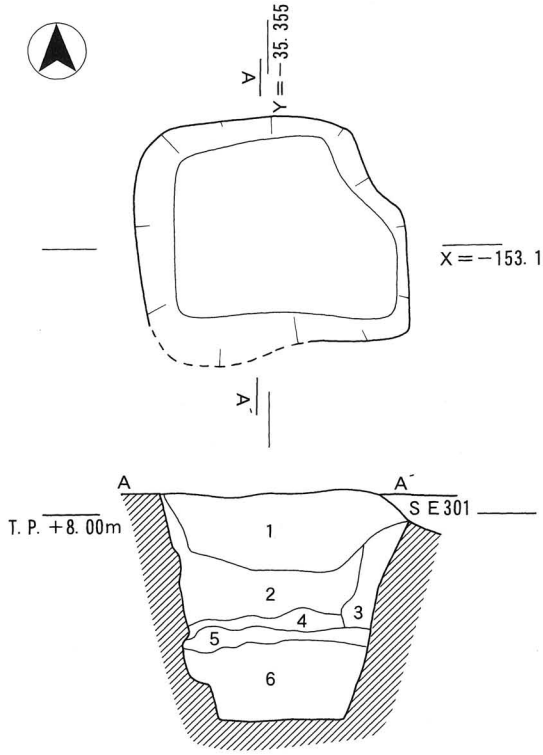
ＳＥ301（第９図、図版四)

３Ｂ地区で検出した。ＳＥ302の南に隣接している。北部を残して大半が側溝掘削に削平を受けており全容は不明である。検出部分で東西幅1.35m、南北幅1.35m以上を測る。深さについては0.65m迄を確認している。埋土については､確認した部分で２層を確認している。遺物は土師器、



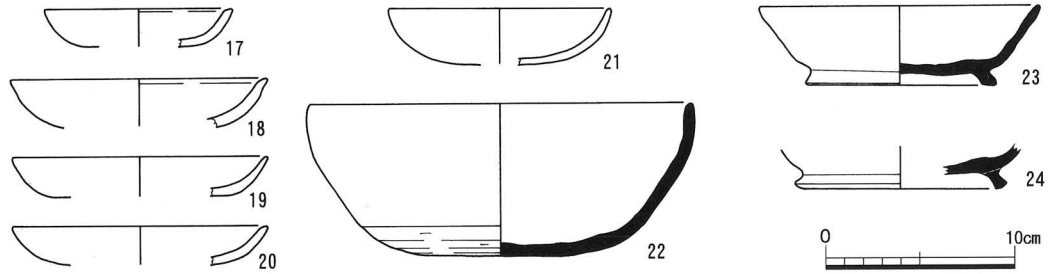
1　5Y3/1 オリーブ黒色粘土
2　5Y3/1 オリーブ黒色粗粒砂混粘土

第９図　ＳＥ301平断面図(Ｓ＝1/40)



1　10Y6/1 灰色砂質土
2　10YR5/1 褐灰色砂質土
3　7.5Y5/1 灰色砂質土
4　10YR6/2 灰黄褐色砂質土
5　5Y5/1 灰色粘質土
6　N5/0 灰色粘土

第10図　ＳＥ302平断面図(Ｓ＝1/40)



第11図　ＳＥ302出土遺物実測図

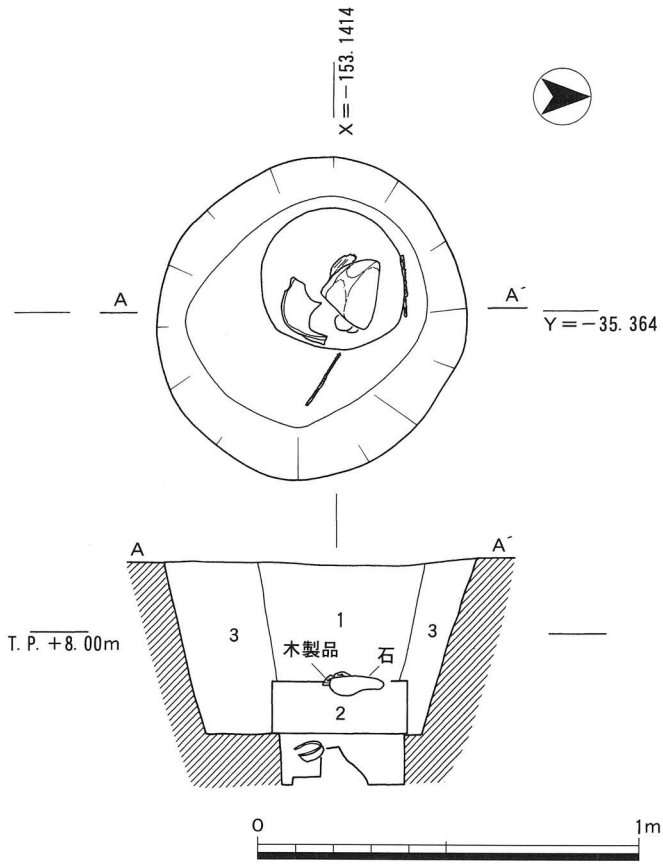
須恵器の破片が極少量出土しているが図化し得たものは無い。出土土器の特徴から見て奈良時代前半の帰属時期が推定される。

ＳＥ302（第10・11図、図版四・一七）

３Ｂ地区で検出した。素掘りの井戸で、南西端部分がＳＥ301に切られている。掘方の平面形状は不整方形を呈するもので、東西幅1.42m、南北幅1.3m、深さ1.2mを測る。底部はほぼ水平で、掘方の斜面は一部を除き上外方にほぼ直線的に伸びる。埋土は６層（１～６層）が堆積している。遺物は最下部の６層を中心に奈良時代前期を中心とする土師器、須恵器等の細片が少量出土している。８点(17～24)を図化した。17～21は土師器である。17・18は口縁端部が内傾するもので杯Ｃに分類される。19・20は皿Ａ。21は椀Ａである。22～24は須恵器である。22は大形の鉢Ｅである。復元口径20.2cmを測る。23・24は杯Ｂである。平城宮Ⅱに比定される。遺構の帰属時期は奈良時代前半である。

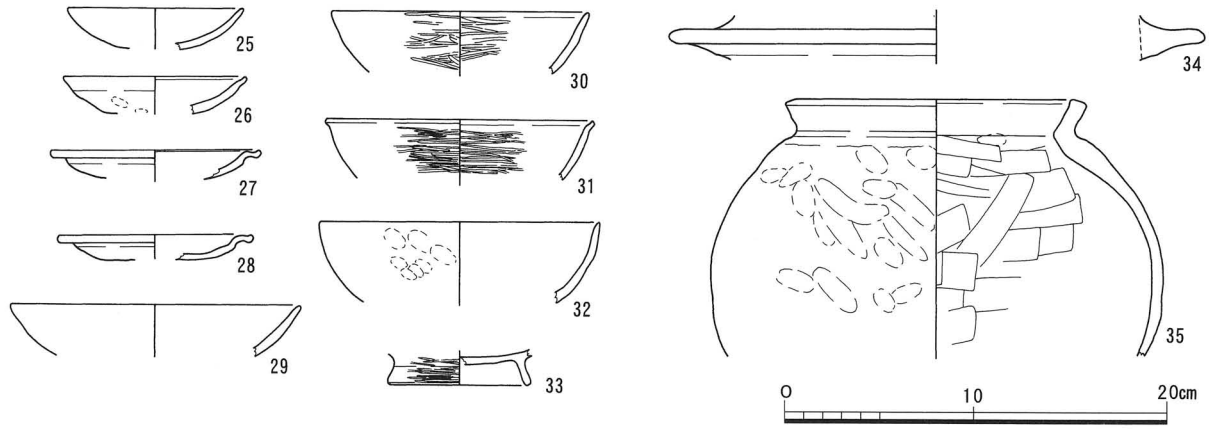
ＳＥ303（第12･13図、図版四･一七）

３Ａ地区で検出した。円形を呈する曲物積み上げ井戸で、東西径0.85m、南北径0.82m、深さ0.60mを測る。井戸側は掘方内の北西部に設けられており、調査時点で最下部から二段の曲物が残存していた。埋土は井戸側内が２層（１・２層）、掘方内が１層（３層）である。遺物は井戸側内から平安時代後半に比定される土師器、黒色土器、銭貨、石材等が多数出土している。なお、井戸側内から出土した石材については、井戸廃絶時期の祭祀に伴う可能性

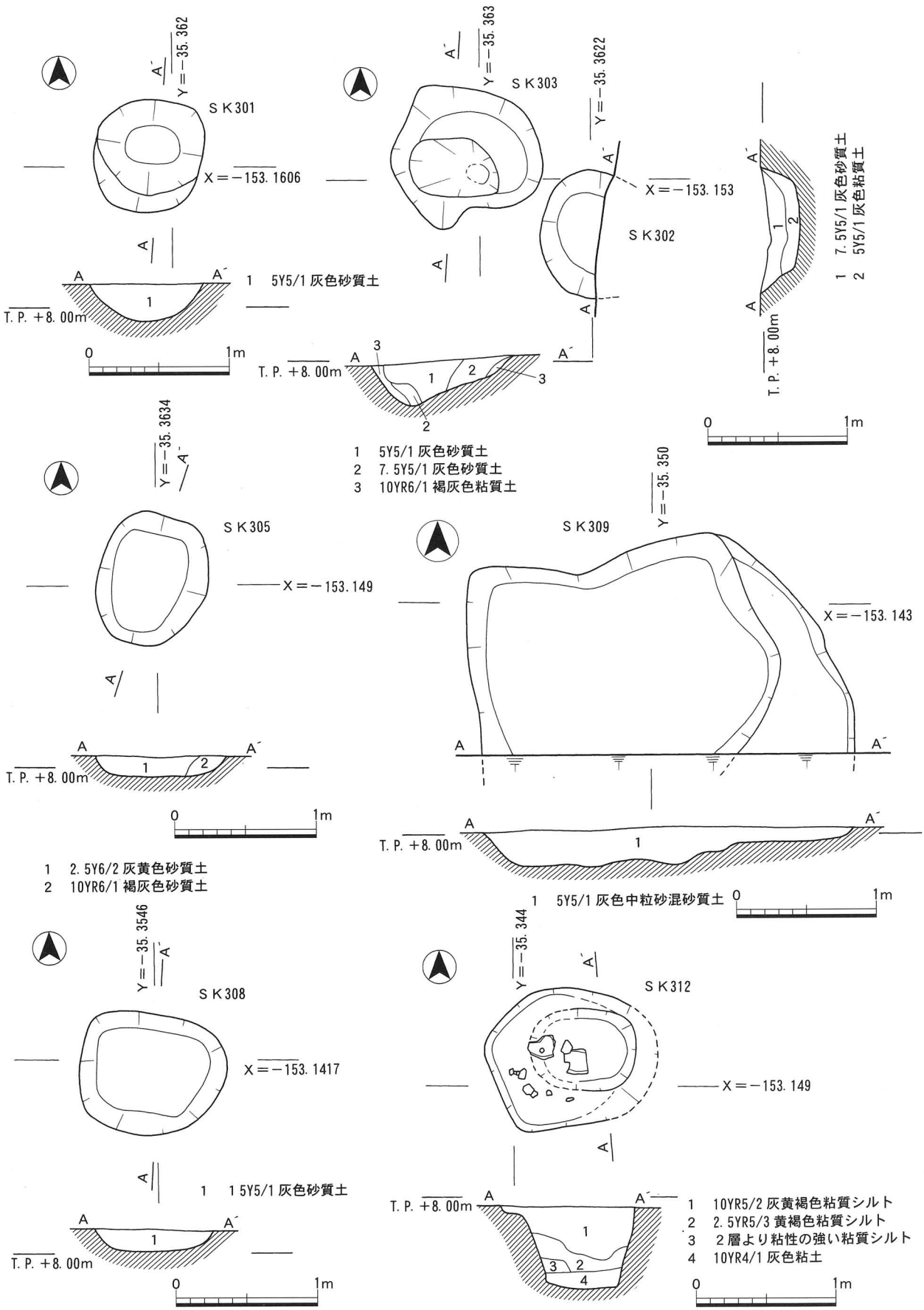


1　7.5Y4/1 灰色中～細粒砂混砂質土
2　10Y3/1 オリーブ黒色細粒砂混粘土
3　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細粒砂～小礫混粘質土

第12図　ＳＥ303平断面図（Ｓ＝1/20）



第13図　ＳＥ303出土遺物実測図



第14図　ＳＫ301～303、ＳＫ305、ＳＫ308、ＳＫ309、ＳＫ312平断面図（Ｓ＝1/40）

がある。11点(25～35)を図化した。25～28は土師器小皿である。27・28が「て」の字状口縁を持つ。29は土師器椀。30・31・33が黒色土器椀で30がＡ類、31がＢ類である。32は不明。33は高台部でＢ類椀である。34は土師器羽釜の鍔部分である。35は甕である。そのほか、径２cmを測る小形銭の銭貨が出土しているが、風化が進行しており銭名の判読は出来ない。出土遺物の時期は、佐藤編年(佐藤1992)の平安時代Ⅲ期古(11世紀前半)に比定される。

土坑(ＳＫ)

ＳＫ301（第14図）

１Ａ地区で検出した。ＳＤ305を切っている。不整円形を呈するもので、東西径0.77m、南北径0.8m、深さ0.27mを測る。埋土は5Y5/1灰色砂質土の単一層である。遺物は土師器の細片が極少量出土しているが、図化し得たものは無く、遺構の帰属時期は判然としない。

ＳＫ302（第14図）

２Ａ地区で検出した。東部は建物の基礎構築時に削平を受けている。検出部分で東西幅0.43m、南北幅0.95m、深さ0.24mを測る。埋土は砂質土を主体とする２層から成る。遺物は土師器・須恵器の細片が極少量出土しているが、図化し得たものは無く、遺構の帰属時期は判然としない。

ＳＫ303（第14図）

ＳＫ302の西に隣接している。不整形を呈するもので、東西幅1.1m、南北幅1.04mを測る。掘方は二段で南東部が深くなっておりその部分の深さは0.3mを測る。埋土は３層からなる。遺物は須恵器の細片が極少量出土したのみで、遺構の帰属時期は判然としない。

ＳＫ305（第14図）

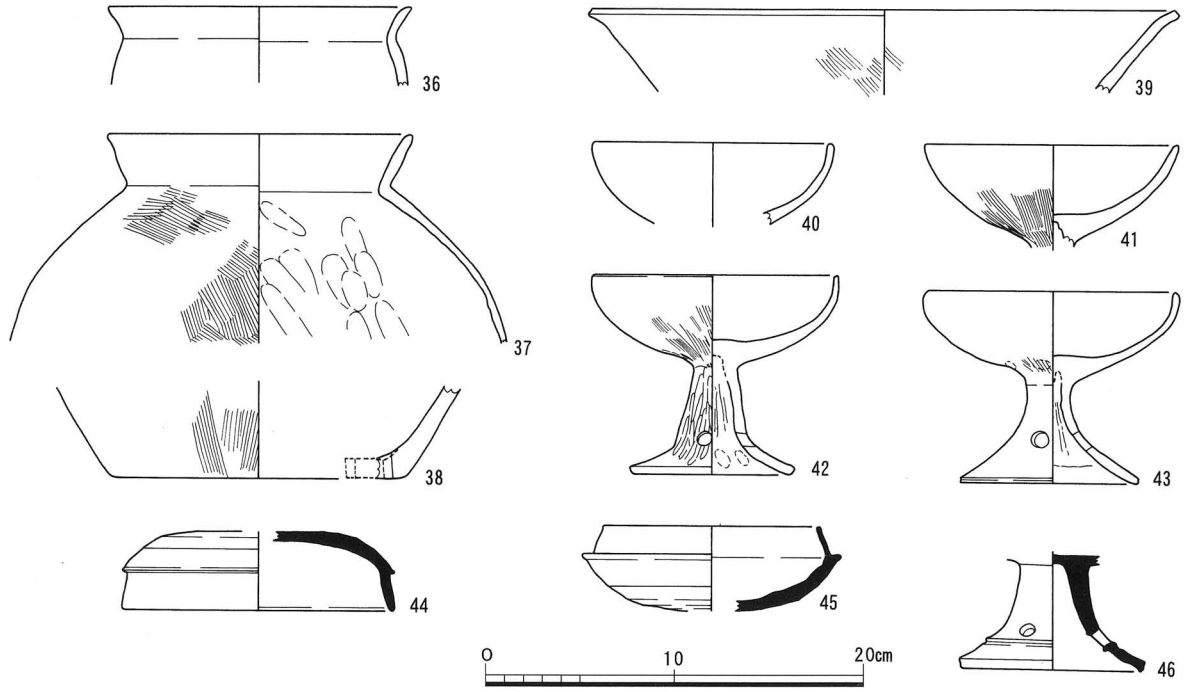
３Ａ地区で検出した。南北方向に長い楕円形を呈するもので、東西径0.78m、南北径0.95m、深さ0.13mを測る。埋土は砂質土の２層から成る。遺物は土師器・須恵器の細片が極少量出土している。遺構帰属時期は判然としない。

ＳＫ308（第14図）

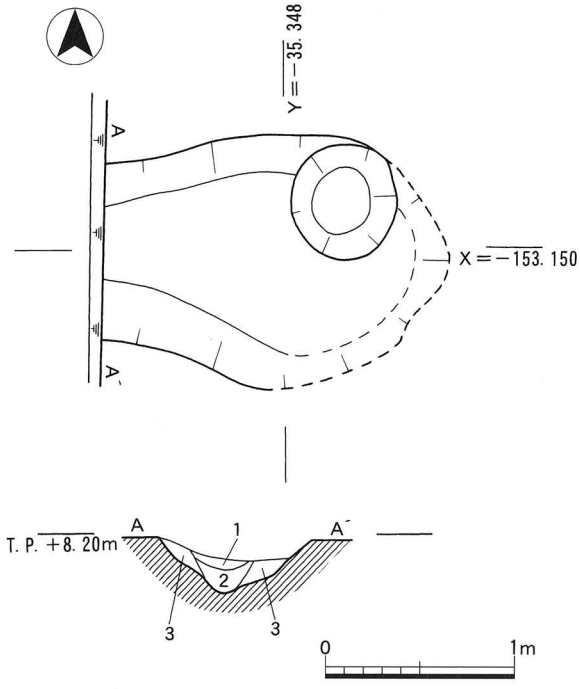
３Ｂ地区で検出した。ＳＥ302の北に隣接する。隅丸方形を呈するもので、東西幅1.05m、南北幅0.87m、深さ0.15mを測る。埋土は5Y5/1灰色砂質土の単一層である。遺物は土師器の細片が極少量出土している。帰属時期は判然としない。

ＳＫ309（第14・15図、図版五・一七）

３Ｂ・Ｃ地区で検出した。南部は側溝掘削により削平を受けている。検出部分で東西幅2.67m、南北幅1.58mを測る。掘方は二段で東部にテラス状の部分を持つもので、最も深い部分で0.25mを測る。埋土は中粒砂を含む砂質土の単一層である。遺物は古墳時代前期前半(布留式古相)から古墳時代中期後半に比定される土器類が数多く出土している。古墳時代中期後半に比定される土器類11点(36～46)を掲載した。36～43は土師器である。36・37は甕で、36は小形品、37は大形品である。38は甑の底部片である。39は大形有稜高杯の口縁部片である。40～43は椀形高杯である。42・43が完形で、法量は42が口径13.05cm、器高10.6cm、裾径8.6cm、43が口径13.5cm、器高10.2cm、裾径9.4cmを測る。44～46は須恵器である。44は杯蓋、45は杯身である。共に田辺編年のＴＫ23型式(５世紀後半)に比定される。46は高杯の脚部である。田辺編年のＴＫ73型式(５世紀前半)に比定される。帰属時期は古墳時代中期後半である。

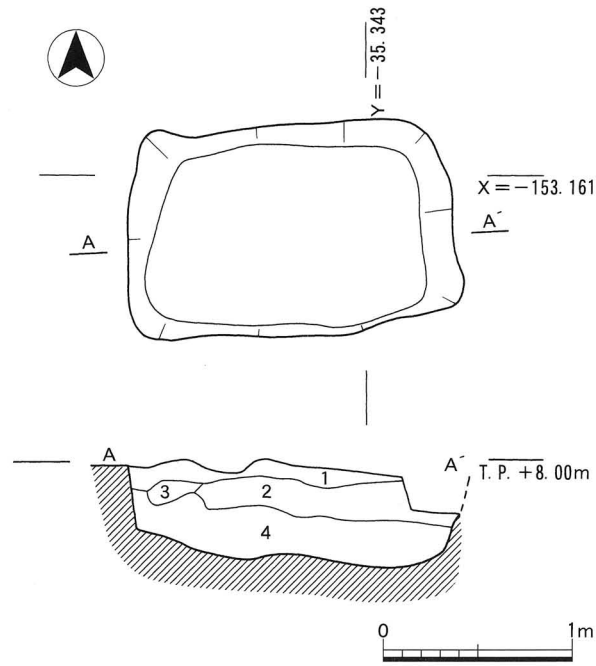


第15図　ＳＫ309出土遺物実測図



1　5Y5/1 灰色砂質土
2　5Y5/2 灰オリーブ色砂質土
3　7.5Y5/1 灰色砂質土

第16図　ＳＫ310平断面図（Ｓ＝1/40）



1　5Y4/2 灰オリーブ色粗粒砂混砂質土
2　5Y4/1 灰色細粒砂混粘質土
3　7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土
4　10Y4/1 灰色シルト質粘土

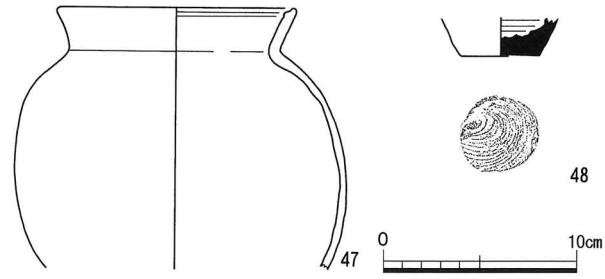
第17図　ＳＫ311平断面図（Ｓ＝1/40）

ＳＫ310（第16・18図、図版一七）

２・３Ｃ地区で検出した。西端は既設建物の基礎により削平を受けている。検出部分から東西方向に長い楕円形であったと推定され、北東部分に小穴１個が存在している。遺物は土師器が少量出土している。１点(47)を図化した。47は土師器甕である。粗製品で体部下位以下を欠く。口縁端部は内傾肥厚している。復元口径12.5cmを測る。10世紀末前後のものと考えられる。

ＳＫ311（第17・18図）

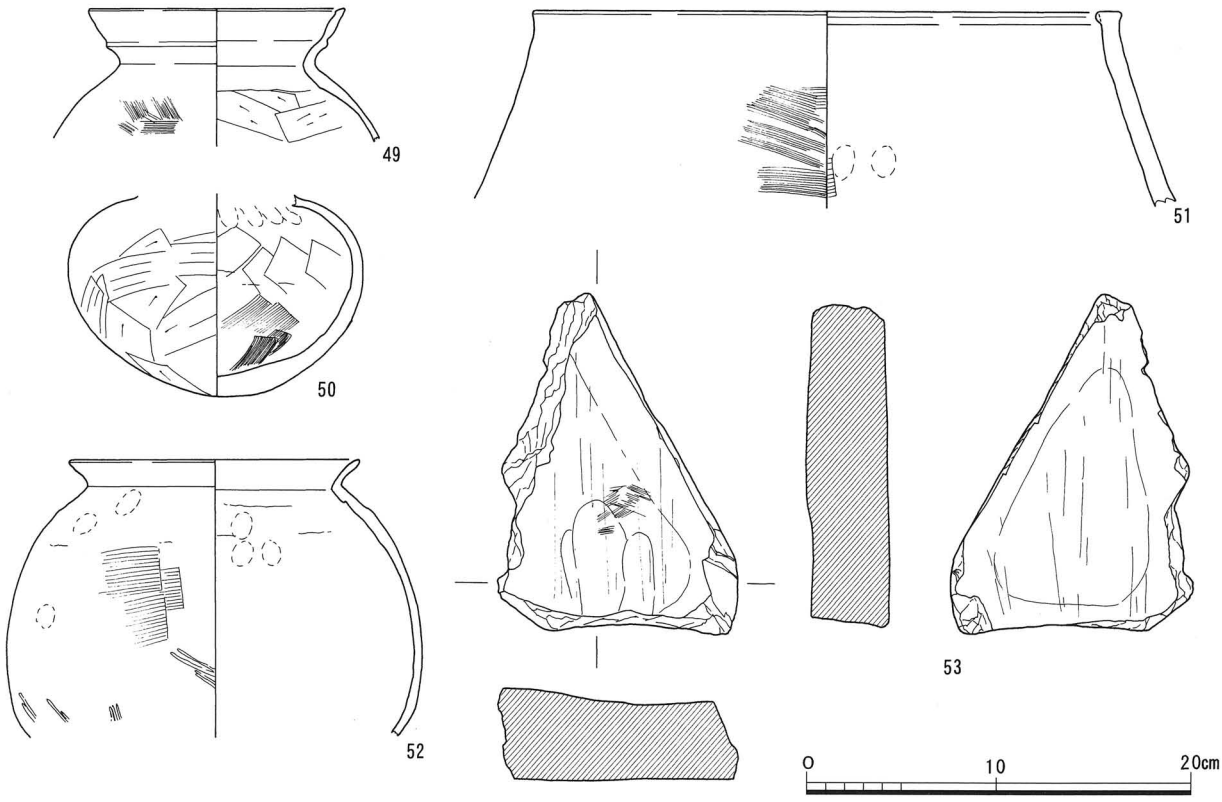
調査区南東部の１Ｃ地区で検出した。不整の長方形を呈するもので、東西幅1.73m、南北幅1.12m、深さ0.57mを測る。埋土は４層からなる。遺物は土師器・須恵器の細片が極少量出土している。１点(48)を図化した。48は須恵器小壷の底部である。裏面に静止糸切り痕が残る。遺構の帰属時期は９世紀中頃に比定される。



第18図　ＳＫ310（47）、ＳＫ311（48）出土遺物実測図

ＳＫ312（第14・19図、図版六・一七・一八）

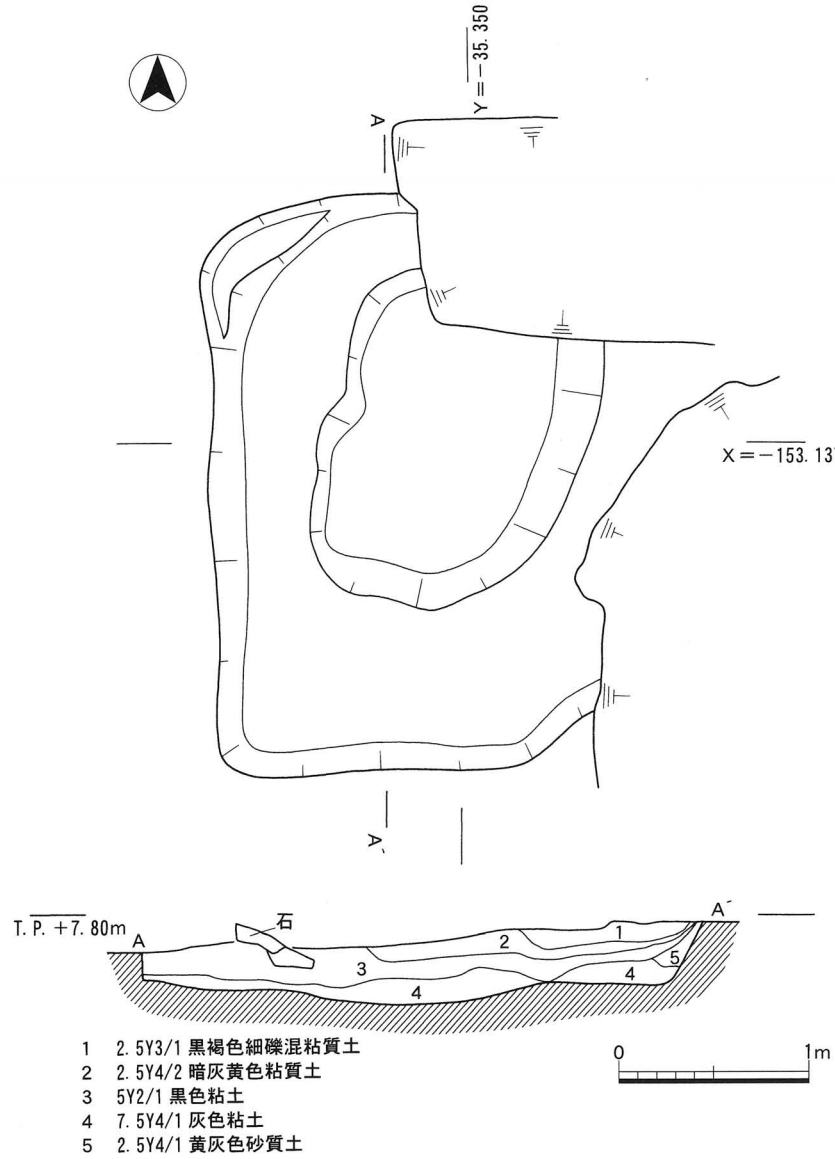
３Ｃ地区で検出した。東端部分は既設建物の基礎により削平を受けているが概ね東西方向に長い楕円形を呈するものと推定される。検出部分で東西幅1.23m、南北幅0.99m、深さ0.59mを測る。埋土は粘土～粘土質シルトを主体とする４層（１～４層）から成る。遺物は４層から古墳時代前期後半（布留式新相）に比定される古式土師器、砥石等が少量出土している。４点(49～53)を図化した。49は口縁部外面に稜を持つ壷（複合口縁壷Ｅ2）である。古墳時代前期後半（布留式新相）に成立する器種である。50は直口壷（小形壷Ｂ1－Ⅱ）であるが口頸部を欠く。体部外面の中位以下にヘラケズリが行われている。51は大形複合口縁壷（複合口縁壷Ｅ1）の口縁部片である。復元口径30.5cmを測る。東部四国系のものである。52は甕である。53は２面に使用痕を認める砥石である。石材はかんらん石安山岩。遺構の帰属時期は古墳時代前期後半（布留式新相）である。



第19図　ＳＫ312出土遺物実測図

ＳＫ319（第20・21図、図版六・一七・一八）

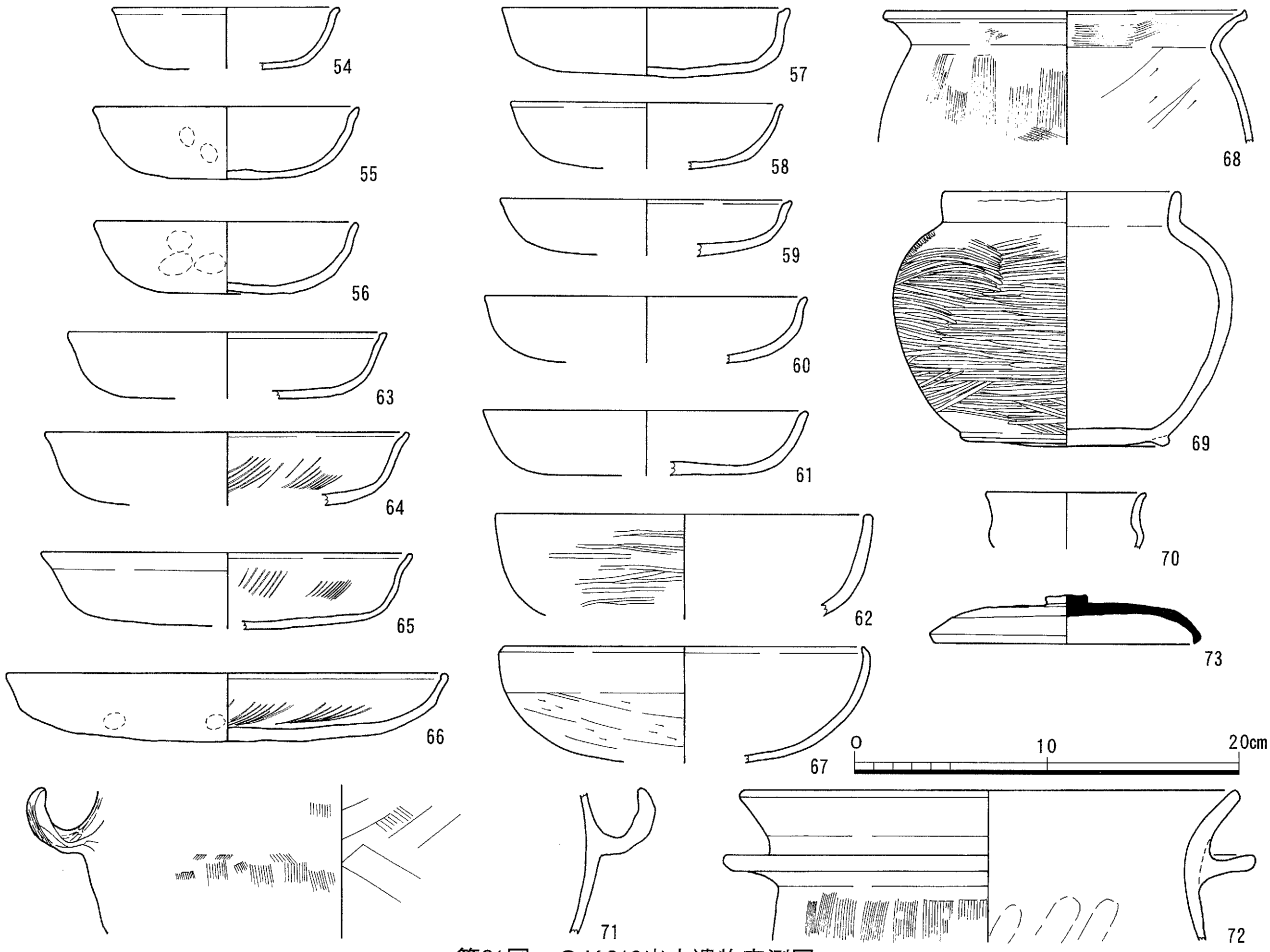
４ＢＣ地区で検出した。方形を呈するものと推定されるが、北部が試掘坑、東部がＳＫ102により削平を受けている。検出部分で東西幅2.30m、南北幅3.05m、深さ0.40mを測る。埋土はである。遺物は土師器・須恵器の細片が少量出土している。20点(54～73)を図化した。73以外は土師器である。54～61は土師器杯Ｃである。55が完形品で口径13.9cm、器高3.9cmを測る。62は椀Ａ。63～66は杯Ａで、64～66には内面に放射状暗文が施文されている。66が完形品で口径23.2cm、器高3.6cmを測る。67は鉢Ｂである。器面調整はｂ手法である。68は甕Ａの細片である。69は肩の張る体部から直上に短く伸びる直口の口



第20図　ＳＫ319平断面図（Ｓ＝1/40）

第２表　第３面　土坑（ＳＫ）法量表（単位m）

遺構名	地　区	形状	全長（検出長）	幅（最大）	深さ	埋土	備考
ＳＫ304		不明	1.10	1.66	0.11	－	
ＳＫ306	３Ａ	方形	0.60	0.44	0.11	10YR6/2灰黄褐色砂礫土	
ＳＫ307	〃	不明	1.07	0.65	0.23	－	
ＳＫ313	４ＢＣ	〃	1.68	0.44	0.26	－	
ＳＫ314	〃	〃	1.10	0.50	0.08	－	
ＳＫ315	４Ｃ	〃	0.94	0.37	0.30	10YR4/1褐灰色細砂混シルト 2.5Y4/2暗灰黄色シルト	
ＳＫ316	〃	〃	0.35	0.71	0.11	－	
ＳＫ317	〃	〃	0.91	1.07	0.18	－	
ＳＫ318	３Ａ	不整円形	0.90	0.75	0.69	5Y7/1灰白色砂質土 2.5Y6/2灰黄色砂質土 5Y6/1灰色砂質土 2.5Y5/1黄灰色砂質土 7.5Y4/1灰色砂質土 N6/0灰色砂質土	



第21図　ＳＫ319出土遺物実測図

縁部が付く壷Ａで、高台は「ハ」の字に開き低い。体部外面調整は横位の密なヘラミガキが多用されている。約1/2が残存しており、口径12.4cm、器高13.6cm、体部最大径17.7cm、高台径10.9cmを測る。70は小形の壷Ｂの細片である。71は甕Ａと推定され、肩部に舌状の把手が付く。72は羽釜片で口縁部から体部上位が残存している。胎土には角閃石・黒雲母を含む、河内産のものである。鍔はほぼ水平方向に付けられている。73は須恵器杯Ｂの蓋である。奈良時代中期を中心とする平城宮Ⅲに比定される。

溝（ＳＤ）

ＳＤ301

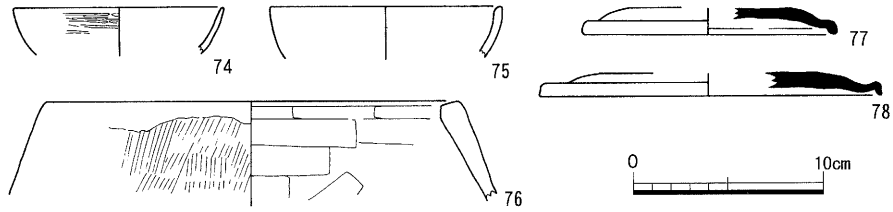
１Ａから２Ａ地区にかけて緩やかに弧を描いて南北方向に伸びる小溝で、ＳＤ306・309・318・319を切っている。検出長9.50m、幅0.25～0.40m、深さ0.12mを測る。埋土は10YR6/2灰黄褐色砂質土の単一層である。遺物は土師器・須恵器の細片が極少量出土しているが、時期を明確にし得たものはない。

ＳＤ302

ＳＤ301の東に隣接している。南北方向に直線的に伸びる小溝で、ＳＤ308を切り、ＳＤ303・309・318・319に切られている。埋土は10YR6/2灰黄褐色砂質土の単一層である。遺物は土師器の細片が極少量出土しているが、時期を明確にし得たものはない。

ＳＤ304（第22図）

１Ａ地区で検出した。南北方向に伸びる小溝である。ＳＤ303・318に切られている。検出長2.60m、幅0.40m、深さ0.04mを測る。埋土は10YR6/2灰黄褐色砂質土である。遺物は奈良時代中期の土師器・須恵器の細片が少量出土している。２点(76・77)を図化した。76は土師器竈の口縁部の細片である。77は須恵器杯Ｂの蓋である。平城宮Ⅲに比定される。



第22図　ＳＤ304（76・77）、ＳＤ305（74・75・78）出土遺物実測図

ＳＤ305（第22図）

１Ａ・Ｂ地区で検出した。東西方向に伸びる小溝である。検出長2.95m、幅0.40m、深さ0.10mを測る。埋土は10YR6/2灰黄褐色砂質土である。遺物は奈良時代中期の土師器・須恵器の細片が少量出土している。３点(74・75・78)を図化した。74・75は土師器椀Ａの細片である。共に口縁部の細片である。78は須恵器杯Ｂの蓋の細片である。平城宮Ⅲに比定される。

ＳＤ307

２Ａ地区で検出した。東西方向に伸びる小溝である。検出長2.55m、幅0.50m、深さ0.06mを測る。埋土は10YR6/2灰黄褐色砂質土である。遺物は土師器の細片が極少量出土したが、時期を明確にし得たものは無い。

ＳＤ308

２Ａ地区で検出した。逆「Ｌ」字状に伸びる小溝で、ＳＤ302・309に切られている。検出部分で東西長2.65m、南北長0.78m、深さ0.03mを測る。埋土は10YR6/2灰黄褐色砂質土である。遺物は土師器・須恵器の細片が出土したが、時期を明確にし得たものは無い。

ＳＤ309

２Ａ地区で検出した。南東―北西に伸びる小溝で、ＳＤ302・308を切り、ＳＤ301に切られている。検出長5.30m、幅0.35m、深さ0.07mを測る。埋土は10YR2/2黒褐色砂質土である。遺物は土師器の細片が極少量出土している。

ＳＤ311

２Ａ地区で検出した。東西方向に直線的に伸びる小溝である。検出長3.35m、幅0.45m、深さ0.04mを測る。埋土は10YR6/2灰黄褐色砂質土である。遺物は土師器片が極少量出土しているが、時期を明確にし得たものは無い。

ＳＤ313

３Ｂ地区で検出した。南北方向に伸びる小溝で、南部は建物の基礎で削平を受けている。検出部長0.68m、幅0.59m、深さ0.02mを測る。埋土は10YR6/2灰黄褐色砂質土である。遺物は土師器片が極少量出土しているが、時期を明確にし得たものは無い。

ＳＤ314（第23・24図、図版一八）

１・２ＢＣ地区で検出した。南北方向に伸びる溝で北部は撹乱、南部はＳＤ315に切られている。検出長8.60m、幅3.30m、深さ0.31mを測る。埋土は10YR6/2灰黄褐色砂質土である。遺物は奈

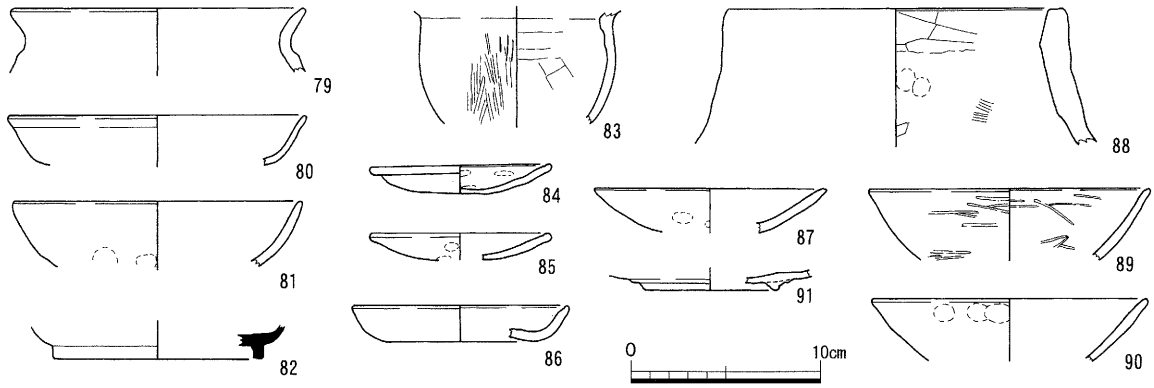
良時代後半に比定される土師器・須恵器の細片が少量出土している。４点(79～82)を図化した。79は土師器甕Ａの細片である。80は土師器杯Ａ。81は土師器椀Ａ。82は須恵器杯Ｂの底部である。遺構の帰属時期は奈良時代後半である。

ＳＤ315（第23・24図）

調査区東部の１・２Ｃ地区で検出した。ＳＤ314を切る。約３ｍ程度の幅を持ち、南北方向に伸びるもので、北端で西に屈曲した後、溝幅を減じている。検出部分で東西長2.60m、南北長14.50m、深さ0.30mを測る。埋土は10Y4/2オリーブ灰色粘土質シルトである。遺物は平安時代後期に比定される土師器・須恵器・瓦器等が少量出土している。９点(83～91)を図化した。83は小形甕の細片である。84～87は土師器小皿である。84・85は「て」の字状口縁を呈する。84が完形品で口径9.6cm、器高1.6cmを測る。86は口縁端部が小さく肥厚する。87は椀状を呈する。88は土師器で器壁が厚いもので、器種については竈ないしは甕の口縁部等が考えられる。89～91は瓦器椀である。３点とも和泉型に分類されるもので、89・90が体部細片。91が底部で断面三角形を呈する貼り付け高台である。尾上編年の(12世紀末)に比定される。遺構の帰属時期は12世紀末が推定される。

ＳＤ316

３ＡＢ地区で検出した。南北方向に伸びるもので、北端でＳＤ317に合流しているほか、溝底にＳＰ333が存在している。検出長3.60m、幅1.25m、深さ0.14mを測る。埋土は5Y3/1オリーブ黒色細砂～小礫である。遺物は土師器・須恵器等の細片が小量出土している。出土遺物から遺構帰属時期は古墳時代中期が推定される。



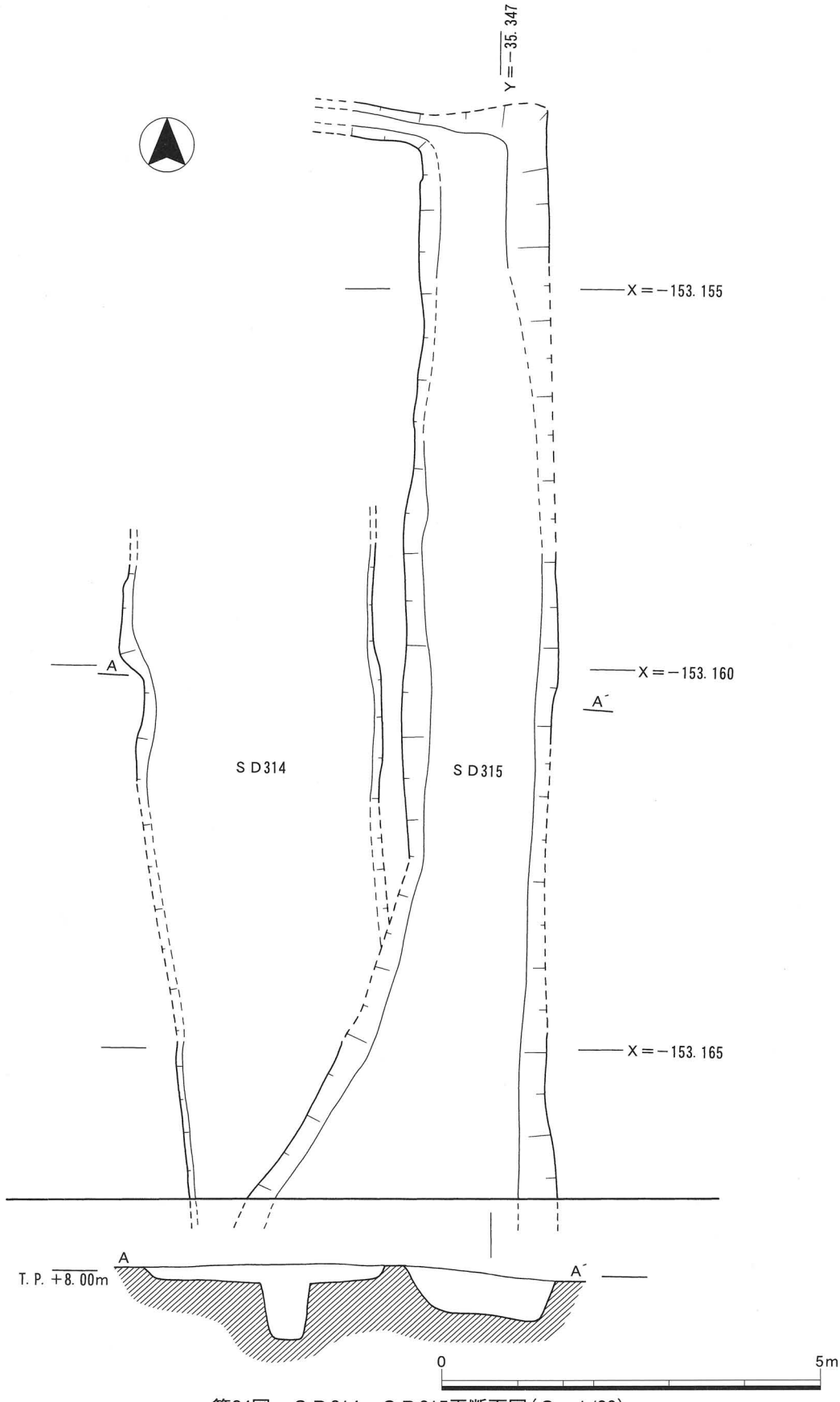
第23図　ＳＤ314（79～82）、ＳＤ315（83～91）出土遺物実測図

ＳＤ317（第25図）

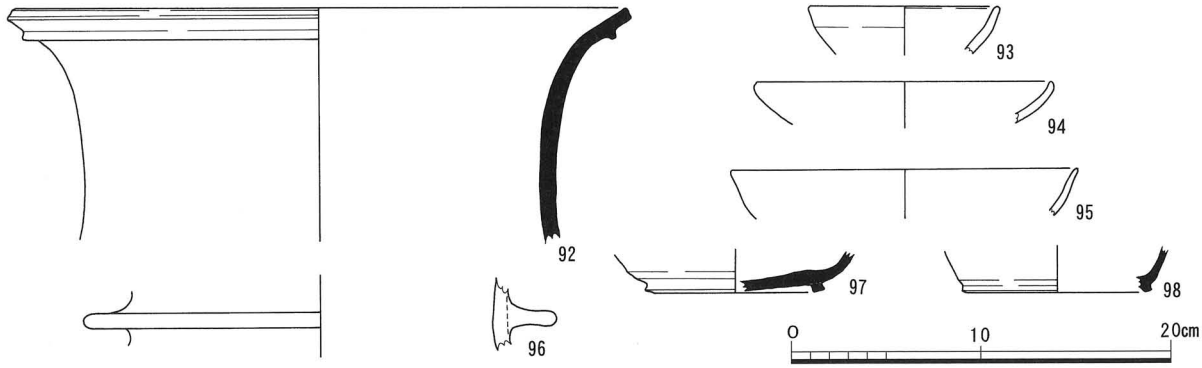
調査区北西部の３ＡＢ地区で検出した。一部でＳＥ303に切られている。東西方向に伸びるものであるが、北肩は調査区外に至るため詳細は不明である。検出長10.00m、幅0.62m、深さ0.15mを測る。埋土は7.5YR4/2灰褐色小礫混砂質土である。遺物は古墳時代中期前半に比定される土師器・須恵器の細片が少量出土している。１点(92)を図化した。92は須恵器壷の口頸部である。大形品で口縁端部外面よりやや下に凸帯が廻る他、口縁部外面に黒色の釉が施釉されている。初期須恵器の範疇のものである。遺構の帰属時期は古墳時代中期前半である。

ＳＤ318（第25図）

調査区南西部の１Ａ地区で検出した。東西方向に伸びる小溝である。検出長4.15m、幅0.50m、



第24図　ＳＤ314、ＳＤ315平断面図（Ｓ＝1/80）



第25図　ＳＤ317、ＳＤ318出土遺物実測図

深さ0.09mを測る。埋土は7.5YR4/2灰褐色小礫混砂質土である。遺物は奈良時代に比定される土師器・須恵器の細片が極少量出土している。６点(93～98)を図化した。いずれも細片が中心である。93・94は土師器椀Ａ。95は杯Ａである。96は土師器羽釜の鍔部分。97・98は共に須恵器杯Ｂの底部付近の細片である。帰属時期は奈良時代後半が推定される。

第３表　第３面　溝(ＳＤ)法量表(単位m)

遺構名	地　区	全長 (検出長)	幅 (最大)	深さ	埋土	備考
ＳＤ303	１Ａ	2.60	0.35	0.03	緑黒色小礫混砂質土	
ＳＤ306	２Ａ	2.00	0.20	0.03	褐黄色砂質土	
ＳＤ310	〃	2.60	0.40	0.04	〃	
ＳＤ312	２･３Ｂ	1.00	1.40	0.17	〃	

小穴(ＳＰ)

ＳＰ301～339

総数で39個(ＳＰ301～339)を検出した。既往建物の基礎構築時の掘削が第３面におよぶため、分布範囲については不明な点があるが、概ね調査区中央部より西に偏在する傾向が認められた。平面の形状では、円形・楕円形・不整円形がある。規模は径0.08～0.72m、深さ0.05～0.48mを測る。そのうち柱痕を検出したものはＳＰ306である。遺物はＳＰ302～306・308・309・311～320・323・325・326・331・332・335・336・339から古墳時代前期から平安時代後半に比定される土師器・須恵器・黒色土器・屋瓦等が出土している。法量等の詳細は第４表に示した。

写真２　第３面　調査区西部遺構検出状況(南から)

第４表　第３面　小穴（ＳＰ）法量表（単位m）

遺構名	地　区	平面形	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
ＳＰ301	１Ａ	円形	0.21	0.2	0.28	2.5Y5/1黄灰色砂質土 2.5Y5/3黄褐色砂質土	
ＳＰ302	〃	〃	0.2	0.18	0.15	2.5Y5/1黄灰色砂質土 5Y5/2灰オリーブ色砂質土	土師器
ＳＰ303	〃	〃	0.21	0.2	0.1	5Y5/4オリーブ色砂質土 5Y5/1灰色砂質土	土師器
ＳＰ304	２Ａ	〃	0.45	0.4	0.14	5Y5/1灰色砂質土 7.5Y5/1灰色砂質土	土師器
ＳＰ305	〃	〃	0.31	0.3	0.05	5Y5/1灰色砂質土	土師器
ＳＰ306	〃	〃	0.25	0.2	0.21	5Y5/1灰色砂質土 7.5Y5/1灰色砂質土 2.5Y5/1黄灰色砂質土	土師器
ＳＰ307	〃	〃	0.28	0.25	0.06	－	
ＳＰ308	３Ａ	楕円形	0.22	0.15	0.08	5Y6/2灰オリーブ色砂質土	土師器
ＳＰ309	〃	不明	0.8	0.18	0.48	5Y3/1オリーブ黒色砂質土 10YR3/1黒褐色砂質土 2.5Y5/3黄褐色砂質土 5Y3/2オリーブ黒色粘質土	土師器・平瓦
ＳＰ310	〃	〃	0.5	0.08	0.4	5Y3/1オリーブ黒色砂質土 5Y4/2灰オリーブ色粘質土	
ＳＰ311	１Ｂ	楕円形	0.71	0.53	0.33	2.5Y3/2オリーブ黒色砂質土 2.5Y3/1オリーブ黒色粘質土 5Y3/2オリーブ黒色小礫混粘土	土師器
ＳＰ312	〃	不整円形	0.58	0.36	0.29	2.5Y3/1オリーブ黒色粘質土 2.5Y3/1オリーブ黒色粘土 5Y4/1灰色粘土	土師器
ＳＰ313	〃	不明	0.57	0.55	0.17	5Y3/2オリーブ黒色砂質土	土師器
ＳＰ314	〃	円形	0.52	0.46	0.39	7.5Y3/2オリーブ黒色粘質土 7.5Y4/1灰色粘質土 7.5Y4/1灰色粘土	土師器・須恵器
ＳＰ315	〃	〃	0.4	0.22	0.37	5Y3/2オリーブ黒色粘質土 7.5Y4/1灰色粘土	土師器
ＳＰ316	〃	不明	0.72	0.48	0.27	5Y4/2灰オリーブ色砂質土 2.5Y4/2灰オリーブ色粘質土	土師器
ＳＰ317	〃	円形	0.56	0.47	0.26	5Y4/2灰オリーブ色砂質土 5Y4/2灰オリーブ色砂質土 2.5Y4/3暗オリーブ色粘質土	土師器
ＳＰ318	〃	〃	0.34	0.33	0.19	2.5Y3/2オリーブ黒色粘質土	土師器
ＳＰ319	２Ｂ	〃	0.29	0.28	0.13	2.5Y3/2オリーブ黒色粘質土	土師器
ＳＰ320	１ＣＤ	〃	0.31	0.29	0.13	10Y4/2オリーブ灰色粘質土 5Y4/2灰オリーブ色粘質土	土師器・黒色土器
ＳＰ321	３Ａ	〃	0.35	0.22	0.05	5Y3/1オリーブ黒色粘質土	
ＳＰ322	〃	〃	0.48	0.44	0.11	5Y3/1オリーブ黒色粘質土	
ＳＰ323	〃	〃	0.48	0.47	0.15	5Y3/1オリーブ黒色粘質土 7.5YR4/4にぶい赤褐色粘質土	土師器
ＳＰ324		〃	0.3	0.27	0.09	5Y3/1オリーブ黒色粘質土	
ＳＰ325	３Ｂ	円形	0.47	0.46	0.23	5Y3/2オリーブ黒色細～中粒砂	土師器
ＳＰ326	〃	楕円形	0.33	0.21	0.14	2.5Y4/3暗オリーブ色砂質土	
ＳＰ327	〃	円形	0.26	0.25	0.14	5Y3/1オリーブ黒色粘質土	
ＳＰ328	〃	〃	0.23	0.13	0.16	5Y3/1オリーブ黒色粘質土	
ＳＰ329	〃	不明	0.95	0.38	0.34	5Y3/1オリーブ黒色粘土 5Y3/1オリーブ黒色微～細砂混粘土	
ＳＰ330	〃	〃	0.52	0.19	0.05	－	
ＳＰ331	〃	〃	0.25	0.23	0.2	5Y3/1オリーブ黒色微～細砂混粘土	土師器

遺構名	地　区	平面形	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
ＳＰ332	３Ｂ	不明	0.66	0.38	0.24	5Y3/1オリーブ黒色微～細砂混粘土	土師器
ＳＰ333	〃	不整円形	0.49	0.43	0.23	10YR3/2黒褐色粘質土	
ＳＰ334	〃	円形	0.23	0.2	0.13	2.5Y4/2暗灰黄色粘質土	
ＳＰ335	〃	〃	0.52	0.48	0.27	－	土師器・須恵器・瓦
ＳＰ336	〃	〃	0.31	0.28	0.21	－	土師器
ＳＰ337	〃	〃	0.22	0.21	0.2	－	
ＳＰ338	〃	〃	0.28	0.24	0.07	－	
ＳＰ339	〃	不定形	1.03	0.81	0.49	5B4/1暗青灰色粘質土 10GY2/1緑黒色粘土	土師器

土器集積（ＳＷ）

ＳＷ301（写真３、第26図、図版一八・一九）

調査区北部の４Ｂ地区で検出した。東西約0.5ｍ、南北約0.75ｍに広がる土器集積である。古墳時代中期前半を中心とする土師器・須恵器を中心としている。３点(99～101)を図化した。99は口頸部を欠くが、土師器直口壺と推定される。精製品で色調は明橙色である。100は土師器の有稜高杯である。図上で完形に復元される。大形の杯部を持つもので、口径26.5cm、杯部高6.5cm、器高14.9cmを測る。杯部の内外面は横位のヘラミガキ。脚部外面には縦位のヘラミガキが施されている。色調は黄橙色である。101は須恵器甕である。口頸部は完存しており、口径24.8cmを測る。口縁端部端面に凹線が廻る他、口縁端部外面より1.0cm下部に凸帯が廻る。体部外面に縦方向のタタキが施されている。焼成は良好である。田辺編年のＴＫ216型式（５世紀前半）に比定される。土器集積の帰属時期は古墳時代中期前半である。

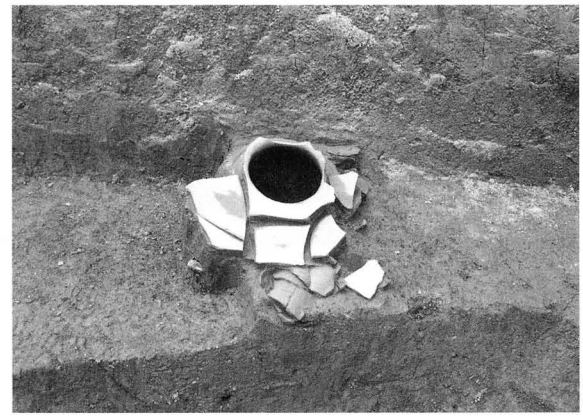
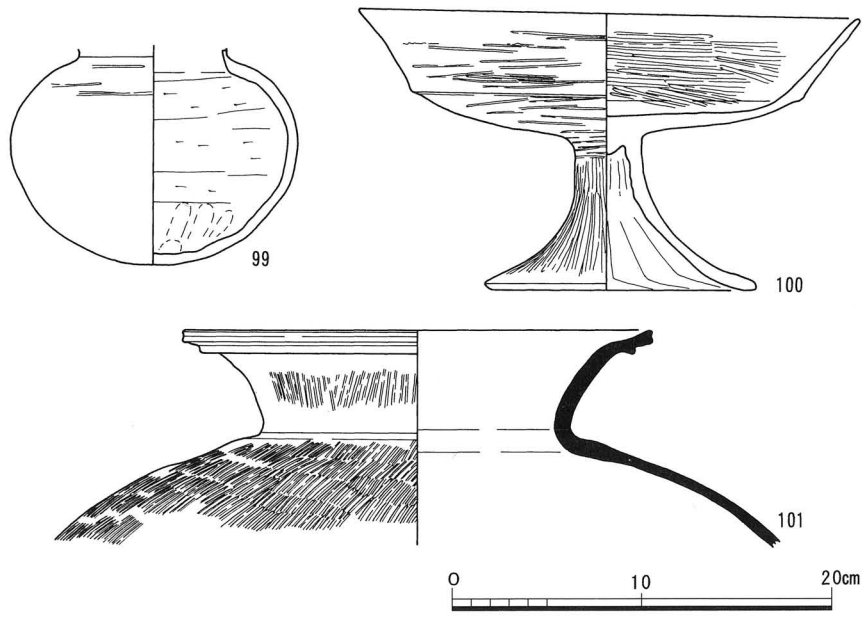


写真３　ＳＷ301検出状況（東から）



第26図　ＳＷ301出土遺物実測図

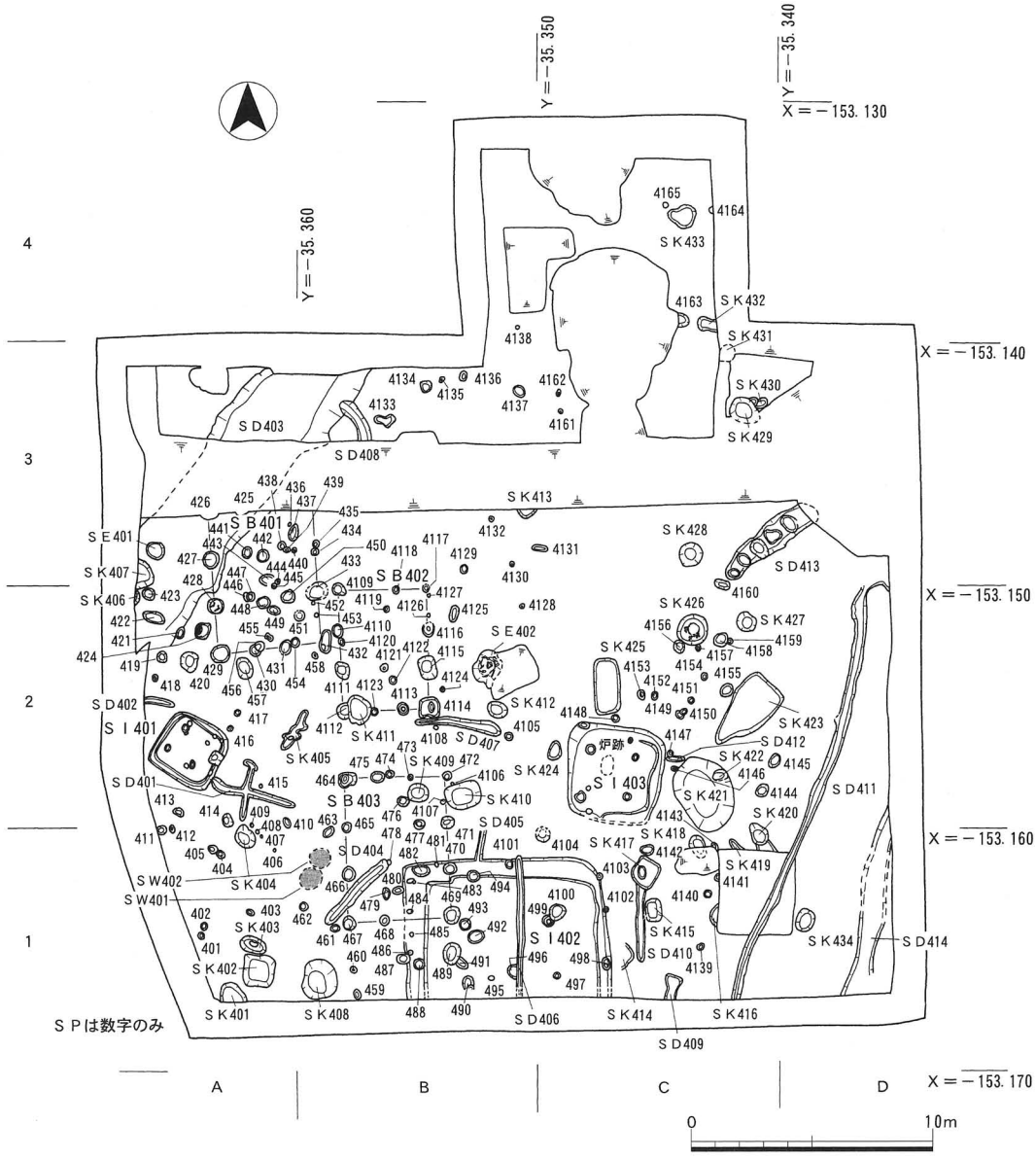
第４面(第27図、図版七)

第６層上面(T.P.+7.6～7.9m)を調査対象面とした。弥生時代後期末から平安時代後期に比定される竪穴住居３棟(ＳＩ401～403)、掘立柱建物３棟(ＳＢ401～403)、井戸２基(ＳＥ401・402)、土坑34基(ＳＫ401～434)、溝14条(ＳＤ401～414)、小穴165個(ＳＰ401～4165)、土器集積２箇所(ＳＷ401・402)を検出した。

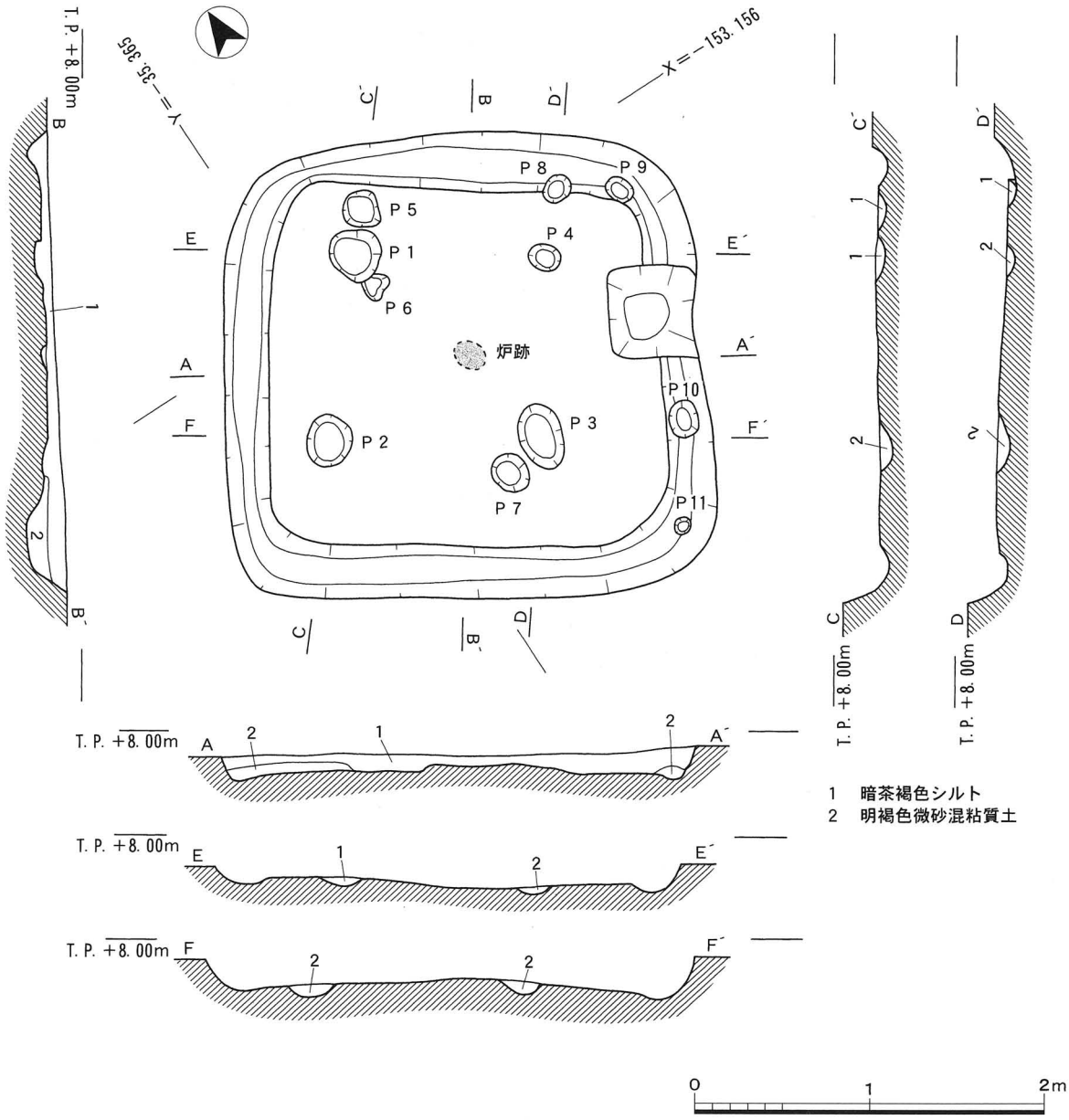
竪穴住居(ＳＩ)

ＳＩ401（第28・29図、図版八)

調査区西部の２Ａ地区で検出した。上面形状が隅丸方形を呈する小型の竪穴住居である。規模は東西幅2.7～2.8m、南北幅2.7mで検出面から床面まで0.05～0.15mを測る。主軸はＮ30° Ｅである。床面積約7.4㎡を測る。建物内に11個の小穴が存在しており、その内のＰ１～４が主柱穴と推定されるが、いずれも浅く柱根や柱痕は認められない。周溝は壁面に沿って廻っており、

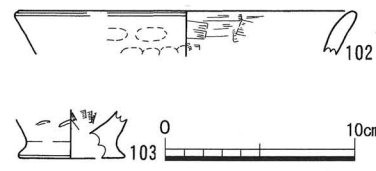


第27図　第４面平面図(Ｓ＝1/300)



第28図　ＳＩ401平断面図（Ｓ＝1/40）

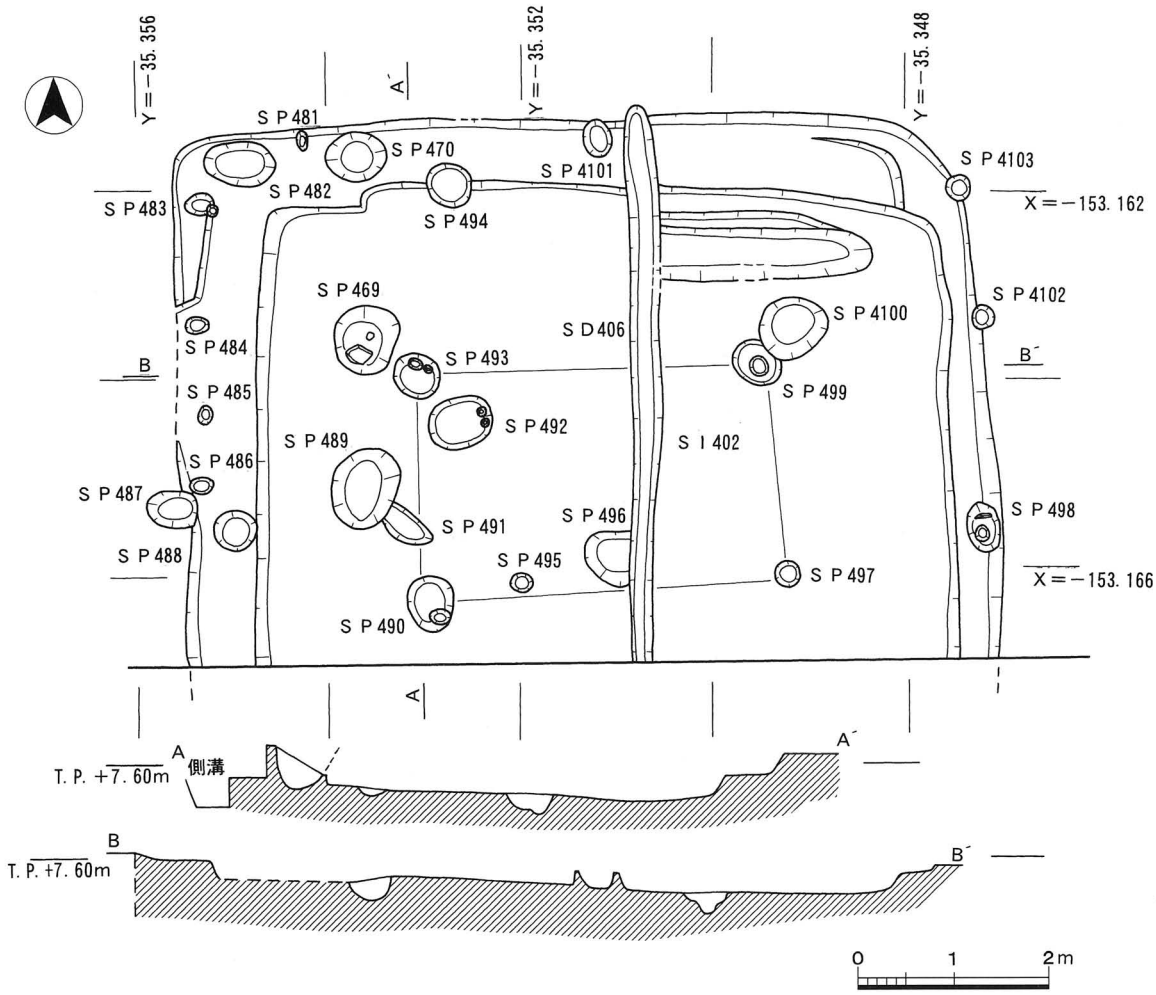
幅0.15～0.35m、深さ0.05～0.10mで、明褐色微砂混粘質土が堆積していた。炉跡は中央部付近に存在しており径0.20m程度で深さ0.05mを測る。内部の中央部を中心に炭が堆積していた。住居内の埋土は暗茶褐色シルトである。遺物は弥生時代後期末から古墳時代初頭前半（庄内式古相）に比定される弥生土器・古式土師器の細片が極少量出土している。２点（102・103）を図化した。102はＶ様式甕の口縁部片である。103は底部が「ハ」の字に開く小形鉢の底部片。ＳＩ401の北部で多量の弥生時代後期末から古墳時代初頭前半の遺物が出土したＳＤ403があり、この流路方向と建物の主軸方向に共通点がある。遺構の帰属時期は弥生時代末から古墳時代初頭前半（庄内式古相）が考えられる。



第29図　ＳＩ401出土遺物実測図

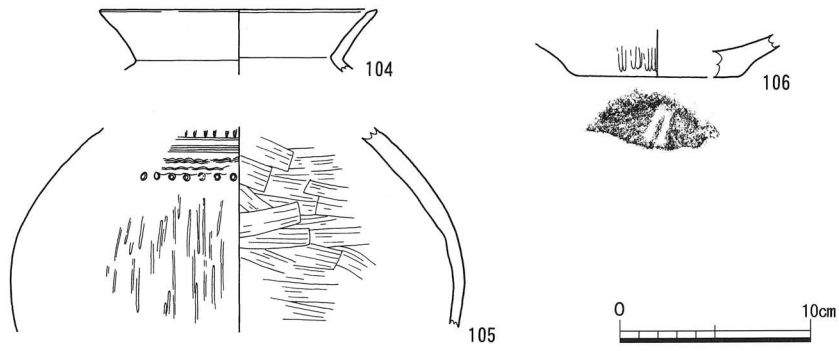
ＳＩ402（第30・31図、図版八）

調査区中央南端の１Ｂ・Ｃ地区で検出した。南端が調査区外に至るため全容は不明であるが検

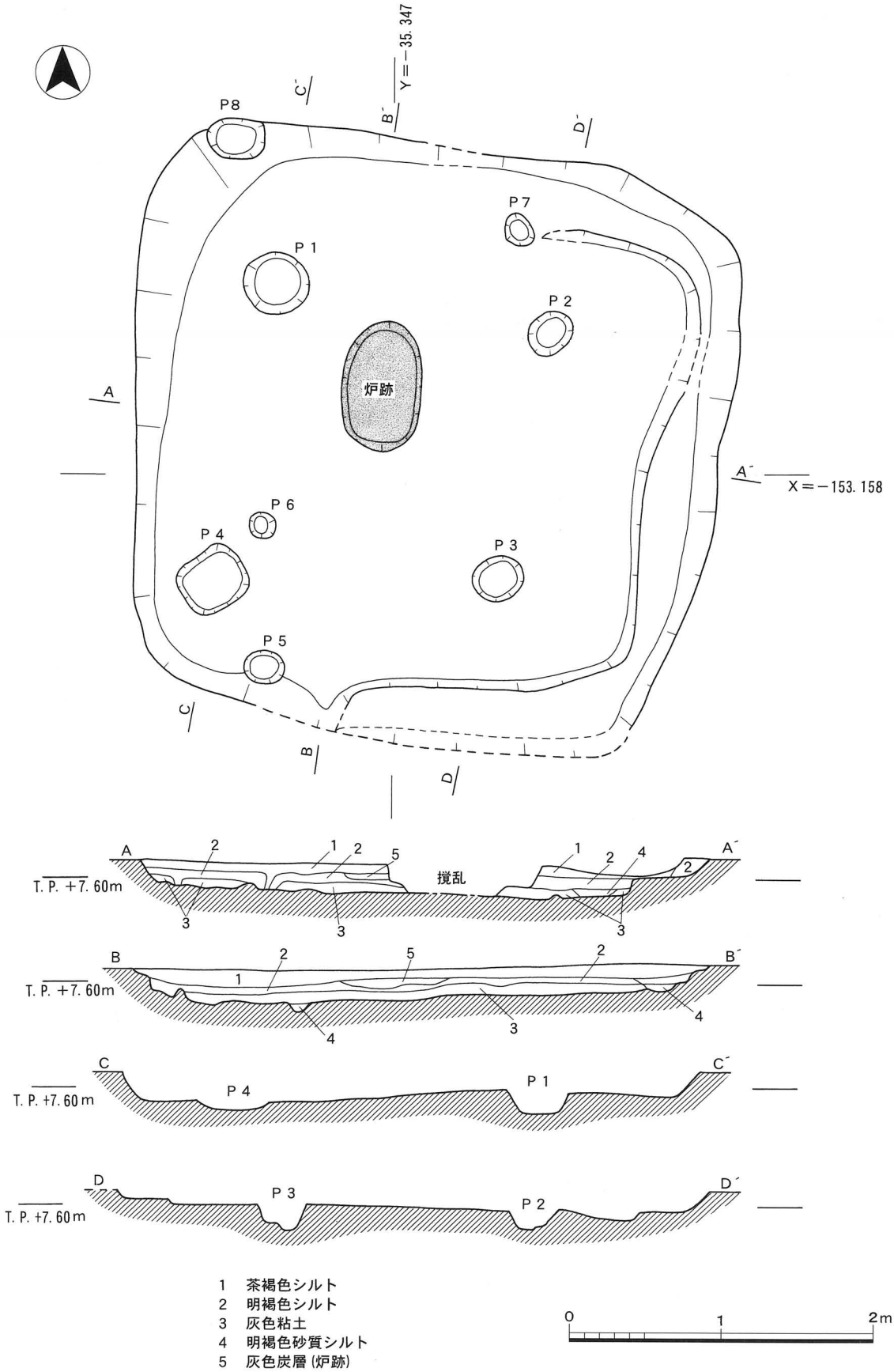


第30図　ＳＩ402平断面図(Ｓ＝1/80)

出部分から、大形の竪穴住居で、建て替えが行われていた可能性が推定される。形状は隅丸方形を呈するものと推定される。規模は検出部分で東西幅8.63m、南北幅5.80mで検出面から床面まで0.35mを測る。主軸はＮ１° Ｗである。建物内に数多くの小穴が存在しており、建物に帰属するものの峻別は困難であるが、その内のＳＰ490・493・497・499が主柱穴と推定される。炉跡は確認していない。住居内の埋土は10YR4/1褐灰色シルト混粘質土である。遺物は古式土師器片が極少量出土している。３点(104～106)を図化した。104は布留式傾向甕(甕Ｅ)の口縁部である。105は大形壷の体部片である。体部外面上位に直線文・波状文・竹管文が施文されている。庄内式古相のものと推定される。106は壷底部の細片である。色調は白灰色である。非生駒西麓産。新旧の遺物が混在しているが104の遺物からみて遺構の帰属時期は古墳時代前期前半(布留式古相)が推定される。



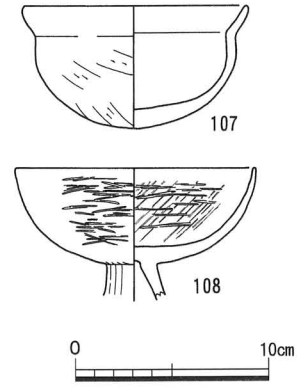
第31図　ＳＩ402出土遺物実測図



第32図　ＳＩ403平断面図（Ｓ＝1/40）

ＳＩ403（第32・33図、図版九）

２Ｃ地区で検出した。ＳＩ402の北に隣接している。４本柱で中央部に炉を持つ隅丸方形の竪穴住居である。主軸方向がほぼ座標北に向く。規模は東西幅3.86m、南北幅4.04mで検出面から床面まで0.27mを測る。床面積8.96㎡を測る。周溝は無く、北東部から南東部にかけて拡張の際に生じたテラス状を呈する部分がある。床面ないし壁面にかけて８個（Ｐ１～８）の柱穴があり、そのうちのＰ１～４が主柱穴である。炉跡は床面中央部よりやや北側に設けられており、東西方向に長い楕円形を呈する。規模は東西径0.53m、南北径0.86m、深さ0.24mで内部は灰で充填されていた。また、炉が構築されている２層上面が遺構機能時の床面、以下が加工時の堆積と推定される。遺物は古墳時代前期前半（布留式古相）に比定される古式土師器が少量出土している。２点（107・108）を図化した。107は精製品の小形鉢（鉢Ｇ1）である。約1/2が残存しており、口径11.8cm、器高6.5cmを測る。108は椀形の杯部を有する高杯（高杯Ｃ）で脚部の上位以下を欠く。杯部は完存しており、外面の器面調整は横位のヘラミガキで内面は横位の密なヘラミガキの後、放射状ヘラミガキが行われている。遺構の帰属時期は古墳時代前期前半（布留式古相）であるため、ＳＩ402と同時期に存在していたようである。

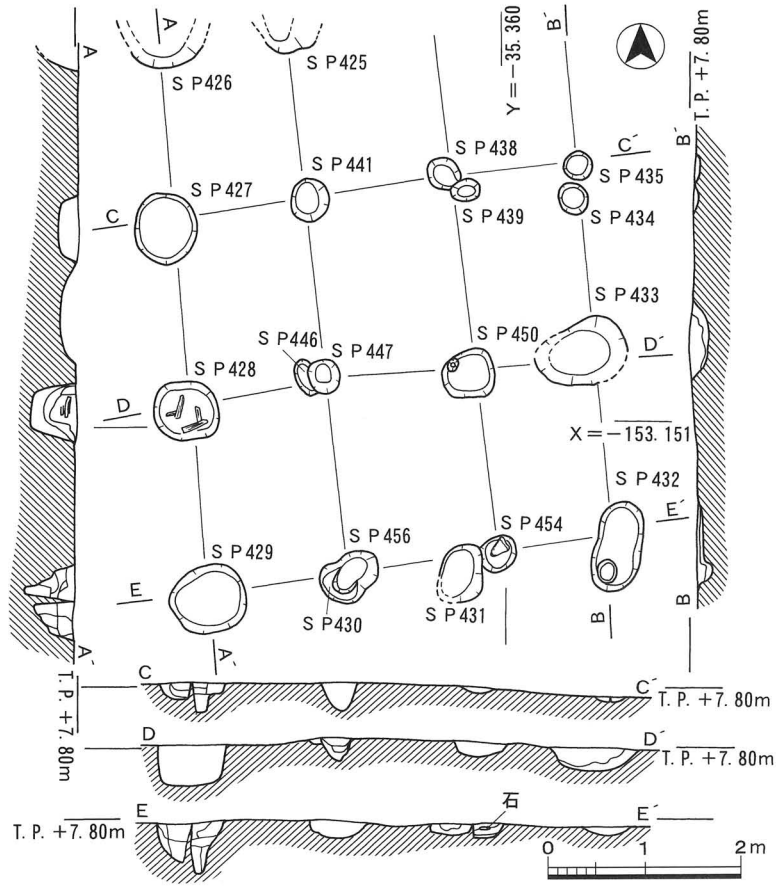


第33図　ＳＩ403出土遺物実測図

掘立柱建物（ＳＢ）

ＳＢ401（第34図、図版九）

調査区北西部の２・３ＡＢ地区で検出した。北端は削平されており全容は不明である。検出部分では東西３間（4.3m）、南北３間（5.8m）を測る。桁行（南北）方向の柱間が約1.9m、梁間（東西）方向の柱間が1.5m前後であるが、東端の柱間幅が1.25m前後を測るためこの部分が庇であると推定される。棟筋の柱穴は床束の跡と推定されるため、東庇を持つ床張の南北棟建物が想定できる。主軸方向はＮ５°Ｗで検出部分の床面積は約24.9㎡を測る。柱穴の掘方形状は円形ないしは楕円形で、西端の南北ラインの柱穴がやや大きい傾向がある。その内、礎板を検出したものがＳＰ426・428、根石を検



第34図　ＳＢ401平断面図（Ｓ＝1/80）

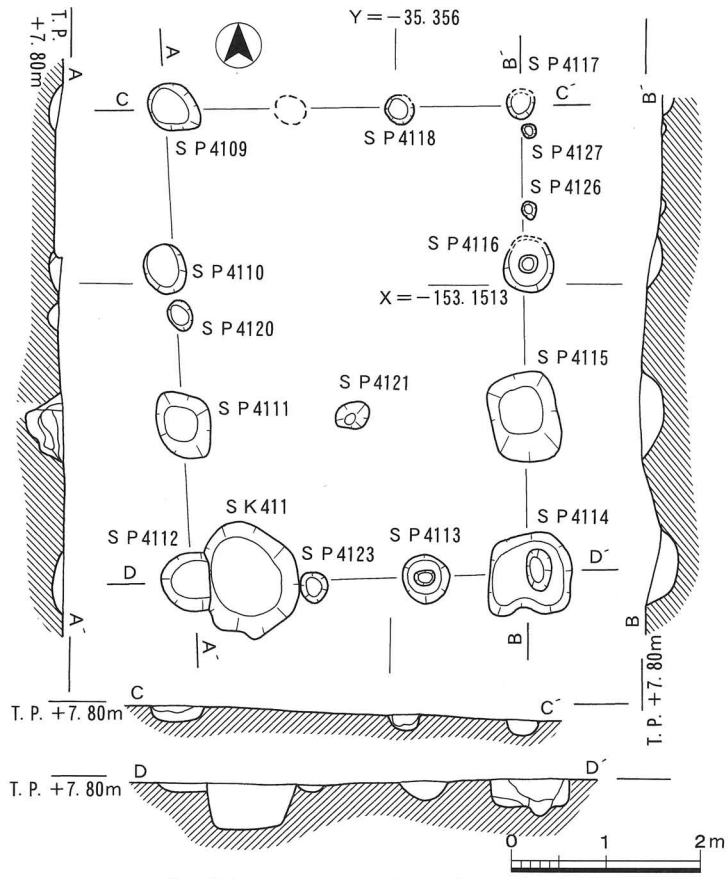
出したものがＳＰ454である。他にも柱穴が多く存在しており、重複する建物があった可能性があると思われる。周辺遺構との関連から、遺構の帰属時期は古墳時代前期後半(布留式新相)が推定される。

ＳＢ402（第35図、図版一〇）

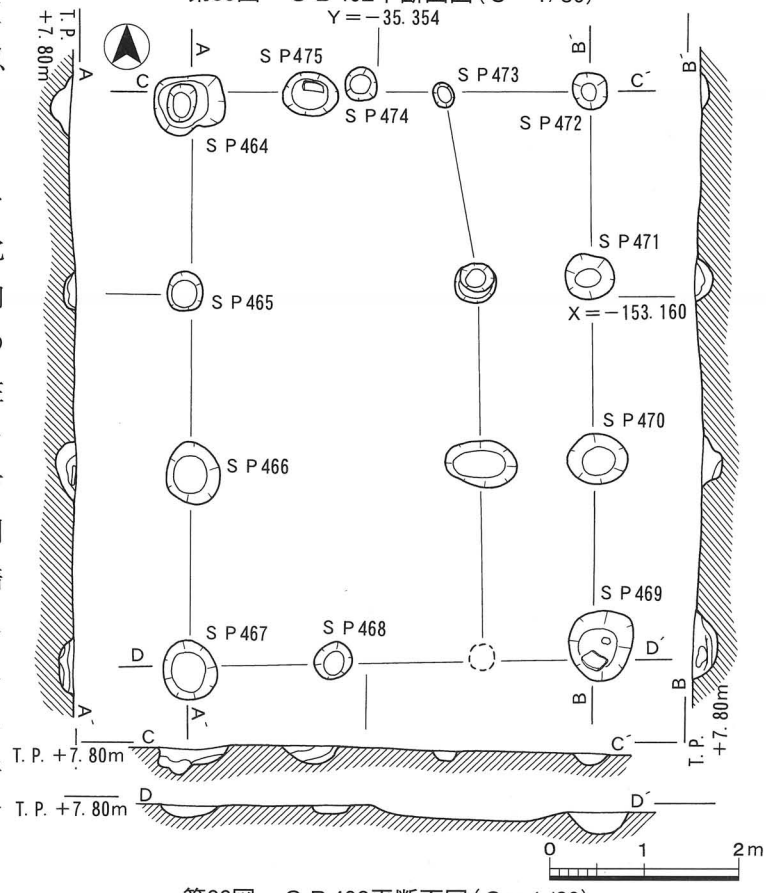
ＳＢ401の南東部で検出した。東西３間(3.5m)、南北３間(5.0m)を測る南北棟建物である。桁行(南北)方向の柱間が約1.6m、梁間(東西)方向の柱間1.2mを測る。主軸方向はＮ４°Ｗで床面積は10.5㎡を測る。柱穴の掘方形状は円形ないしは隅丸方形で不揃いである。なおＳＰ4111とＳＰ4115の中間付近に柱痕を検出したＳＰ4121が存在しており、建物内を仕切るためのものであった可能性がある。なお、南西隅にあたるＳＰ4112が古墳時代前期後半(布留式新相)の遺物が出土したＳＫ411を切ることから構築時期はそれ以降が想定される。

ＳＢ403（第36図、図版一〇）

ＳＢ402の南に位置する。ＳＩ402を切っている。東西３間（3.5m)、南北３間(4.2m)を測る。桁行(南北)方向の柱間が約2.0m、梁間（東西）方向の柱間が1.4～1.5mであるが、東端の柱間幅が1.2m前後を測るため、東庇を持つ南北棟建物が想定できる。主軸方向はＮ４°Ｗで床面積は14.7㎡を測る。柱穴の掘方形状は円形ないしは楕円形である。そのうち、礎板を検出したものがＳＰ466・475、根石を検出したものがＳＰ469である。構築時期については、主軸方向や柱間の数値が共通するＳＢ401と同時期の古墳時代前期後半(布留式新相)が推定される。



第35図　ＳＢ402平断面図（Ｓ＝1/80）



第36図　ＳＢ403平断面図（Ｓ＝1/80）

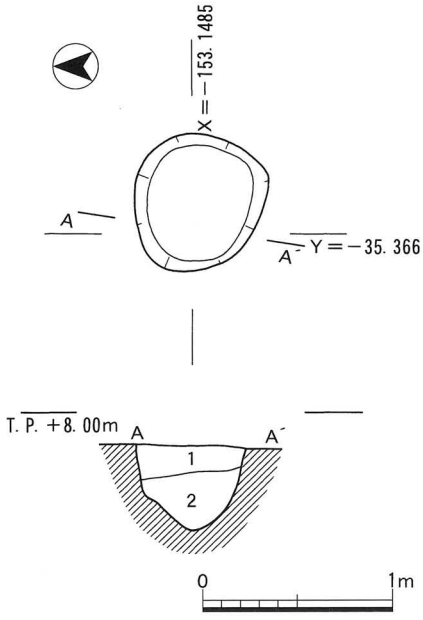
井戸（ＳＥ）

ＳＥ401（第37図）

３Ａ地区で検出した。不整円形を呈するもので。東西径0.73m、南北径0.71m、深さ0.46mを測る。埋土は２層から成る。遺物は古式土師器類が極少量出土している。全て細片化しており、判然としない点があるが、概ね古墳時代前期後半（布留式新相）を中心とするものと推定される。

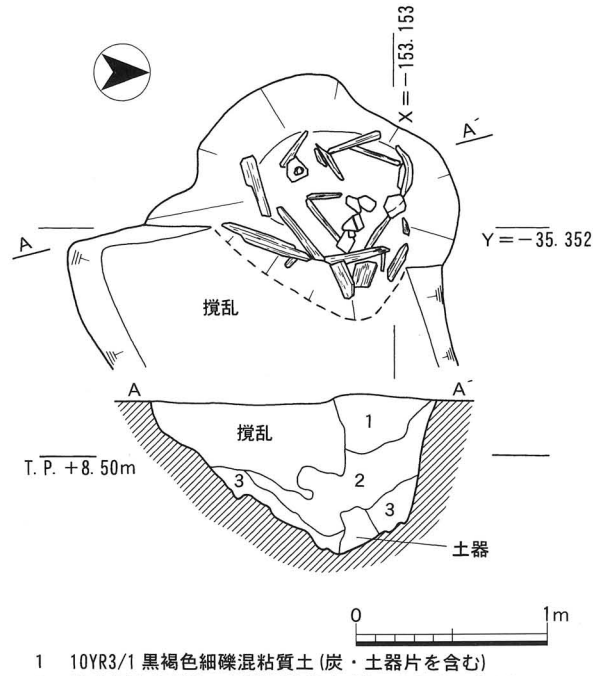
ＳＥ402（第38～40図、図版一一・一九・二〇）

２Ｂ地区で検出した。東部が撹乱により削平を受けている。不整円形を呈するものと推定され、検出部分で東西幅1.26m、南北幅1.63m、深さ0.84mを測る。埋土は３層で、最下層からは木材片が多量に出土している。土器類についても最下層部分を中心に古墳時代前期後半（布留式新相）に比定される古式土師器類が多数出土しており、完形品を含む比較的良好な状態のものが含まれている。古式土師器31点（109～139）を図化した。109・110は小形丸底壷である。109は口頸部を欠く。やや雑な作りのもので、体部の大半はヘラケズリの後、乱方向のハケメが施されている。110がほぼ完形で口径9.15cm、器高10.0cm、体部最大径10.35cmを測る。体部最大径が口径を凌駕する精製の小形壷で、（小形壷Ｂ5）に分類される。焼成は良好で赤褐色を呈する。112～124は布留式甕である。形式的には、布留式甕（甕Ｆ2）に分類される。全容が知り得た121～124では、体部が球形の121～123と長胴形の124がある。体部外面の器面調整はハケが多用されている。121の体部外面の上位には、ヘラ先による３つの刺突文が施されている。体部内面は屈曲部のやや下方にヘラケズリが及んでおり、体部中位から底部にかけて指頭圧痕が残る。胎土については、非生駒西麓産を使用するのが大半を占めるが、118・122・124については角閃石を含む生駒西麓産の胎土が使用されている。125は口縁部下半に稜を持つもので、山陰系のものである。111・126は口縁端部が直口を呈するもので、５世紀代の長胴甕の祖形となる（甕Ｇ）に分類される。126は完形品で口径15.5cm、器高22.7cm、体部最大径22.5cmを測る。高杯は12点（127～138）である。杯部



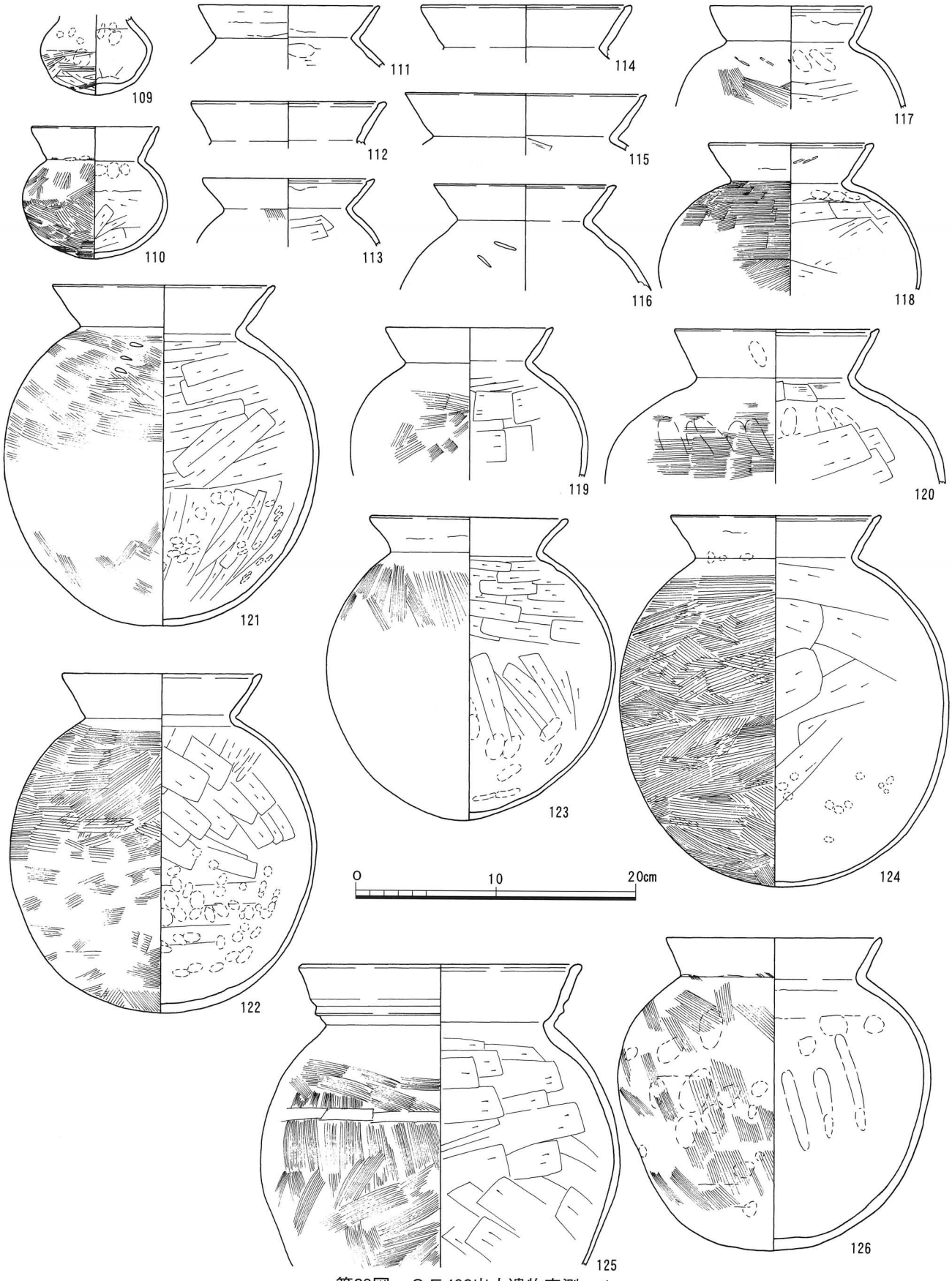
1　茶褐色砂質土
2　茶褐色粘質土

第37図　ＳＥ401平断面図（Ｓ＝1/40）

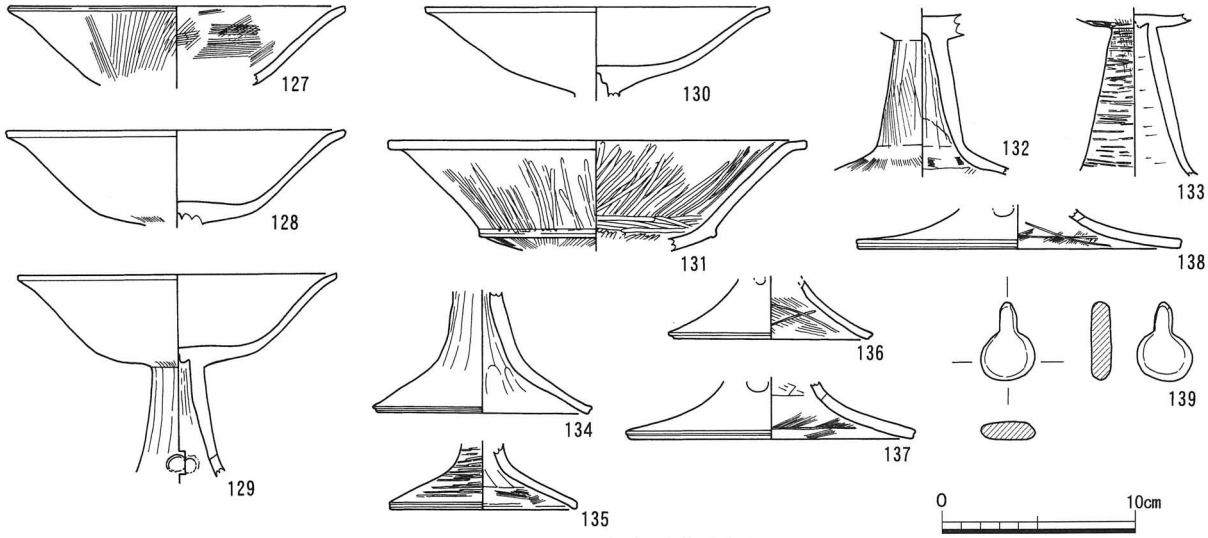


1　10YR3/1 黒褐色細礫混粘質土（炭・土器片を含む）
2　N2/0 黒色細粒砂～細礫混粘質土（炭・土器片を含む）
3　5BG4/1 暗青灰色粘土（木製品・自然木が多量出土）

第38図　ＳＥ402平断面図（Ｓ＝1/40）



第39図　ＳＥ402出土遺物実測－１



第40図　ＳＥ402出土遺物実測－２

が残存している127～131の内、127～129は丸味を持つ稜部分から口縁部が斜上方に伸びるもので、口縁部付近で外反する形態（高杯Ａ6）に分類される。127の杯部外面には縦方向のハケ調整が行われている。130は杯部が浅く稜がない（高杯Ａ7）である。131は明瞭な稜を有する大形の有稜高杯（高杯Ａ9）にあたる。杯部内外面は縦方向のヘラミガキ、杯部外面はハケ調整が行われている。132～138は脚部片である。133・135が精製品で横位に密なヘラミガキが行われている。139は用途不明の石製品である。鍵穴状の形状を呈する。自然石を利用しているが、突起部分の屈曲部外側（掲載図面の右の屈曲部）については、削る加工が行われている。法量は全長4.2cm、幅1.1cm、突出部長1.6cm、突出部幅0.95cmを測る。石材は砂岩である。遺物は布留Ⅳ期に比定される。遺構の帰属時期は古墳時代前期後半（布留式新相）である。

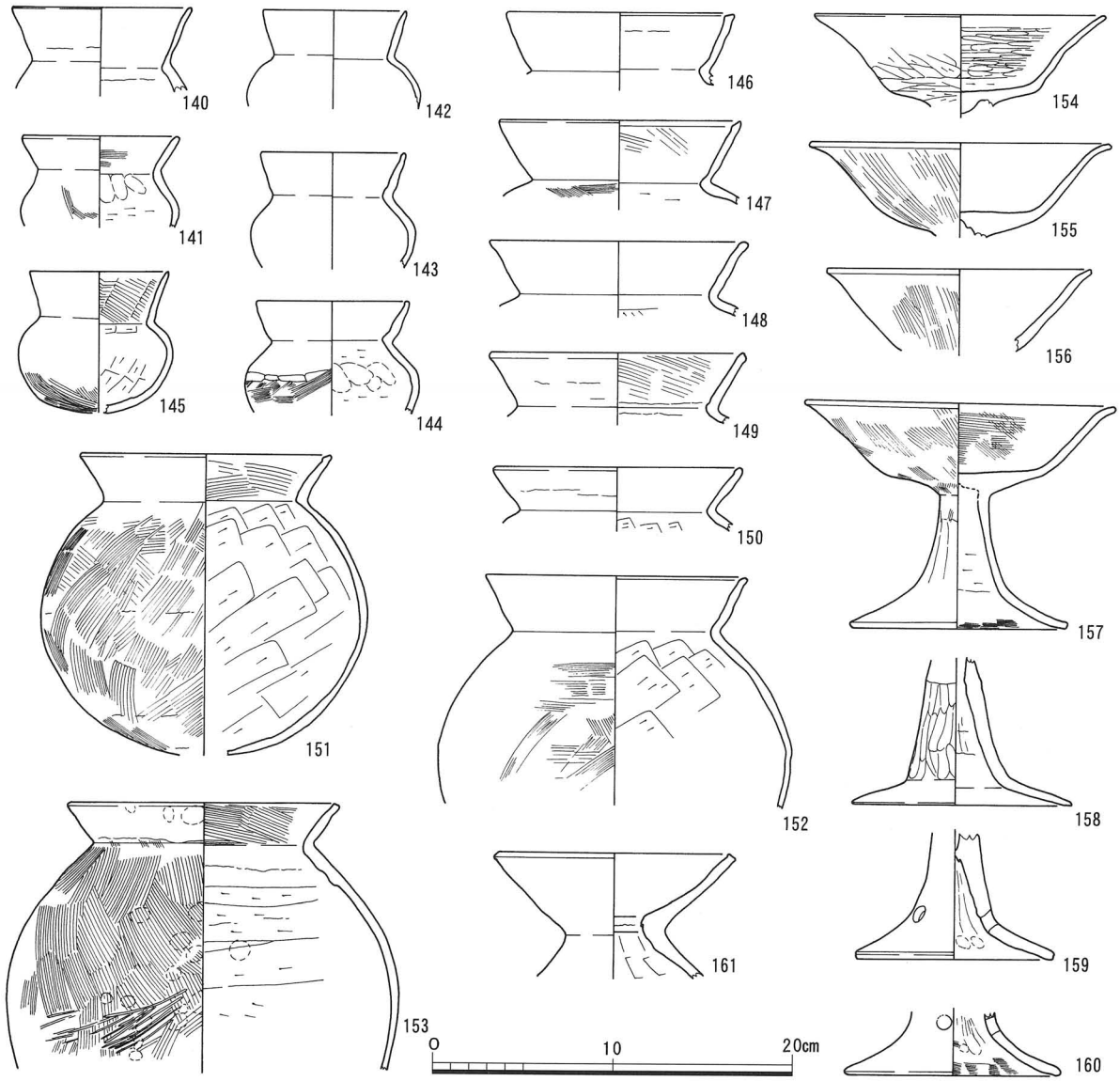
土坑（ＳＫ）

ＳＫ401（第42図）

調査区南西隅の１Ａ地区で検出した。中央部より南部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅1.12m、南北幅0.82m、深さ0.08mを測る。埋土はシルトを主体とする２層から成る。遺物は土師器の細片が極少量出土しているが、時期を明確にし得たものはない。

ＳＫ402（第41・42図、図版一二・二〇）

調査区南西隅の１Ａ地区で検出した。隅丸方形を呈するもので、東西幅1.3m、南北幅1.31m、深さ1.13mを測る。埋土は粘土質シルト～シルトを主体とする８層から成る。出土遺物は古墳時代前期後半（布留式新相）を中心とする古式土師器が多量出土している。古式土師器22点（140～161）を図化した。140～145は小形丸底壷（小形壷Ｂ5）である。145以外は底部を欠く資料である。体部最大径が口径を凌駕する精製および粗製の小形壷で、体部外面にはハケ調整が行われている。146～152は布留式甕である。146・147が（甕Ｆ2）、148～152が（甕Ｆ3）にあたる。153は口縁端部が外傾し小端面を持つもので甕（甕Ｇ）に分類される。154～160は高杯である。杯部が残る154～157では、稜が明瞭な154がやや古い形態を示すが、他は杯部が半球形を呈するもので、口縁端部



第41図　ＳＫ402出土遺物実測図

付近で強く外反して終わる形態を持つ（高杯Ａ7）に分類される。158～160は脚部である。161は鼓形器台（器台Ｃ2）である。古墳時代前期後半の布留Ⅳ期にあたる。

ＳＫ403（第42図）

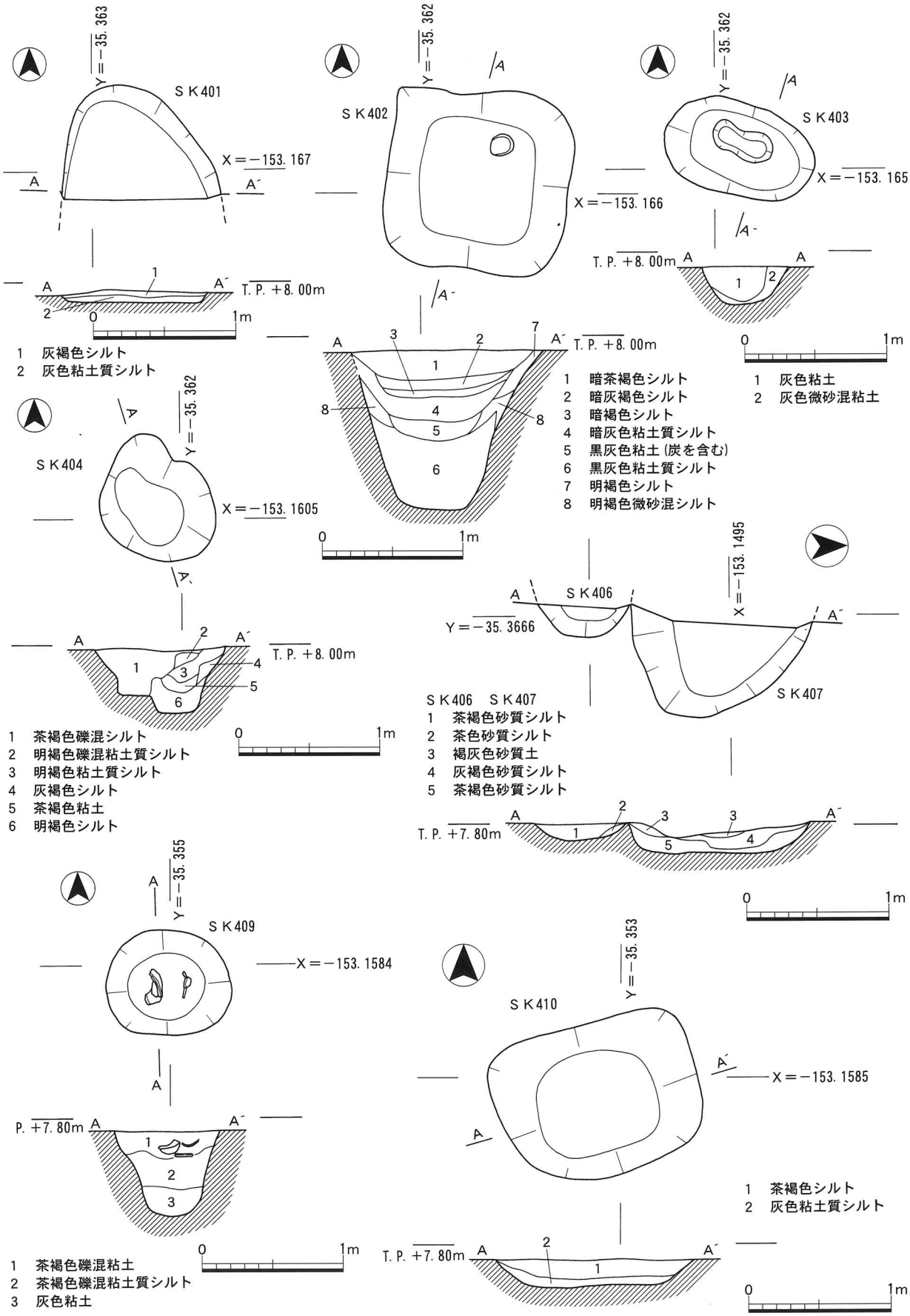
ＳＫ402の北に隣接している。東西方向に長い楕円形を呈するもので、東西径1.1m、南北径0.66m、深さ0.27mを測る。埋土は粘土を主体とする２層から成る。遺物は古式土師器の細片が極少量出土している。遺構の帰属時期は古墳時代前期（布留式期）のものであるが時期は限定できない。

ＳＫ404（第42図）

１・２Ａ地区で検出した。不整円形を呈するもので、東西径0.8m、南北径0.9m、深さ0.45mを測る。埋土は６層から成る。遺物は土師器片が極少量出土しているが、細片のため時期は不明である。

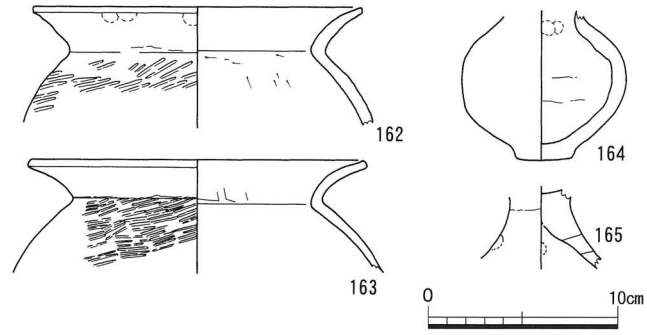
ＳＫ406（第42・43図）

調査区西端の２Ａ地区で検出した。西部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西長0.21m、南北長0.65m、深さ0.12mを測る。埋土は２層から成る。遺物は弥生土器・土師



第42図　ＳＫ401～404、ＳＫ406、ＳＫ407、ＳＫ409、ＳＫ410平断面図(Ｓ＝1/40)

器・須恵器の細片が少量出土している。１点(162)を図化した。162はＶ様式甕の口縁部から体部上半の細片で、体部外面に右上がりのやや太い単位のタタキが施されている。図化した遺物は弥生時代後期のものであるが、そのほかに古墳時代中期の遺物が出土していることから、遺構の帰属時期は古墳時代中期が推定される。



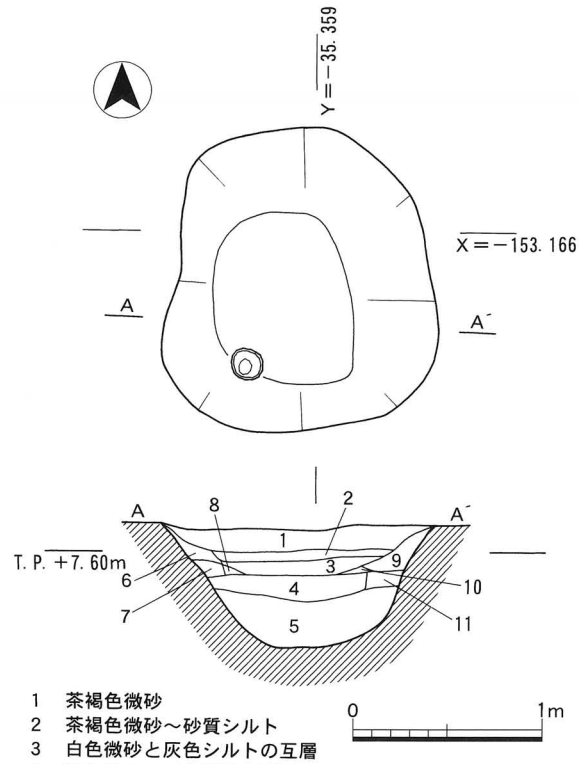
第43図　ＳＫ406（162）、ＳＫ407（163）、ＳＫ412（164・165）出土遺物実測図

ＳＫ407（第42・43図、図版一二）

ＳＫ406の北に隣接している。ＳＫ406と同様、西部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.68m、南北幅1.3m、深さ0.2mを測る。埋土は３層から成る。遺物は弥生時代後期から古墳時代前期に比定される弥生土器･古式土師器が少量出土している。１点(163)を図化した。163はＶ様式甕の口縁部から体部上位の細片である。遺構の帰属時期は古墳時代初頭である。

ＳＫ408（第44・45図、図版一二・二一）

１Ｂ地区で検出した。不整円形を呈するもので、東西径1.34m、南北径1.61m、深さ0.65mを測る。断面形状は逆台形で、埋土は11層から成る。出土遺物は５層を中心に古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される古式土師器が少量出土している。古式土師器11点(166～176)を図化した。166は小形丸底壷(小形壷Ｂ3)である。口径10.9cm、器高6.9cm、体部最大径7.6cmを測る。167も体部を欠くが166と同様小形丸底壷と推定される。168～171は甕の細片である。168・169が庄内式甕。170は不明。171はその形状や体部外面にハケを多用することから布留式影響の庄内式甕である(甕Ｄ)に分類される。173～175は精製の高杯の(高杯Ａ4)にあたる。173・174が杯部、175は裾部の破片である。176は鼓形器台(器台Ｃ2)の脚部である。古墳時代前期前半の布留Ⅱ期に比定される。

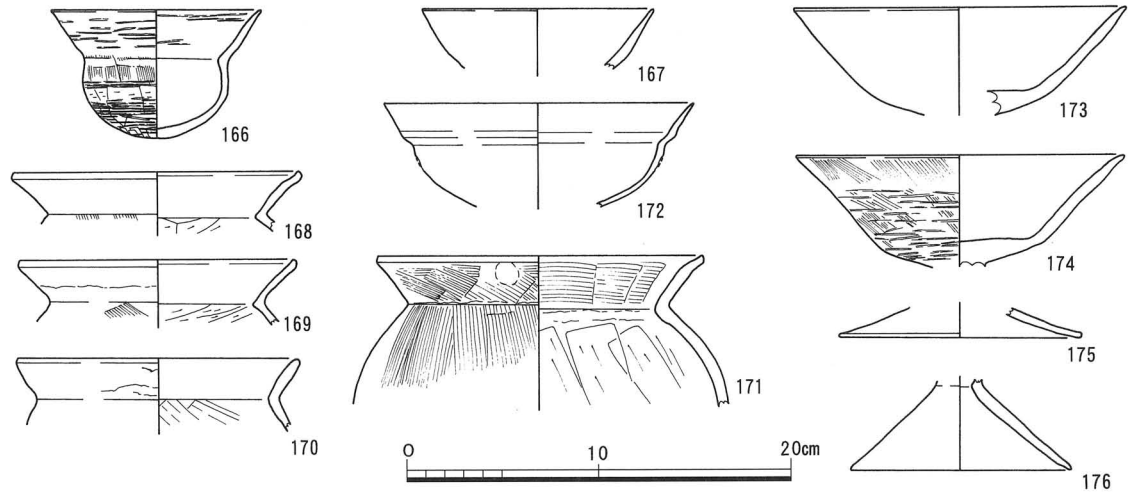


1　茶褐色微砂
2　茶褐色微砂～砂質シルト
3　白色微砂と灰色シルトの互層
4　灰色粘土と灰色微砂の互層
5　青灰色粘土に灰色微砂と炭を少量含む
6　茶褐色微砂と茶褐色粘土の互層
7　茶褐色微砂～砂質シルトと茶褐色粘土の互層
8　灰色粘土
9　茶褐色シルトと明褐色～灰色粘土質シルトの互層
10　明褐色粘土質シルトと灰色粘土の互層
11　明褐色粘土質シルト(炭を含む)

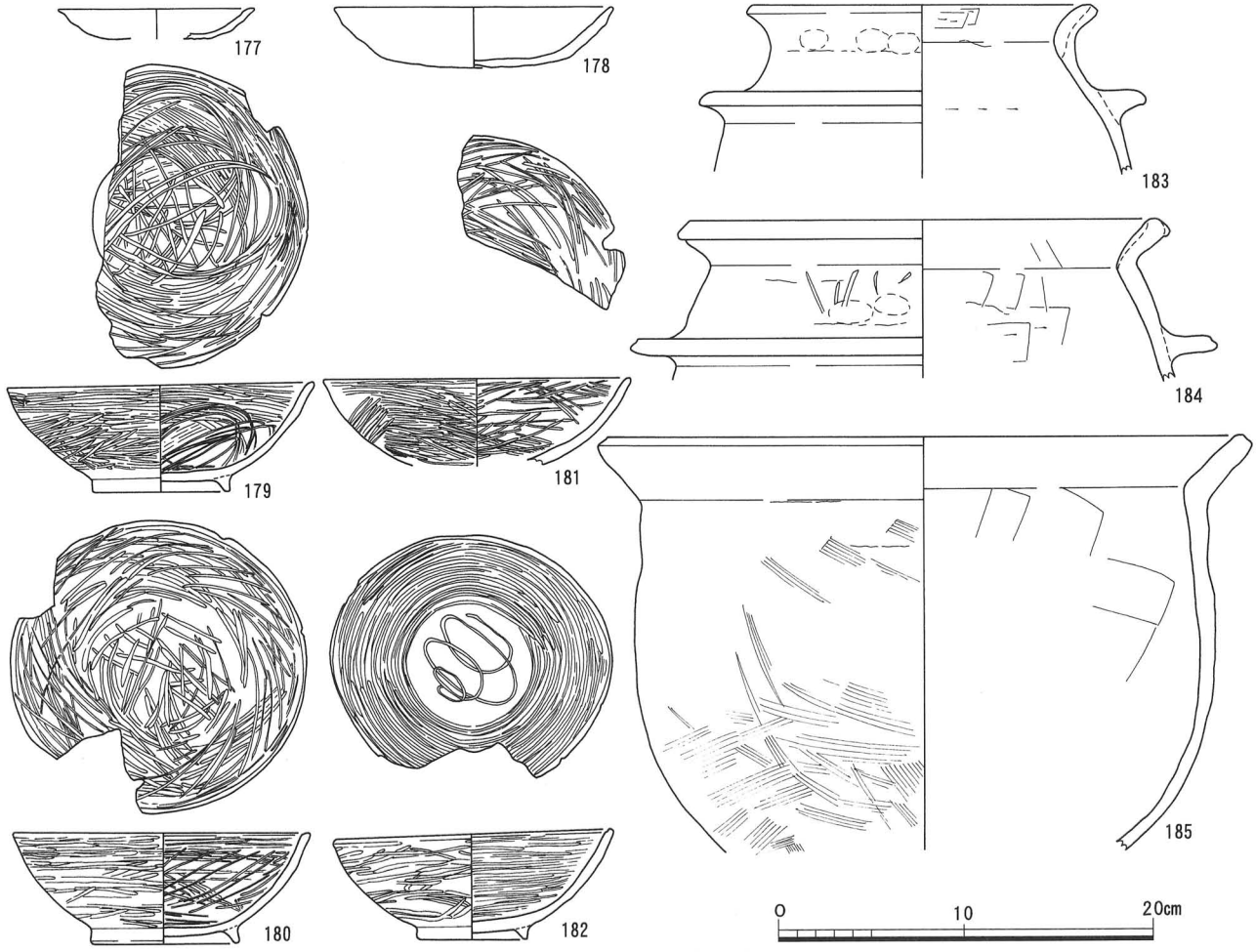
第44図　ＳＫ408平断面図(Ｓ＝1/40)

ＳＫ409（第42・46図、図版一三・二一）

２Ｂ地区で検出した。不整円形を呈するもので、東西径0.88m、南北径0.75m、深さ0.60mを測る。埋土は粘土質シルト～粘土の３層から成る。遺物は平安時代後期に比定される土師器・瓦器が少量出土している。９点(177～185)を図化した。177は土師器小皿で復元口径10.5cm。178は



第45図　ＳＫ408出土遺物実測図



第46図　ＳＫ409出土遺物実測図

土師器中皿で口径15.0cm、器高3.3cmを測る。179～182は瓦器椀である。179～181は和泉型瓦器椀である。体部が深目で重厚な高台が付く瓦器椀で、和泉型瓦器椀の最古形式にあたる。法量は179が口径16.5cm、器高5.9cm、高台径7.4cm、高台高0.9cm。180が口径15.9cm、器高6.0cm、高台径7.9cm、高台高1.0cmを測る。尾上編年のⅠ－２期(11世紀末)に比定される。182は口縁部端部内面に沈線が廻る大和型の瓦器椀である。体部内面にレコード状ヘラミガキ、見込みに渦巻き状

ヘラミガキが施されている。川越編年のⅠ－Ｃ型式(11世紀末)に比定される。183・184は土師器羽釜である。森島編年の河内産Ａ型式(11世紀末)に比定される。185は土師器甕である。遺構の帰属時期は平安時代後半(11世紀末)である。出土遺物からみて本来の構築面は第３層上面が推定される。

ＳＫ410（第42図）

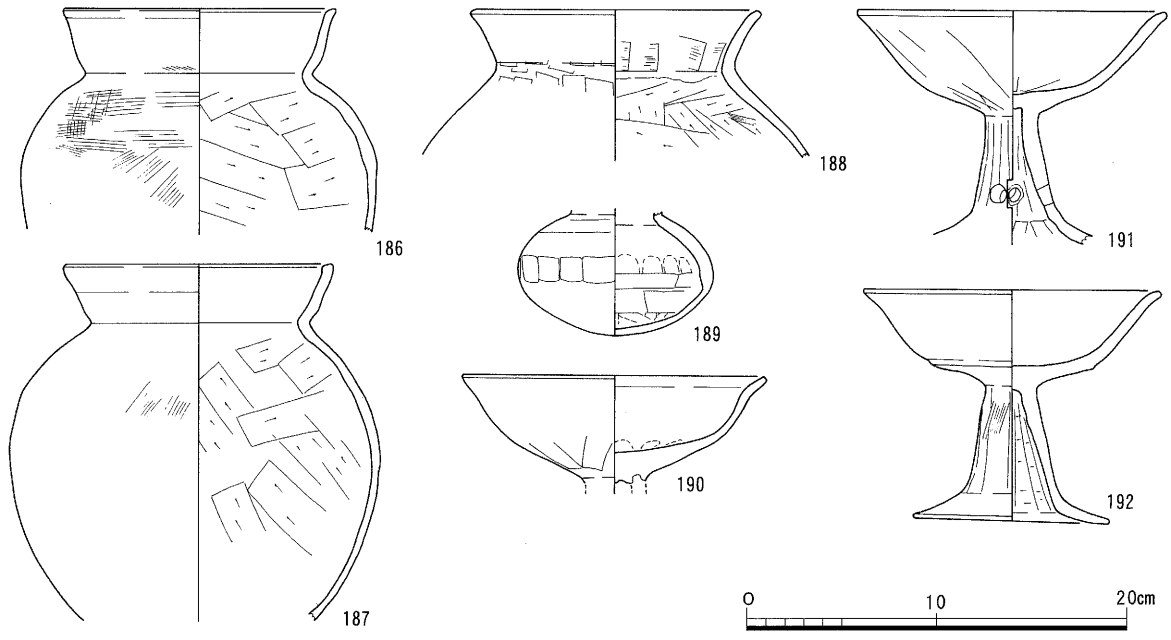
２Ｂ地区で検出した。ＳＰ4106を切っている。隅丸の長方形を呈するもので、東西幅1.4m、南北幅1.1m、深さ0.18mを測る。埋土は粘土質シルト～シルトの２層から成る。遺物は弥生土器・古式土師器が出土している。遺構の帰属時期は古墳時代初頭(庄内式期)である。

ＳＫ411（第47・48図、図版一三・二二）

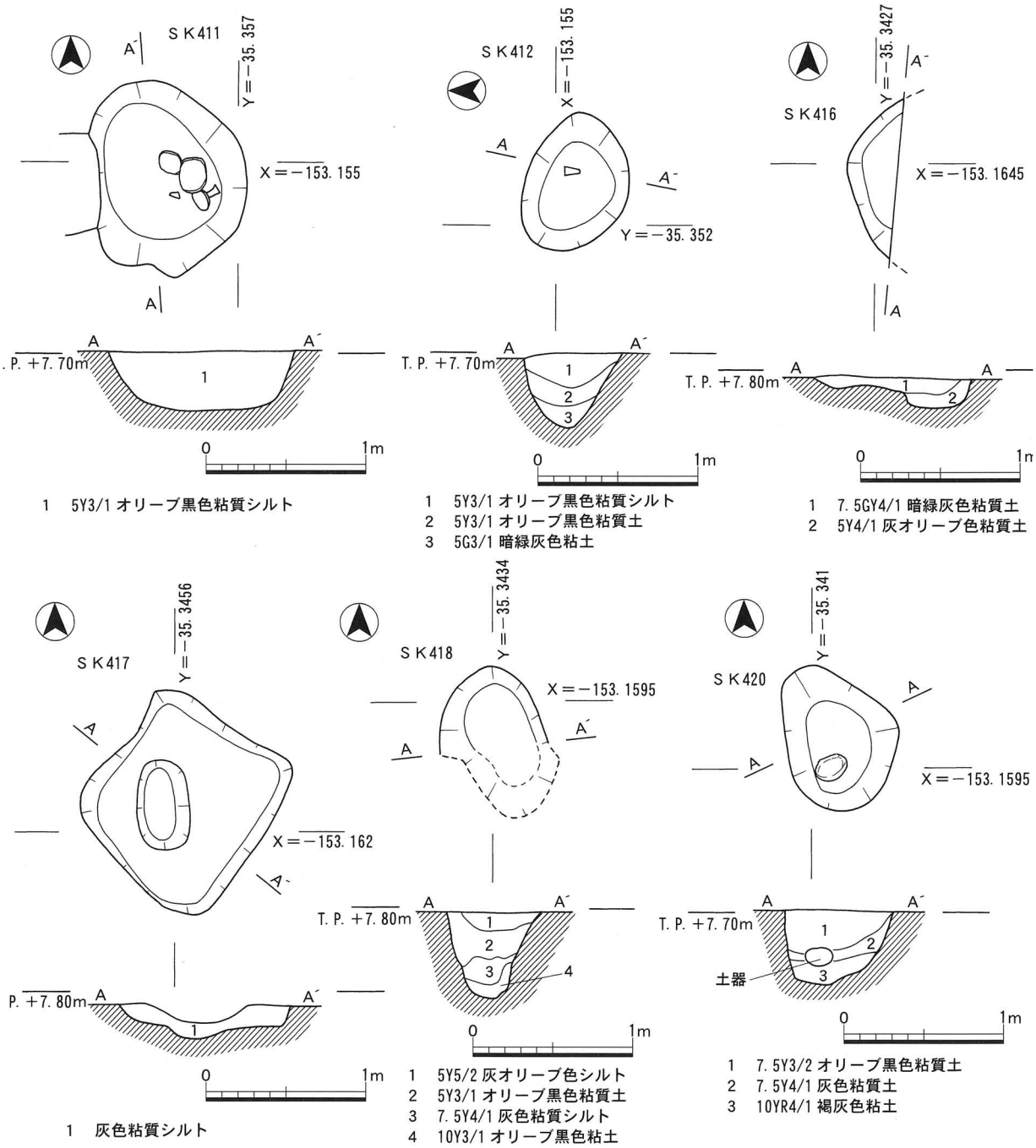
２Ｂ地区で検出した。西端がＳＰ4112に切られている。不整円形を呈するもので東西径0.92m、南北径1.22m、深さ0.37mを測る。埋土は5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルトの単一層である。遺物は古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される古式土師器が少量出土している。７点(186～192)を図化した。186は口縁部が内傾する以外は布留式甕の属性を備えている。187は布留式甕で(甕Ｆ3)に分類される。粗製品で胎土中に0.1～４㎜大の長石粒が多量に出土している。188は直口の口縁端部を有する(甕Ｇ)である。189は小形丸底壷である。口頸部を欠く。190～192は高杯である。杯部が椀形を呈し、口縁部付近で小さく外反する190が(高杯Ａ7)、191が(高杯Ａ6)、明瞭な稜を有する192が(高杯Ａ9)に分類される。古墳時代前期後半(布留式新相)の布留Ⅳ期にあたる。

ＳＫ412（第43・48図、図版二一）

２Ｂ地区で検出した。東西方向に長い楕円形を呈するもので、東西径0.85m、南北径0.65m、深さ0.47mを測る。埋土は３層から成る。遺物は弥生土器が少量出土している。２点(164・165)を図化した。164は小形壷である。口頸部を欠くが以下は完存している。165は高杯の脚部である。脚部上位から「ハ」の字に裾部が開く形状で小形の高杯のものと推定される。スカシ孔は三方に穿たれている。時期は弥生時代後期末が推定される。



第47図　ＳＫ411出土遺物実測図



第48図　ＳＫ411、ＳＫ412、ＳＫ416～418、ＳＫ420平断面図（Ｓ＝1/40）

ＳＫ416（第48図）

１Ｃ地区で検出した。東部は撹乱を受けている。検出部分で東西幅0.33m、南北幅1.05m、深さ0.18mを測る。埋土は粘質土を主体とする２層から成る。遺物は古式土師器の細片が極少量出土しているが、時期を明確にしたものはない。

ＳＫ417（第48図）

１Ｃ地区で検出した。方形を呈するもので、南部でＳＤ410を切っている。東西幅1.08m、南北幅1.1m、深さ0.20mを測る。埋土は灰色粘質シルトの単一層である。遺物は弥生土器の細片が極少量出土している。遺構の帰属時期は弥生時代後期が推定される。

ＳＫ418（第48図）

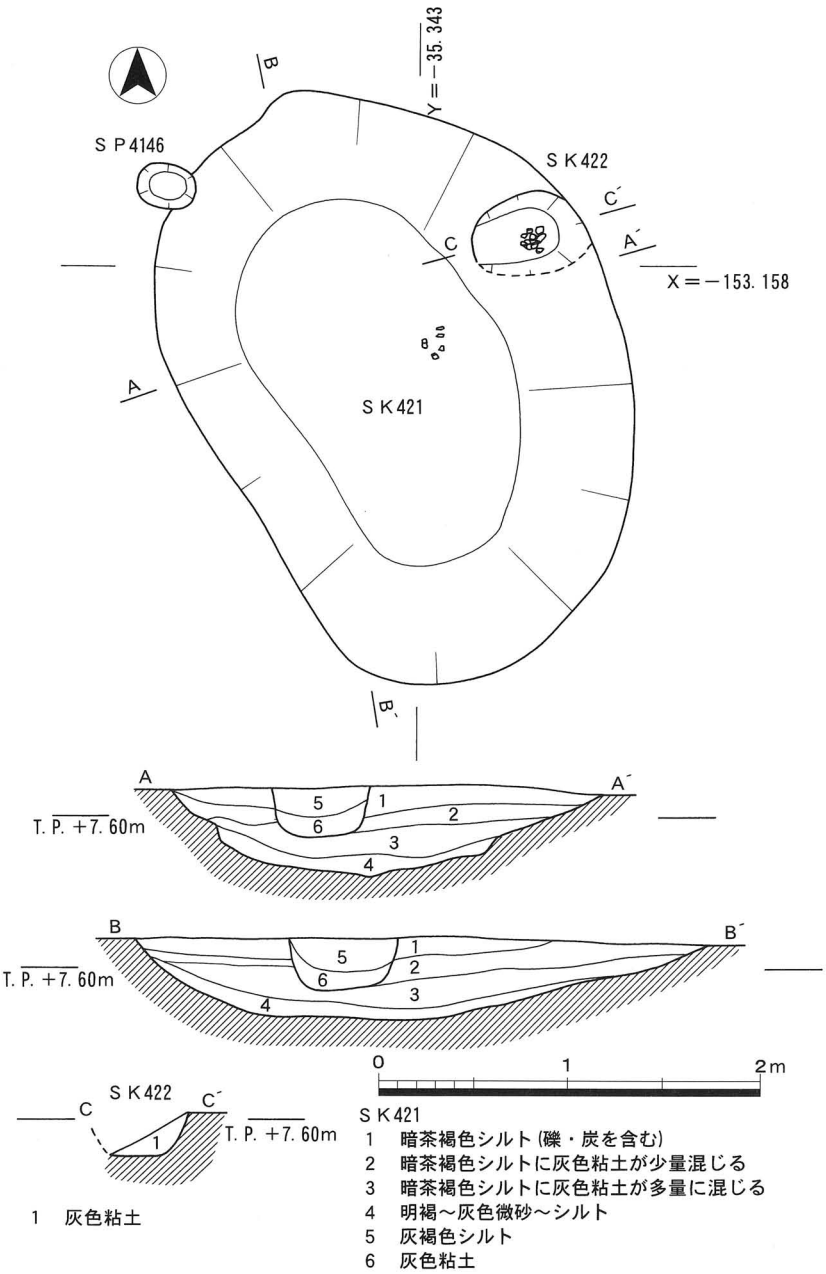
ＳＫ421の南に隣接している。楕円形を呈するもので、南部は撹乱により上部が削平を受けている。検出部分で東西径0.68m、南北径0.95m、深さ0.55mを測る。埋土は４層から成る。遺物は土師器・須恵器の細片が極少量出土したが、時期を明確にし得たものはない。

ＳＫ420（第48・51図、図版一三・二二）

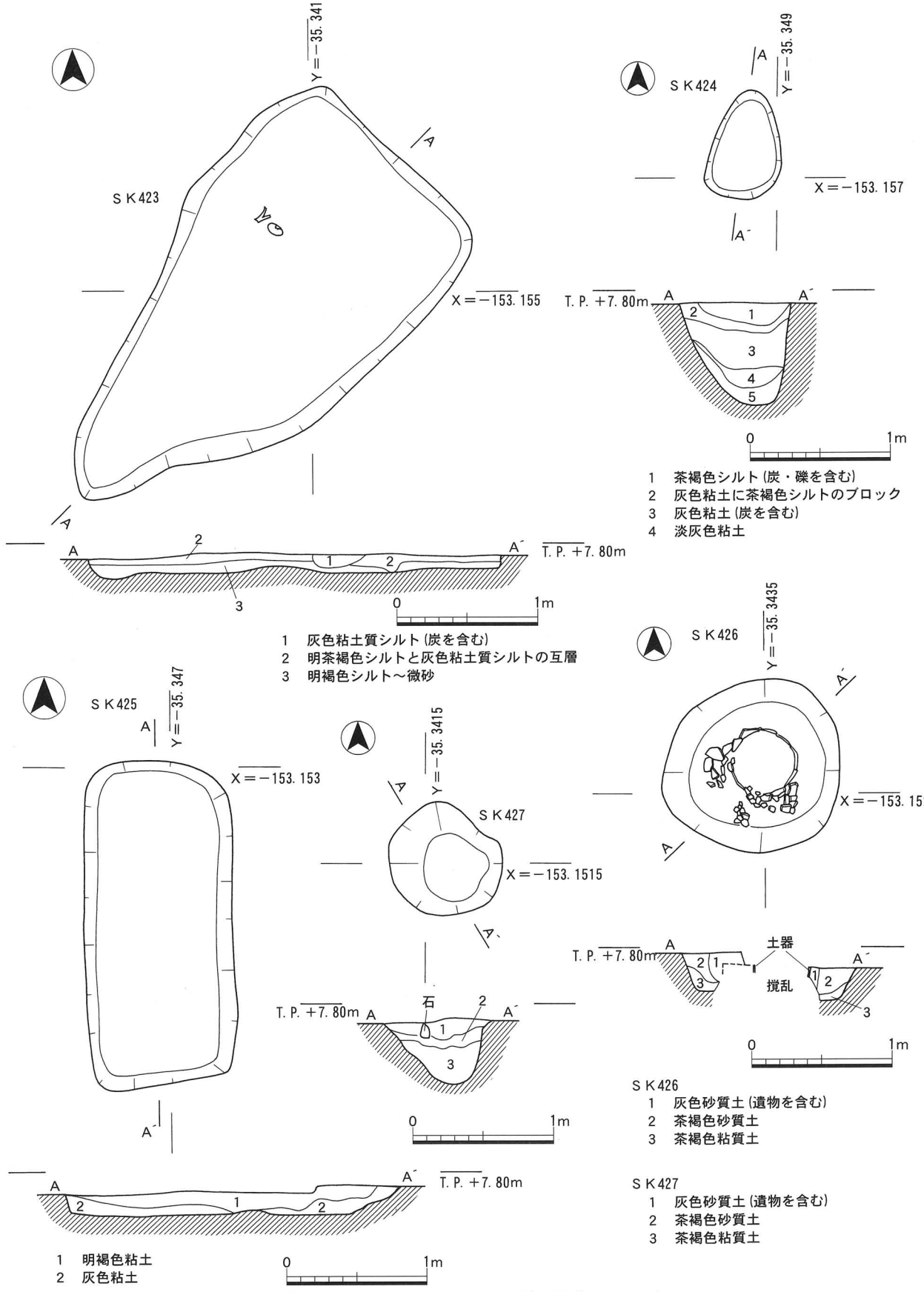
１・２Ｃ地区で検出した。不整楕円形を呈するもので、東西径0.72m、南北径0.89m、深さ0.47mを測る。埋土は３層が堆積している。遺物は２層から古墳時代前期後半（布留式新相）に比定される古式土師器が少量出土している。２点（193・194）を図化した。193は完形品の複合口縁壺（複合口縁壺Ｅ２）である。全体に丁寧な作りで、口縁部から体部にかけて化粧土が塗布されている。球形の体部に二段に屈曲して口縁部が直線的に伸びる。口径10.5cm、器高21.4cm、体部最大径20.4cmを測る。194は布留式甕の体部上半以下が残存している。布留Ⅳ期。遺構の帰属時期は古墳時代前期後半（布留式新相）に比定される。

ＳＫ421（第49・51図、図版一四・二二）

２Ｃ地区で検出した。ＳＫ422を切りＳＰ4146に切られている。楕円形を呈するもので、東西径2.5m、南北径3.03m、深さ0.48mを測る。断面形状は半円形である。埋土は後の遺構埋土である５・６層を除けば４層（１～４層）から成る。出土遺物は弥生土器・須恵器が少量出土している。５点（195～199）を図化した。195・196はＶ様式甕である。195が口縁部片、196が底部片である。197は中形鉢である。1/2が残存している。口径23.2cm、器高10.0cm、底径3.7cmを測る。底部は小さく突出する平底で裏面はドーナツ底である。198



第49図　ＳＫ421、ＳＫ422平断面図（Ｓ＝1/40）



第50図　ＳＫ423～ＳＫ427平断面図（Ｓ＝1/40）

は高杯の脚部である。199は５世紀代の須恵器甕である。

ＳＫ422（第49図）

２Ｃ地区で検出した。ＳＫ421により上部が切られている。東西方向に長い楕円形で、東西径0.6m、南北径0.4m、深さ0.2mを測る。埋土は灰色粘土の単一層である。遺物は古墳時代前期後半（布留式新相）に比定される古式土師器が少量出土している。１点(200)を図化した。200は口縁部が「く」の字に屈曲する大形甕である。口径18.7cmを測る。甕Ｇに分類されるもので、古墳時代前期後半の布留Ⅳ期に比定される。

ＳＫ423（第50図）

２Ｃ・Ｄ地区で検出した。不定形を呈するもので、長辺3.29m、短辺1.84mを測る。底部は水平で、深さは浅く0.15m前後を測る。埋土は３層から成る。遺物は古式土師器・石材等の細片が少量出土したが、時期を明確にし得たものはない。

ＳＫ424（第50図）

ＳＩ403の西に隣接している。南北方向に長い楕円形を呈するもので、東西径0.5m、南北径0.78m、深さ0.74mを測る。埋土は５層から成る。遺物は古墳時代前期後半（布留式新相）に比定される古式土師器が少量出土している。

ＳＫ425（第50図）

ＳＩ403の北に隣接している。隅丸の長方形を呈するもので、東西幅1.05m、南北幅2.35m、深さ0.16mを測る。埋土は粘土を主体とする２層から成る。遺物は古墳時代前期前半（布留式古相）に比定される布留式甕が少量出土している。

ＳＫ426（第50・51図、図版一四）

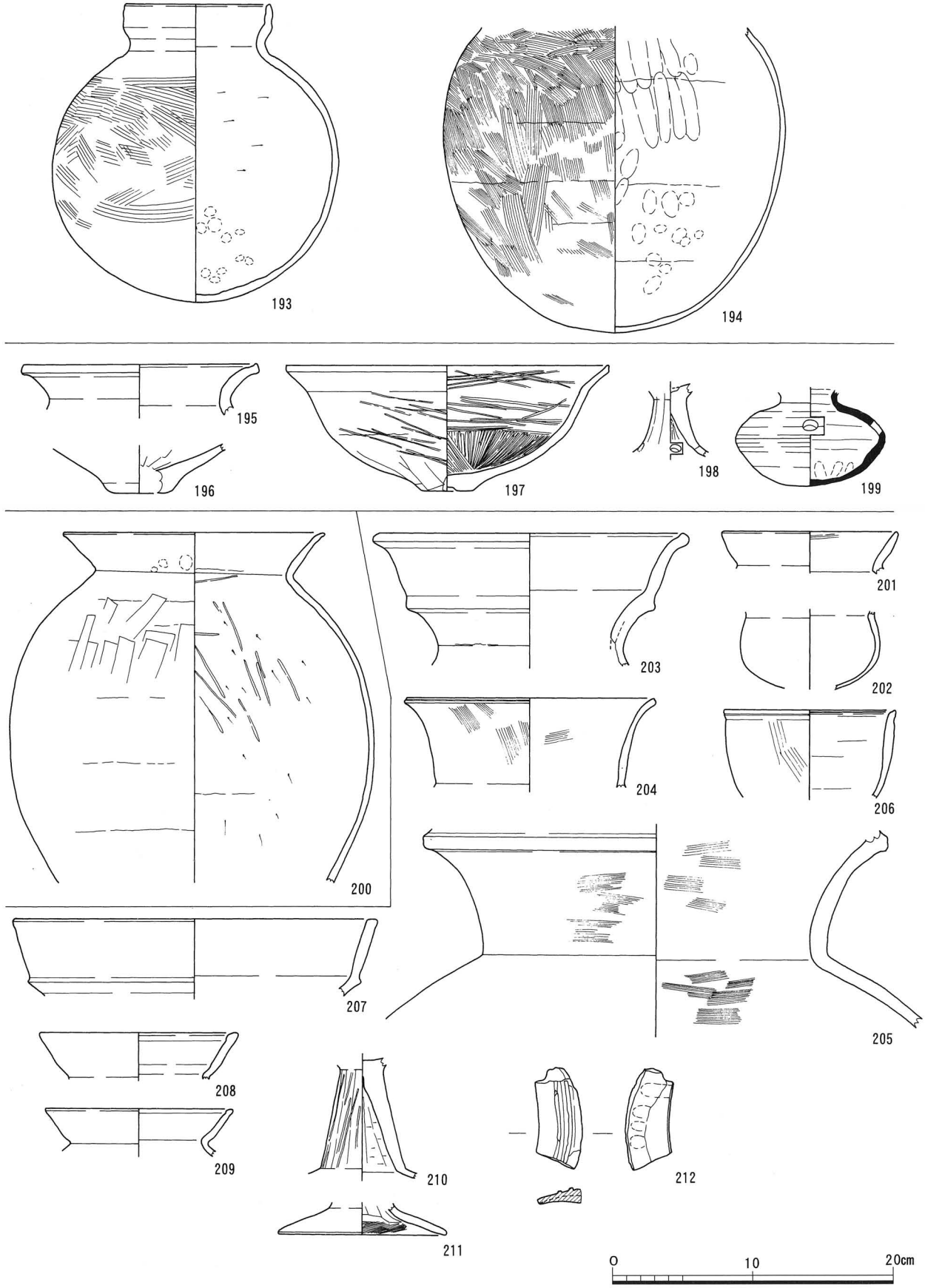
２Ｃ地区で検出した。不整円形を呈するもので、東西径1.26m、南北径1.24m、深さ0.37mを測る。埋土は２層から成る。出土遺物は古式土師器の細片が少量出土している。12点(201～212)を図化した。201・202は小形丸底壷である。201が体部、202が口縁部を欠く。203は大形の二重口縁壷である。頸部以下を欠く。204は大形の直口壷の口縁部である。205は大形の複合口縁壷（複合口縁壷Ｅ1）で口縁部を欠く。東部四国系と推定される。口頸部内面に黒色顔料が塗布されている。206は小形の鉢である。207は大形鉢の口縁部である。山陰系である。208・209は布留式甕（甕Ｆ2）の口縁部である。210・211は高杯の脚部。212は手焙形土器の覆部片である。覆部端面に粘土紐を弧状に２本巡らしている。東海系の手焙形土器である。古墳時代前期後半（布留式新相）に比定される。

ＳＫ427（第50図）

２Ｃ地区で検出した。不整円形を呈するもので、東西径0.8m、南北径0.82m、深さ0.48mを測る。埋土は３層から成る。遺物は古墳時代前期前半（布留式古相）に比定される布留式甕の細片が極少量出土している。

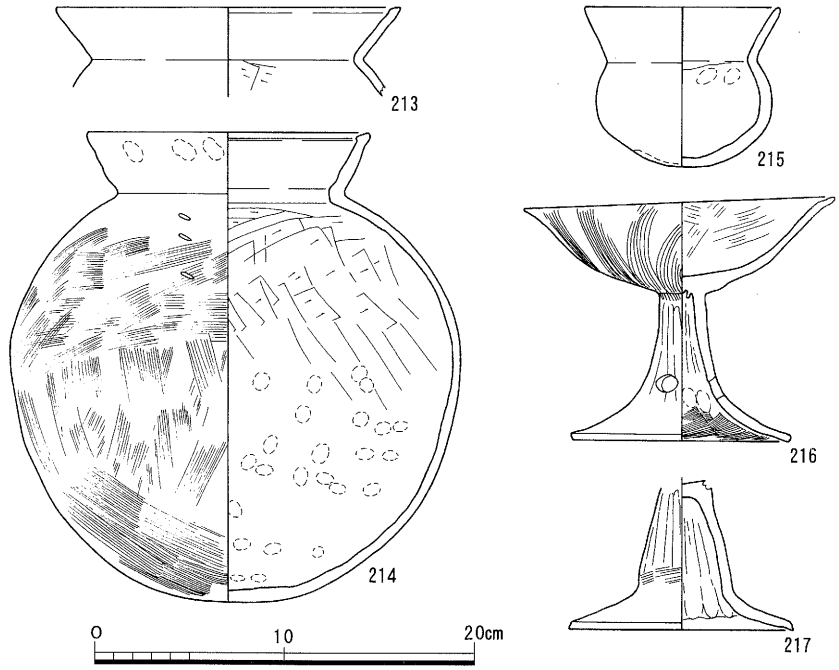
ＳＫ428（第52・54図、図版一四・二二・二三）

３Ｃ地区で検出した。不整円形を呈するもので東西径1.01m、南北径0.96m、深さ0.50mを測る。埋土は３層から成る。遺物は３層から古墳時代前期後半（布留式新相）に比定される古式土師器が極少量出土している。５点(213～217)を図化した。213・214は布留式甕（甕Ｆ3）である。214が完形品で、口径15.0cm、器高24.9cm、体部最大径23.7cmを測る。体部内面は上位から中位

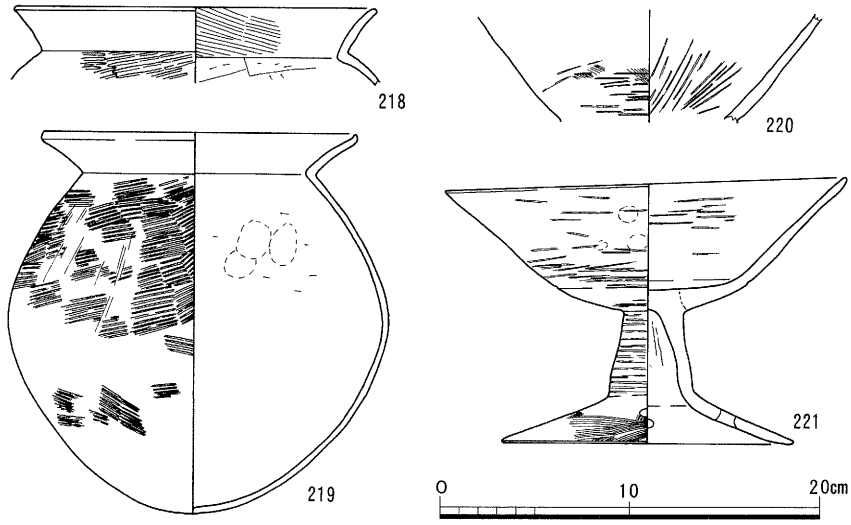


第51図　ＳＫ420（193・194）、ＳＫ421（195～199）、ＳＫ422（200）、ＳＫ426（201～212）出土遺物実測図

にかけて右上がりのヘラケズリ、以下は指頭圧痕が残る。体部外面は上位が右上がりのハケ、以下は縦方向、底部は左上がりのハケを施す。体部外面上位にヘラ先による圧痕が認められる。215は小形丸底壷（小形壷Ｂ4）である。色調は褐灰色で、実体鏡で角閃石の含有が認められる生駒西麓産である。216・217は高杯である。216はほぼ完形品である。口径16.5cm、器高13.0cm、裾径11.4cmを測る。杯部に稜が認められないタイプで、杯部外面にハケ調整が放射状に行われている。（高杯Ａ7）に分類される。217は脚部片である。古墳時代前期後半（布留式新相）に比定される。



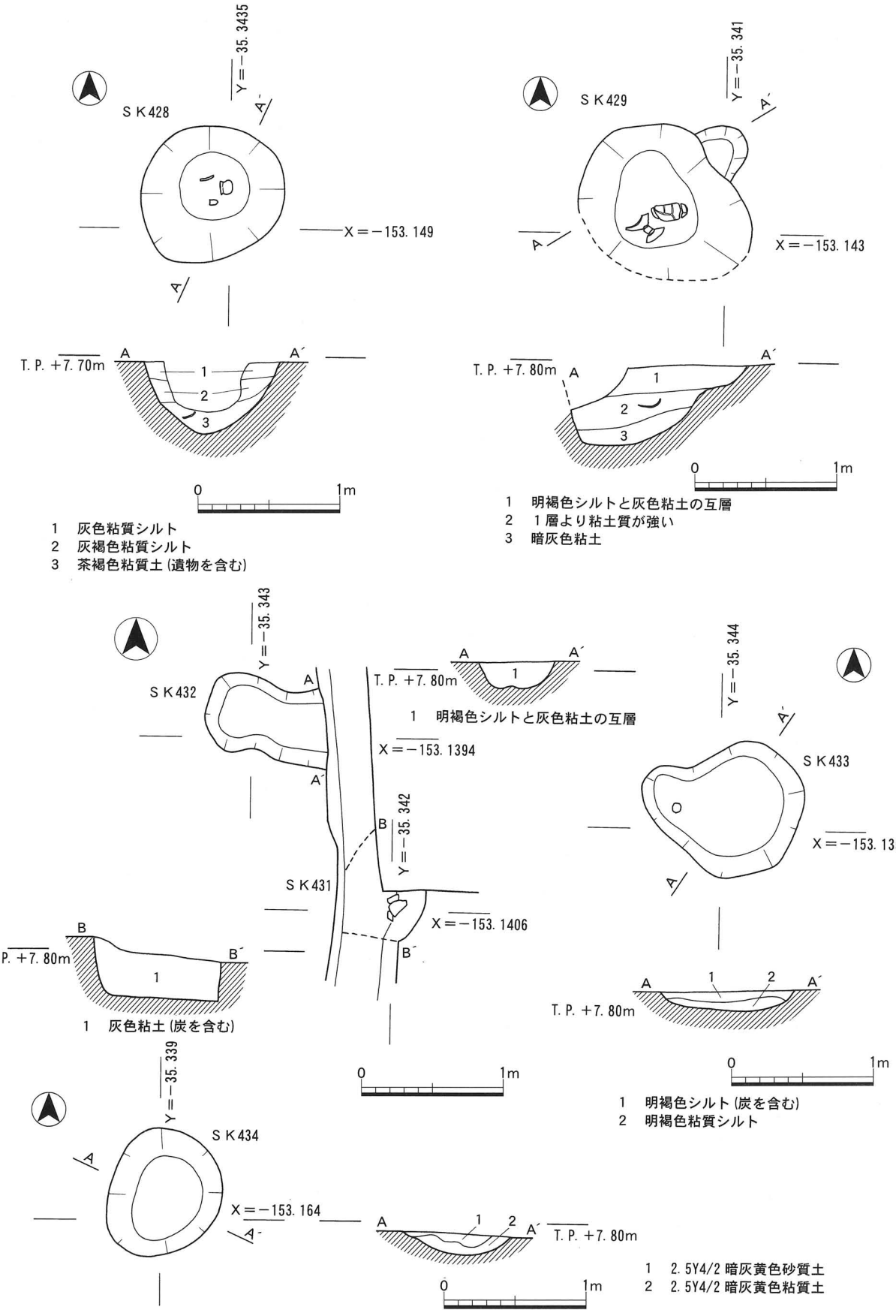
第52図　ＳＫ428出土遺物実測図



第53図　ＳＫ429出土遺物実測図

ＳＫ429（第53・54図、図版一五・二三）

３Ｃ地区で検出した。南部は側溝掘削時に削平を受けているが、概ね不整の円形を呈するものと推定される。検出部分で東西径1.20m、南北径1.09m、深さ0.57mを測る。埋土は３層から成る。遺物は３層から古墳時代前期前半（布留式古相）に比定される古式土師器が少量出土している。古式土師器４点（218～221）を図化した。218・219は庄内式甕である。219は完形品で口径16.8cm、器高20.2cm、体部最大径20.1cmを測る。220・221は精製の高杯である。221が完形品で、口径21.2cm、器高14.2cm、裾径15.2cmを測る。器面調整は杯部内外面および脚柱部に横位のヘラミガキ、裾部外面にハケ調整が施されている。スカシ孔は四方に穿たれている。共に布留式古相の布留Ⅰ期に比定される。



第54図　ＳＫ428、ＳＫ429、ＳＫ431～ＳＫ434平断面図（Ｓ＝1/40）

ＳＫ431（第54・55図、図版二三）

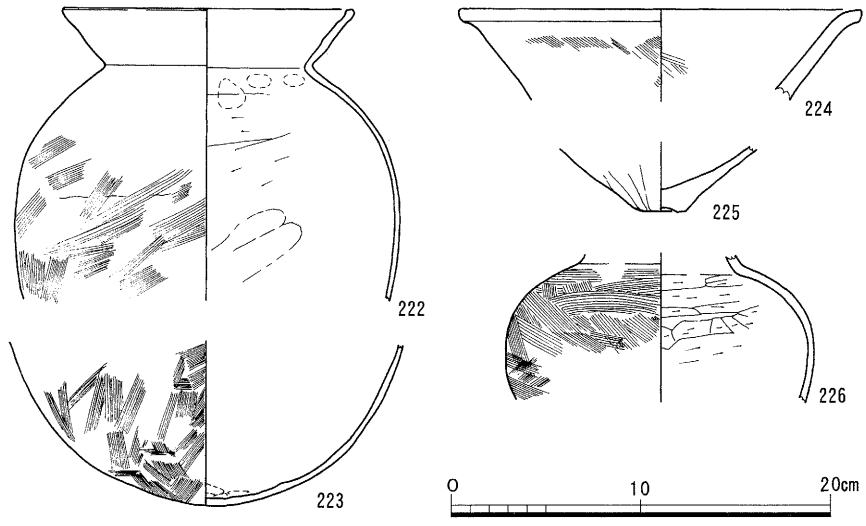
調査区北東隅の３Ｃ地区で検出した。東西方向に伸びるが東部が側溝掘削時に削平を受けており全容は不明。検出部分で東西幅0.57m、南北幅0.76m、深さ0.43mを測る。埋土は灰色粘土の単一層である。遺物は古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される古式土師器が少量出土している。２点(222・223)を図化した。222・223は布留式甕である。222は口縁部から体部中位が残存している。布留式甕(甕Ｆ3)にあたる。223は体部下位から底部の資料である。外面はハケ、内底面には指頭圧痕が残る。遺構の帰属時期は古墳時代前期後半(布留式新相)である。

ＳＫ432（第54・55図、図版一五）

４Ｃ地区で検出した。側溝掘削時の削平および北東部分が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.85m、南北幅0.53m、深さ0.19mを測る。埋土は炭を含む灰色粘土の単一層である。遺物は古墳時代初頭前半から前期後半に比定される古式土師器の細片が極少量出土している。３点(224～226)を図化した。224は高杯の口縁部である。口縁端部が外折するもので端面は丸味を持って終る。色調は明橙色。225は壷の底部である。突出しない平底の底部で裏面は窪む。226は布留式甕である。体部外面は乱方向のハケ、内面は水平方向のヘラケズリが行われている。225については、庄内式古相に認められるが、そのほかは古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される。

ＳＫ433（第54図、図版一五）

４Ｃ地区で検出した。不整円形を呈するもので、東西径1.15m、南北径0.95m、深さ0.15mを測る。埋土は２層から成る。遺物は古墳時代初頭に比定される古式土師器の細片が極少量出土している。



第55図　ＳＫ431（222・223）、ＳＫ432（224～226）出土遺物実測図

ＳＫ434（第54図）

１Ｄ地区で検出した。円形を呈するもので、東西径0.78m、南北径0.9m、深さ0.15mを測る。埋土は２層から成る。遺物は古式土師器の細片が極少量出土したが、時期を明確にし得たものはない。

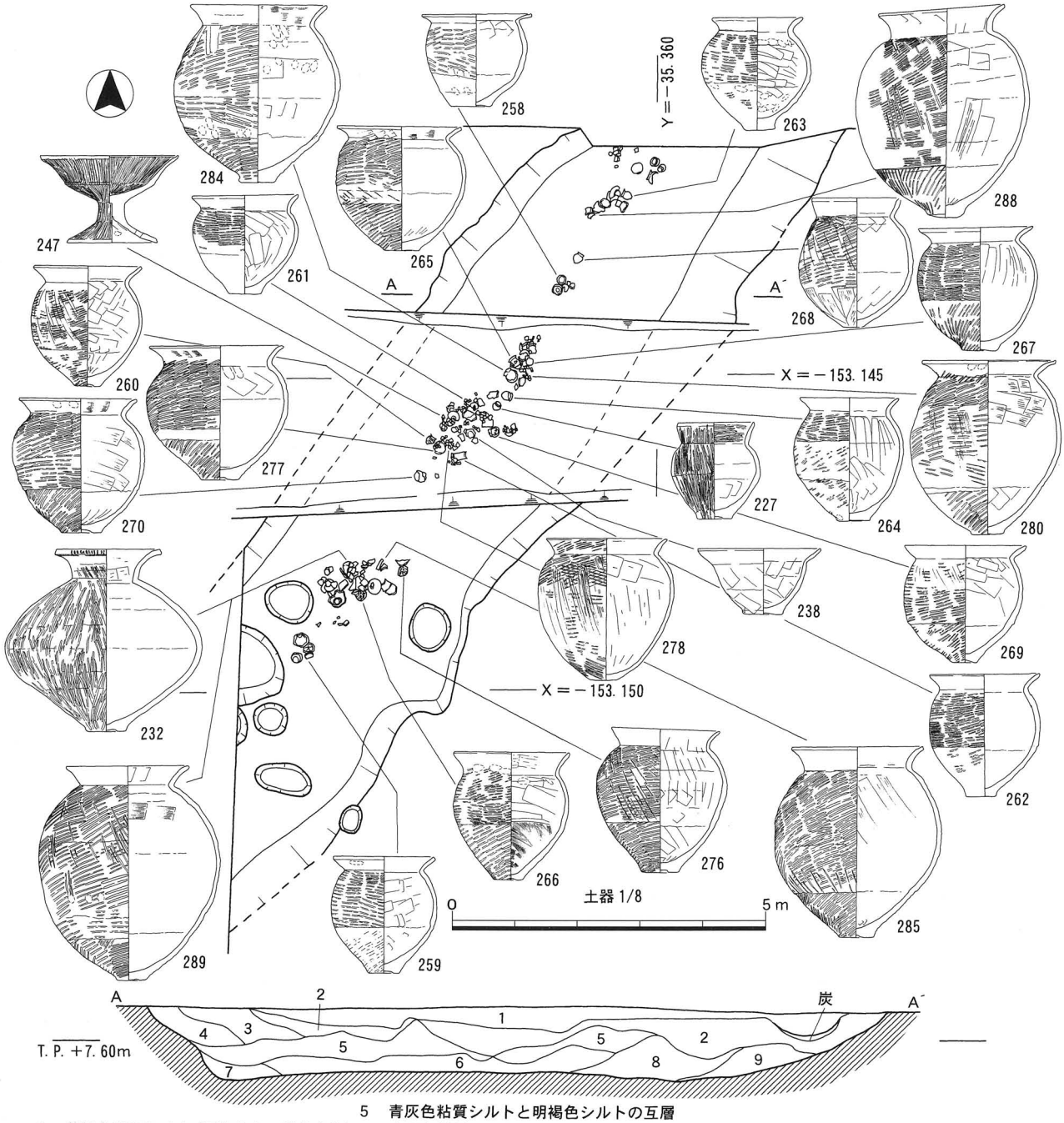
第５表　第４面　土坑(ＳＫ)法量表(単位m)

遺構名	地区	平面形	東西幅	南北幅	深さ	埋土	出土遺物
ＳＫ413	３Ｂ	不明	1.33	0.41	0.08	－	
ＳＫ414	１Ｃ	〃	0.42	1.12	0.05	茶褐色シルト	
ＳＫ415	〃	方形	0.67	0.92	0.20	茶褐～灰色粘質シルト	
ＳＫ419	〃	不明	0.52	0.44	0.09	5Y3/1オリーブ黒色粘質土	
ＳＫ430	３Ｃ	不定形	0.49	0.46	0.15	－	

溝（ＳＤ）

ＳＤ403（第56～60図、図版二三～二六）

調査区北西部の２・３Ａ地区から３Ｂ地区にかけて南西－北東に直線的に伸びる。検出部分で長さ16.0m、幅4.5m、深さ0.47mを測る。埋土は９層で粘質シルト～砂質シルトが優勢な層相を呈しており、緩やかな流れの溝であったと推定される。遺物は弥生時代後期末から古墳時代初頭前半（庄内式古相）に比定される大量の弥生土器・古式土師器が出土しており総量はコンテナ３箱に及ぶ。64点（227～290）を図化した。壷類は10点（227～236）である。227～229は広口直口壷で



第56図　ＳＤ403平断面図（Ｓ＝平面1/100、断面1/40、土器1/8）

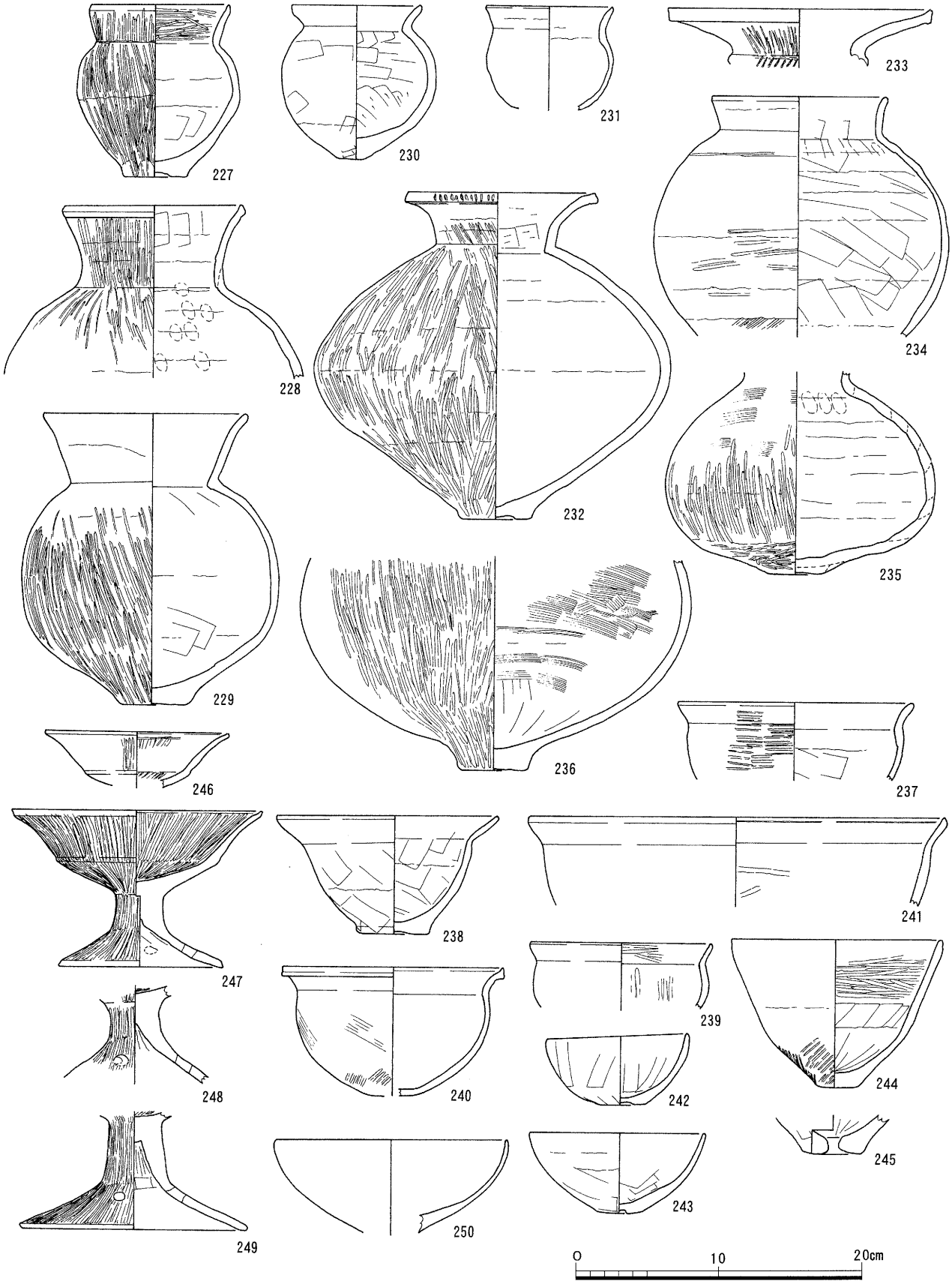
ある。227が小形品で口径9.7cm、器高12.2cmを測る。228が大形品、229は中形品で、229はほぼ完形品である。口径14.2cm、器高20.7cm、底径4.4cmを測る。228が在地産の他は生駒西麓産である。230・231は小形の広口壷である。230が完形品で口径9.0cm、器高11.0cm、底径4.0cmを測る。232は扁球形の体部に頸部から大きく外反する口縁部が付く〔広口壷Ｂ1〕である。233は頸部から斜上方に口縁部が直線的に伸びるもので、端面は垂直方向に広い端面を形成する広口壷である。体部上半に貼り付け突帯が廻っており、上面には列点文が施文されている。234は口縁部が上外方に伸びる〔広口壷Ｃ〕である。235は口縁部を欠くため全容は不明である。体部は玉葱状で、底部は僅かに突出する平底である。236は体部中位以下が残存する大形壷で底部は突出平底である。

鉢類は10点(237～245)を図化した。237～240は口縁部が小さく外反する〔小形鉢Ａ1〕である。口縁端部が丸味を持つ237・238、尖り気味に終る239、垂直方向に小端面を作る240がある。241は〔中形鉢Ａ〕で復元口径28.7cmを測る。242～244は〔小形鉢Ｃ〕である。底部は突出しない242・243と小さく突出する244がある。裏面は242・243がドーナツ底、244が平底である。全て生駒西麓産。245は底部有孔鉢である。非生駒西麓産。

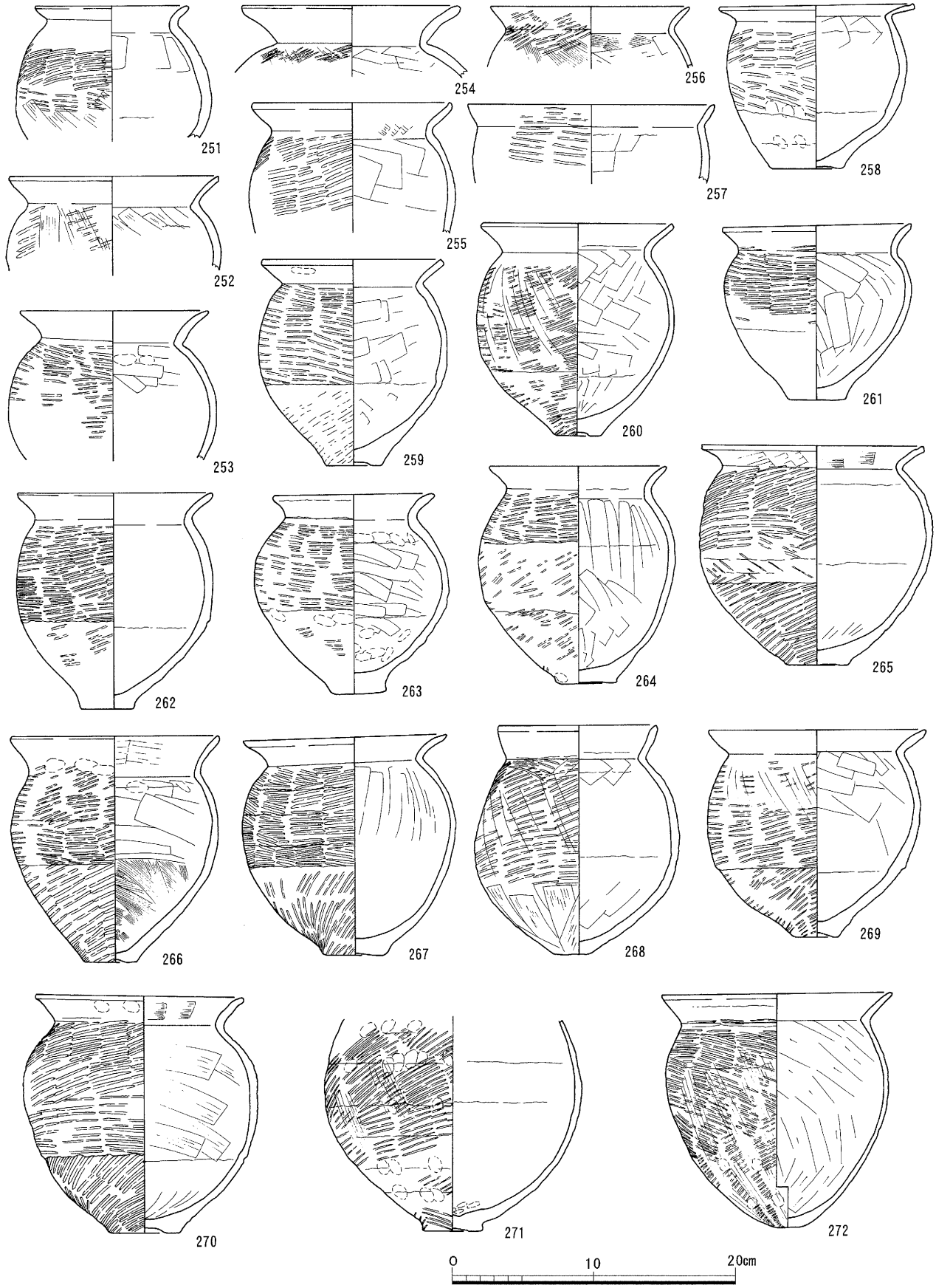
高杯は５点(246～250)である。246・247は弥生系の有稜高杯である。246は小形高杯の杯部片である。復元口径12.7cmを測る。247は完形品で、杯部径17.4cm、器高11.0cm、裾部径11.2cmを測る。器面調整は杯部内外面および脚部外面は縦位の密なヘラミガキが施されている。口径・杯部径(稜径)・口縁部の長さ(口縁長)から導かれる数値は口稜比64、口縁比27であり、これらの数値から有稜高杯を分類(原田2003)した中の〔高杯Ｄ1〕にあたる。248・249は脚部片である。246・247は生駒西麓産。248・249は非生駒西麓産である。250は椀形高杯である。非生駒西麓産。

甕は40点(251～290)である。272の庄内式甕を除く甕形土器については、庄内式甕と供伴した資料であるため「Ｖ様式甕」「Ｖ様式系甕」に分類されるが、混在して出土したため個々の資料についての峻別は困難である。器高数値の違いから小形・中形・大形の三種に分類した。251～271は器高17cm未満の小形の甕である。全容が明らかな258～270については、二ないしは三分割により成形が行われている。体部外面のタタキ調整のうち、下段については、258・261のようなタタキを持たないものや268のようなヘラケズリで消されるものを除けば、右上がりタタキのものが大半を占める。中段ないしは上段については、水平方向ないしは右上がりのタタキが行われている。口縁部は「く」の字に屈曲外反するもので、口縁端部は丸く終るもの、尖り気味で終るもの、外傾ないしは垂直方向に小端面を形成するものがある。底部については、小さく突出するもの259～264・267～271や突出しないもの258・265・266・268がある。裏面については、平底が261～263窪み底が258・264・265・267、ドーナツ底が260・266・269・270・271である。そのうち、非生駒西麓産のものが251・253・259・261・267・265で他は生駒西麓産である。

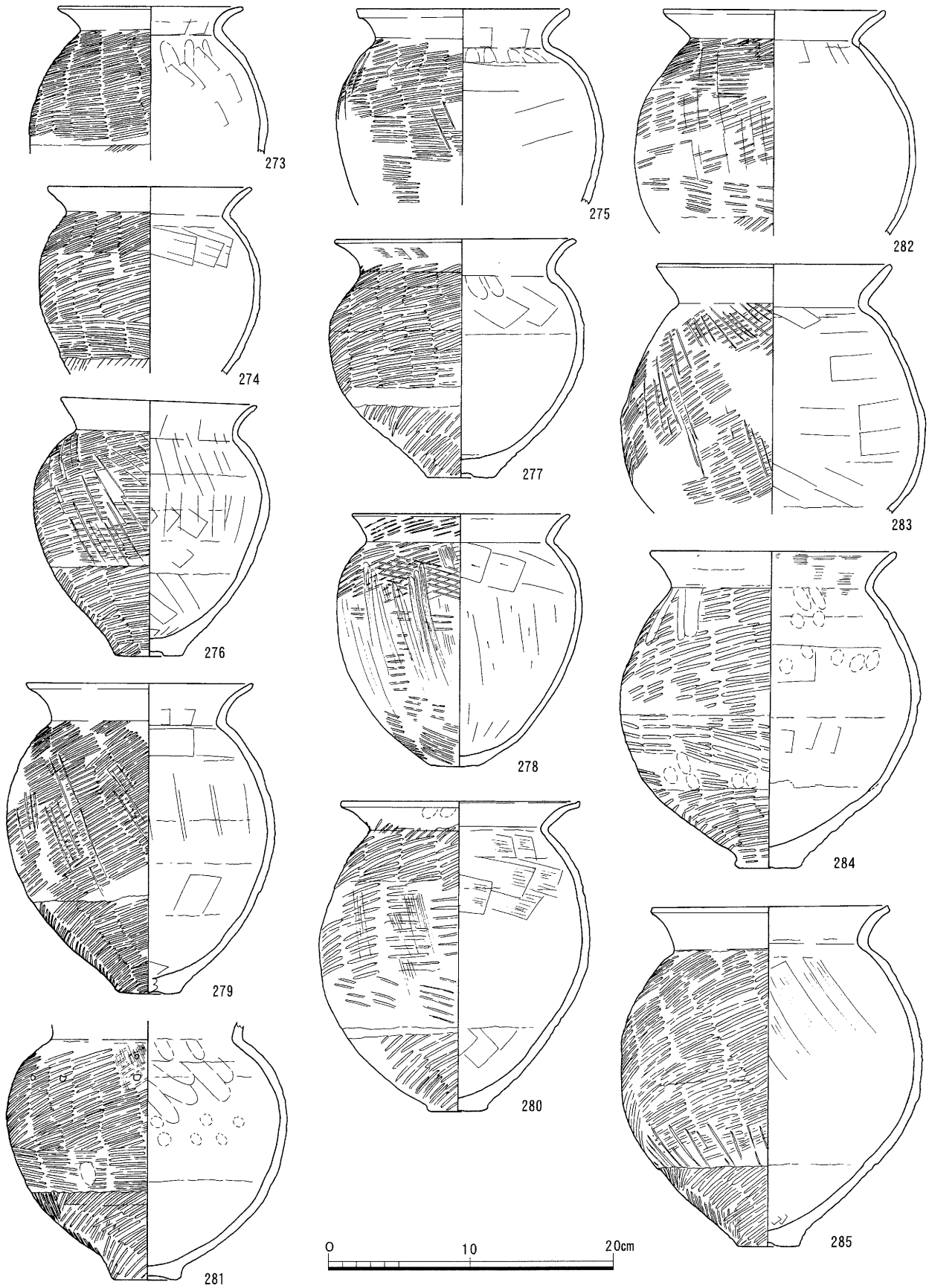
273～285の甕は器高が16～24cmの中形甕である。そのうち全容が明らかな276～280・284・285にいては、三分割成形によるもので、体部外面のタタキは下段が一様に右上がり、中段および上段についてはタタキの方向を変えるものと、289・285のように同方向に行うものがある。なお、体部外面には、タタキ調整の後に左上がりのハケを散発的に施されているものが、275・276・278・279・280・282・283に認められた。口縁部の形状は「く」の字ないしは大きく外反するものが大半で、端面は丸く終るもの、内傾・外傾・垂直方向に小端面を形成するものがある。底部は突出しないもの276～279・285、小さく突出するもの280・281・284がある。裏面は平らなもの



第57図　ＳＤ403出土遺物実測図－１



第58図　ＳＤ403出土遺物実測図－２



第59図　ＳＤ403出土遺物実測図－３

第60図　ＳＤ403出土遺物実測図－４

278、窪み底のもの279、ドーナツ底の276・277・280・281・285がある。そのうち非生駒西麓産が274・276・278の３点でその他は生駒西麓産である。

286～290は器高26.5cm以上の大形品である。三分割成形によるもので、器高が高いためか上段幅が最も広い特徴を示している。体部のタタキの方向は下段が右上がり、中段が水平、上段が右上がりで、タタキ後に行われるタタキの一部を消す行為は288～290で認められた。口縁部は「く」の字および強く外反するものがある。底部は小さく突出する289・290と突出する288がある。裏面は288が平底、289・290がドーナツ底である。全て生駒西麓産である。

272は河内型庄内式甕である。ほぼ完形に復元できるが、土圧による歪が顕著である。体部の上位に最大径を持つことや、全体に体部外面のタタキが細筋であること、内面の屈曲部が鋭く体部内面にヘラケズリが行われる等の特徴から、河内型庄内式甕の最古型式（甕Ｂ１）に分類される。色調は褐灰色である。胎土中に角閃石を含む生駒西麓産である。

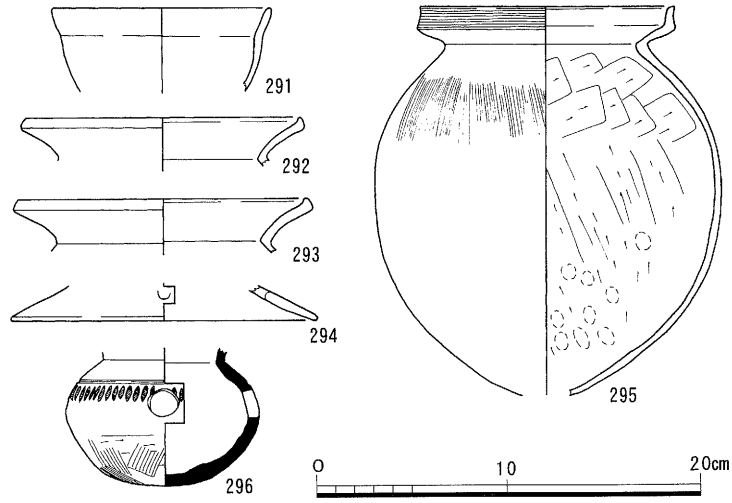
ＳＤ404（第61図）

１Ｂ地区で検出した。北東―南西方向に直線的に伸びる。全長3.62m、幅0.50m、深さ0.42mを測る。埋土はシルトを主体とする３層から成る。遺物は古墳時代初頭後半（庄内式新相）に比定される古式土師器の細片が少量出土している。５点（291～295）を図化した。291は小形鉢（鉢Ｇ２）の細片である。292・293は庄内式甕の口縁部片。294は高杯の裾部片である。295は吉備系甕で底

部を欠く。口径13.2cm、残存高20.6cm、体部最大径18.0cmを測る。

ＳＤ410

１Ｃ地区で検出した。南北方向に直線的に伸びるもので、北端はＳＫ417に切られている。検出長3.23m、幅0.32m、深さ0.08mを測る。埋土は茶褐色粘土～シルトである。遺物は土師器・須恵器の細片が極少量出土しているが時期を明確にし得たものはない。



第61図　ＳＤ404（291～295）、ＳＤ413（296）出土遺物実測図

ＳＤ411

調査区南東部で検出した。１Ｃから２Ｄ地区にかけて南西―北東に伸びる。検出長19.20m、幅0.63m、深さ0.27mを測る。埋土は粘質シルト～シルトの３層から成る。遺物は古墳時代中期に比定される土師器・須恵器の細片が極少量出土している。

ＳＤ413（第61図）

調査区東部の３ＣＤ地区で検出した。北東－北西に伸びるもので、北東隅は撹乱により削平を受けている。検出長4.15m、幅0.7～1.13m、深さ0.2mを測る。溝底に５個の小穴が存在している。埋土は茶褐色粘質シルトである。遺物は古墳時代中期後半に比定される土師器・須恵器が少量出土している。１点(296)を図化した。296は須恵器瑞で口頸部を欠く。球形の体部中央に沈線と列点文が施文されている。円孔は径1.6cmを測るもので、ほぼ水平に穿たれている。

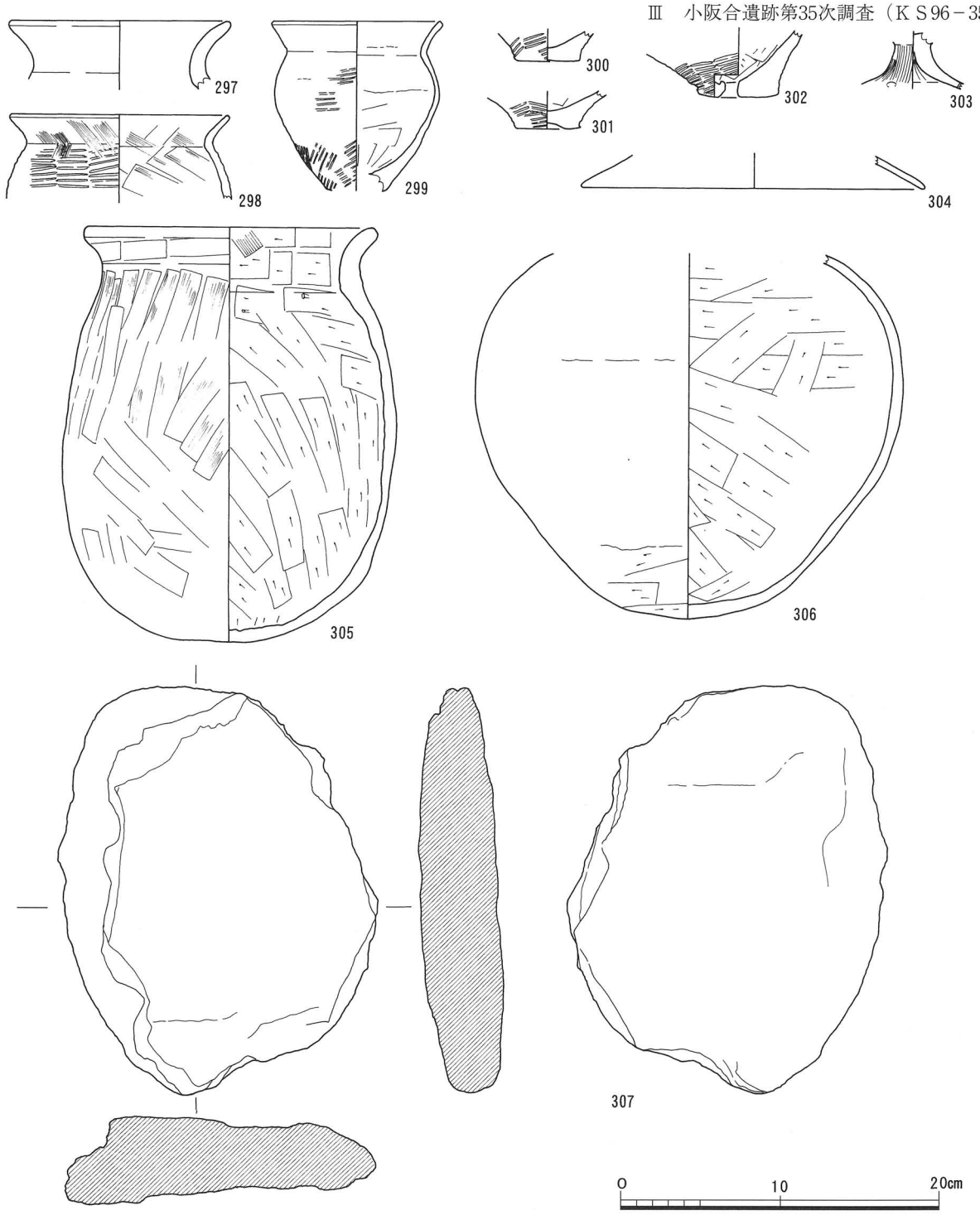
第６表　第４面　溝（ＳＤ）法量表（単位m）

遺構名	地　区	全長（検出長）	幅（最大）	深さ	埋　土	備　考
ＳＤ401	２Ａ	6.05	0.37	0.11	暗茶褐色シルト	
ＳＤ402	〃	1.3	0.3	0.09	茶褐色粘質シルト	
ＳＤ405	１Ｂ	1.2	0.26	0.08	－	
ＳＤ406	〃	5.45	0.32	0.08	－	
ＳＤ407	２Ｂ	3.62	0.53	0.09	茶褐色シルト	
ＳＤ408	３Ｂ	1.92	0.6	0.11	明褐色礫混シルト	
ＳＤ409	１Ｃ	1.06	0.64	0.08	7.5Y4/1灰色粘質土	
ＳＤ412	２Ｃ	0.74	0.2	0.05	2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト	
ＳＤ414	１・２Ｄ	8.1	1	0.1	5Y4/2灰オリーブ色シルト 5Y5/1灰色粘質シルト	

小穴（ＳＰ）

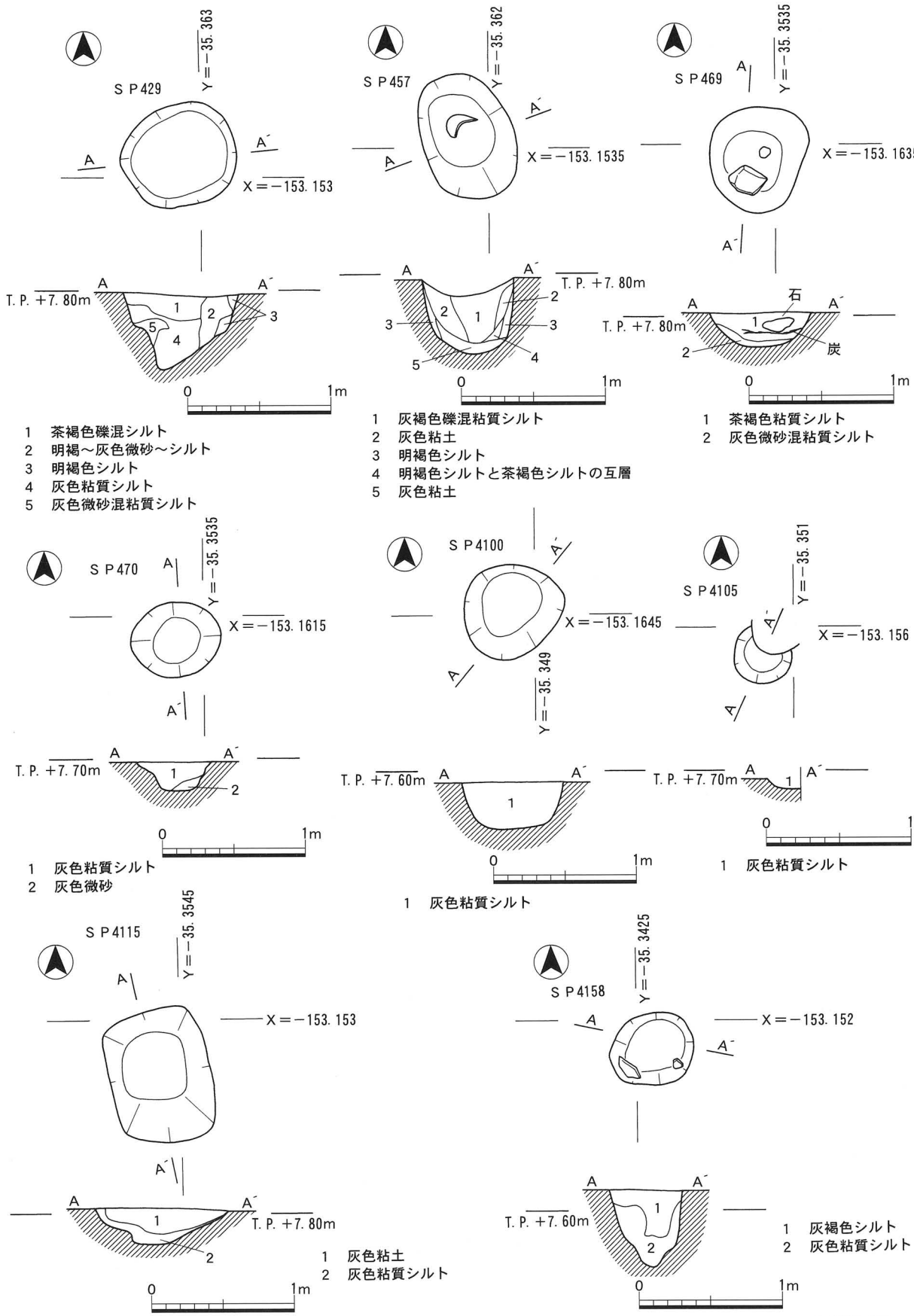
ＳＰ401～4165

総数で165個（ＳＰ401～4165）を検出した。同一面で弥生時代後期・古墳時代前期前半（布留式古相）・前期後半（布留式新相）に比定される遺構を検出しており、掘立柱建物を構成する柱穴の重複もあり、個々の帰属時期については不明な点が多い。ＳＩ401・403内で検出された小穴以外については、通し番号を付与している。平面の形状では、円形・楕円形・方形・不整円形がある。規模は径0.10～0.94m、深さ0.03～0.58mを測る。そのうち柱根・柱痕を検出したものは、ＳＰ



第62図　ＳＰ429（297）、ＳＰ457（305）、ＳＰ469（298・300・302）、ＳＰ470（304）、ＳＰ4100（299）、ＳＰ4105（303）、ＳＰ4115（307）、ＳＰ4158（301・306）出土遺物実測図

426・428・466・475で、根石を検出したものはＳＰ448・469である。遺物が出土したものは、ＳＰ401・403・414・427・429・437・441・448・451・454・456・457・462・464・467・469～471・475・482・489・4100・4105・4110・4115・4116である。弥生土器・古式土師器・土師器・須恵器等が出土している。そのうち11点(297～307)を図化した。297はＶ様式甕の口縁部片である。ＳＰ429出土。298～301はＶ様式甕である。298が口縁部から体部片、299が小形品、300・301が甕底部である。298・300がＳＰ469出土。299がＳＰ4100出土。301がＳＰ4158出土。302は底部有孔鉢の底部片である。弥生時代後期に比定される。ＳＰ469出土。303は小形高杯の脚部片である。



第63図　ＳＰ429、ＳＰ457、ＳＰ469、ＳＰ470、ＳＰ4100、ＳＰ4105、ＳＰ4115、ＳＰ4158平断面図

第６表　第４面　溝（ＳＤ）法量表（単位ｍ）

遺構名	地　区	平面形	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
ＳＰ401	１Ａ	円形	0.32	0.31	0.09	茶褐色砂質シルト	弥生土器
ＳＰ402	〃	〃	0.33	0.28	0.10	〃	
ＳＰ403	〃	〃	0.35	0.24	0.15	明褐色シルト	土師器
ＳＰ404	〃	〃	0.36	0.31	0.18	茶褐色粘質シルト	
ＳＰ405	〃	〃	0.41	0.34	0.18	〃	
ＳＰ406	〃	〃	0.14	0.13	0.09	〃	
ＳＰ407	〃	〃	0.10	0.09	0.09	〃	
ＳＰ408	〃	〃	0.17	0.14	0.13	〃	
ＳＰ409	１・２Ａ	〃	0.19	0.15	0.15	〃	
ＳＰ410	〃	方形	0.40	0.27	0.11	〃	
ＳＰ411	〃	円形	0.37	0.35	0.11	〃	
ＳＰ412	〃	不定形	0.28	0.21	0.05	〃	
ＳＰ413	２Ａ	〃	0.47	0.32	0.37	茶褐色砂質シルト	
ＳＰ414	〃	〃	0.54	0.42	0.42	明褐色シルト	土師器
ＳＰ415	〃	円形	0.15	0.15	0.08	茶褐色礫混粘土質シルト	
ＳＰ416	〃	〃	0.24	0.19	0.14	茶褐色礫混シルト	
ＳＰ417	〃	〃	0.24	0.23	0.10	茶褐色礫混粘土質シルト	
ＳＰ418	〃	不整円形	0.33	0.20	0.07	茶褐色粘質シルト	
ＳＰ419	〃	方形	0.44	0.38	0.21	茶褐色礫混シルト	
ＳＰ420	〃	不定形	0.80	0.68	0.22	茶褐色微砂～礫混シルト	
ＳＰ421	〃	楕円形	0.45	0.33	0.37	茶褐色微砂混シルト	
ＳＰ422	〃	〃	0.92	0.46	0.15	－	
ＳＰ423	〃	円形	0.56	0.48	0.25	－	
ＳＰ424	〃	方形	0.75	0.58	0.35	茶褐色微砂混砂質シルト	
ＳＰ425	３Ａ	不明	－	－	－	－	
ＳＰ426	〃	不明	－	－	－	－	
ＳＰ427	〃	円形	0.75	0.65	0.30	－	土師器
ＳＰ428	２Ａ	〃	0.73	0.66	0.50	明茶褐色粘土質シルト	
ＳＰ429	〃	〃	0.82	0.70	0.58	茶褐色礫混シルト	弥生土器
ＳＰ430	〃	楕円形	0.50	0.25	0.27	－	
ＳＰ431	〃	不整円形	0.61	0.43	0.11	茶褐色粘質シルト	
ＳＰ432	２Ｂ	楕円形	0.94	0.43	0.16	茶褐色礫混シルト	
ＳＰ433	２・３Ｂ	不定形	0.92	0.65	0.20	－	
ＳＰ434	３Ｂ	円形	0.32	0.30	0.04	－	
ＳＰ435	〃	〃	0.32	0.29	0.05	－	
ＳＰ436	３Ａ	〃	0.15	0.12	0.03	－	
ＳＰ437	３Ａ・Ｂ	楕円形	0.71	0.36	0.22	－	土師器
ＳＰ438	３Ａ	円形	0.33	0.32	0.08	－	
ＳＰ439	〃	〃	0.29	0.24	0.14	－	
ＳＰ440	３Ａ・Ｂ	〃	0.23	0.20	0.09	－	
ＳＰ441	３Ａ	〃	0.45	0.40	0.24	－	土師器・須恵器
ＳＰ442	〃	不整円形	0.53	0.50	0.35	－	
ＳＰ443	〃	不定形	0.49	0.47	0.12	－	
ＳＰ444	〃	円形	0.22	0.21	0.22	－	
ＳＰ445	２・３Ａ	〃	0.22	0.20	0.20	－	
ＳＰ446	２Ａ	不定形	0.40	0.12	0.04	－	
ＳＰ447	〃	不整円形	0.36	0.32	0.18	－	

遺構名	地　区	平面形	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
ＳＰ448	２Ａ	円形	0.60	0.50	0.34	−	土師器・須恵器
ＳＰ449	〃	不定形	0.51	0.34	0.25	−	
ＳＰ450	〃	方形	0.58	0.55	0.11	−	
ＳＰ451	２Ａ･Ｂ	円形	0.50	0.43	0.14	−	須恵器
ＳＰ452	２Ｂ	〃	0.13	0.16	0.20	−	
ＳＰ453	〃	〃	0.19	0.16	0.06	−	
ＳＰ454	２Ａ･Ｂ	〃	0.37	0.35	0.15	茶褐色シルト	土師器
ＳＰ455	２Ａ	不定形	0.37	0.22	0.05	−	
ＳＰ456	〃	〃	0.42	0.39	0.40	−	土師器
ＳＰ457	〃	楕円形	0.92	0.63	0.52	茶褐色礫混粘質シルト	土師器・須恵器
ＳＰ458	２Ｂ	円形	0.28	0.21	0.07	〃	
ＳＰ459	１Ｂ	楕円形	0.42	0.30	0.17	茶褐色粘質シルト	
ＳＰ460	〃	円形	0.29	0.25	0.11	茶褐色礫混シルト	
ＳＰ461	〃	〃	0.39	0.30	0.12	茶褐色シルト	
ＳＰ462	〃	〃	0.37	0.35	0.14	明茶褐色シルト	土師器
ＳＰ463	１･２Ｂ	不定形	0.51	0.29	0.20	茶褐色礫混シルト	
ＳＰ464	２Ｂ	〃	0.74	0.52	0.30	茶褐色シルト	土師器・須恵器
ＳＰ465	１･２Ｂ	円形	0.41	0.37	0.20	灰褐色シルト 茶褐色シルト	
ＳＰ466	１Ｂ	〃	0.64	0.57	0.22	暗灰色粘質シルト	
ＳＰ467	〃	〃	0.62	0.57	0.14	茶褐色シルト 明褐色シルト	土師器
ＳＰ468	〃	〃	0.40	0.38	0.14	灰色粘質シルト	
ＳＰ469	〃	不整円形	0.75	0.65	0.26	茶褐色粘質シルト	古式土師器(布留)
ＳＰ470	〃	円形	0.65	0.53	0.22	〃	土師器
ＳＰ471	２Ｂ	不整円形	0.53	0.46	0.19	灰色粘質シルト	須恵器
ＳＰ472	〃	円形	0.38	0.37	0.15	茶褐色粘質シルト	
ＳＰ473	〃	〃	0.25	0.22	0.11	茶褐色礫混シルト	
ＳＰ474	〃	〃	0.34	0.33	0.10	−	
ＳＰ475	〃	〃	0.57	0.47	0.20	10Y3/1オリーブ黒色粘土	土師器・須恵器
ＳＰ476	〃	〃	0.50	0.42	0.16	茶褐色シルト	
ＳＰ477	〃	〃	0.43	0.41	0.17	〃	土師器
ＳＰ478	１Ｂ	〃	0.25	0.19	0.07	茶褐色粘質シルト 明褐色シルト	
ＳＰ479	〃	楕円形	0.51	0.32	0.09	−	
ＳＰ480	〃	〃	0.49	0.34	0.13	茶褐色粘質シルト 明褐色シルト	
ＳＰ481	〃	不定形	0.20	0.11	0.07	−	
ＳＰ482	〃	楕円形	0.76	0.48	0.27	茶褐色礫混粘質シルト	土師器
ＳＰ483	〃	〃	0.32	0.24	0.22	茶褐色粘質シルト 明褐灰色粘土	
ＳＰ484	〃	〃	0.25	0.18	0.12	茶褐色粘質シルト	
ＳＰ485	〃	〃	0.20	0.17	0.09	〃	
ＳＰ486	〃	〃	0.23	0.18	0.15	〃	
ＳＰ487	〃	不整円形	0.53	0.38	0.22	〃	
ＳＰ488	〃	円形	0.43	0.43	0.19	−	
ＳＰ489	〃	不整円形	0.87	0.67	0.22	灰色粘質シルト	弥生土器
ＳＰ490	１Ｂ	不明	0.46	0.45	0.10	明褐色粘土質シルト	
ＳＰ491	〃	〃	0.42	0.32	0.07	淡灰～明褐色砂質シルト	

遺構名	地　区	平面形	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
ＳＰ492	１Ｂ	不整円形	0.66	0.55	0.10	明褐灰色粘土質シルト	
ＳＰ493	〃	円形	0.50	0.46	0.10	明褐色粘土質シルト	
ＳＰ494	〃	〃	0.48	0.46	0.06	〃	
ＳＰ495	〃	〃	0.23	0.20	0.03	〃	
ＳＰ496	〃	不明	0.60	0.46	0.17	淡灰～明褐色砂質シルト	
ＳＰ497	１Ｃ	円形	0.28	0.25	0.15	－	
ＳＰ498	〃	楕円形	0.53	0.34	0.22	－	
ＳＰ499	〃	円形	0.53	0.28	0.07	－	
ＳＰ4100	〃	不整円形	0.68	0.65	0.33	灰褐色粘質シルト	古式土師器(布留)
ＳＰ4101	１Ｂ	円形	0.38	0.30	0.13	灰色粘土	
ＳＰ4102	１Ｃ	不整円形	0.25	0.23	0.10	－	
ＳＰ4103	〃	円形	0.26	0.24	0.06	－	
ＳＰ4104	１・２ＢＣ	不明	0.60	0.20	0.14	－	
ＳＰ4105	２Ｂ	〃	0.39	0.25	0.07	灰褐色粘質シルト	弥生土器
ＳＰ4106	〃	〃	0.15	0.10	0.03	－	
ＳＰ4107	〃	円形	0.20	0.18	0.09	茶褐色粘質シルト	
ＳＰ4108	〃	〃	0.18	0.16	0.07	茶褐色礫混シルト	
ＳＰ4109	２・３Ｂ	不整円形	0.61	0.49	0.18	－	
ＳＰ4110	２Ｂ	円形	0.52	0.43	0.15	灰～明褐色シルト	土師器・須恵器・石材
ＳＰ4111	〃	不整円形	0.80	0.61	0.40	明褐色粘質シルトと灰色粘質シルトの互層	
ＳＰ4112	〃	〃	0.62	0.52	0.10	灰色粘質シルト 茶褐色シルト	
ＳＰ4113	〃	円形	0.51	0.48	0.23	茶褐色礫混シルト	
ＳＰ4114	〃	方形	0.86	0.75	0.38	灰色礫混粘質シルト	
ＳＰ4115	〃	〃	0.95	0.70	0.37	灰色粘土 灰色粘質シルト	根石
ＳＰ4116	〃	円形	0.57	0.52	0.16	－	古式土師器(布留)
ＳＰ4117	２・３Ｂ	〃	0.30	0.23	0.17	－	
ＳＰ4118	２Ｂ	〃	0.32	0.30	0.17	－	
ＳＰ4119	〃	〃	0.27	0.21	0.19	－	
ＳＰ4120	〃	〃	0.32	0.26	0.11	茶褐色シルト	
ＳＰ4121	〃	〃	0.37	0.29	0.27	茶褐色礫混シルト	
ＳＰ4122	〃	〃	0.36	0.32	0.17	明褐色シルト	
ＳＰ4123	〃	〃	0.32	0.27	0.10	灰色粘土質シルト	
ＳＰ4124	〃	〃	0.21	0.19	0.05	－	
ＳＰ4125	〃	楕円形	0.69	0.36	0.22	－	
ＳＰ4126	〃	円形	0.17	0.14	0.05	－	
ＳＰ4127	〃	〃	0.16	0.13	0.05	－	
ＳＰ4128	〃	〃	0.23	0.20	0.05	－	
ＳＰ4129	３Ｂ	〃	0.36	0.32	0.13	－	
ＳＰ4130	〃	〃	0.24	0.21	0.05	－	
ＳＰ4131	３Ｂ・Ｃ	楕円形	0.63	0.24	0.06	－	
ＳＰ4132	３Ｂ	円形	0.23	0.21	0.06	－	
ＳＰ4133	〃	不定形	0.87	0.30	0.18	明褐色礫混シルト	
ＳＰ4134	〃	円形	0.49	0.48	0.11	明褐色砂質シルト	
ＳＰ4135	３Ｂ	円形	0.24	0.18	0.10	暗茶褐色礫混シルト	
ＳＰ4136	〃	〃	0.39	0.31	0.18	明褐色シルト 灰色粘土	
ＳＰ4137	〃	不整円形	0.51	0.43	0.05	明褐色砂質シルト	

遺構名	地　区	平面形	長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
ＳＰ4138	４Ｂ	円形	0.16	0.15	0.15	明褐色粘質シルト	
ＳＰ4139	１Ｃ	〃	0.30	0.25	0.07	7.5Y4/1灰色粘質土	
ＳＰ4140	〃	〃	0.34	0.33	0.05	10Y4/1灰色粘質土	
ＳＰ4141	〃	不明	0.30	0.19	0.07	〃	
ＳＰ4142	〃	楕円形	0.55	0.37	0.09	－	
ＳＰ4143	〃	〃	0.32	0.18	0.09	5Y3/1オリーブ黒色粘質土	
ＳＰ4144	２Ｃ	円形	0.58	0.48	0.19	2.5Ｙ4･1黄灰色シルト	古式土師器(布留)
ＳＰ4145	〃	〃	0.60	0.45	0.13	茶褐色シルト 灰色粘土	
ＳＰ4146	〃	〃	0.32	0.23	0.13	2.5Y4/2灰オリーブ色シルト 5Y3/2オリーブ黒色粘質シルト	
ＳＰ4147	〃	〃	0.28	0.26	0.14	〃	
ＳＰ4148	〃	〃	0.32	0.30	0.15	茶褐色シルト 灰色粘土	
ＳＰ4149	〃	楕円形	0.39	0.21	0.06	2.5Y4/3暗オリーブ色シルト	
ＳＰ4150	〃	円形	0.31	0.25	0.04	2.5Y4/1灰色シルト	
ＳＰ4151	〃	〃	0.26	0.25	0.07	5Y4/1灰色シルト 2.5Y5/2灰オリーブ色シルト	
ＳＰ4152	〃	〃	0.33	0.26	0.06	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	
ＳＰ4153	〃	〃	0.40	0.33	0.09	〃	
ＳＰ4154	〃	〃	0.28	0.24	0.07	5Y4/1灰色シルト	
ＳＰ4155	〃	〃	0.58	0.49	0.20	茶褐色粘質シルト	
ＳＰ4156	〃	不整円形	0.51	0.45	0.22	10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 7.5Y4/1灰色粘質土	
ＳＰ4157	〃	円形	0.26	0.23	0.06	2.5Y4/2暗灰黄色シルト	
ＳＰ4158	〃	不整円形	0.60	0.51	0.55	灰褐色粘土 灰色粘質シルト	弥生土器・古式土師器
ＳＰ4159	〃	不明	0.26	0.20	0.34	〃	
ＳＰ4160	２･３Ｃ	不定形	0.66	0.34	0.12	－	
ＳＰ4161	３Ｃ	円形	0.20	0.16	0.11	明褐色礫混シルト	
ＳＰ4162	〃	〃	0.30	0.20	0.13	〃	
ＳＰ4163	４Ｃ	不明	0.58	0.33	0.09	明褐色シルト 灰色粘土	
ＳＰ4164	〃	〃	0.31	0.25	0.16	暗茶褐色シルト	
ＳＰ4165	〃	円形	0.26	0.22	0.16	暗茶褐色礫混シルト	

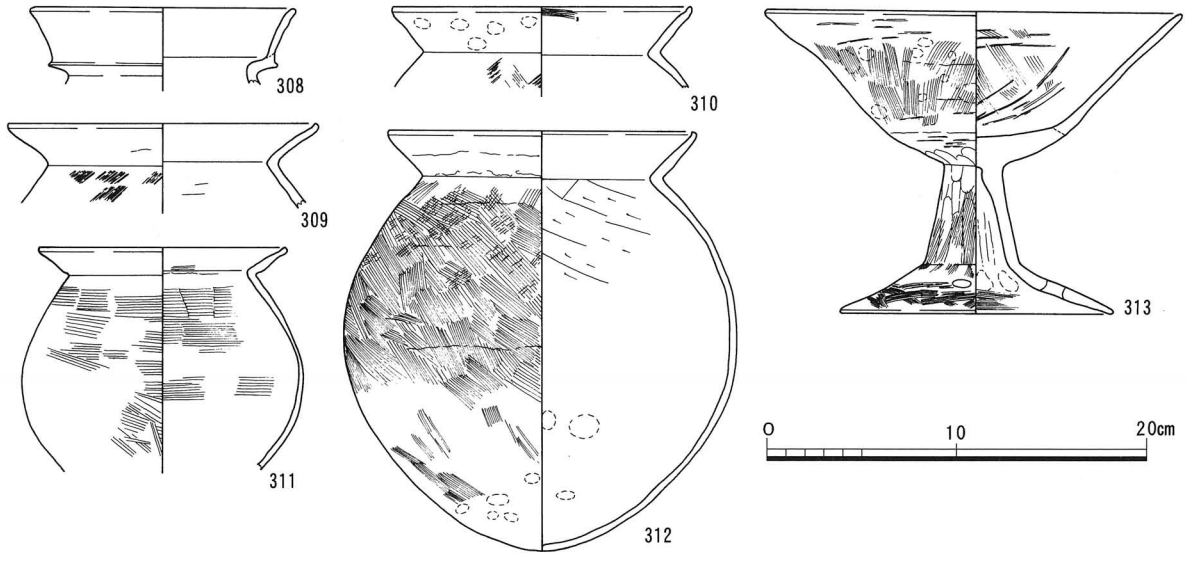
ＳＰ4105出土。304は高杯の裾部片である。ＳＰ470出土。305は口縁部が外反する長胴甕である。約1/2が残存しており口径18.0cm、器高26.5cmを測る。胎土中に１～５㎜大の長石を多量に含む粗製の甕で全体に器壁が厚い。体部の調整は外面が板ナデ、内面はヘラケズリが施されている。体部外面の上位に煤の付着が認められる。類例の少ないもので、帰属時期は判然としない。ＳＰ457出土。306は壷の体部片であるが、体部外面に煤が付着しており甕として使用されたものと推定される。体部内面と外面下位にヘラケズリが行われている。胎土中に角閃石を含む生駒西麓産である。ＳＰ4158出土。301と供伴して出土していることから、帰属時期としては古墳時代初頭前半(庄内式古相)が推定される。307は根石に使用されたもので、石材は花崗岩である。ＳＰ4115出土。

土器集積（ＳＷ）

ＳＷ401（写真４、第64図、図版二六）

調査地南部の１Ｂ地区で検出した。東西約0.5m、南北約0.5mの範囲に広がっている。古墳時代前期前半（布留式古相）を中心とする土器集積である。古式土師器６点（308～313）を図化した。308は山陰系甕の口縁部片である。色調は灰白色である。309・310・312は河内型庄内式甕である。309・310は口縁部から体部上半の細片である。共に体部外面に右上がりの細筋のタタキが施されている。312が完形品である。球形の体部に「く」の字に屈曲する口縁部が付くもので、口径16.3cm、器高22.2cm、体部最大径20.7cmを測る。体部外面の器面調整は、上半が右上がりの細筋タタキの後、左上がりのハケ調整が行われている。内面のヘラケズリは上半が明瞭であるが、中位以下は単位が不明瞭である。河内型庄内式甕の最終段階にあたる（甕Ｂ４）に分類されるものである。309・310・312は生駒西麓産。311は布留式影響の庄内式甕（甕Ｄ）である。中形品で復元口径13.1cmを測る。体部内外面共に横位のハケ調整が多用されている。色調は淡灰黄色。非生駒西麓産である。313は精製品の有稜高杯（高杯Ａ４）である。杯部は深く、上外方に直線的に伸びるものである。完形に復元が可能で、口径22.0cm、器高8.0cm、裾部径14.3cmを測る。布留Ⅰ期に比定される。

写真４　ＳＷ401（手前）、ＳＷ402（奥）検出状況（西から）



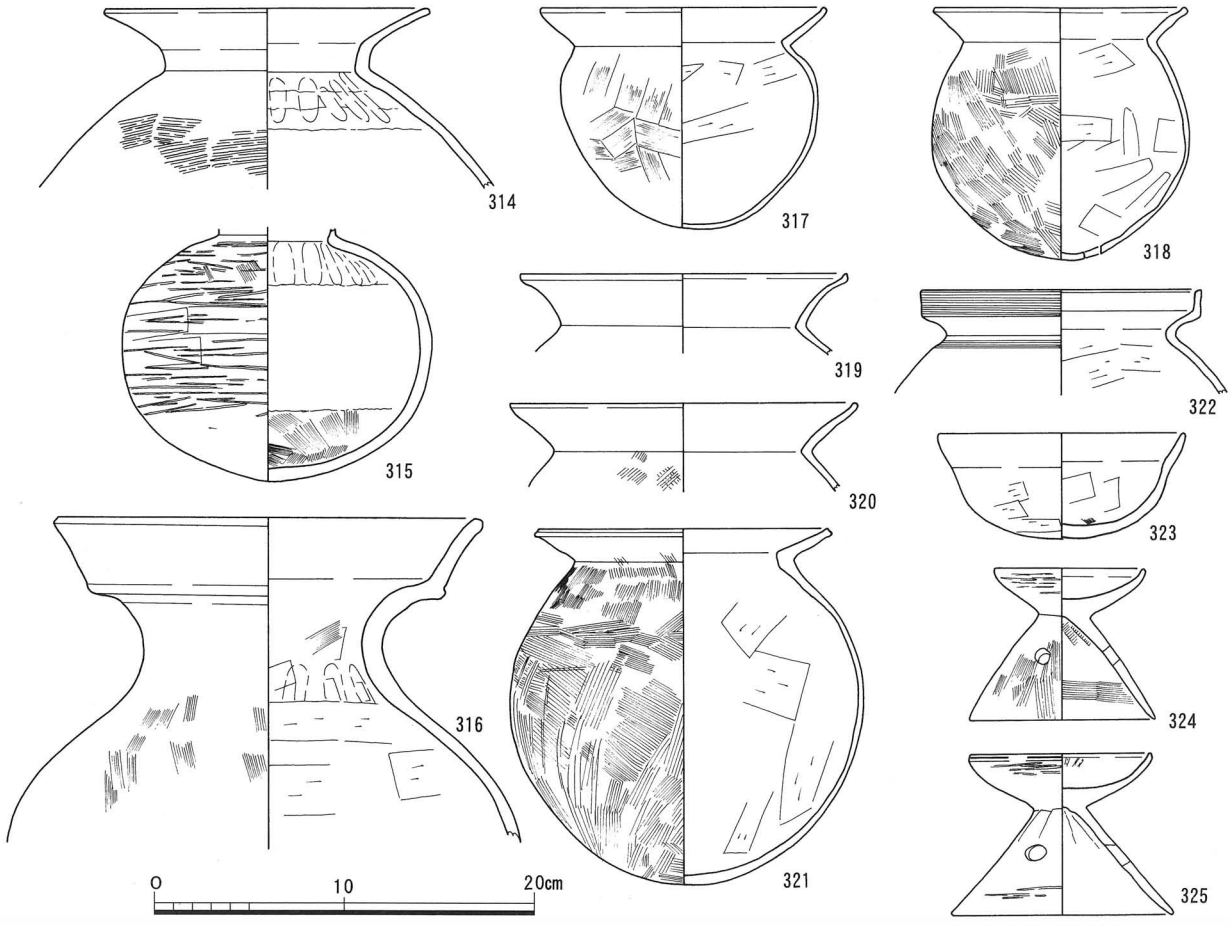
第64図　ＳＷ401出土遺物実測図

ＳＷ402（写真５、第65図、図版二七）

ＳＷ401の北に隣接するもので、東西約0.8m、南北約0.5mの範囲に広がっている。隣接するＳＷ401と同様、古墳時代前期前半（布留式古相）の遺物が出土しているため、形成された時間差は少ないものと推定される。古式土師器12点（314～325）を図化した。314は上外方に短く伸びる頸部から口縁部が斜上方に伸びる広口壺である。体部上半に直線文が施文されている。

色調は赤橙色。315は精製品の壷底部で口頸部を欠くが二重口縁壷ないしは直口壷と推定される。316は山陰系の二重口縁壷。口縁部から体部中位が完存している。口径22.6cmを測る。全体に器面剥離が顕著で調整は不明瞭である。317～321は甕である。317･318は小形の甕で317が口径15.1cm、器高11.6cm、体部最大径13.6cm、318が口径13.4cm、器高13.3cm、体部最大径13.6cmを測る。共に、形態や体部外面がハケによる調整である特徴から布留式影響の庄内式甕の(甕Ｄ)に分類される。318については、底部に方形の穿孔が１個存在している。共に生駒西麓産。319～321は中形甕で319・320は庄内式甕(甕Ｂ４)、321は完形品で口径15.7cm、器高18.8cm、体部最大径18.7cmを測る。屈曲部に面を持ち、口縁端部は外傾し端面に一条の沈線が廻る他、体部外面はハケメを多用する等の特徴を持つもので、布留傾向甕である(甕Ｅ)に分類される。319・320は生駒西麓産。322は吉備系甕(甕Ｊ４)である。口縁端部に擬凹線が廻る。323は椀形の体部を持つ小形鉢(鉢Ｇ２)にあたる。324・325は精製品の小形器台(器台Ｂ３)にあたる。共に深目杯部を持つもので、端部は上方につまみ上げられて尖り気味で終る。色調は明赤褐色である。遺構帰属時期は布留Ⅰ期である。

写真５　ＳＷ402検出状況(南から)



第65図　ＳＷ402出土遺物実測図

2）遺構に伴わない出土遺物

第４層出土遺物（第66図、図版二七・二八）

古墳時代中期から奈良時代中期に比定される遺物が出土しているが、細片が中心で完形のものは無い。31点(326～356)を図化した。326～338は土師器である。326は杯Ａである。体部内面に放射暗文が施文されている。327・328・330・331は杯Ｃの細片である。328が大型で復元口径21.4cmを測る。329は椀Ａの細片である。332・333は高杯Ａである。332は杯部片で杯部内面に螺旋と放射暗文が施文されている。333は脚部である。脚柱部に９面に亘る面取りが行われている。334は甕Ａの細片である。335は肩部に強いヨコナデを行う甕Ａの細片である。

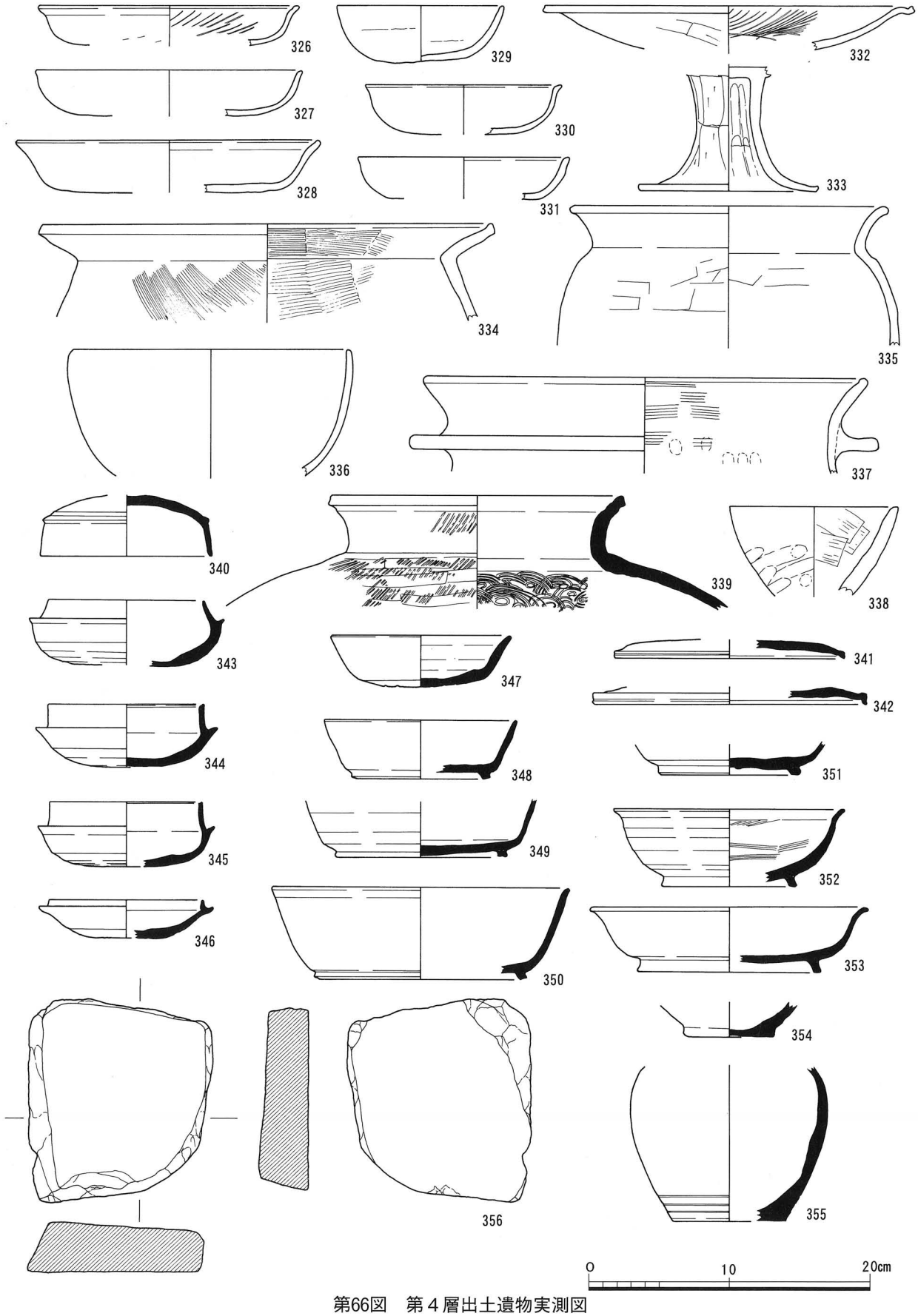
336は深い体部を持つ鉢で、後円部は直口の形態を持つ。鉢Ｂに分類される。337は羽釜の細片である。色調は褐灰色で胎土中に角閃石・黒雲母を含む生駒西麓産である。土師器類は概ね平城宮Ⅲ(750年)前後のものである。338は製塩土器の細片である。胎土はやや粗く、色調は熱変により灰白色に変色している。

339～355は須恵器である。339は甕Ａの細片である。体部外面に平行タタキ、内面に青海波タタキが施されている。340～343は杯蓋である。340が田辺編年(田辺1966)のＴＫ216型式(５世紀前半)、341・342は細片であるが、完形ならば宝珠形つまみが付くもので、ＭＴ21型式(８世紀前半)にあたる。杯身は343～353の11点である。343がＴＫ216型式(５世紀前半)、344・345がＴＫ23型式(５世紀後半)、346がＴＫ217型式(７世紀中葉)に比定される。347～353は受部を持たない形式である。高台を持たない347が杯Ａに分類される。口径12.4cm、器高4.0cmを測る。348～353は351を除き高台を有する杯Ｂに分類される。口縁部が直口を呈する348～351の他、351・352は口縁部が外反する形態のもので、当該期に存在した銅椀を模倣した形態のものがある。奈良時代中期に比定される。354・355は壷の底部である。354の底部裏面には静止糸切り痕が認められる。356は台石と推定される。扁平な石材の一面のみに研磨痕が認められる。一部に煤が付着しており、火熱を受けたことが推定される。石材は安山岩である。

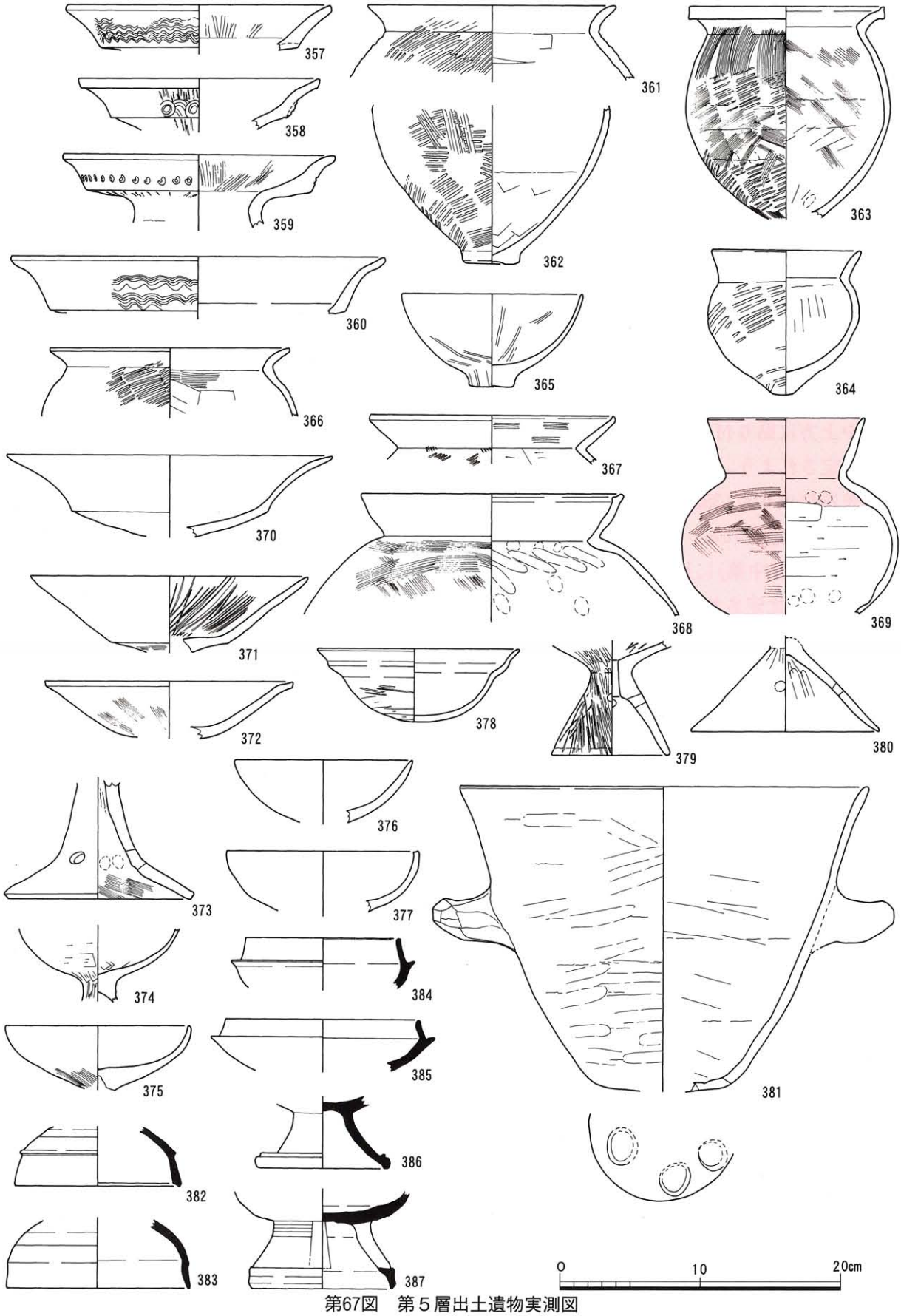
第５層出土遺物（第67図、図版二八）

弥生時代後期後半から古墳時代後期期中葉に比定される弥生土器・古式土師器・土師器・須恵器等が出土している。31点(357～387)を図化した。

357～360は二重口縁壷の細片である。口縁部外面には、２条の波状文を持つ357・360、竹管押圧円形浮文間に波状文を持つ358、細かい竹管文が廻る359がある。色調が褐色ないしは赤褐色を呈する357～359が角閃石を含む生駒西麓産。360は色調が灰白色で非生駒西麓産である。弥生時代後半から古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定される。361～363はＶ様式甕である。361・362共に生駒西麓産。363は中形の甕で底部を欠く。復元口径13.8cmを測る。口縁端部が垂直方向に拡張され幅広の端面を形成しており、当該期の吉備系甕の影響を受けたものと推定される。体部外面のタタキは細筋(４本/cm)で、体部中位の繋ぎ目付近でタタキが帯状に消されている他、体部上半と下半位置にはタタキの痕跡を消すハケ調整が行われている。生駒西麓産。364は小形甕である。約1/2が残存しており、口径10.4cm、器高10.5cmを測る。底部は突出しない小さな平底である。非生駒西麓産。365は椀形の体部に突出した平底が付く。口径12.8cm、器高6.8cm、底径3.0cmを測る。色調は赤褐色。366～368は甕である。366・367は庄内式甕の細片である。366が屈曲部に丸みを持つもので、定型化以前の庄内式甕、367が定型化した河内型庄内式甕にあたる。



第66図　第４層出土遺物実測図



第67図　第５層出土遺物実測図

前者が庄内式古相、後者が庄内式新相に比定される。共に生駒西麓産。368は布留式甕片である。口縁端部は内傾して肥厚するが強いヨコナデにより中位に凹線状の窪みが廻る。形態から布留式甕の中でも新相の(甕Ｆ3)にあたる。369は精製の直口壷である。体部外面から体部内面の上位にかけて赤色顔料が塗布されている。370～377は高杯である。370は弥生系高杯である。口縁部が大きく外反し、口縁長が長めの特徴を持つもので、庄内式古相段階に比定される。371は精製品の庄内系有稜高杯(高杯Ａ3)である。杯部内面に放射状ヘラミガキが行われている。庄内式新相に盛行する器種である。372は椀形の杯部を持つ高杯(高杯Ａ7)で布留式新相のものである。373は脚部。374～377は椀形高杯である。古墳時代中期中葉～後半(５世紀中～後半)に比定される。378は二段屈曲鉢(鉢Ｈ2)である。布留式古相のものである。379・380は小形器台である。379が杯部と脚部が貫通するもので(器台Ａ2)にあたる。380は杯部を欠く。中実の器台Ｂ類にあたる。379が庄内式古相。380が庄内式新相から布留式古相に比定される。381は甑である。約1/2が残存しており、復元口径28.8cm、器高　21.8cm、復元底径8.5cmを測る。把手は牛角状で体部の中位のやや上方に貼り付けられている。蒸気孔は2.2cm程度の円孔で３孔が残存していた。５世紀中葉に比定されよう。

須恵器類は６点(382～387)を図化した。382・383は杯蓋の細片である。共にＴＫ23型式(５世紀後半)に比定される。384・385は杯身の細片である。384がＴＫ47型式(５世紀末)、385がＴＫ10型式(６世紀中葉)に比定される。386･387は高杯で共に杯部の大半を欠く。386がＴＫ23型式(５世紀後半)に比定される。387が杯部外面と脚部内面に灰かぶりが認められる。ＴＫ47型式(５世紀末)に比定される。

参考文献

弥生土器

・原田昌則　2003「第５章　遺構・遺物の検討　第１節　中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半(庄内式古相)の土器の細分試案について」『久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書－大阪竜華都市拠点地区竜華東西線４工区に伴う』(財)八尾市文化財調査研究会報告74　(財)八尾市文化財調査研究会　本文中の土器分類で〔　〕で示したものがそれにあたる。

古式土師器

・原田昌則　1993「第５章　まとめ　３)中河内地域における庄内式から布留式土器の編年試案」『Ⅱ久宝寺遺跡(第１次調査)』(財)八尾市文化財調査研究会報告37　本文中の土器分類で(　)で示したものがそれにあたる。なお、本書で使用した布留式期の土器編年と既往編年との対応関係については下表に示した。

・既往編年案との対応関係

暦年代	270			300			350			400		
古墳時代前期	前半			中葉			後半					中期
土器様式	布留式											
様式区分	古相前半			古相後半		中相			新相			
原田 1998	**布留Ⅰ期**			**布留Ⅱ期**		**布留Ⅲ期**			**布留Ⅳ期**			**布留Ⅴ期**
杉本 2006	25 期	26 期	27 期	28 期	29 期	30 期	31 期	32 期	33 期	34 期		
米田 1991	庄内式期Ⅳ		庄内式期Ⅴ＝布留式期Ⅰ			布留式期Ⅱ	布留式期Ⅲ		布留式期Ⅳ			布留式期Ⅴ
西村 2006	古段階			中段階			新段階					
寺沢 1986・2002	布留０式(新)		布留１式			布留２式	布留３式		布留４式(古)	布留４式(新)		
標識資料	中田１－39 土坑２		萱振 SE03		朝集殿下層溝	小若江北				船橋０Ⅰ		

土師器
・奈良国立文化財研究所　1978『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所学報第32冊
・古代の土器研究会編　1992「古代の土器Ⅰ　都城の土器集成」
・古代の土器研究会編　1993「古代の土器Ⅱ　都城の土器集成」
・佐藤　隆　1992「第２節　平安時代における長原遺跡の動向ⅱ）長原遺跡における平安時代の土器編年」『大阪市平野区　長原遺跡発掘調査報告Ⅴ　市営長吉住宅建設に伴う発掘調査報告書　後編』（財）大阪市文化財協会
・森島康雄　1990「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』日本中世土器研究会
須恵器
・田辺昭三　1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
・田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店
瓦器
・尾上　実　1983「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念論集　古文化論集』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会（和泉型瓦器椀の型式に使用）
・森島康雄　1992「畿内産瓦器椀の併行関係と暦年代」『大和の中世土器Ⅱ』大和古中近研究会（和泉型瓦器椀の実年代に使用）
製塩土器
・広瀬和雄　1994「６大阪府」『日本土器製塩研究』青木書店

第３章　まとめ

今回の調査では４面（第１～４面）に亘る調査を実施した結果、弥生時代後期末から平安時代後期に比定される遺構・遺物を検出した。

ただ、前述でも触れたように、旧建物の基礎構築における掘削箇所が調査地の全般にわたって広がっており、それらの基礎掘削による撹乱部分が深層に達していたため、古墳時代前期後半（布留式新相）から平安時代後半の遺構を検出した第１～３面では、面的な広がりを捉えることは困難であった。以下、本調査で検出した弥生時代末期～平安時代末期の成果と既往成果を含めて時期毎に概観する。

弥生時代後期末から古墳時代初頭前半（庄内式古相）

第４面で検出した。弥生時代後期末から古墳時代初頭前半（庄内式古相）の遺構分布は調査区西部を中心としている。竪穴住居（ＳＩ401）、ＳＤ403等がそれにあたるもので、主軸方向が共通している。竪穴住居（ＳＩ401）については、当該期の一般的な竪穴住居に比して小規模（約2.7×2.7ｍ）である特徴を持っている。なお、調査範囲内および周辺の調査においても他に同時期の竪穴住居が存在しないことから、居住域のなかでも中心部分から隔絶された位置に存在していた産屋的な性格を有する建物であった可能性がある。同時期の居住域は南接する第１次調査Ａ－Ⅲ地区で検出されており、本調査地点より南部に展開していたことが想定される。

古墳時代初頭後半（庄内式新相）

庄内式新相のものは、調査区の全域にわたって散発的な遺構分布が認められる。ＳＤ404等がそれにあたる。当該期の居住域は当調査地点の南東約200ｍ地点で行われた第４次調査の５・７・９調査区付近一帯が居住域の中心であったと推定される。

古墳時代前期前半・後半（布留式古相・新相）

第４面で検出した。調査区のほぼ全域に分布している。時期的には布留式古相と新相に区別することが可能であり、当該期を通じて連続するものではなく一時期の断絶があったことが窺われる。布留式古相時期のものは、竪穴住居２棟（ＳＩ402・403）を中心とするもので、調査区の中央

部から東部にかけての分布が認められる。布留式古相の居住域は、調査地より北側では、第32次調査、南側では第１次調査のＡ－Ⅰ地区・Ａ－Ⅲ地区、第３次調査の26地区・28地区、第４次調査の第７地区で検出されており、東西約250m、南北約300mの範囲に広がっている。

布留式新相の段階においては、主軸を共通する掘立柱建物３棟（ＳＢ401～403）を中心に遺構が分布しており、遺構検出数が最も多い。当該期の遺構の分布は、西側では第４次調査の第１調査区、北側では第８次調査の５調査区で検出されており、当調査地から西部ないしは北部に展開していたようである。

古墳時代中期中葉（５世紀中葉）

第３面で検出したＳＤ316・317と第４面で検出したＳＫ421・ＳＤ413がある。調査区の東部と西部で検出したが、検出数が少なく散発的な分布を示している。周辺においては、第１次調査のＡ－Ⅱ・Ⅲ地区・22地区、第４次調査の１・２区、第32次調査で居住域を構成する遺構が検出されており、これらを含めて東西約150m、南北約200mに展開していたことが推定される。同時の居住域は当調査地から北へ約350m地点で実施された第８次調査の１・２・４区および第26次調査を中心として東西約100m、南北約100mに展開する居住域が検出されている。さらに、遺跡範囲北西隅で平成10年度に府文化財調査研究センターにより実施された調査（その１）においても居住域が検出されていることから、小阪合遺跡内では同時期に南北方向に約200～250mの間隔を有して展開する３箇所の居住域が存在していたことが推定される。

奈良時代前期から後期（８世紀前半から後半）

第３面で検出した。奈良時代の全般にわたって集落が営まれている。時期的には前期のものがＳＥ301・302、中期のものがＳＫ319、ＳＤ304、後期のもののものがＳＤ314・318である。

当該期の集落域としては、本調査地を中心として北側の第32次調査、南側の第１次調査のＡ－Ⅲ地区、第３次調査の25・27調査区を包括して南北方向の東西約300m、南北約100mに展開する居住域と遺跡範囲の北西部の府文化財調査研究センター（その１）・府文化財センター（その２）、第40次調査で奈良時代中～末の居住域が検出されている。特に、後者の居住域においては、墨書土器や和銅開珎をはじめとする多数の皇朝銭が出土しており、北接する位置に存在していた東郷廃寺を中心とした遺跡周辺の性格を考える上で貴重な資料と言える。

平安時代中期中葉（10世紀末から11世紀前半）

第３面で検出したＳＥ303・ＳＫ310がある。

当該期の遺構は本調査地および、遺跡範囲の北西部にあたる府文化財調査研究センター（その１）・府文化財センター（その２）調査で検出されており、奈良時代に成立した居住域を踏襲する形をとるが集落域の規模は小さい。

平安時代中期中葉から後期

当該期には生産域として利用されている。第２面で検出された農耕に関連した小溝で構成される生産域である。遺構の帰属時期としては、第３面で検出したＳＥ303の廃絶時期である11世紀前半から第１面で検出したＳＫ102（12世紀初頭）の間が推定される。

平安時代後期前半から後半（11世紀末期から12世紀末期）

11世紀末の遺構は第４面で検出したＳＫ409、12世紀初頭の遺構は第１面で検出したＳＫ102、12世紀末期の資料としては第３面で検出したＳＤ315がある。それ以外の遺構については旧建物

の基礎構築で削平を受けており、平面的な広がりは判然としない。調査区に隣接する東側には、当該期の河川が南北方向に流下していたことがこれまでの調査で判明している。当該期の集落のうち居住域については、この河川を挟んで展開している。左岸に成立した居住域としては、北から府文化財調査研究センター（その１）・府文化財センター（その２・３）・第39次・第８次・第20次・本調査区を含めて東西約150m、南北約700mの範囲に及ぶ大規模な居住域(北集落)がある他、さらに南部では第３次の28区･第４次の９区から中田遺跡内に広がる居住域(南集落)がある。右岸に成立した集落としては、府教委昭和63年度調査・第30次調査で検出されており、小阪合２丁目に存在する式内社である坂合神社の西部に展開した居住域(東集落)がある。以上のように、当該期の小阪合遺跡内では３箇所に居住域の存在が想定される。

小阪合遺跡周辺は、延久四年(1072)の石清水文書にあるように石清水八幡宮の荘園に含まれている。荘田として若江郡掃部別宮に御供田五町九段があり、その内訳として南条大二十里十坪の一段四十歩、二十四坪の一町百歩、二十五坪の五段、三十六坪の八段、揚田里四坪の三坪、八坪の五段、門田里二十坪の四段、渋川里二十四坪の五段があったとされている。これらの荘田は、八尾市南本町六丁目に鎮座する掃部別宮(矢作神社)の管理するところのものであり、小阪合遺跡内で検出されている当該期の集落についても荘田の維持・管理を行った荘民層の集落であったことが推定されよう。しかしながら、鎌倉時代初頭(13世紀初頭)においては、第21次調査以外には小阪合遺跡内からは遺構が検出されておらず､集落域の移動や断絶を余儀なくされたようである。これらの要因としては、延久元年(1069)の「延久の荘園整理令」発布でかなりの打撃を受けた石清水八幡宮領は、その後も、一族、門徒らによる宮神領の略取や平氏全盛のため源氏に縁の深い八幡宮への庇護の減少と相俟って、鎌倉時代はじめにかけて荘園衰退を余儀なくされたようである。これらの事象は、小阪合遺跡で検出した当該期の３箇所の集落推移と同調しており、鎌倉時代初頭に集落数の減少結果を招いた要因であった可能性が高い。

参考文献

・沢井浩三　1958「第三章　中世」『八尾市史』大阪府八尾市役所
・棚橋利光　1977「式内社調査報告　第４館　河内国」式内社研究会編纂
・宮川　満　1979「第二章　荘園の動向　第四節　社領の発達」『大阪府史　第三巻　中世編Ⅰ』大阪府史編纂委員会
・高萩千秋　1987『小阪合遺跡－八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－<昭和57年度第１次調査報告書>』(財)八尾市文化財調査研究会報告10　財団法人八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋　1987「小阪合遺跡第３次調査」『小阪合遺跡－八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－<昭和58年度第２次調査・第３次調査報告書>』(財)八尾市文化財調査研究会報告11（財)八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋　1988『小阪合遺跡－八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－<昭和59年度第４次調査報告書>』財団法人八尾市文化財調研究会
・山上　弘　1989『小阪合遺跡発掘調査概要・Ⅱ－八尾市南小阪合町所在－』大阪府教育委員会
・高萩千秋　1990『小阪合遺跡』－第８・13・16次調査発掘調査報告－　(財)八尾市文化財調査研究会報告26(財)八尾市文化財調査研究会
・棚橋利光　1991「二、河内中北部の街道(東西道)」『歴史の道調査報告書　第四集　奈良街道』大阪府教育委員会
・坪田真一　1993「Ⅱ小阪合遺跡第19次調査(ＫＳ90－19)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』(財)八尾市

文化財調査研究会報告41　(財)八尾文化財調査研究会
・坪田真一　1993「Ⅲ小阪合遺跡第20次調査(ＫＳ90－20)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』(財)八尾市文化財調査研究会報告41　(財)八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋　1993「Ⅳ小阪合遺跡第22次調査(ＫＳ92－22)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告39　(財)八尾市文化財調査研究会
・渋　斎　1995「東郷廃寺発掘調査報告」『八尾市文化財紀要７』八尾市教育委員会文化財課
・原田昌則　1996「Ⅰ小阪合遺跡(第30次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告54』(財)八尾市文化財調査研究会
・坪田真一・古川晴久 1997「13.小阪合遺跡第32次調査(ＫＳ96－32)」『平成８年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』　(財)八尾市文化財調査研究会
・駒井正明・本間元樹・陣内暢子・松田留美・松田順一郎　2000「小阪合遺跡－都市基盤整備公団八尾団地建替えに伴う発掘調査報告書－」『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第51集』(財)大阪府文化財調査研究センター
・本間元樹・辻本　武　2004「小阪合遺跡(その２)－八尾団地(建替)埋蔵文化財発掘調査(第２次)－」『(財)大阪府文化財センター調査報告書　第116集』(財)大阪府文化財センター
・松下知世・金光正裕・若林邦彦・新海正博　2005「小阪合遺跡(その３)－山本団地建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査報告－」『(財)大阪府文化財センター調査報告書　第132集』(財)大阪府文化財センター
・岡田清一　2005「18.小阪合遺跡第39次調査(ＫＳ2004－39)」『平成16年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
・岡田清一・菊井佳弥　2006「16.小阪合遺跡第40次調査(ＫＳ2005－40)」『平成17年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
・原田昌則　2007「Ⅲ小阪合遺跡第21次調査(ＫＳ91－21)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告101』(財)八尾市文化財調査研究会

図　　版

第１面　調査区北部遺構検出状況（南東から）

第１面　調査区西部遺構検出状況（南から）

図版二

第２面　調査区北部遺構検出状況（東から）

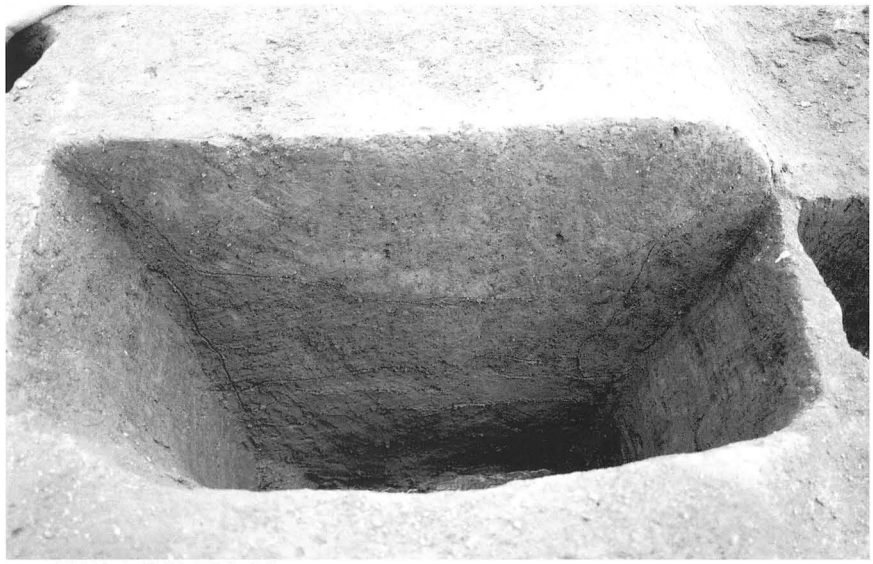
第２面　調査区西部遺構検出状況（南から）

第３面　遺構検出状況（北から）

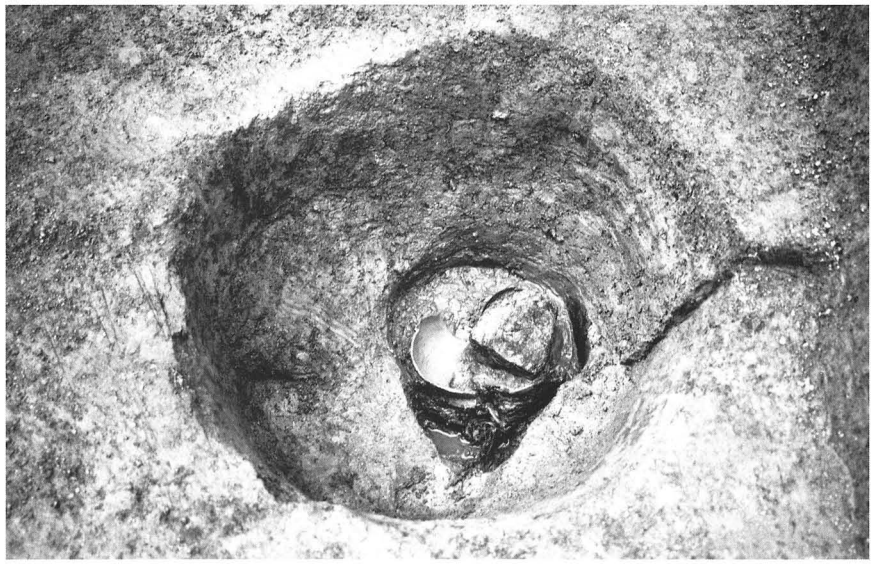
第３面　遺構検出状況（東から）

図版四

ＳＥ301検出状況（西から）



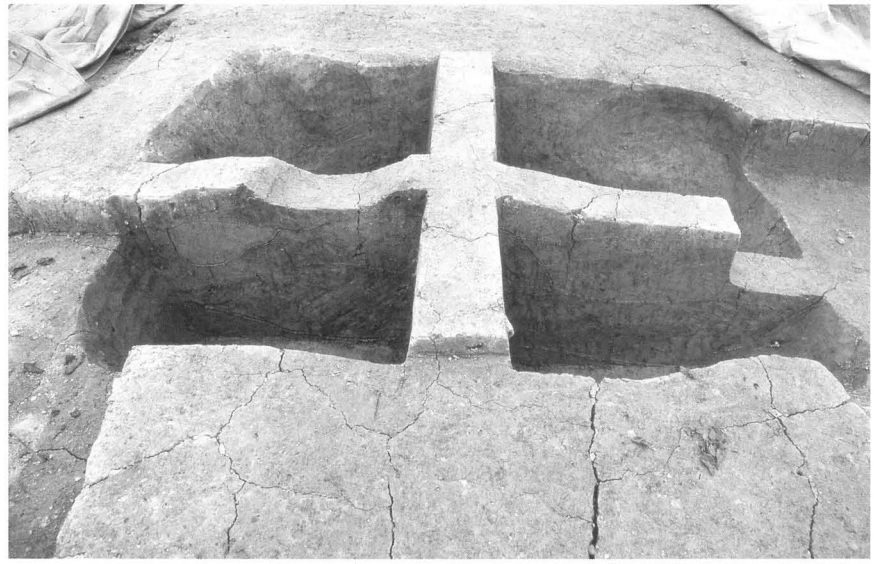
ＳＥ302検出状況（西から）



ＳＥ303検出状況（東から）

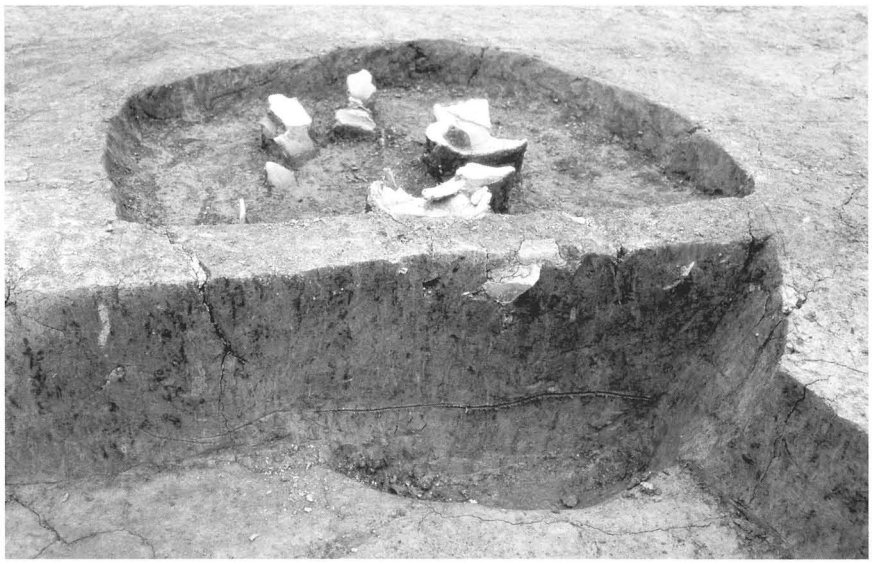
ＳＫ309検出状況（西から）

ＳＫ310検出状況（東から）

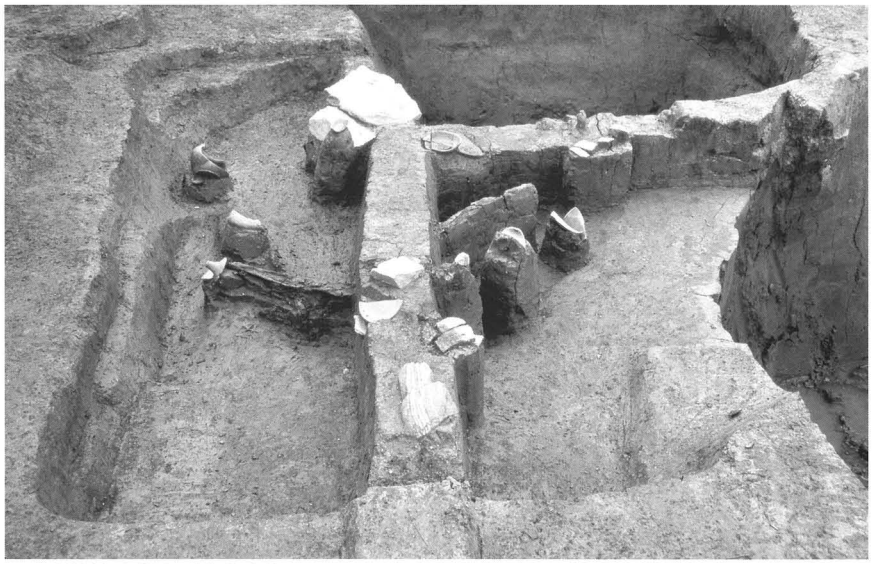


ＳＫ311検出状況（南から）

図版六



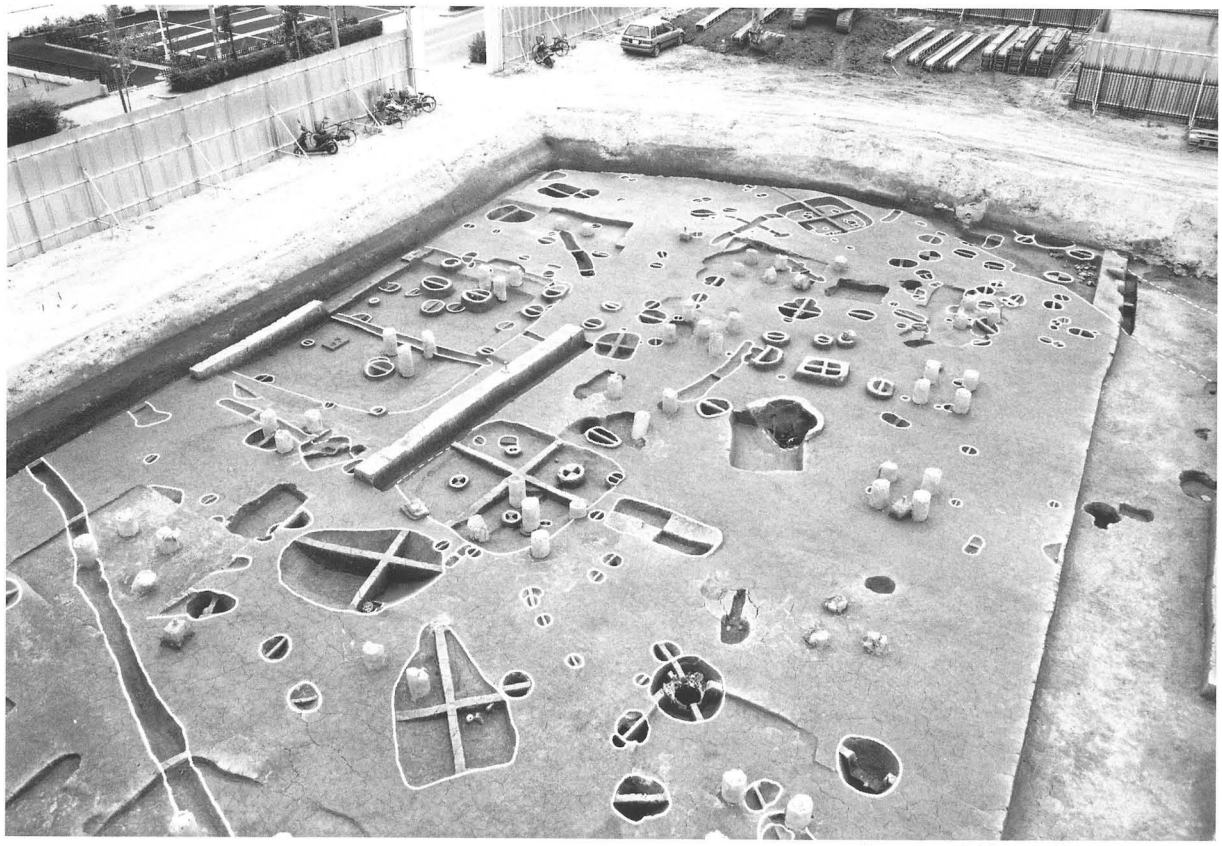
ＳＫ312検出状況（東から）



ＳＫ319検出状況（南から）

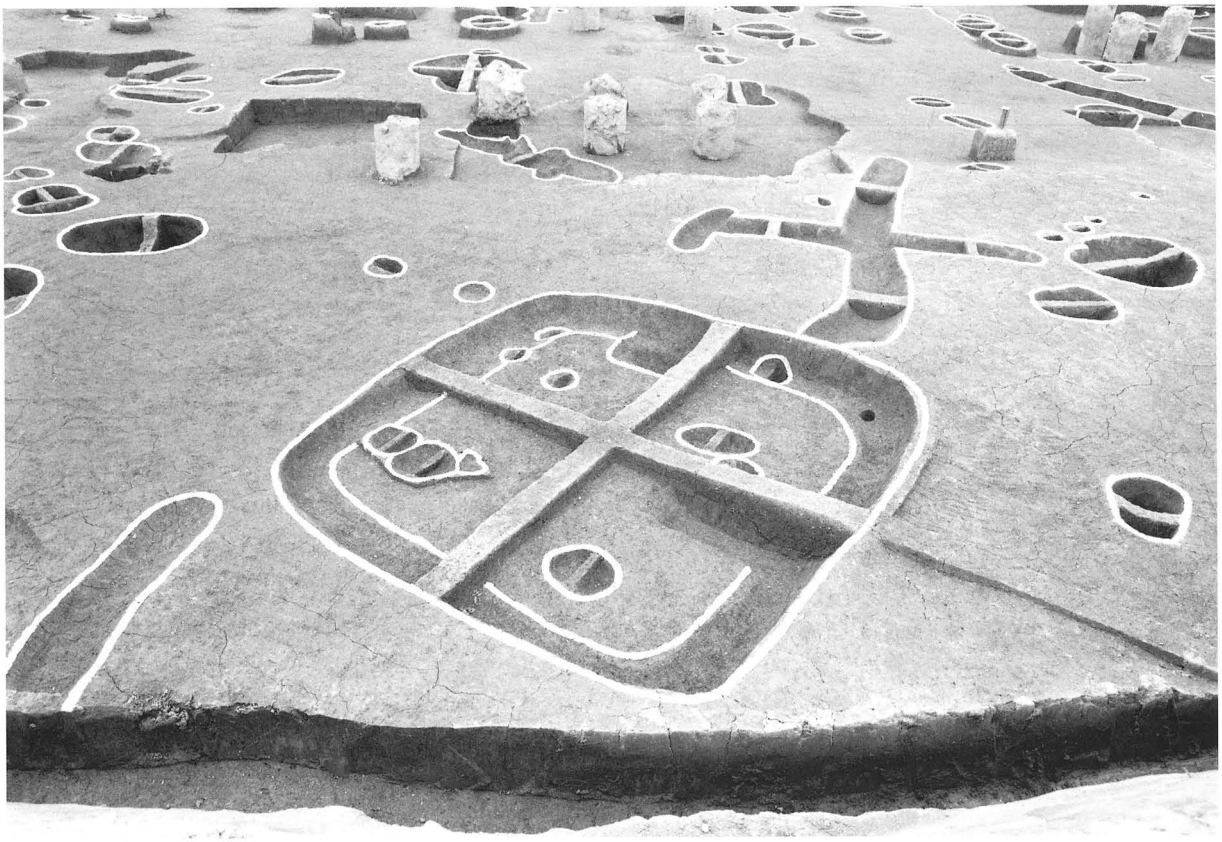
第３面南西部遺構検出状況

第４面　遺構検出状況（北から）

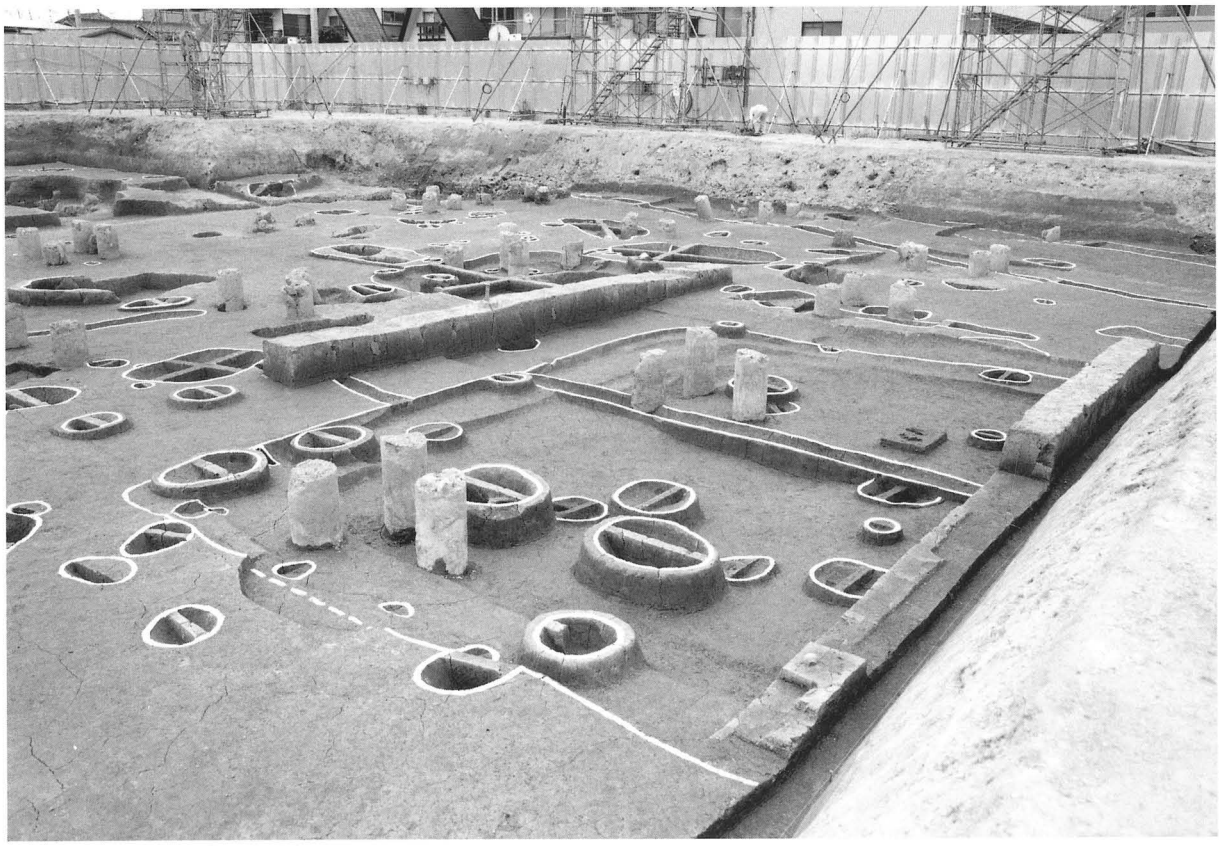


第４面　遺構検出状況（東北から）

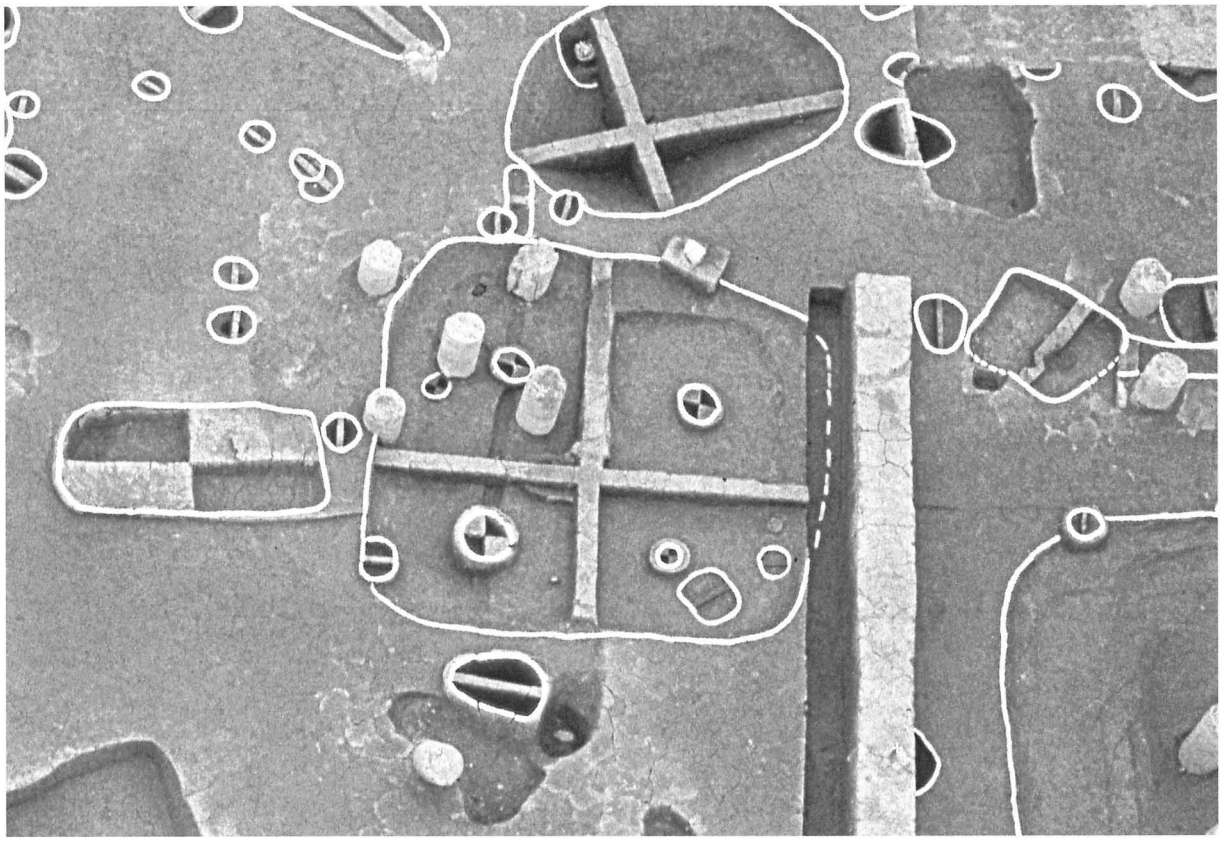
図版八



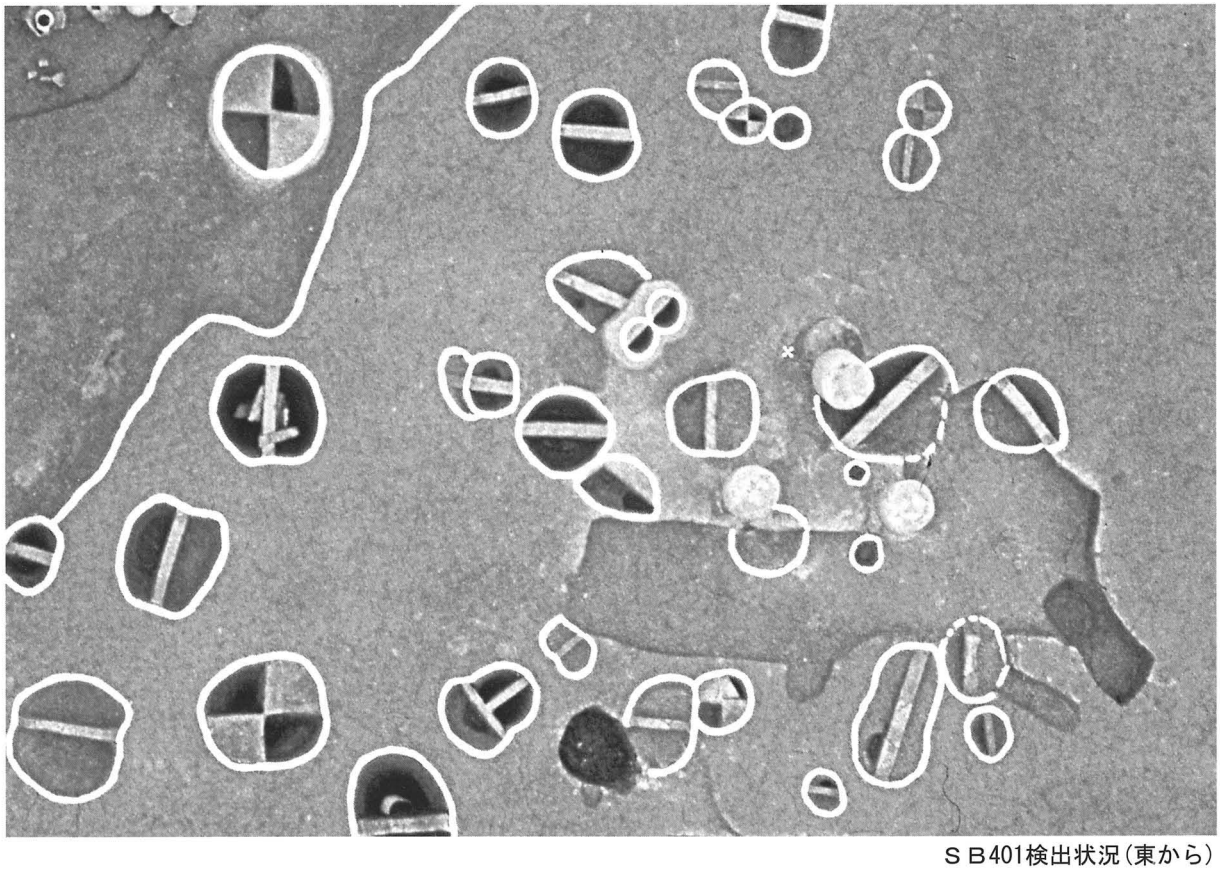
ＳＩ401検出状況（西から）



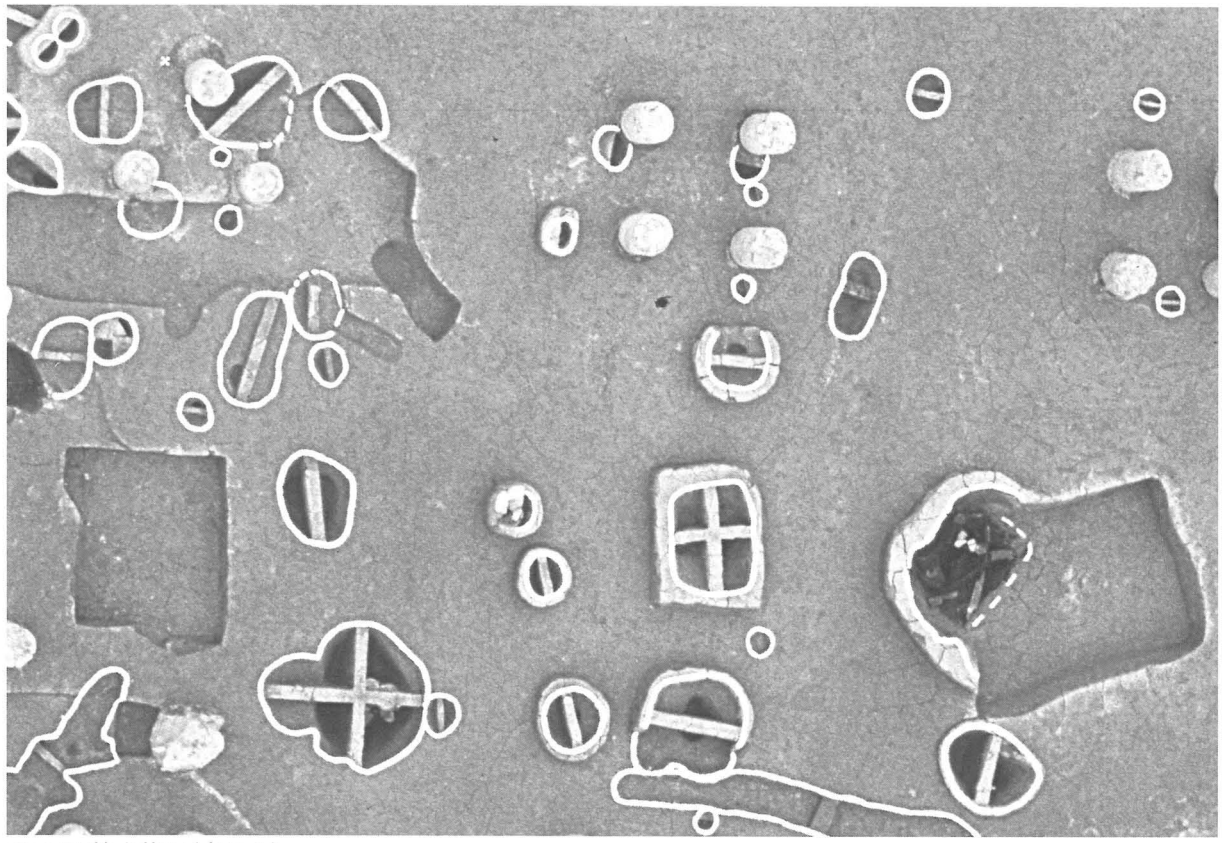
ＳＩ402検出状況（南西から）



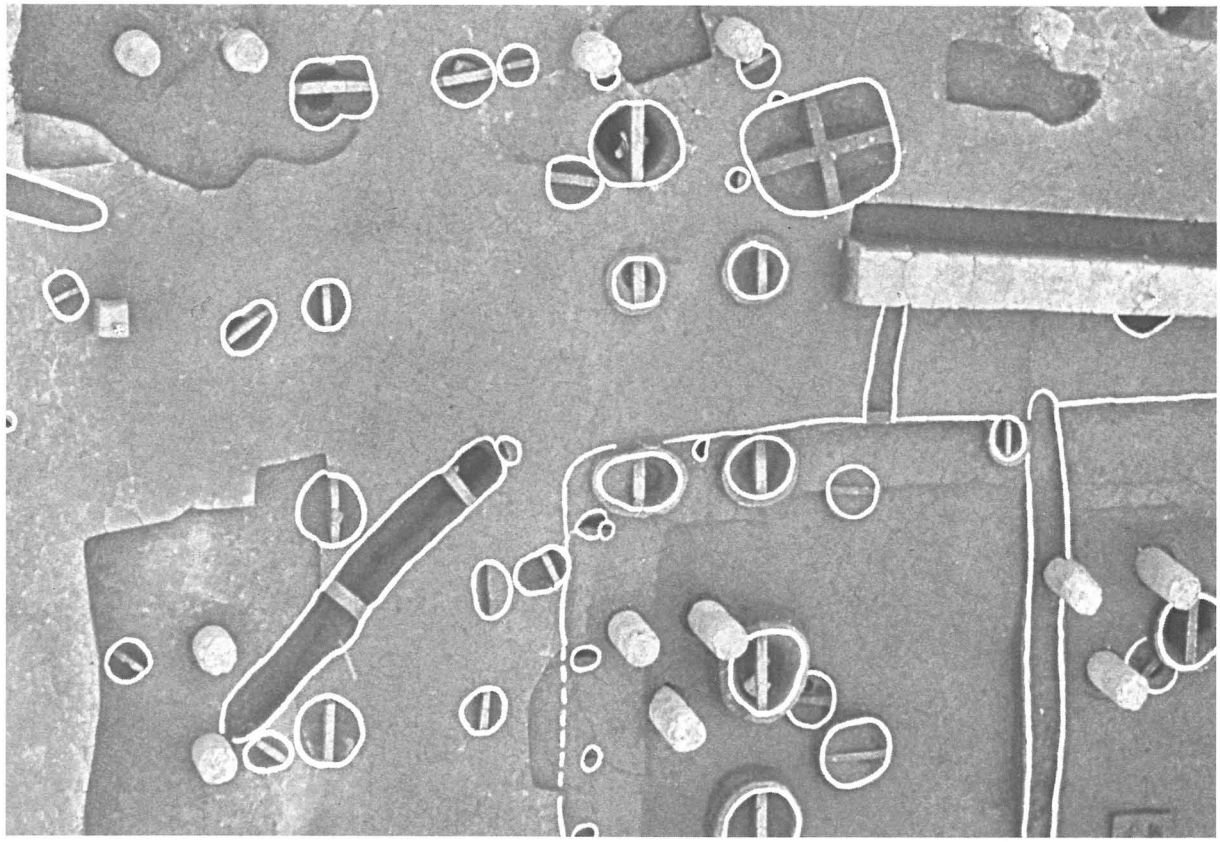
ＳＩ403検出状況（西から）



ＳＢ401検出状況（東から）



ＳＢ402検出状況（南から）



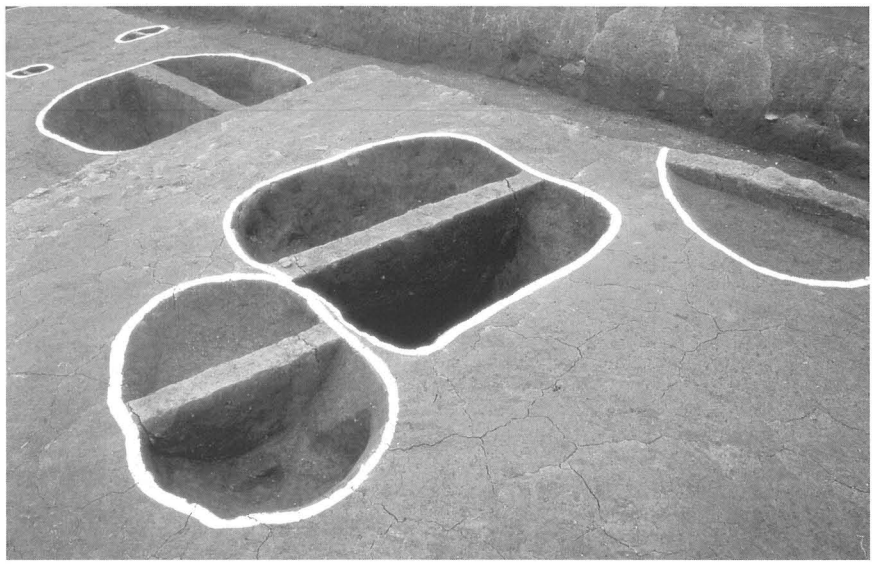
ＳＢ403検出状況（南から）

ＳＥ402検出状況（東から）

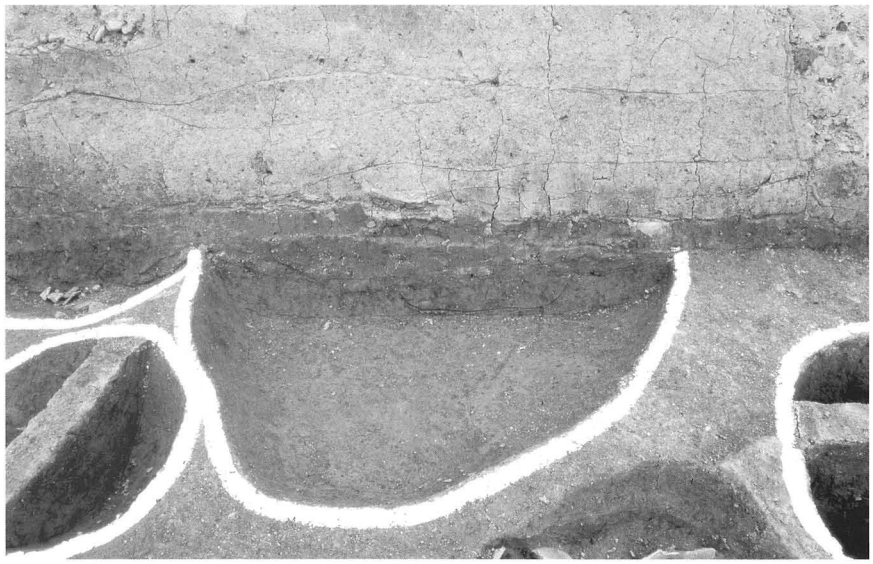
ＳＥ402遺物出土状況（西から）

ＳＥ402最下層遺物出土状況（西から）

図版一二

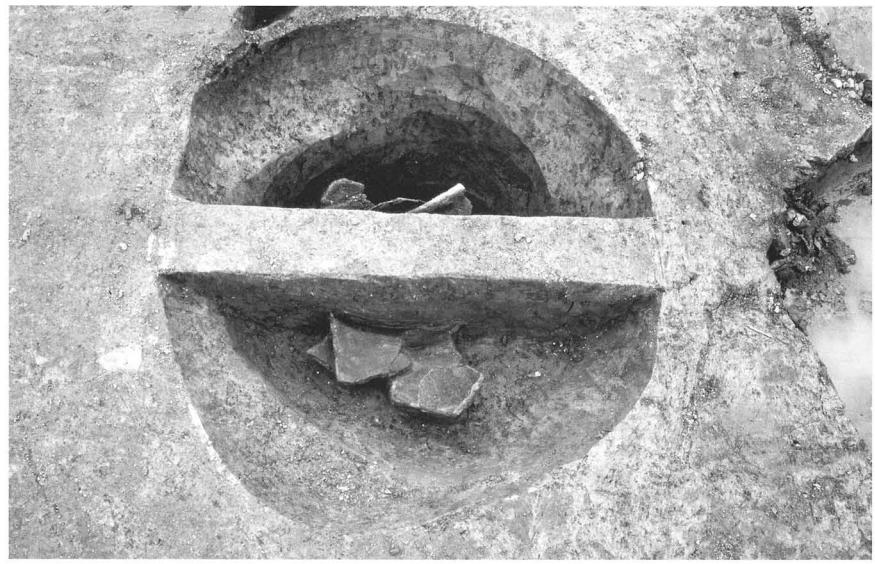


ＳＫ402・403検出状況（北西から）

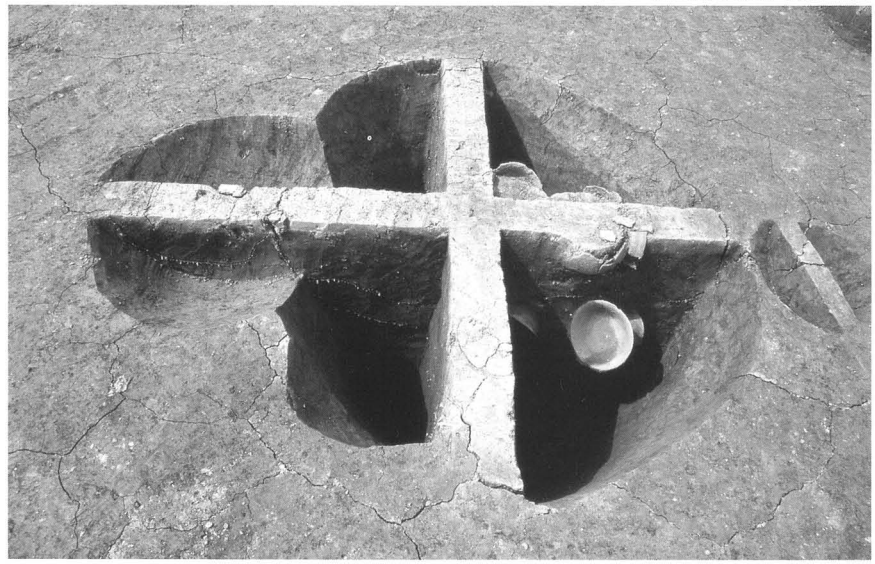


ＳＫ407検出状況（東から）

ＳＫ408検出状況（西から）



ＳＫ409検出状況（東から）



ＳＫ411遺物出土状況（南から）

ＳＫ420検出状況（南から）

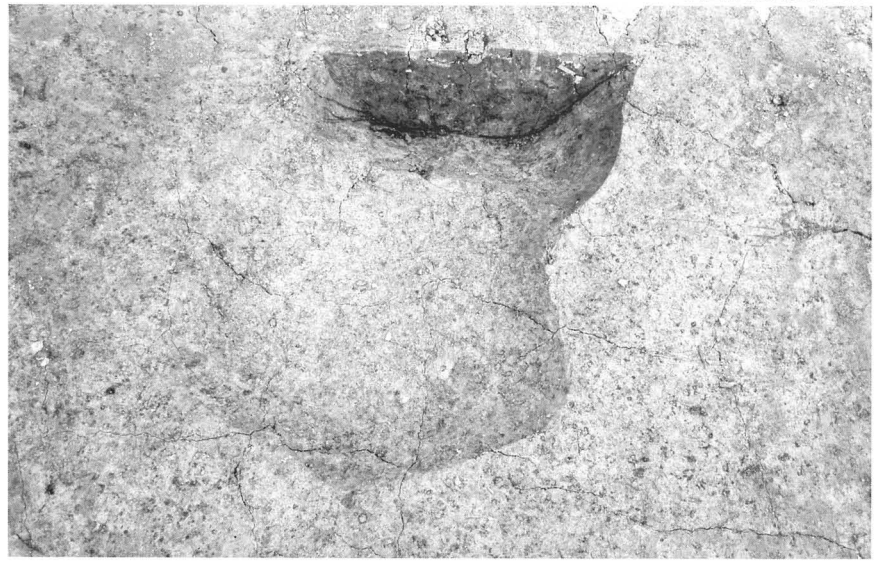
図版一四

ＳＫ421検出状況（西から）

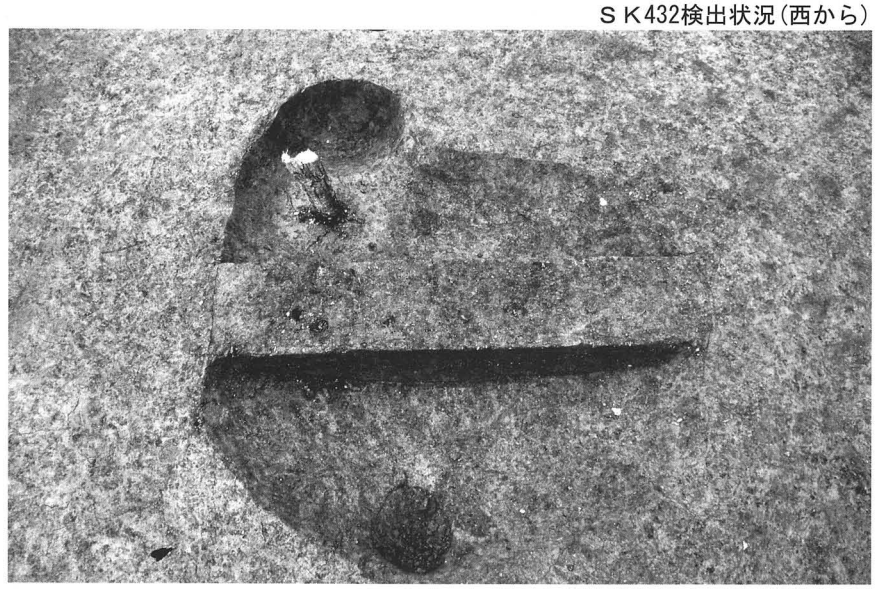
ＳＫ426検出状況（南東から）

ＳＫ428検出状況（西から）

ＳＫ429検出状況（南から）

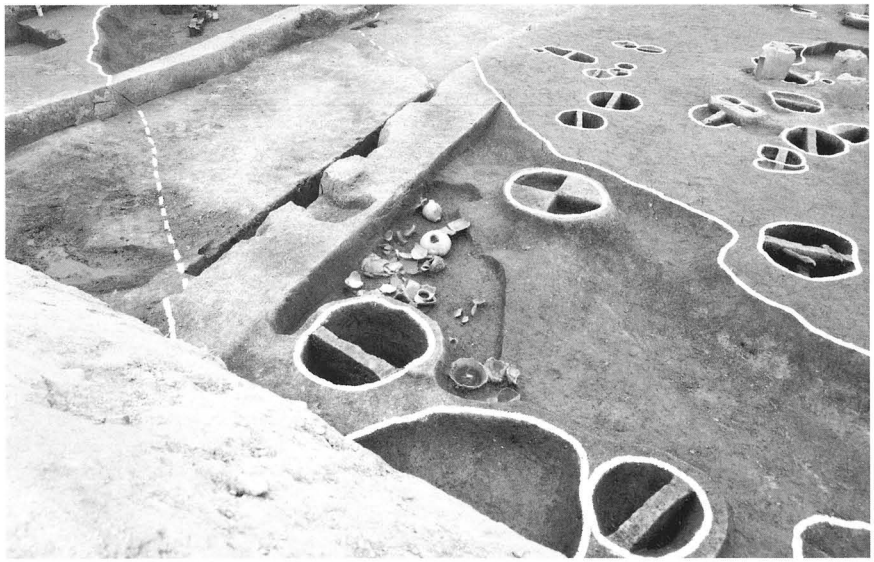


ＳＫ432検出状況（西から）



ＳＫ433検出状況（南から）

図版一六



ＳＤ403検出状況（南西から）

ＳＤ403北部遺物出土状況（南から）

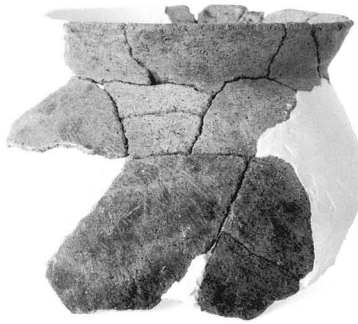
調査風景

3

4

23

35



37

47

53

55

SK102(3・4)、SE302(23)、SE303(35)、SK309(37)、SK310(47)、SK312(53)、SK319(55) 出土遺物

図版一八

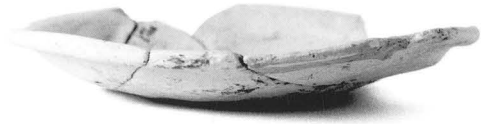
57

65

66

69

73



84

99

100

SK319(57・65・66・69・73)、SD314(84)、SW301(99・100)出土遺物

101

109

110

120

121

122

123

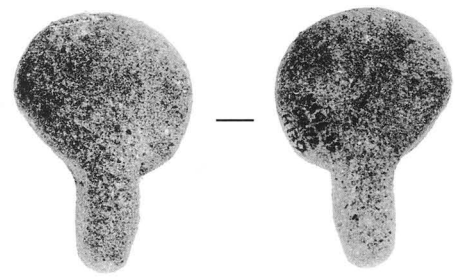
124

SW301(101)、SE402(109・110・120～124)出土遺物

125

126

129



139

145

151

153

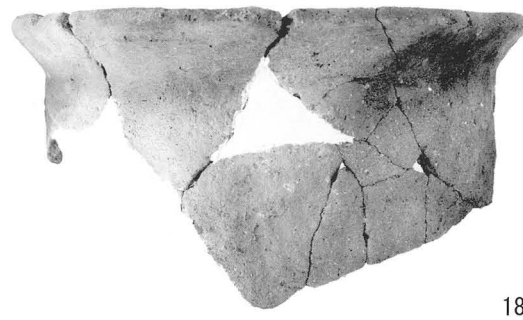
157

ＳＥ402(125・126・129・139)、ＳＫ402(145・151・153・157)出土遺物

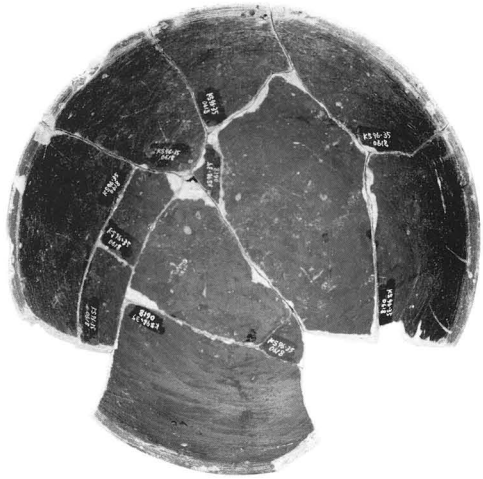
164

166

174



185



180

182

SK412(164)、SK408(166・174)、SK409(180・181・185)出土遺物

図版二二

186

187

191

192

193

197

199

214

ＳＫ411(186・187・191・192)、ＳＫ420(193)、ＳＫ421(197・199)、ＳＫ428(214)出土遺物

215

216

221

222

227

229

232

234

ＳＫ428(215・216)、ＳＫ429(221)、ＳＫ431(222)、ＳＤ403(227・229・232・234)出土遺物

図版二四

238

242

243

244

247

260

263

264

ＳＤ403(238・242～244・247・260・263・264)出土遺物

266

268

270

272

276

277

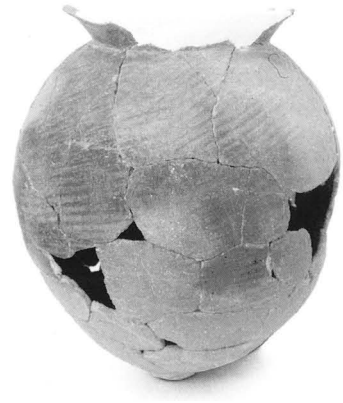
278

285

ＳＤ403(266・268・270・272・276・277・278・285)出土遺物

図版二六

286



289

296

305

312

313

315

316

ＳＤ403(286・289)、ＳＤ413(296)、ＳＰ457(305)、ＳＷ401(312・313)出土遺物

317

321

318

323

324

329

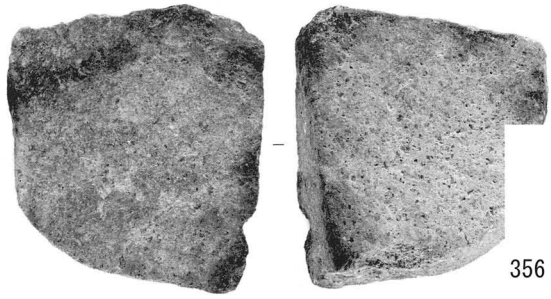
343

SW402(317・318・321・323・324)、第４層(329・343)出土遺物

図版二八

347

353



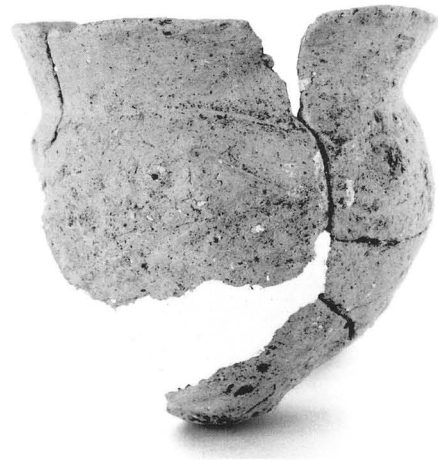
356

369

378

379

363



364

381

第４層(347・353・356)、第５層(363・369・378・379・381)出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん　やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく116
書名	財団法人　八尾市文化財調査研究会報告116
副書名	小阪合遺跡　Ⅰ 小阪合遺跡（第28次調査）　Ⅱ 小阪合遺跡（第29次調査）　Ⅲ 小阪合遺跡（第35次調査）
巻次	
シリーズ名	財団法人　八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	116
編著者名	Ⅰ成海佳子・河村恵理　Ⅱ河村　Ⅲ原田昌則
編集機関	財団法人　八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581－0821　大阪府八尾市幸町四丁目58－2　TEL・FAX　072－994－4700
発行年月日	西暦2008年８月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こざかあいいせき 小阪合遺跡 （第28次調査）	おおさかふやおしやまもとちょうみなみ７ちょうめ 大阪府八尾市山本町南七丁目	27212	40	135° 37′ 15″	34° 37′ 05″	19940526～ 0805	約855	小学校体育館
こざかあいいせき 小阪合遺跡 （第29次調査）	おおさかふやおしあおやまちょう３ちょうめ 大阪府八尾市青山町三丁目	27212	40	135° 36′ 59″	37° 37′ 09″	19940601～ 19950320	約7220	総合体育館
こざかあいいせき 小阪合遺跡 （第35次調査）	おおさかふやおしあおやまちょう４ちょうめ 大阪府八尾市青山町四丁目	27212	40	135° 36′ 54″	34° 37′ 07″	19960317～ 0619	約1090	養護老人ホーム施設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小阪合遺跡（第28次調査）	墓域	弥生時代後期	方形周溝墓・土器棺墓	弥生土器	
	生産域	古代末期～中世	畔畔・水田	土師器・瓦器・須恵器	
小阪合遺跡（第29次調査）	生産域	中世～近世	水田・島畠	国産陶磁器	
		弥生時代中期	溝	弥生土器	
小阪合遺跡（第35次調査）	集落	弥生時代後期末～古墳時代初頭後半	竪穴住居・溝	弥生土器・古式土師器・石製品	
		古墳時代前期前半・後半	竪穴住居・掘立柱建物井戸・土坑・小穴・溝	古式土師器	
		古墳時代中期	土坑・溝	土師器・須恵器	
		奈良時代前期～後期	井戸・土坑・溝	土師器・須恵器	
		平安時代中期～後期	井戸・土坑・溝	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器	

要約	・小阪合28次調査においては、弥生時代後期に調査地を横断する大溝を境界として、南西部に住居跡（居住域）、北東部に方形周溝墓群と土器棺墓（墓域）を確認した。また古代末期～中世にかけては生産域として利用されていた。 ・小阪合29次調査においては、弥生時代中期～近世まで連綿と続く耕作面を確認した。当該地域一帯は旧楠根川の影響を多大に受けて不安定な自然環境のもとにあり、集落域に適さない土地であり、生産域として利用していたものと推測できた。 ・小阪合35次調査においては、弥生時代後期末～平安時代後期にかけて連綿と居住域として利用されていたことが明らかとなった。そのうち、第４面で検出された古墳時代初頭前半（庄内式古相）の竪穴住居（ＳＩ401）は一辺約2.7m程度の小型住居で、既往調査から居住域のなかでも中心部分から隔絶された位置にあることから産屋的な性格を持つ可能性がある。

小阪合遺跡
財団法人 八尾市文化財調査研究会報告116
Ⅰ　小阪合遺跡（第28次調査）
Ⅱ　小阪合遺跡（第29次調査）
Ⅲ　小阪合遺跡（第35次調査）

発　行　　平成20年８月
編　集　　財団法人　八尾市文化財調査研究会
〒581－0821
大阪府八尾市幸町四丁目58番地の２
TEL・FAX 072－994－4700

印　刷　　㈱近畿印刷センター
表　紙　　レザック66　　＜260Kg＞
本　文　　ニューエイジ　＜ 70Kg＞
図　版　　ニューエイジ　＜110Kg＞